

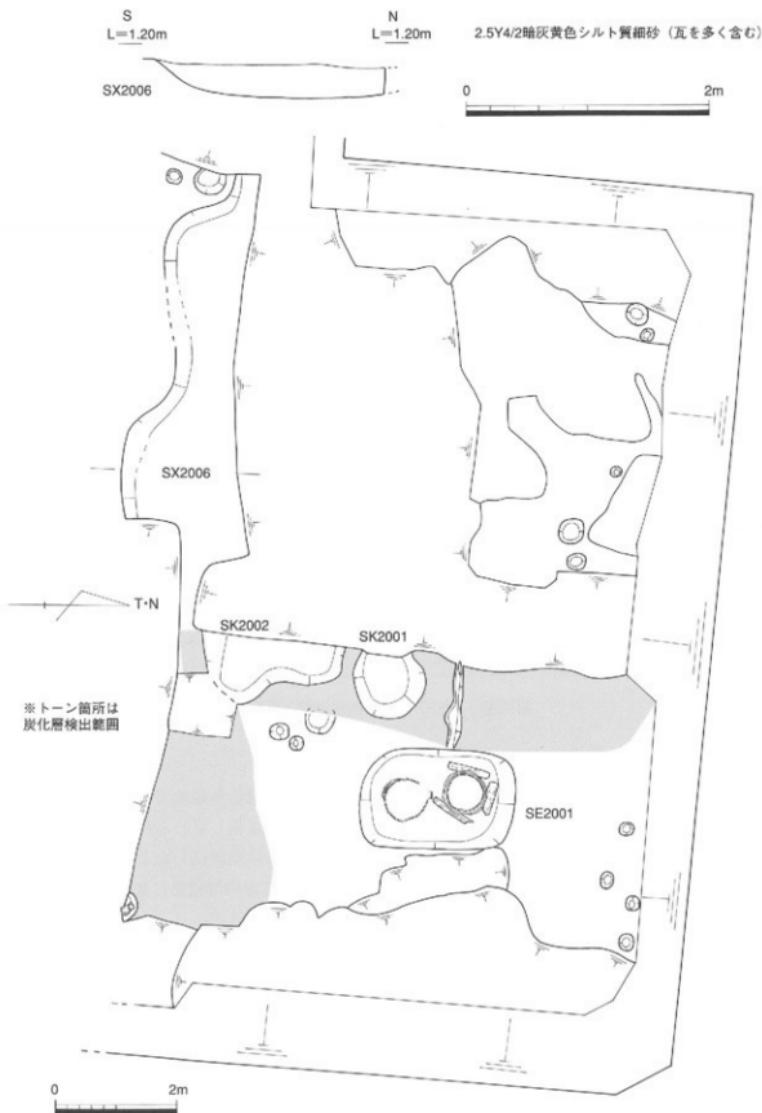
遺物名 番号	種別	法面 高さ(現存高)	法面 厚さ(現存高)	地土	色調			形状	構成	備考
					前面	裏面	内面			
SX2010_1	軒丸瓦	—	—	—	砂礫	灰N5.0	灰N4.0		角	巴
SX2010_2	廻丸瓦	3.3	1.6	—	砂礫少	灰N5.0	黄灰2.SYb/1		直	葉
SX2010_3	廻丸瓦	7.2	1.3	—	砂礫少	灰N5.0	灰白SYb/1		直	葉
SX2010_4	軒丸瓦	4.8	1.4	1.0	砂礫少	灰N4.0	灰N5.0		不良	葉

第189図 SX2010出土遺物実測図・観察表

#### B区第2面検出遺構（第190図）

B区では中央部に大きな擾乱坑が存在し、その壁面の堆積状況から窪地であることが窺われた（第10図）。窪地の範囲はSX2006が南面に相当し、炭化層が埋積し認められた西半部一帯と想定された。この窪地の最下層部となる第3面では、17世紀後半には埋没したと考えられるSX3004～3006を確認している。また当遺構面の上位では、19世紀前葉の堆積物に考えられる土塁及び瓦片を含んだ整地が認められ、窪地上面はこの間の所産と想定される。

一方、微高地となる東半部ではSE2001, SP2001, 2002を検出しているが、第1面で近代期の所産に考えられるSX1005の直下で認められ、出土遺物では幕末～明治期の所産が中心となっている。

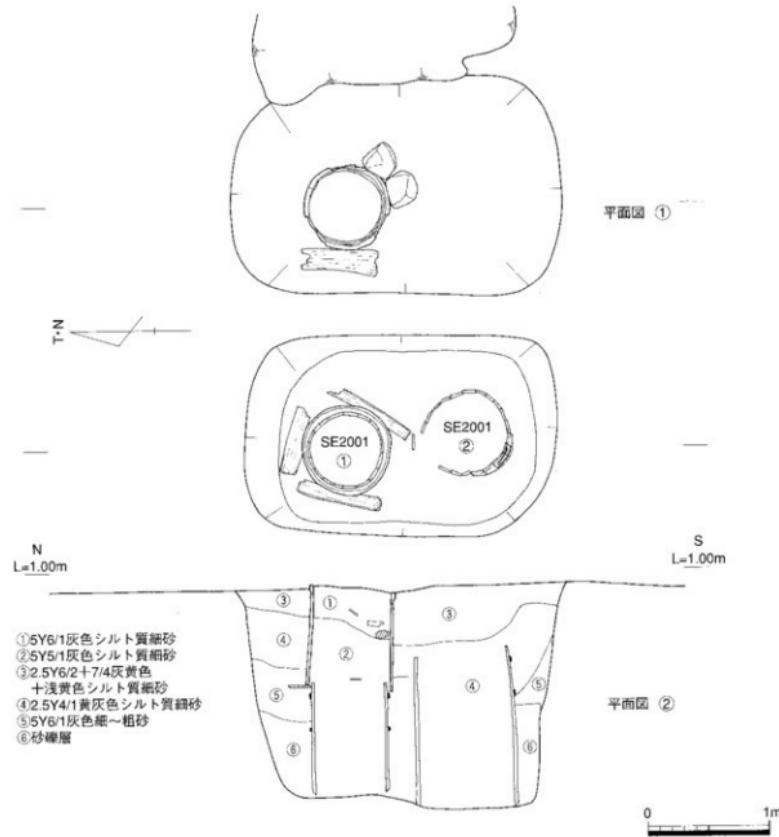


第190図 第2面B区遺構平面・土層図

SE2001 (第191図)

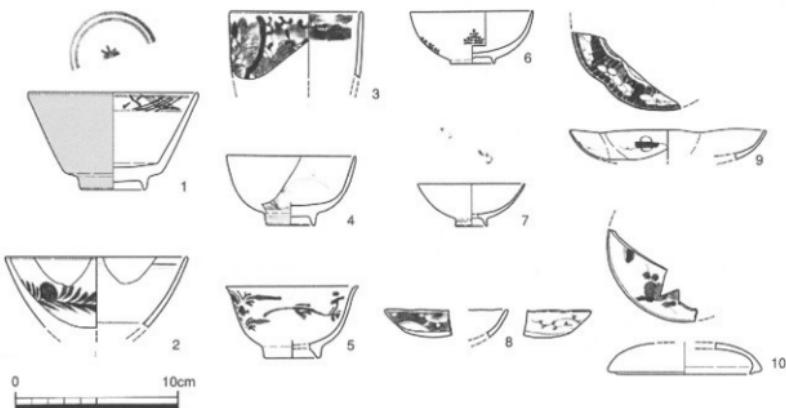
B区東半、第2面で確認した井戸である。検出した標高は0.85m、底面の標高は-0.8~-0.9mを測る。平面の形状は長方形で、2つの井側が認められる（北側：SE2001-①、南側：SE2001-②）。土層図6層の上位で湧水が認められた。SE2001-①の井側は2段遺存し、下段が木桶で、上段が土製である。井側の径は、それぞれ約60cmと70cmで、高さが90cm前後である。SE2001-②は、径が約80cm、高さが約120cmである。規格が異なるため、埋設された時期が異なる可能性もあるが、確認状況からは明確な判断ができない。

断面は急勾配の壁面で、底面はSE2001-②の下部でやや深くなっている。堆積状況は5・6層が井側の留め土である。平面図との対応では、平面図1が3層の上層部付近、平面図2が5層



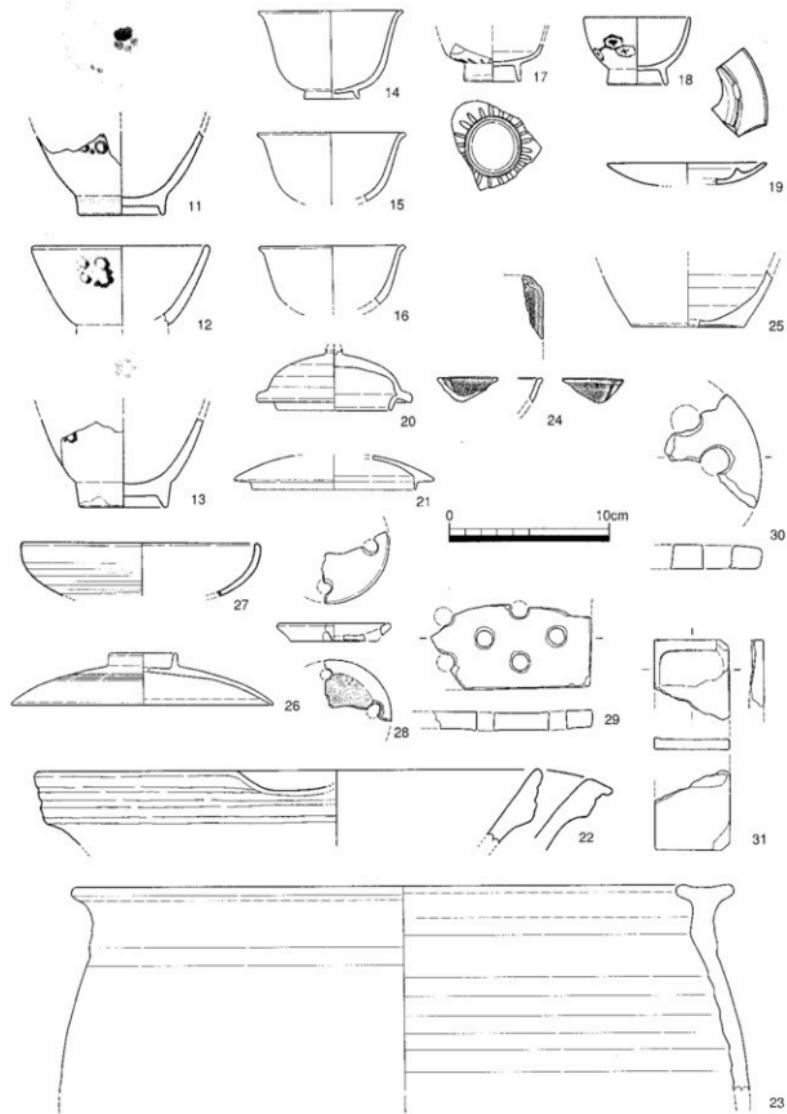
第191図 SE2001-①・②平面・土層図

の上層部付近である。平面図1では、土製の井側（SE2001-①）が認められ、更に上段を固定する板材と石材が一部で遺存している。平面図②では、SE2001-①の下段の木桶及びSE2001-②が現れる。この時点でも、SE2001-①の四方に組まれたと推定される上段部固定用の板材とSE2001-②の一部が欠損している。この状況から3・4層は、廃絶以降の搅乱を含んだ堆積層と考えられる。SE2001-①は少なくとも、更に1段あったことが考えられ、下段の高さを考慮すると井側の上端は、標高は1.7m前後であったことが想定される。また、第1面の確認では、同地点で当井戸を囲うような方形状のプランに集石及び石列が標高1.3m前後で検出されている（第8図）。この集石、石列については、現状では上述のように3・4層が搅乱を含んだ堆積物であり、その上位で確認されているため後世の所産と考えられるが、共伴する施設の可能性も否定できない。遺構の所属時期は、SE2001-①の出土遺物より幕末～明治期の埋没が考えられる。



遺構名	樹文 符号	遺物 種別	器形	座標	測量 (m)	地土	各説1 (新土)	各説2 (相葉・内井色調)	色調3 (背景、上位)	説明	製作年代	備考
SE2001	1	縁 板	蓋板	口:16.00 高:6.00 幅:16.00	0	灰白色	外:透明 内:造形物	底:淡・緑青色	内:青方盤	大正V期	蓋板のみ、裏面内にアルミナ付属	
SE2001	2	縁 板	蓋板	口:11.10	0	灰白色	内外:透明板	底:淡青色		大正V期		
SE2001	3	縁 板	蓋板	口:8.00	0	灰白色	内外:透明板	底:淡青色		大正V期		
SE2001 回方	4	縁 板	蓋板	口:7.85 高:4.25 幅:12.90	0	灰白色	内外:透明板	底:オリーブ灰19YS-2	内:草花	大正V期		
SE2001	5	縁 板	蓋板	口:7.85 高:4.35 幅:12.90	0	灰白色	内外:透明板	上層:青・土		大正V期	福沢蔵	
SE2001	6	縁 板	小片	口:7.40 高:3.20 幅:12.65	0	灰白色	内外:透明板	底:淡青色				
SE2001	7	縁 板	小片	口:6.55 高:2.50 幅:11.90	0	灰白色	内外:透明板	底:淡黄色 上位:淡黑色				
SE2001	8	縁 板	蓋板	口:10.00	0	灰白色	内外:透明板	底:淡青色		大正V期	笠形瓦形	
SE2001	9	縁 板	蓋板	口:12.00	0	灰白色	内外:透明板	底:淡青色		大正V期	型打瓦形	
SE2001	10	縁 板	蓋板	最大径: 16.40 幅:16.00	0	灰白色	内外:透明板	底:淡・青色		大正V期		

第192図 SE2001出土遺物実測図・観察表（その1）



第183図 SE 2001出土遺物実測図（その3）

遺物名 通番	類別 種別	器種	底径 径量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉面、内外色調)	色調3(底面、上腹)	調整	製作年代	備考
SE2001_11	陶	碗	直・美 径15.40	細	灰白SY8/1	内外:灰白SY8/2	底面:オリーブ灰10Y5/2			
SE2001_12	陶	碗	直・黄 □:11.00	細	灰SY8/1	内外:灰白SY7/2	底面:オリーブ灰10Y4/2			
SE2001_13	陶	碗	直・美 径15.00	細	灰白2.5Y8/2	内外:灰白5Y7/2	底面:オリーブ灰10Y5/2			
SE2001_14	陶	碗	直・高 高:15.65 径:15.20	細	灰白SY8/1	内外:灰白10Y7/1				
SE2001_15	陶	碗	直・高 □:18.80	細	灰白2.5Y8/2	内外:灰白SY7/2				
SE2001_16	陶	碗	京・信 径16.70	細	灰白2.5Y8/2	内外:灰白2.5Y7/2				
SE2001_17	陶	碗	京・信 径13.40	細	灰白SY7/1	内外:灰白10Y7/2				
SE2001_18	陶	小舟	直・美 □:9.40 高:14.20 径:13.50	細	にじいき7.5Y7/0	内外:灰白SY8/2	底面:緑青釉10BG3/1			
SE2001_19	陶	打吹皿	鏡前 □:9.8	細	にじいき7.5Y4/4	にじいき7.5Y4/4		内外:ロクロナデ 外底:タケヌリ		
SE2001_20	陶	蓋	直 径16.90	細	褐色10YR6/1	外底:緑青釉SYR3/6				
SE2001_21	陶	蓋	京・信 身:12.35 底:10.00	細	灰白SY7/1	外底:灰オリーブSY8/2				
SE2001_22	陶	度跡口縁 鉢	鏡前 □:31.6	微妙粒		外底:緑青釉2.5YR3/2 内底:暗赤灰10R3/1				
SE2001_23	陶	度口縁鉢	□:41.00	細	明青釉2.5YR5/6	内外:暗赤灰2.5YR3/2				
SE2001_24	陶	五		粗	浅青釉2.5Y6/3	内外:明青釉2.5Y6/3				瀬内焼
SE2001_25	陶	無底鉢	大谷 高:6.80		赤茶10RA4	外底:暗赤灰SY3/2				
SE2001_26	陶	五	京・信 □:15.80 高:13.20 径:16.00	細	浅青釉2.5Y6/3	内外:浅青釉2.5Y6/3				
SE2001_27	土師質	五	□:14.4	粗	にじいき7.5YR7/4	にじいき7.5YR7/4		内外:ロクロナデ 外底:ミガキ		内西に羅付集
SE2001_28	土師質	目皿	□:7.00 高:1.19 径:5.40	粗	褐SYR6/6	褐SYR6/6				
SE2001_29	土師質	目皿	最大径:11.0 高:3.7	中	浅黄褐7.5YR6/3	浅黄褐7.5YR6/3				
SE2001_30	土師質	目皿	最大径: 11.00	中	にじいき2.5YR6/4	灰白10YR8/1				
SE2001_31	石	種								

第194図 SE2001出土遺物観察表

### SE2001-①出土遺物（第192～194図）

遺物はSE2001-①から、幕末期の所産を中心にコンテナ2箱程度出土している。

1～4・8～10は、肥前系磁器である。5・7は、瀬戸・美濃系磁器端反碗及び小杯である。11～13は、瀬戸・美濃系陶器廣東碗である。14～16は、京・信楽系陶器端反碗である。24は源内焼、25は大谷焼と考えられる。28～30は焜炉類の付属品。31は硯である。

### SK2001 (第195図)

B区東部、第2面で確認した遺構である。検出した標高は0.86m前後、底面の標高は0.65m前後を測る。検出長は東西方向で約1.1m、南北方向で約1.2mを測る。西面は搅乱により壊されているが、平面はほぼ円形と考えられる。断面は船底形で、埋土に多量の瓦が認められた。所属時期は、出土遺物より18世紀前葉頃と考えられる。

#### SK2001出土遺物 (第198図)

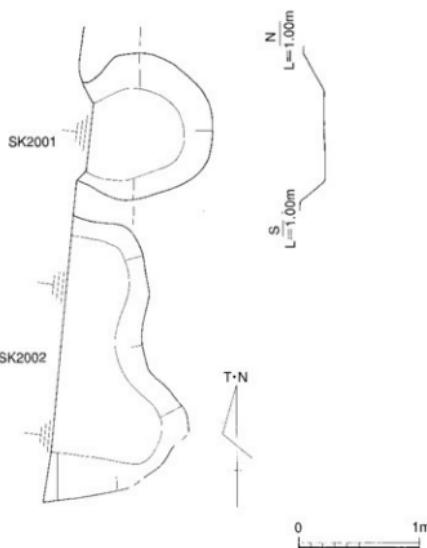
7・8は肥前系陶器碗及び小杯である。9・10は備前灯明皿(9)、備前擂鉢(10)である。

### SK2002 (第195図)

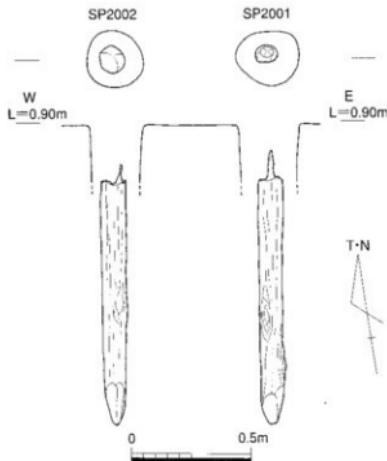
B区東部、第2面で検出した遺構である。検出した標高は0.86m前後、底面の標高は0.57m前後を測る。検出長は東西方向で約1m、南北方向で約2.3mを測る。西面は搅乱により壊されていた。平面は不整形な長方形として検出された。断面は船底形で、埋土に多量の瓦が認められた。所属時期は、同様の様相を示すSK2001と同時期の所産と考えられる。

#### SK2002出土遺物 (第198図)

11は瓦質土器火鉢で、脚部を有する。



第195図 SK2001・2002平面・断面図



第196図 SP2001・2002平面・断面図

### SP2001・2002 (第196図)

B区北東隅、第2面で検出した杭である。検出した標高は0.83～0.89m前後を測る。径約12cmの丸太杭を東西に2箇所打ち込んでいる。北及び東が調査対象外で、東西列となるかどうかは不明である。

杭は丸太材の先端部を尖らしたもので、1m以上の長さで遺存していた。詳細な時期は不明である。

#### SX2006 (第190図)

A区北端部、第2面で確認した遺構である。検出した標高は1.08m前後、底面の標高は0.76m前後を測る。検出長は東西方向で約6m、南北方向で最大約1.7mを測る。北面は搅乱により壊されている。平面は不定形で、北部のB区へ下る落ち込みとなっている。所属時期は出土遺物及びB区の整地状況を考慮し、18世紀代～19世紀前葉と考えられる。

#### SX2006出土遺物 (第198図)

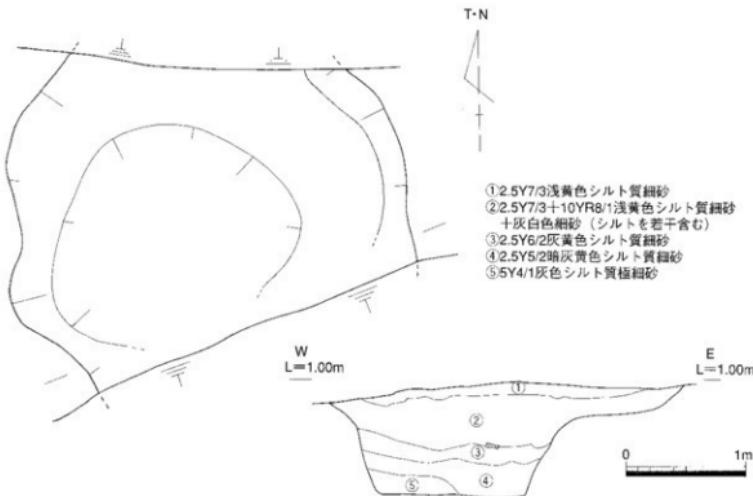
1～6は肥前系磁器である。紅皿(1)、碗(2)、皿(4～6)がある。

#### SE2002 (第12・197図)

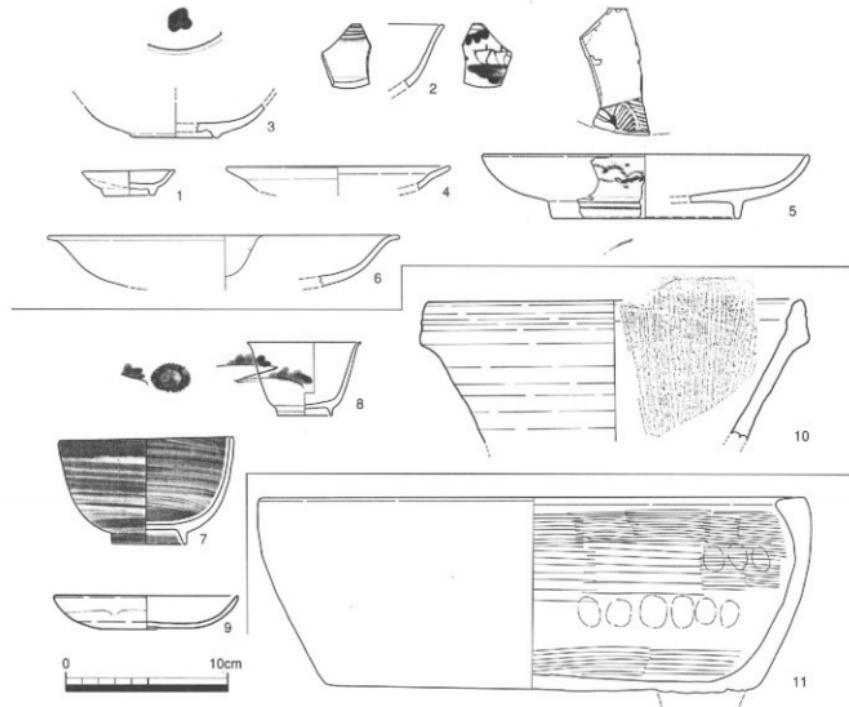
D区東半部、第2面で確認した井戸状の遺構である。検出した標高は0.96m、底面の標高は-0.02mを測る。検出長は東西方向で約3.3m、南北方向で約2.3mを測るが、北は調査範囲外であり、西及び南側は搅乱により壊されている。平面の形状は、不整形な円形を呈するものと想定される。断面の観察では1.4mの標高で確認され、第1面での検出は可能であったが、調査の工程上、第2面で確認した。断面の形状は西半については不明だが、中位で屈曲し段部が認められる。以下、底まで器壁は急傾斜となり、底面では湧水を確認した。断面土層では詳細に分層されているが、基本的には陶磁器、瓦片等を多量に包含した堆積物により充填される。遺物を多量に含むことから、廃棄土坑の性格を有する。

#### SE2002出土遺物 (第199～201図)

遺物は、コンテナ5箱程出土した。18世紀代～明治時代の所産のものが認められる。

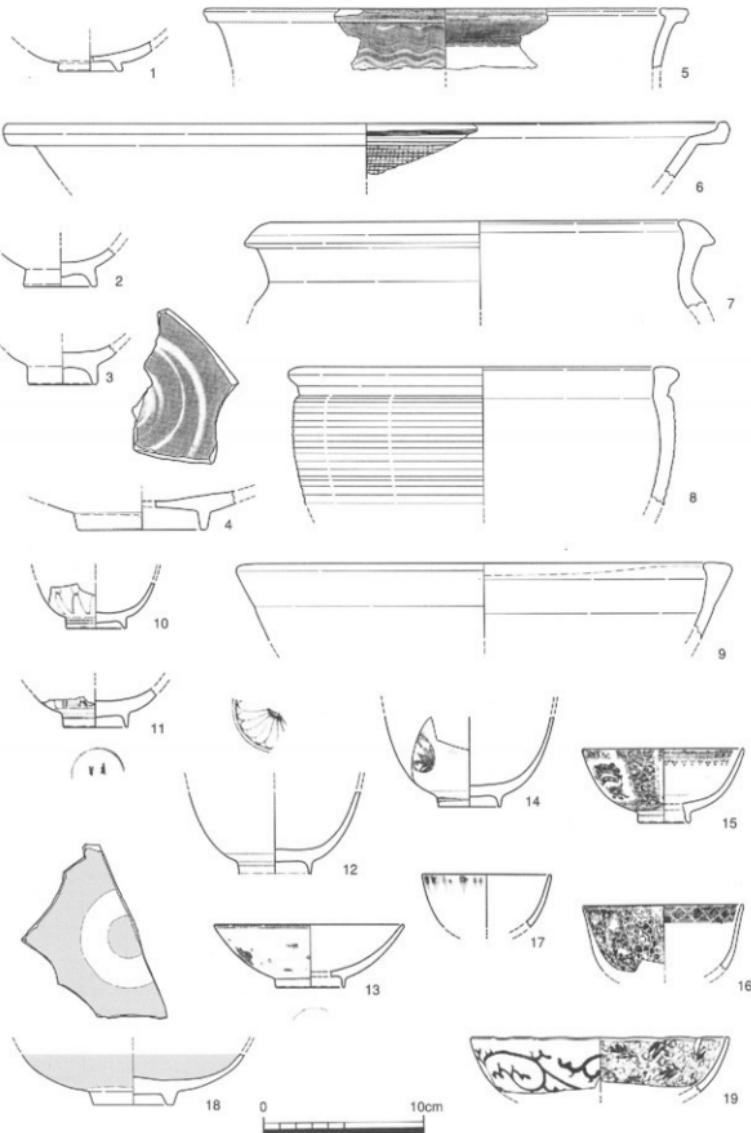


第197図 SE2002平面・土層図

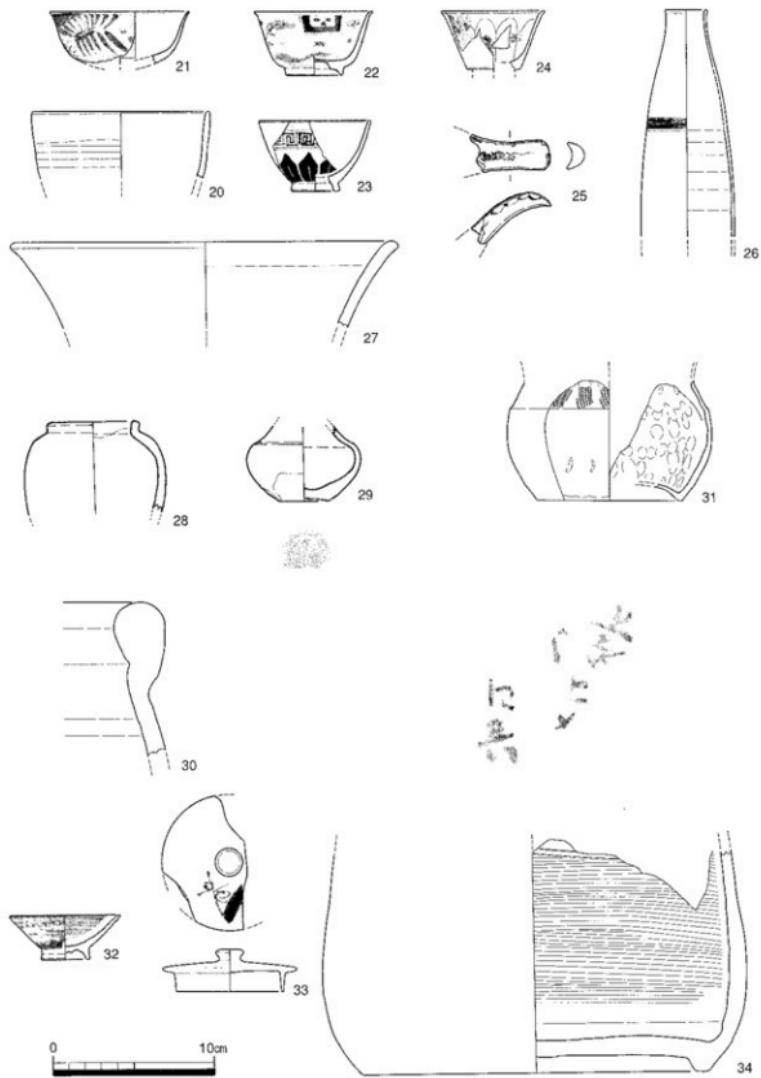


遺物名	種類	遺物 特徴	断面	裏面	表面	寸法(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(胎土・内井色調)	色調3(表面・上絵)	表面	製作年代	備考
SX2006 1	碗	小杯	透前	口:5.50 底:3.50	黑	灰白SYB1	内外:灰白SYB1					大绳目組	
SX2006 2	罐	罐	透前		灰	灰白色	内外:透明白						
SX2006 3	罐	直	透前	底:16.00	黄	灰白色	内外:透明板	背景:オリーブ黒 7.5Y3/2黒2.5Y3/1				大绳目組	初期伊万里 基部内に斜板仕当
SX2006 4	瓶	直	透前	口:19.20	黄	灰白色	内外:オリーブ2.5YR9/1					大绳目組	
SX2006 5	瓶	直 付	透前	口:26.00 底:11.50	黄	灰白SYB1	内外:透明板	高脚:透青白				大绳目組	
SX2006 6	罐	直	透前	口:21.50	黄	灰白色	内外:透明白					大绳目組	
SX2001 7	周	罐	透前	口:11.00 底:8.00 高:4.40	黑	にい焼2.5YR6/4	にい焼2.5YR6/4			内外:透明な烈毛目		大绳目組	
SX2001 8	碗	小杯	透前	口:8.50 底:2.50	黑	灰白色	内外:透明板	高脚:透青白				大绳目組	
SX2001 9	碗	灯明皿	透前	口:11.2 底:2.0	黑	赤10HS-6	赤10HS-6						口縁内外に粒状並
SX2001 10	碗	深鉢	透前	口:29.3	和	梅原10R3-6	梅原10R3-6						内面口縁部・外面:ロク ロナデ
SX2002 11	五貫	大鉢	透前	口:33.7 底:28.4	透粉粒	黄8.5YB1	三N20						三脚の足有

第198図 SX2006・SK2001・2002出土遺物実測図・観察表



第199図 SE2002出土遺物実測図（その1）



第200図 SE 2002出土遺物実測図（その2）

遺物名	形状	遺物 番号	種別	座地	法面(m)	裏土	色調1(表面)	色調2(裏面、内外色)	色調3(表面、上縁)	調整	製作年代	備考
SE2002_1 壁 純正規	直前	底:4.60	壁	灰白2.5Y7/1	内外:淡青SY7/3				内面:ピンク2ト所			
SE2002_2 壁 純正規	直前	底:3.40	壁	灰白10YR8/1	淡青2.5Y7/4					大柄Ⅱ期	兵器手柄	
SE2002_3 壁 純正規	直前	底:4.00	壁	灰白2.5Y6/1	内外:淡青2.5Y6/4					大柄Ⅱ期	兵器手柄	
SE2002_4 壁 純正規	直前	底:18.00	壁	灰白2.5Y7/1	灰オリーブSY5/2				内面:複数の刷毛目	大柄Ⅱ期	兵刃直済	
SE2002_5 壁 純正規	直口横脛 扇形	口:30.00	壁	暗赤10YR6/1	内外:深緑-青				外面:底状の刷毛目			
SE2002_6 壁 純正規	直口横脛 扇形	口:45.00	壁	暗赤2.5YR5/6	灰褐色SY16/2					大柄Ⅱ期	三島	
SE2002_7 壁 純正規	直口横脛 扇形	口:25.20	壁	赤褐色2.5YR4/6	赤褐色2.5YR4/6					大柄Ⅱ期		
SE2002_8 壁 純正規	直口横脛 扇形	口:22.00	壁	にじい赤褐色2.5YR4/4	にじい赤褐色2.5YR4/4							
SE2002_9 壁 純正規	直口横脛 扇形	口:27.70	壁	淡青帯10YR8/3	外面:灰白10Y8/1							
SE2002_10 壁 純正規	直前	底:3.70	壁	灰白色	内外:透明感	裏面:暗青色	外面:一重顎目	大柄Ⅱ期	高台内に朱い			
SE2002_11 壁 純正規	直前	底:4.00	壁	灰白色	内外:透明感	裏面:暗青色					面部に鉄紋有	
SE2002_12 壁 純正規	直前		壁	灰白色	内外:透明感	裏面:暗青色	内面:墨	大柄Ⅱ期				
SE2002_13 壁 純正規	直・横	口:11.20 底:24.10 厚:3.85	壁	灰白色	内外:透明感	裏面:暗青色				大柄Ⅱ期		
SE2002_14 壁 純正規	直・横	底:3.90	壁	灰白色	内外:透明感	裏面:暗青色				大柄Ⅱ期	コンニャク印伝	
SE2002_15 壁 純正規	直前	口:8.85 底:9.50 厚:4.50	壁	灰白色	内外:透明感	裏面:コバルト				大柄Ⅱ期	鉄紙屋	
SE2002_16 壁 純正規		口:10.00	壁	灰白色	内外:透明感	裏面:コバルト				大柄Ⅱ期	型紙屋	
SE2002_17 壁 実	直前	口:8.00	壁	灰白色	内外:透明感	裏面:暗青色	外面:圓錐文	大柄Ⅱ期				
SE2002_18 壁 実	直前	底:5.00	壁	灰白色	内外:明透感	裏面:此の日私制				大柄Ⅱ期	青磁皿 落合内熱粘	
SE2002_19 壁 実	直前	口:16.00	壁	灰白色	内外:透明感	裏面:暗青色	外面:雁跋	19c前				
SE2002_20 壁 純正規	直口横脛 斧・斧	口:11.00	壁	灰白SY8/1	内面上:灰白SY8/2 内面下:透明感2.5YR0/3							
SE2002_21 壁 小杯	直・横	口:8.60	壁	灰白色	内外:透明感	上面:赤・黒						
SE2002_22 壁 小杯	直・横	口:17.20 底:13.40 厚:3.90	壁	灰白色	内外:透明感	裏面:暗青色					型紙屋	
SE2002_23 壁 小杯	直・横	口:16.80 底:14.30 厚:4.43	壁	灰白色	内外:透明感	裏面:暗青色・コバルト						
SE2002_24 壁 小杯	直・横	口:16.00	壁	灰白色	内外:透明感	裏面:コバルト						
SE2002_25 壁 れんげ	直・横	横存:2.0 横存:2.1	壁	灰白色	内外:透明感	裏面:暗青色						
SE2002_26 壁 漆塗判	直・横	口:12.60	壁	灰白色	内外:透明感	裏面:暗青色						
SE2002_27 壁 純正規	直口横脛 斧・斧	口:19.00	壁	灰白2.5Y7/1	内面:絞赤7.5GY8/1							
SE2002_28 壁 実	直前	口:14.9	壁	灰褐色	裏面10YR4/2 内面:赤10YR4/8				内面:ロクロナデ			
SE2002_29 壁 実	直前	底:13.0	壁	赤褐色10YR4/4	裏面10YR4/3				外面:留松木切り 内面:ロクロナデ			
SE2002_30 壁 実	直前	底:19.00	壁	赤褐色10YR4/8								
SE2002_31 壁 実		底:19.00	壁	灰褐色7.5YR5/2					内面:柯丸抹茶・押抜さえ 内面:留松木切り・押抜さえ 外面:墨			
SE2002_32 壁 小杯	直前	口:18.80 底:17.60 厚:2.70	壁	にじい青緑SY5/5	内面:オリーブ灰2.5GY8/1				内外:直線的な刷毛目			
SE2002_33 壁 実	直前	口:8.35 底:7.60 厚:2.70	壁	淡青緑7.5YR6/4	内面:灰白SY8/1	裏面:墨10YR2/1						
SE2002_34 土頭貝 傷		底:11.50 底:12.30	壁	にじい青緑10YR8/3	内面:灰白10YR8/1 内面:にじい青緑10YR7/3				内面:ハタケメ		内面に墨書	

第201図 SE2002出土遺物観察表

## 第2面A-C区北部遺構（第202図）

当地点は、北側をB区に存在する窪地、西側はSX2008、南側は屋敷境の長屋に考えられるSA2001に囲まれた空間となっている。明瞭な施設として想定できるものは認められないが、中央部に溝状の遺構が認められる他、その周囲で不定形な土坑状の遺構やピットが検出された。所属時期は、第2面下層に相当するSD2006（17世紀末葉）及びSX2008の埋没時期（19世紀前葉）から、18世紀代を中心とした所産が考えられる。但し、第1面で確認したSX1005（近代所産）直下に位置するものは、幕末～明治期の所産となる可能性がある。

### SK2006（第202・203図）

A区北部、第2面で確認した遺構である。検出した標高は1.13m前後、底面の標高は0.88mを測る。径1.2m程のやや不整形な円形として検出した。断面は船底形である。所属時期は、出土遺物より18世紀前半を中心に考えられる。

### SK2006出土遺物（第204図）

1は肥前系陶器皿である。2は肥前系磁器碗である。3は肥前系磁器小壺である。4・5は備前産で、瓶（4）、擂鉢（5）である。6は瓦質土器焼烙である。

### SK2005（第202・203図）

A区北部、第2面で確認された遺構である。検出標高は1.13m前後、底面の標高は0.92mを測る。径0.9m程のやや不整形な円形として検出した。断面は船底形である。所属時期は、出土遺物より明治期の所産と考えられる。

### SK2005出土遺物（第204図）

7～10は肥前系磁器猪口及び紅皿。11は肥前系磁器瓶である。12は肥前系陶器鉢。13は土瓶で、外面にイッチン掛けによる装飾が認められる。明治時代の所産。14は施釉陶器鍋である。

### SK2007（第202図）

A区北部、第2面で確認した遺構である。検出した標高は1.15m前後、底面の標高は0.71mを測る。径1.2m程のやや不整形な円形として検出した。

### SK2007出土遺物（第204図）

15は肥前系陶器碗である。16は肥前系陶器鉢である。

### SK2009（第202・203図）

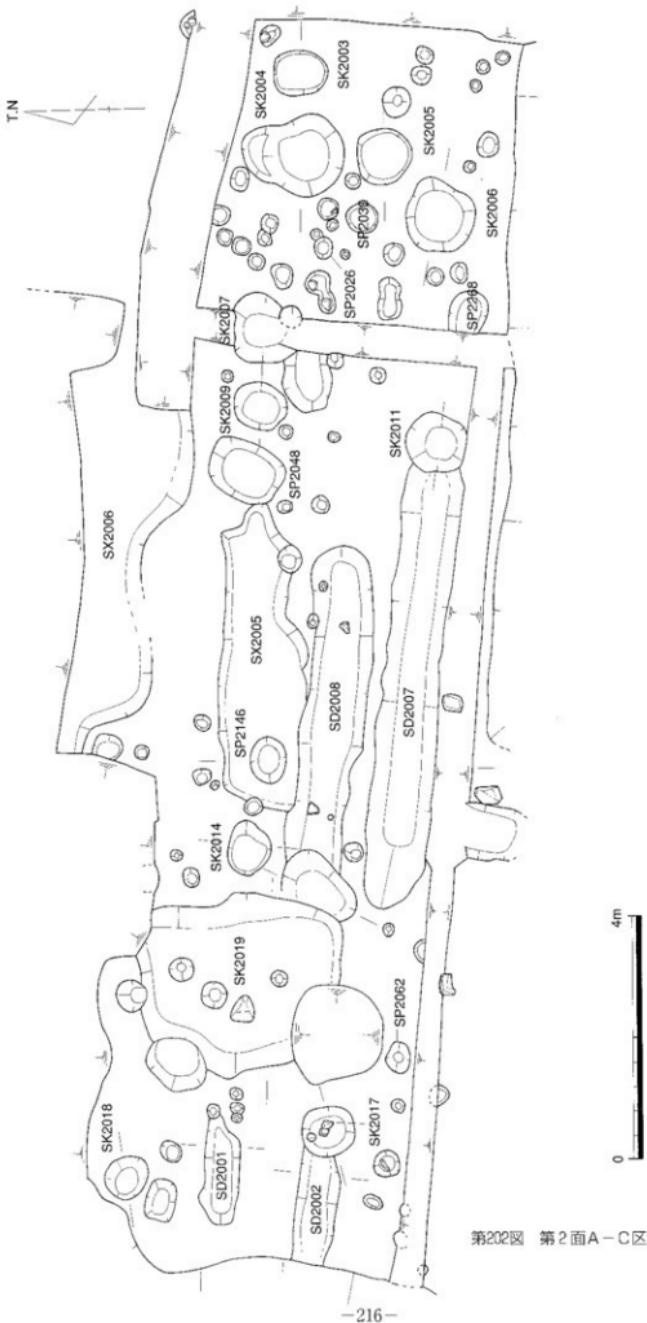
A区北部、第2面で確認された遺構である。検出した標高は1.09m前後、底面の標高は0.88mを測る。径0.8～0.9m程のやや不整形な円形として検出した。断面はU字形である。

### SK2009出土遺物（第205図）

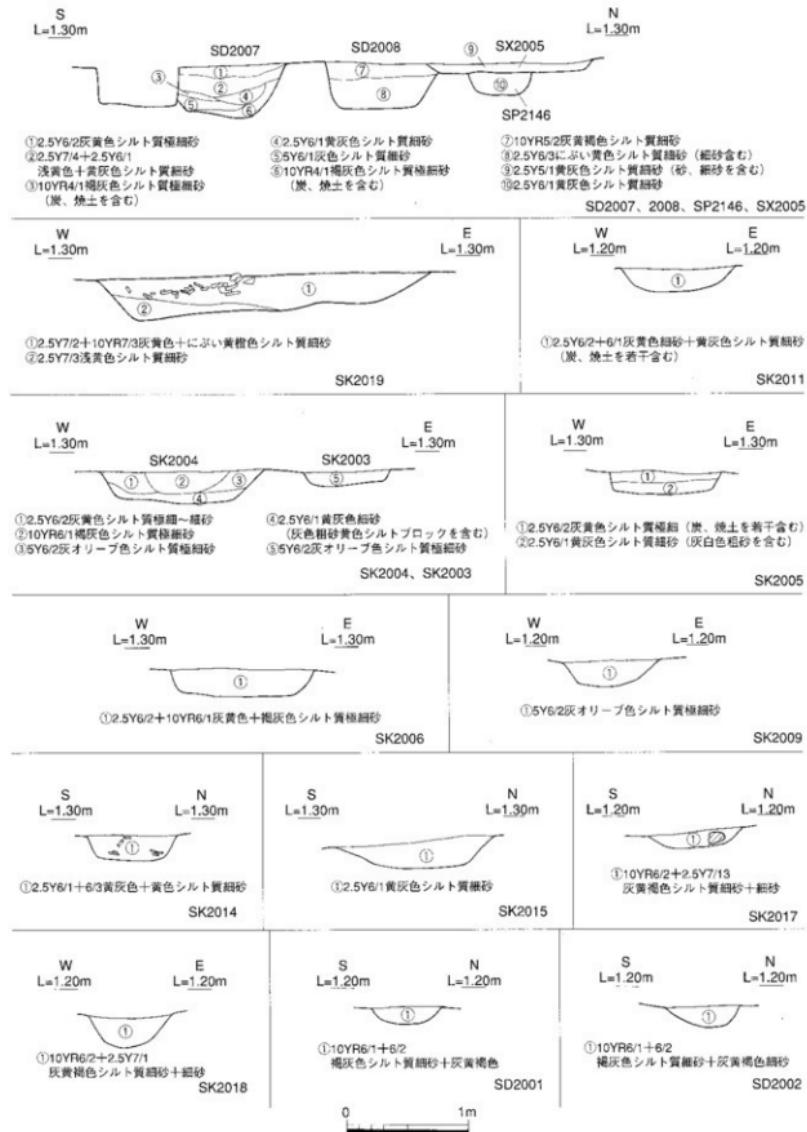
1・2は、軒丸瓦である。

### SK2015（第202・203図）

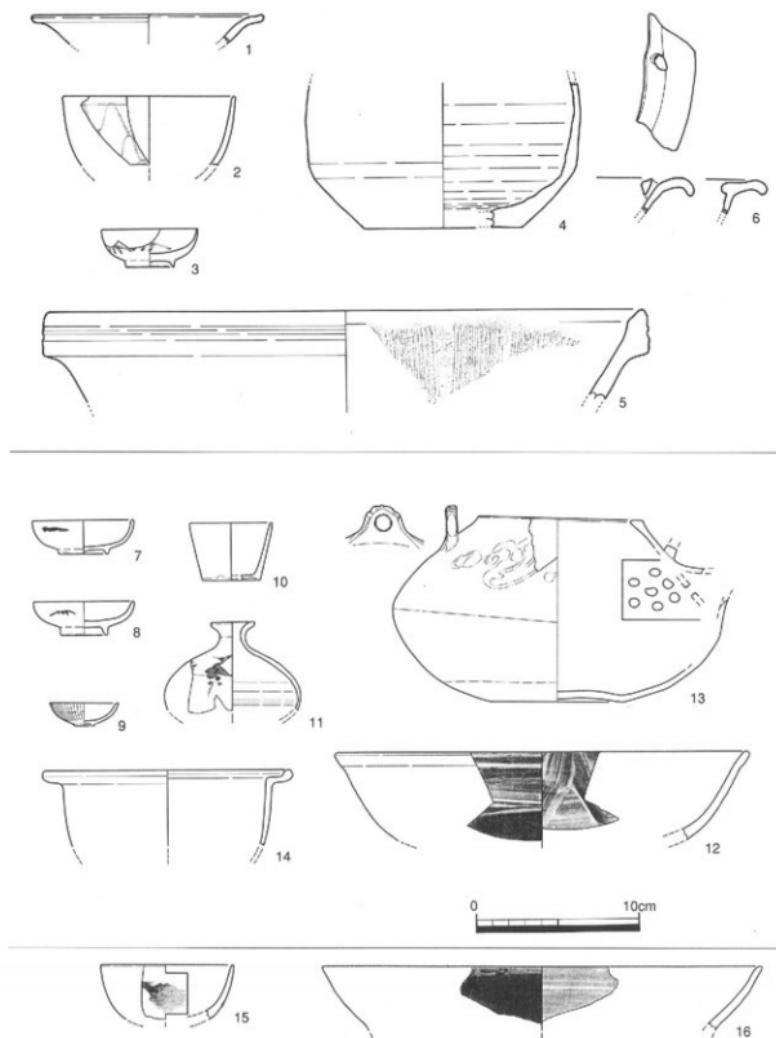
C区北部、第2面で確認した遺構である。検出した標高は1.13m前後、底面の標高は約0.9mを測る。検出長は東西方向で約0.8m、南北方向で約1.35mを測る。断面は船底形である。SD2008に後出し、SK2019に壊される。時期の判明できる遺物は出土していない。



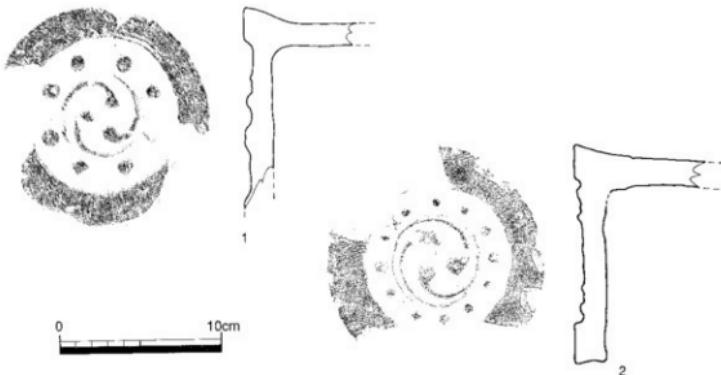
第202図 第2面A-C区北部遺構平面図



第203図 第2面A-C区北部遺構土層図



第204図 SK 2006・2005・2007出土遺物実測図



遺物名 番号	構造 種別	器形	基盤	底盤 (cm)	地土	色鉛1(鉛土)	色鉛2(輪郭、内外色調)	色鉛3(表面、上部)	調査	製作年代	備考
SK2006-1	輪	皿	盤	口:13.9	細	BN4.0	外面:輪郭SYR6/3 内面:青白SYB1			大徳3年	
SK2006-2	輪	輪口唇口	盤前	口:10.45	粗	灰白色	内面:透明釉	表面:淡青色	外縁:一重網目	大徳3年	
SK2006-3	盤	豆型口	盤前	口:5.85 底:3.25 足:2.65	粗	灰白色	内面:透明釉	表面:オリーブ墨SYW6/1	外縁:青	大徳3年	
SK2006-4	盆	瓶底部	瓶前?	底:9.6	細		外縁:輪郭墨SYR2/4 内面:淡灰SYT6/1		内縁:ロクロナデ		
SK2006-5	輪	度詰口輪	盤前	底:36.4	粗		内面:輪郭墨SYR5/6			近世	
SK2006-6	五輪	度詰口輪	盤				外縁:深墨SYR6/2 内面:淡灰SY7/1		内縁:オデ 外縁:振押さえ		外面に摩耗面
SK2006-7	輪	瓦底口	盤前	口:11.00 底:11.10 足:3.10	粗	反白色	内面:透明釉	表面:オリーブ墨SYR3/2		大徳V期	
SK2006-8	輪	瓦底口	盤前	口:10.00 底:12.16 足:2.80	粗	反白色	内面:透明釉	表面:淡青色	外縁:笠	大徳V期	
SK2006-9	輪	瓦	盤前	口:2.20 底:2.20	粗	反白色	内面:灰白NB4.0			大徳V期	
SK2006-10	器	小柄	盤前	口:4.90 底:4.90 足:3.40	粗	灰白色	内面:透明釉			大徳V期	
SK2006-11	輪	瓦	盤前	口:2.50	粗	灰白色	内面:透明	表面:淡・薄青色			
SK2006-12	輪	鉢	盤前	口:25.00	粗	灰白SYR4/2	内面:輪郭SYR3/3		外縁:輪郭約1周毛目	大徳V期	腹毛目無
SK2006-13	輪	土瓶			細	灰白SYB1	外縁:輪郭SYB1	イッテン模印:灰白SYB1		明治	
SK2006-14	輪	鍋		口:14.85	粗	灰白SYW6/2	内面:にじい黄橙SYW6/2				
SK2007-15	高台付 輪	鏡	盤前	口:8.00	粗	灰白SYB1	内面:透明釉	表面:暗青色		大徳V期	
SK2007-16	輪	皿	盤前	口:27.00	粗	灰白SYW7/2	外縁:輪郭SYW7/1 内面:輪郭SYW6/1	内面:透明約1周毛目		大徳V期	斜毛目

遺物名 番号	構造 種別	底盤 (cm)			地土	色鉛		調査		焼成	備考
		直径	及さ(保存用)	厚さ		表面	裏面	内面	外縁		
SK2008-1	利丸瓦	7.0	1.3	—	砂礫	BN6.0	灰SYB1			不良	巴
SK2008-2	軒丸瓦	8.1	1.6	—	砂礫	BN6.0	灰SYB1			良	巴

第205図 SK 2006・2005・2007・2009出土遺物実測図・観察表

### SD2007（第202・203図）

A-C区北部、第2面で確認した東西方向の溝状の遺構である。検出した標高は1.00～1.08m、底面の標高は0.61～0.68mを測る。検出長は約7.2m、検出幅は10m前後を測る。東端部がSK2011により壊される。溝状を呈するが東西には伸びない。断面はU字形で、埋土は6層に分割されるが、この内、中層部と最下層部に炭化物及び焼土が認められる。当遺構は、先行するSD3004（上水道）に平面プランが一致し、改修等何らかの関連が推察される。所属時期は、遺構面からすれば18世紀代の所産と考えられる。

### SD2007出土遺物（第206図）

遺物の出土量は少なく、数点のみであった。1は肥前系磁器大皿である。初期伊万里と考えられる。2は焼塙壺蓋である。

### SP2030（第202図）

A区北部、第2面で確認したピットである。検出した標高は1.12m、底面の標高は1.05mを測る。径0.5m前後の円形として検出した。

### SP2030出土遺物（第206図）

3は肥前系磁器紅皿である。4は肥前系磁器小広東碗である。5は焼塙壺で、「泉湊伊織」の刻印が認められる。

### SK2011（第202・203図）

A区北部、第2面で確認した遺構である。検出した標高は1.06～1.09m、底面の標高は0.87m前後を測る。径1m前後の円形として検出した。西端部でSD2007を壊す。断面はU字形である。埋土は単層で焼土及び炭化物を少量観察している。

### SK2011出土遺物（第206図）

6は肥前系陶器鉢底部で、見込み砂目が付着する。

### SP2062（第202図）

C区北部、第2面で確認したピットである。検出した標高は1.02m、底面の標高は0.93mを測る。径0.45m前後の円形として検出した。底面に根石が認められる。

### SP2062出土遺物（第206図）

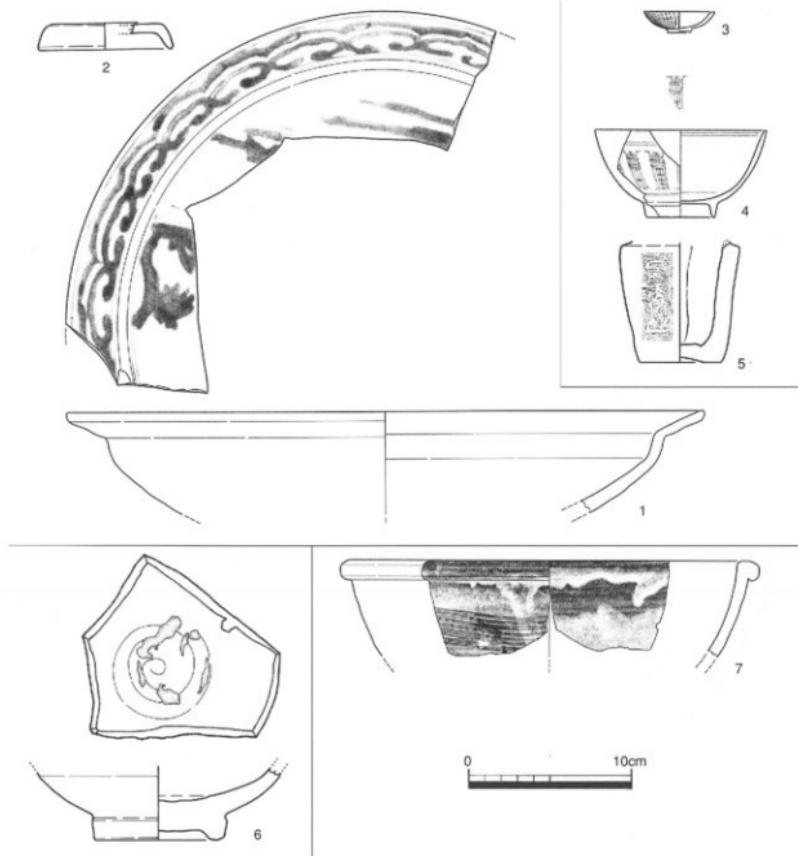
7は肥前系陶器鉢である。

### SD2008（第202・203図）

A-C区北部、第2面で確認した東西方向の溝状の遺構である。検出した標高は0.99～1.08m、底面の標高は0.70～0.81mを測る。検出長は約5m、検出幅は1.1m前後を測る。SD2007に並走して検出された。断面はU字形で、埋土は2層に分割される。重複関係でSX2005に先行する。遺物は出土していない。

### SK2004（第202・203図）

A区北部、第2面で確認した遺構である。検出した標高は1.13～1.16m、底面の標高は0.88～



遺物名 件次 番号	遺物 種類	形態	寸法(cm)	出土	色調1(施土)	色調2(胎瓦・内外色)	色調3(底面・上部)	鉢形	製作年代	備考
SD2007 1 壺 目	粗面	□:39.00	裏	灰白色	内:透明白	裏面:淡・明青色			大正E期	
SD2007 2 土瓶瓦 退張型		□:8.0 高:1.5	黄砂利	植:2.5VR7/6				内外:ロクロナデ		
SP2030 3 瓶 松浦口	粗面	□:14.20 高:1.30 底:1.40	裏	灰白色	内:灰白色				大正V期	
SP2030 4 瓶 桧	粗面	□:19.30 高:3.30 底:2.00	裏	反白色	内:透明白	裏面:淡・明青色			1770~ 小仏東晩	
SP2030 5 土瓶瓦 退張型		□:5.0	黄砂利 一合	に:3.5VR7.5VR7/4				外:ロクロナデ		「重作作織」印(大村)
SK2011 6 壺 伊都部	粗面	底:7.9	裏	反白色	オリーブ灰SYR2/2				大正E期	浮目
SP2062 7 壺 茄	粗面	□:23.40	裏	赤褐色	内:黄褐色				大正E期	素朴無漆

第206図 SD2007・SP2030・SK2011・SP2062・SK2007出土遺物実測図・観察表

1.04mを測る。検出長は東西に約1.3m、南北に約1.7mを測る。平面の形状はやや不整形な円形で、北部に半円形のテラス部が付く。断面は船底形で、堆積状況から中央部に再掘削の痕跡が認められる。

#### SK2004出土遺物（第207図）

1は肥前系陶器碗である。2～4は肥前系磁器。端反碗（2）、小壺（3・4）がある。

#### SK2019（第202・203図）

C区北部、第2面で確認した瓦溜状の遺構である。検出した標高は1.07～1.11m、底面の標高は0.75～0.91mを測る。検出長は東西方向で約3m、南北方向で約3.2mを測る。平面はやや不整形な方形である。断面は船底形で、底面は凹凸状になっており人頭大の石及びピットが認められる。埋土はほぼ瓦片を含む堆積層で占められる。重複関係でSD2008より後出する。

#### SK2019出土遺物（第207図）

瓦片が多く出土したが、瓦に特徴的なものは認められなかった。5は肥前系陶器皿である。6は京・信楽系陶器碗である。7・8は肥前系磁器。碗（7）。糸切り細工による皿（8）がある。

#### SP2048（第202図）

A区北部、第2面で確認したピットである。検出した標高は1.07m前後、底面の標高は0.99mを測る。径0.2m前後の円形として検出した。

#### SP2048出土遺物（第207図）

9は肥前系陶器碗である。

#### SP2026（第202図）

A区北部、第2面で確認したピットである。検出した標高は1.13m前後、底面の標高は1.02mを測る。径0.35m前後の円形として検出した。

#### SP2026出土遺物（第207図）

10は備前掘鉢である。

#### SP2268（第202図）

A区北部、第2面で確認した遺構である。検出した標高は1.12m前後、底面の標高は0.97mを測る。径0.7m前後の円形として検出した。

#### SP2268出土遺物（第207図）

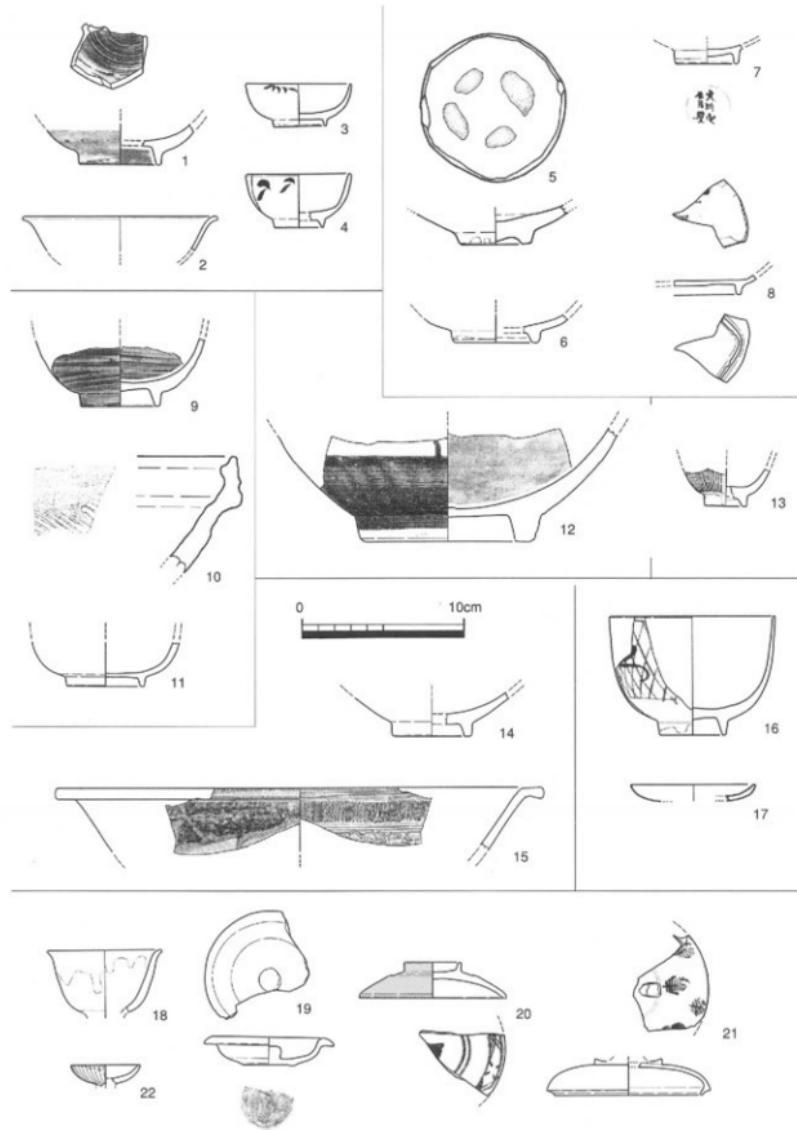
11は肥前系磁器碗である。

#### SK2017（第202・203図）

C区北部、第2面で確認した遺構である。検出した標高は1.03～1.10m、底面の標高は0.92m前後を測る。径0.8mの円形として検出した。断面はU字形で、底面に小石が認められる。重複関係でSD2002より後出する。

#### SK2017出土遺物（第207図）

12は肥前系陶器鉢である。



第207図 SK2004・2019・SP2048・2026・2268・SK2017・2018・2014・SD2001・SK2023出土遺物実測図

遺物名	国文 書類	遺物 種別	器種	底径	高さ(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉面・内・外色面)	色調3(底面、上縁)	調整	製作年代	備考
SK2004_1	馬	輪形器	肥前	底:4.70	高:1.40	陶	灰青褐色SYR7/4	内外:に少し赤褐色SYR4/3		内面:連續的な刷毛目	大根丸型	刷毛目底座
SK2004_2	猪	輪口縁部	肥前	口:12.00	高:1.40	陶	灰白色	内外:透明釉	底面:淡青色		大根V型	透反射
SK2004_3	猪	輪口縁部	肥前	口:5.50	高:1.35	陶	灰白色	内外:透明釉	底面:淡青色	外面:鋸	大根丸型	
SK2004_4	猪	輪口縁部	肥前	口:6.50	高:1.30	陶	灰白色	内外:透明釉	底面:オリーブ緑SYR5/2		大根丸型	
SK2019_5	猪	底底部	肥前	底:4.3	高:1.40	陶	に少し黄褐色SYR7/4	に少し黄褐色SYR4/3			大根V型	全周施物、移動後、裏込みに砂目
SK2019_6	馬	輪底部	東・信	底:5.00	高:1.40	陶	灰白色SYR7/1	内外:オリーブ緑SYR5/2				
SK2019_7	馬	輪底部	肥前	底:3.60	高:1.40	陶	灰白色	内外:透明釉	底面:淡・青褐色			裏面内に「大明正化年製」款記有
SK2019_8	馬	底底部	肥前	底:3.60	高:1.40	陶	灰白色	内外:透明釉	底面:青褐色		大根丸型	手切り加工
SP2048_9	馬	輪形器	肥前	底:4.80	高:1.40	陶	に少し赤褐色SYR7/4	内外:橘赤褐色SYR5/3		内外:直線的な刷毛目	大根丸型	兩日赤津
SP2026_10	馬	輪口縁部	肥前	底:5.00	高:1.40	陶	に少し赤褐色SYR6/4	に少し赤褐色SYR4/4	内外:ロクロナデ		近世中期	
SP2258_11	馬	輪底部	肥前	底:4.70	高:1.40	陶	灰白色SYR6/2	内外:に少し黄褐色SYR6/4			大根丸型	
SK2017_12	馬	底底部	肥前	底:10.10	高:1.40	陶	に少し赤褐色SYR5/4	外面:黒褐色SYR2/2 内面:灰白色SYR6/1			大根丸型	刷毛目底座
SK2018_13	猪	小体	肥前	底:2.10	高:1.40	陶	灰白色SYR6/0				1540~1650年代	裏面内無施
SK2014_14	馬	馬	肥前	底:4.50	高:1.40	陶	灰白色SYR6/1	内外:泥オーブ灰SYR5/1			大根丸型	
SK2014_15	馬	輪口縁部	肥前	口:30.00	高:1.40	陶	明褐色SYR7/2	内外:暗褐色SYR3/4			大根丸型	三島
SD1003_16	猪	輪	肥前	口:18.00 高:7.25	高:3.90	陶	灰白色	内外:透明釉	底面:淡・青褐色	外縁:ロクロナデ	17世紀中葉	
SD1003_17	土附質	皿		口:17.0	中:1.40	陶	暗褐色SYR7/6	暗褐色SYR7/6	内外:ロクロナデ			
SK2023_18	馬	猪	京窓	口:7.0	高:1.40	陶	灰白色	内外:灰白色SYR6/2	上縁:縫		19世紀前半	腹反旋
SK2023_19	馬	猪	京窓	口:7.00 高:7.25	高:3.90	陶	暗褐色SYR6/6	外縁:深褐色SYR4/4		内底:田舎赤切り		外縁部に焼付臺
SK2023_20	猪	猪	肥前	口:5.50 高:5.40	高:3.40	陶	灰白色	外縁:泥オーブ灰SYR5/1 内面:透明釉	底面:粗底SYR5/1		大根丸型	青銅
SK2023_21	猪	猪	肥前	口:10.00	高:3.00	陶	灰白色	内外:透明釉	底面:淡・青褐色		大根V型	受程外縁にアルミナ封付臺
SK2023_22	蟲	輪口	肥前	口:4.20	高:1.40	陶	灰白色	内外:白			大根丸型	型押成形

第208図 SK2004・2019・SP2048・2026・2268・SK2017・2018・SK2014・SD2011・SK2023出土遺物観察表

#### **SK2018（第202・203図）**

C区北部、第2面で確認した遺構である。検出した標高は0.90～1.02m、底面の標高は約0.7mを測る。径0.8mの円形として検出した。断面はU字形である。

#### **SK2018出土遺物（第207図）**

13は肥前系磁器小壺。外面に鍋が認められ、高台内無釉である。

#### **SK2014（第202・203図）**

C区北部、第2面で確認した遺構である。検出した標高は1.07m、底面の標高は0.94mを測る。径0.7m程のやや不整形な円形として検出した。断面はU字形である。

#### **SK2014出土遺物（第207図）**

14は肥前系陶器碗である。15は肥前系陶器鉢で、三島手である。

#### **SD2001（第202・203図）**

C区北部、第2面で確認した遺構である。検出した標高は1.03m前後、底面の標高は0.88前後mを測る。検出長は約1.8m、検出幅は1.0m前後を測る。溝状を呈するが東西には伸びない。断面はU字形である。

#### **SD2001出土遺物（第207図）**

16は肥前系磁器碗。外面は、一重網目文に魚が描かれる。17は土師質土器皿である。

#### **SP2146（第202図）**

C区北部、第2面で確認したピットである。検出した標高は1.00m前後、底面の標高は0.79m前後を測る。SX2005の底面で検出され、平面は径0.6～0.7m前後の楕円形である。

#### **SP2146出土遺物（第209図）**

1・2は、肥前系陶器碗。1は呉器手である。3は京・信楽系陶器碗である。4は肥前系磁器口縁部である。5は備前灯明皿である。6は景德鎮窯系青花の口縁部である。

#### **SX2005（第202・203図）**

A-C区北部、第2面で確認した遺構である。検出した標高は0.92～1.14m、底面の標高は0.78～0.93mを測る。検出長は約5m、最大幅は約1.5mを測る。平面では、不整形な東西方向の溝状に認められる。断面は皿状で、埋土は炭化物を少量含むシルト質土の単層である。SD2008、SP2146より後出す。

#### **SX2005出土遺物（第209図）**

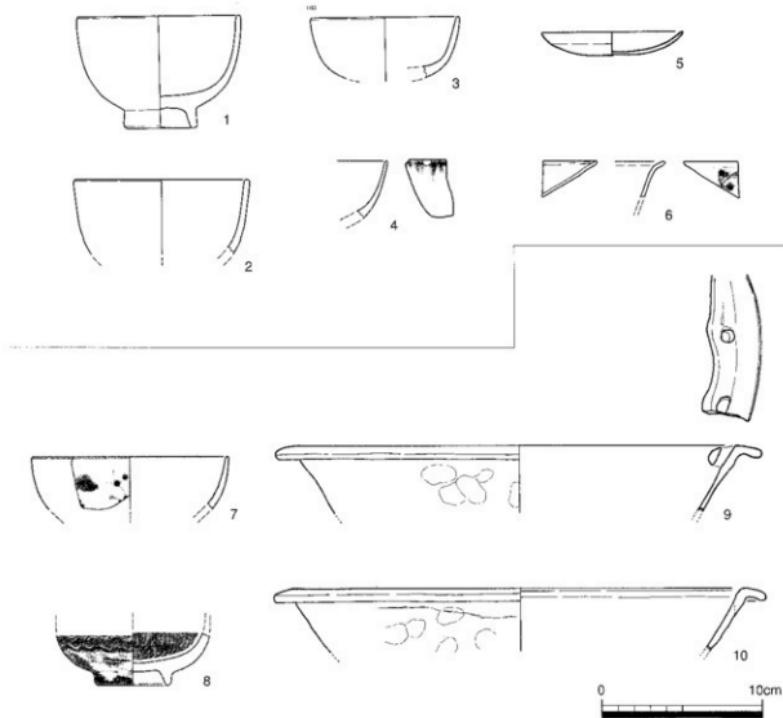
7は肥前系磁器碗である。8は肥前系磁器碗である。9・10は、瓦質土器焙烙である。

#### **SK2023（第242・244図）**

A-C区中央部、第2面で確認された遺構である。検出した標高は1.12m、底面の標高は0.72mを測る。検出長は東西方向で0.9m、南北方向で約1.2mを測る。平面は長方形だが、北面は壊される。断面は箱状である。

#### **SK2023出土遺物（第207図）**

19は京・信楽系陶器端反碗である。19は軟質施釉陶器蓋である。20・21は、肥前系磁器蓋である。22は肥前系磁器紅皿である。



遺構名	形文 (番号)	遺物 種別	基様	度地	法量 (cm)	胎土	色調1 (胎土)	色調2 (釉面、内外色調)	色調3 (渕底、上縁)	調整	製作年代	備考
SP2146	1 圓 瓢	泥前	口:9.80 高:16.95 底:14.60	縦	自2.5Y7/1	内白:灰オリ2.5Y6/2					大繩印期	高台に軽井付箋
SP2146	2 圓 瓢	瓶口縁部 瓶前	口:110.80	縦	淡青2.5Y7/3	内各:よい黄橙10YR7/4						
SP2146	3 圓 瓢	瓶口縁部 瓶・底	口:9.05	縦	灰白9Y7/1	内各:灰黄2.5Y7/2						
SP2146	4 圓 瓢	瓶口縁部 瓶前		縦	灰白色	内各:透明釉	底:明青色	外面:雨露り文	大繩印期			
SP2146	5 圓 瓢	灯明部 瓶前	口:11.7 高:1.4	縦	によい赤7.5R4/4	によい赤7.5R4/4			内各:ロクロナデ 外底:ケズリ		口縁内外に保付箋	
SP2146	6 圓 瓢	瓶口縁部 中国		縦	灰白色	内各:透明釉	底:深青色					
SX2005	7 瓢 瓢	更前	口:12.00	縦	灰白色	内各:透明釉	底:深青色				大繩印期	内面に被付箋
SX2005	8 圓 瓢	肥前	底:3.26	縦	赤10R4/6	内H:緑青灰2.5VR3/1		外輪:波状の網毛目 内面:打刷毛	大繩印期	最高点透出		
SX2005	9 土師甕 瓢		口:26.1	砂利底		外面:黄灰2.5Y9/1 内面:黄灰2.5Y6/1		内・外口縁部:ロクロナデ 外体:西岸さえ				
SX2005	10 土師甕 瓢		口:27.6	砂利底 少	灰SY5/1	灰SY5/1		内・外口縁部:ナダ 外体:砂利底 口縁部:ハケ				

第209図 SP2146・SX2005出土遺物実測図・銀表

## 第2面C区北端部・D区・E区検出遺構（第210～212図）

調査地西半部、屋敷内に微高地上の地点で検出された遺構である。調査範囲の制限により狭地で、部分的に認められた焼土を含む整地直下を確認面とした。明瞭な施設は認められず、小規模な土坑、溝状の遺構やピットが検出されている。遺物がまとめて出土するものは少ない。所属時期は、概ね17世紀後半～18世紀代を中心とすると推定されるが、17世紀前葉の所産を示すものも認められる。

### SK 2036（第210図）

C区北西端部、第2面で確認した遺構である。検出した標高は1.04m前後、底面の標高は0.86m前後を測る。検出長は東西方向で約1.1m、南北方向で約0.9mを測る。平面は方形に検出されたが、南部は搅乱により壊され、北側が調査対象外となる。

### SK 2036出土遺物（第215図）

2は肥前系磁器碗。3は瀬戸・美濃系陶器折縁皿である。

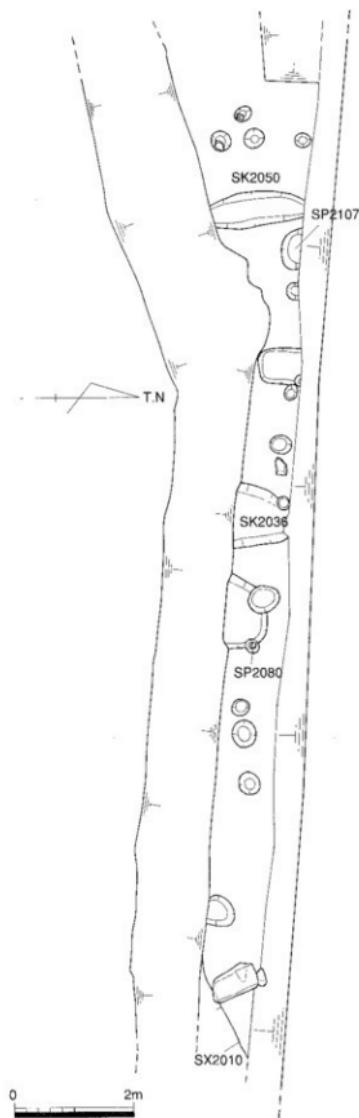
### SK 2050（第210図）

D区北東端部、第2面で確認した遺構である。検出した標高は1.04m前後、底面の標高は0.9m前後を測る。検出長は東西方向で約0.6m、南北方向で約1.5mを測る。平面は溝状に検出された。北が調査対象外となり、また南部は搅乱により壊される。

### SK 2050出土遺物（第215図）

4は土師質土器皿。灰白系の胎土で、底部は回転糸切りである。

5は信楽鉢である。



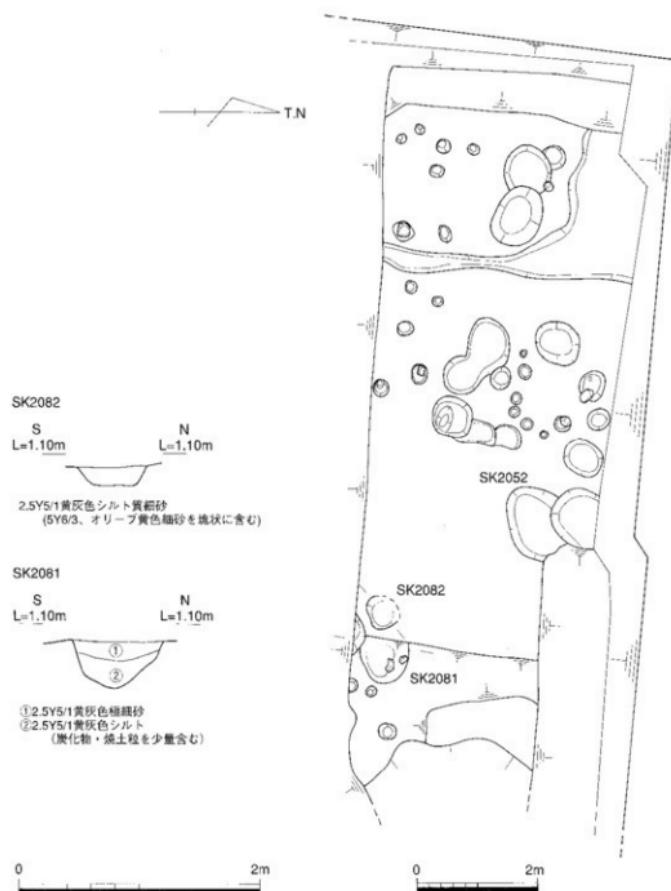
第210図 C区北端部遺構平面図

### SK2081 (第211図)

D区中央部、第2面で確認した遺構である。検出した標高は0.88m前後、底面の標高は、0.69m前後を測る。検出長は東西方向で約0.8m、南北方向で約0.9mを測る。平面は円形と推定される。

### SK2081出土遺物 (第215図)

6は焼塙壺で、輪積成形のものである。



第211図 第2面D区西半遺構平面・土層図

### SK 2082 (第211図)

D区中央部, 第2面で確認した遺構である。検出した標高は0.98m前後, 底面の標高は0.7m前後を測る。検出長は東西方向で約0.7m, 南北方向で約0.2mを測る。

### SK 2082出土遺物 (第215図)

7は肥前系陶器鉢である。

### SK 2063 (第212図)

E区中央部, 第2面で確認した遺構である。検出した標高は1.12m前後, 底面の標高は0.93m前後を測る。検出長は東西方向で約0.7m, 南北方向で約1.0mを測る。平面は方形と推定される。

### SK 2063出土遺物 (第215図)

8~11は肥前系磁器。皿(8), 碗(9・10), 青磁皿(11)が見られる。

### SK 2073 (第213図)

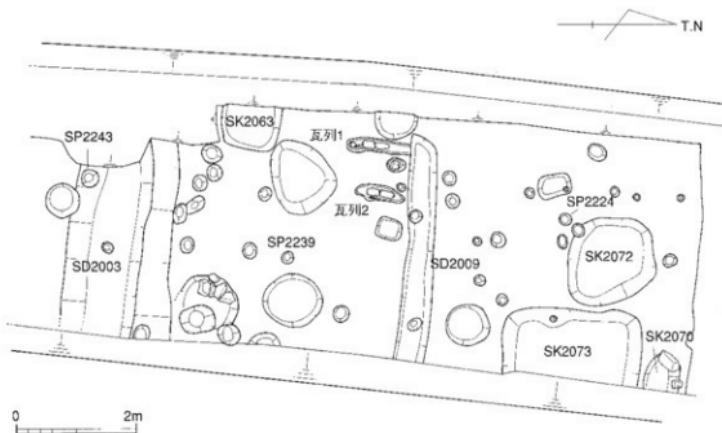
E区北部, 第2面で確認した遺構である。検出した標高は1.07m前後, 底面の標高0.67m前後を測る。検出長は東西方向で約1.15m, 南北方向で約2.45mを測る。方形に推定されるが, 東部が調査対象外となる。断面は船底形で, 埋土は水平状に堆積する。出土遺物は, 17世紀前葉頃の所産と考えられる。

### SK 2073出土遺物 (第216図)

1~3は肥前系陶器皿で, 何れも砂目が認められる。

### SK 2072 (第213図)

E区北部, 第2面で確認した遺構である。検出した標高は1.10m前後, 底面の標高は0.78m前後を測る。検出長は東西方向で約1.4m, 南北方向で約1.4mを測る。平面は不整形な方形である。



第212図 E区遺構平面図

断面は船底形で、埋土は礫を多量に含むシルト質土の単層である。所属時期は出土遺物より、17世紀前葉までの所産と考えられる。

#### SK2072出土遺物（第216図）

4は肥前系陶器碗である。5・6は備前鉢である。7・8は、土師質土器皿である。灰白色系の胎土を有し、底部は回転糸切りである。

#### SK2052（第211図）

D区北部、第2面で検出した遺構である。検出標高は0.92m前後、底面標高は0.70m前後を測る。検出長は東西に約1.1m、南北に約0.8mを測る。円形状に検出された。

#### SK2052出土遺物（第216図）

9は、肥前系陶器皿である。10は、肥前系磁器皿である。11は、備前播鉢である。

#### SD2009（第212・214図）

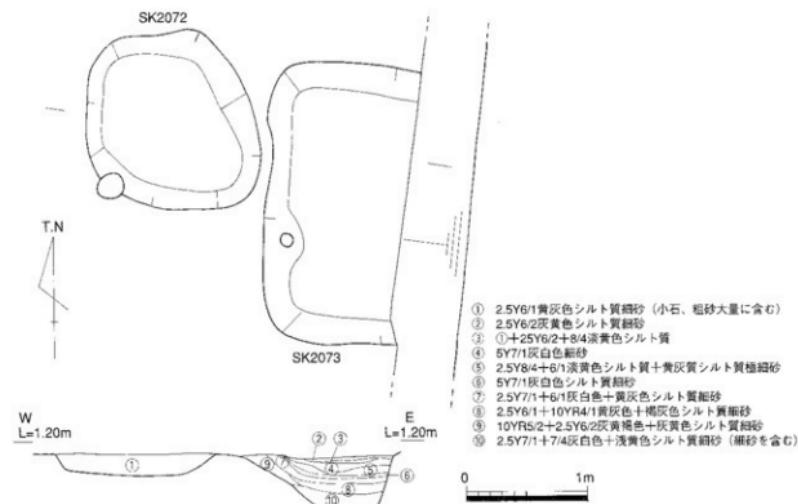
E区中央部、第2面で確認した溝状の遺構である。検出した標高は1.12m前後、底面の標高は1.06m前後を測る。N-83°-Wの主軸を持ち、断面は浅い皿状を呈す。南岸に瓦を南北方向に2列、並んで検出された。溝と合わせ、小規模な区画を示す可能性も考えられる。所属時期はSD2003に主軸が近似することから、17世紀中葉～18世紀前葉の所産と推定される。

#### SD2009出土遺物（第215図）

1は土師質土器皿。灰白色系の胎土を有し、底部は回転糸切りである。

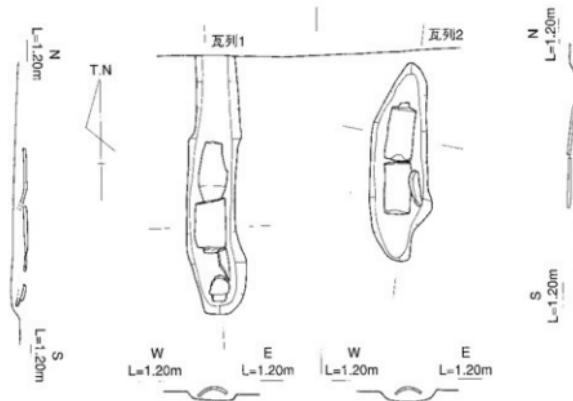
#### 瓦列出土遺物（第217～219図）

1～6の軒丸瓦が、凸面を上に並べられていた。

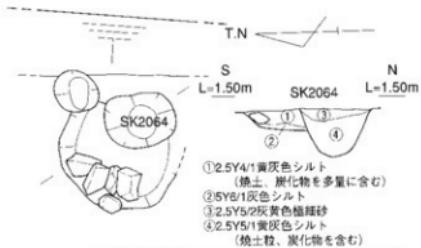


第213図 SK2072・2073平面・土層図

瓦列1・2



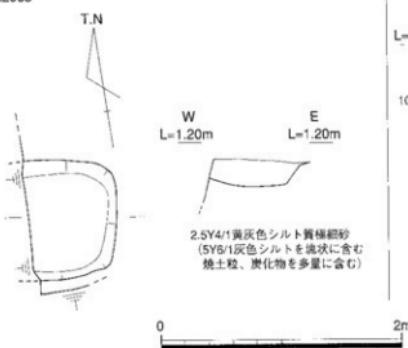
SK2064



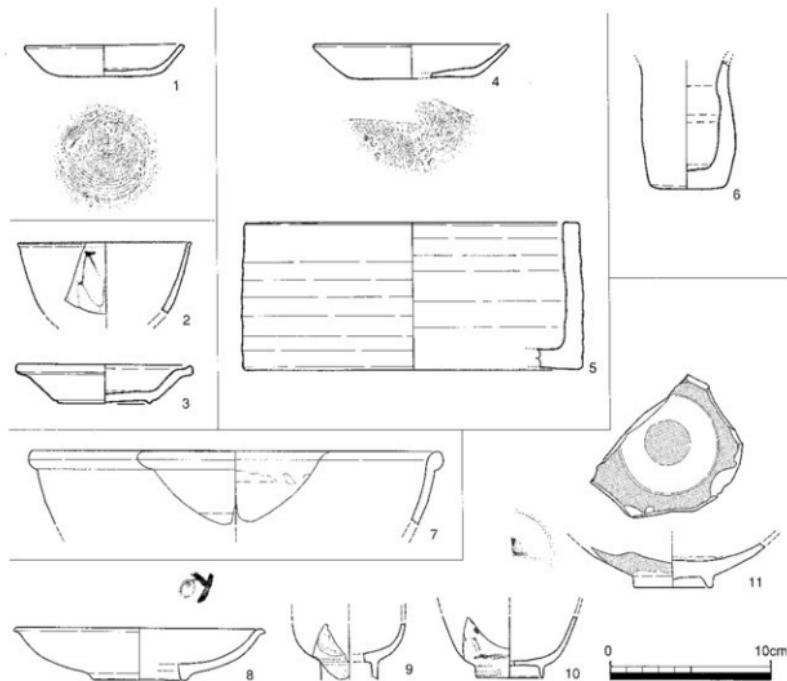
SD2009



SK2063

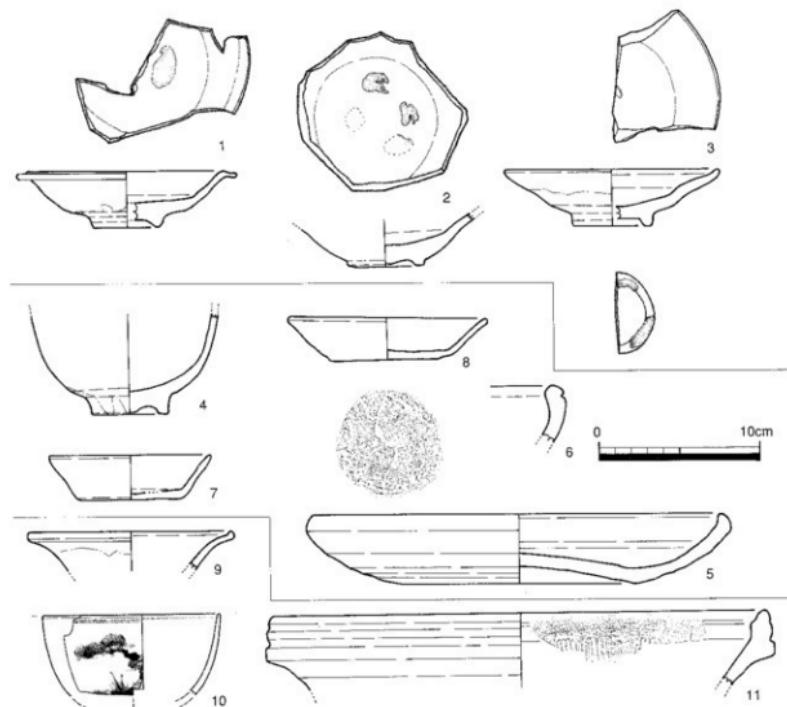


第214図 瓦列・SD2009・2063平面・断面図



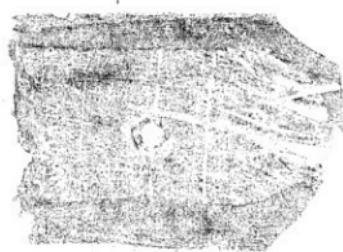
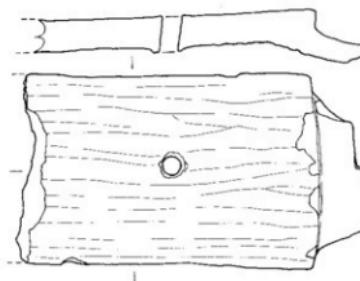
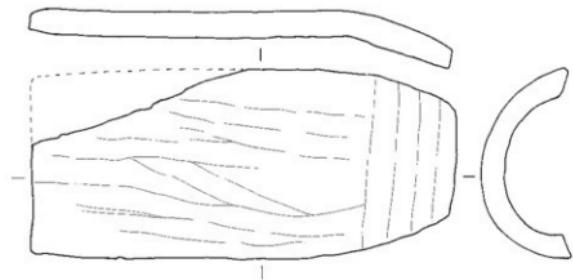
通称名	試文 番号	遺物 種別	器種	底地	底地 径量(cm)	底土	色調1(底土)	色調2(釉面、内・外色調)	色調3(呂床、上縁)	網目	製作年代	備考
SD2009	1 土師甌	皿		口:9.7 底:8.5 高:8.3	中	灰白10YR6/2	灰白10YR6/2			内外:ロクロナデ 外底:凹板条切り		口縁外に側付首
SK2036	2 刷 紋	刷毛	刷毛	口:10.60	灰	灰白色	内外:透明釉	外底:一墨綿目			大柄口形	
SK2038	3 呉 三	若・素	三	口:15.4 底:12.4 高:15.9	粗	灰白2.5YR1	灰白7.5YR7/2				大甌マ 網目	純白底
BK2050	4 土師甌	皿		口:12.0 底:11.6 高:12.6	中	灰白2.5YR1	灰白2.5YR1			内外:ロクロナデ 内底:凹板条切り 外底:凹板条切り		内外に有機物付着
SK2050	5 面 紋	信奉	面	口:29.3 底:19.0 高:20.6	粗		外底:暗褐色SYR5/6 内底:灰白7.5YR2			内外:ロクロナデ		
SK2081	6 土師甌	信奉	刷毛	底:4.7	刷毛		外底:灰白7.5YR6/6 内底:灰白10R5/8		内底:ロクロナデ		盤形底形	
SK2082	7 呉 三	刷毛	刷毛	口:25.00	粗	にい赤褐SYR5/4	褐褐SYR6/1				大柄口形	
SK2083	8 刷 紋	信奉	刷毛	口:15.50 底:15.00 高:15.50	粗	灰白色	灰白7.5YR1	底面:暗青色			大柄口-1粗	切削刃万里 全体に發熱痕
SK2083	9 呉 三	信奉	刷毛	底:14.00	粗	灰白色	内外:透明釉	底面:暗青色				
SK2083	10 呉 三	刷毛	刷毛	底:14.00	粗	灰白色	内外:透明釉	底面:暗青色			強反発	
SK2083	11 皿	信洗部	肥鉢	底:14.00	粗	灰白色	内外:明褐灰10Gy6/1		内底:乾の音泡跡		青銅	

第215図 SD2009・SK2036・2050・2081・2082・2063出土遺物実測図・観察表



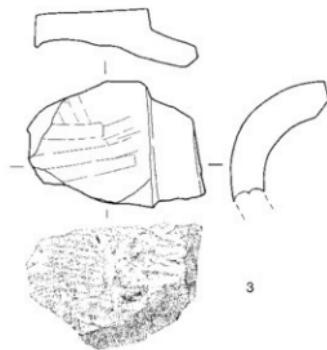
遺構名	花式 番号	遺物 種別	器種	座標	底径 (mm)	断面 (mm)	胎土	色鉄1(胎土)	色鉄2(胎土、内外各面)	色鉄3(内面、上絶)	状態	製作年代	備考
SK2073	1	陶	盆	腰前	D:19.3 底:13.4 高:14.0	横	淡黄褐色	10R6/3	にい焼10R7/3			大柄Ⅱ期	見込みに砂筋2ヶ所
SK2073	2	陶	盆	腰前	D:14.7	横	褐	褐SY6/6	板灰10V4/1			大柄Ⅱ期	見込みに砂筋3ヶ所
SK2073	3	陶	盆	腰前	D:13.2 底:13.5 高:14.9	横	灰白	N7/0	褐オリーブ灰GY7/1			大柄Ⅰ-2期	裏面に粉目2ヶ所
SK2072	4	陶	盆	腰前	D:14.6	横	灰白	10Y7/1	褐オリーブ灰GY7/1			大柄Ⅱ期	
SK2072	5	陶	钵	腰前	D:19.7 底:14.25 高:14.4	横	外:灰 内:褐	灰7.5R4/3 褐7.5R2/3	内面:灰7.5R4/3 外面:褐7.5R2/3			大平鉢、内外面に滑溜感	
SK2072	6	陶	口縁部	腰前		横			外面:褐7.5R2/3 内面:灰7.5R2/4 底:10Y9/1				
SK2072	7	土器質	盆		D:19.9 底:15.9 高:15.9	横	灰白	10Y8/2	灰10V8/2		内面:ロクロナデ 外面:白軒素切り		底面内外に3.0×3.2cmの凹陥痕
SK2072	8	土器質	盆		D:18.1 底:12.8 高:14.9	横	灰白	2.5Y8/1	灰2.5Y8/1		内面:ロクロナデ 外面:白軒素切り 内面:土上にナデ		
SK2052	9	陶	盆	腰前	D:12.4	横	灰	2.5Y8/1	灰白N8/0			大柄Ⅱ期	
SK2052	10	陶	盆	腰前	D:11.00	横	灰白色		内面:浅栗褐色	青青色		大柄Ⅱ期	
SK2052	11	陶	儘体	腰前	D:30.1	横	青灰	7.5R5/1	青灰7.5R5/1		内面:ロクロナデ	近世Ⅱ期	

第216図 SK2073・2072・2052出土遺物実測図・観察表



0 10cm

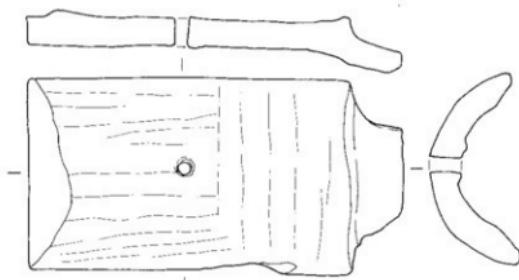
第217図 瓦列出土遺物実測図（その1）



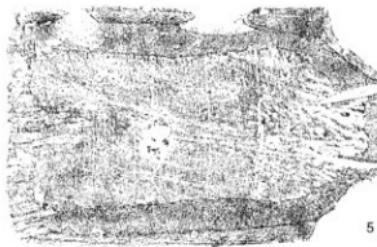
3



4



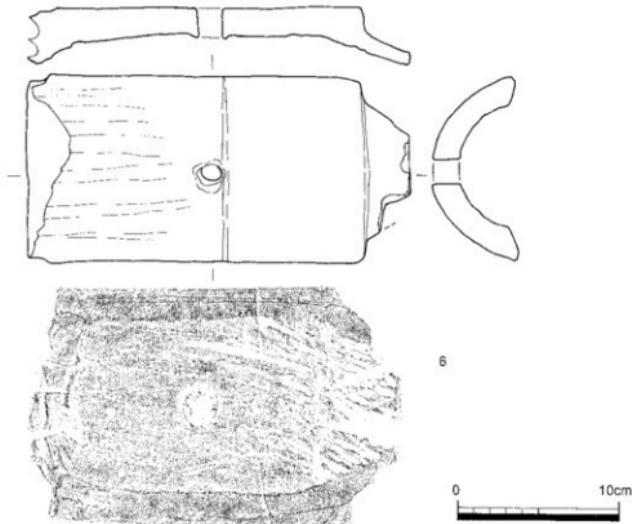
1



5



第218図 瓦列出土遺物実測図（その2）



遺物名 記文 番号	遺物 種別	測量 長さ(復元長) 幅	測量(m)	幅(復元幅) 厚さ	地土	内面		外面		性質	備考
						表面	基面	内面	外面		
瓦列1 1	丸瓦	26.3	1.4	11.6	砂礫・石少	灰N6/0	焼灰N3/0	ゴザ状圧痕		瓦	
瓦列No.2 2	丸瓦	21.6	2.1	12.0	砂礫・石少	灰白2.5Y7/1	焼灰N4/0	ゴザ状圧痕	板ナデ	瓦	被熱
瓦列No.3 3	丸瓦	19.6	2.1	7.7	砂粒少	灰白2.5Y7/1	緑青灰5B4/1	ホロ ゴザ状圧痕	板ナデ	瓦	被熱
瓦列No.3 4	丸瓦	11.0	1.5	5.1	砂粒少	灰白2.5Y7/1	焼灰N3/0	ゴザ状圧痕	板ナデ	瓦	
瓦列No.2 5	丸瓦	23.3	1.7	12.2	砂礫・石少	に少し黄褐色 10YR7/2	灰N4/0	ゴザキラ、ホロ ゴザ状圧痕	板ナデ	瓦	被熱
瓦列No.1 6	丸瓦	23.6	1.6	11.5	砂礫少	灰白2.5Y8/2	灰白N4/0	ゴザ状圧痕		瓦	被熱 しつくい付着

第219図 瓦列出土遺物実測図・観察表（その3）

### SP2080（第210図）

C区北端部、第2面で確認したピットである。検出した標高は1.09m前後、底面の標高は1.02m前後を測る。径約0.2mの円形として検出した。底面に根石が認められる。

### SP2080出土遺物（第220図）

2は瀬戸・美濃系陶器皿口縁部である。

### SK2084（第221図）

C区西部、第2面で確認した遺構だが、第1面で除去しきれなかった搅乱を除いた際に、検出した。埋甕と考えられる土器は、既に破壊された状態で出土している。検出した標高は1.18m前後、底面の標高は0.90m前後を測る。検出長は東西方向で約0.64m、南北方向で約0.34mを測る。南部を搅乱により壊され、平面は半円形に認められた。

### SK2084出土遺物（第220図）

3は瓦質土器の大甕である。外面に格子状の叩き痕、内面に刷毛調整が認められる。亀山系のものである。



0 10cm

遺構名 番号	形式 種類 種別	面積	座標 法量(m)	法量(m)	地土	色調1(地土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(直面、上縁)	調整	製作年代	備考
SK2085 1	坑	圓	深削	□:13.00	圓	深白色	内面:透明釉	外縁:緑青色	外縁:烏甲、漆 内面:四方縁	大塗解剖	
SP2080 2	陶	皿口縁部	瀬戸・美	盤	灰白	灰白10YR7/1	内面:透明白7.5YR3/4				
SK2084 3	瓦質	甕	口	□:61.00	砂利	黄灰2.5Y6/1	黒褐2.5Y3/1				

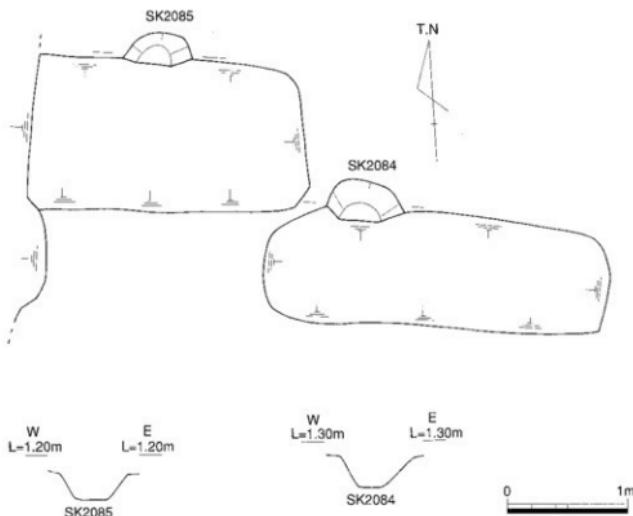
第220図 SK2085・SP2080・SK2084出土遺物実測図・観察表

### SK 2085 (第221図)

C区西部、第2面で確認した遺構だが、第1面で除去しきれなかった擾乱を除いた際に、検出した。検出した標高は1.05m前後、底面の標高は0.83m前後を測る。検出長は東西方向で約0.6m、南北方向で約0.3mを測る。南部を擾乱により壊され、平面は半円形に認められた。

### SK 2085出土遺物 (第220図)

1は肥前系磁器碗である。SX2008の出土品と接合関係が認められた。



第221図 SK 2084・2085平面・断面図

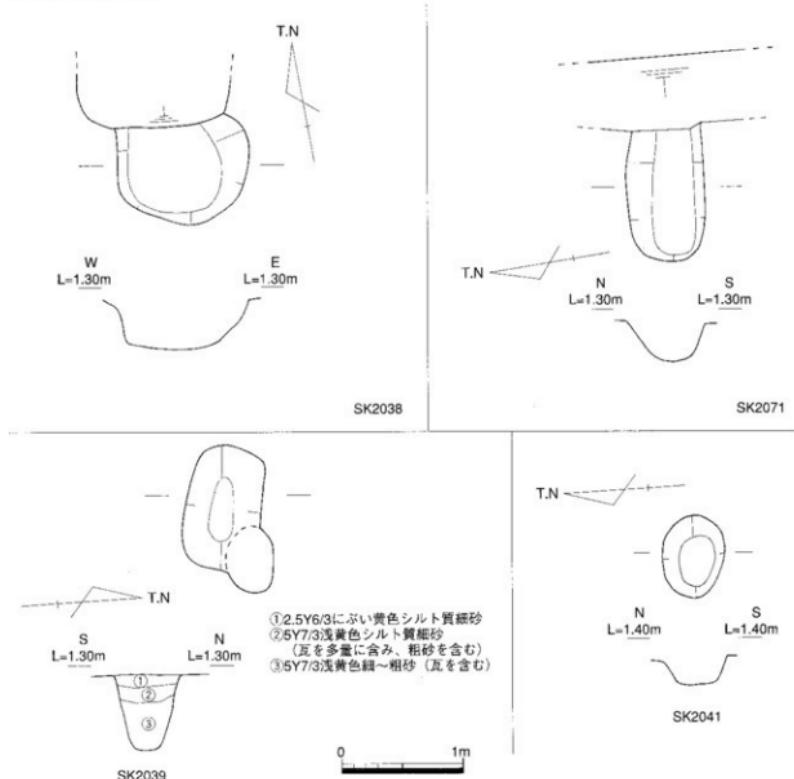
以下SK2038～SK2074は、道路部分で検出された遺構である。19世紀代の廃棄土坑と考えられるものが多いた。

#### SK2038（第222図）

C区南西隅、道路整地の上面で確認した遺構である。検出した標高は1.07～1.20m、底面の標高は0.8m前後を測る。検出長は東西方向で約1.1m、南北方向で約0.8mを測る。平面は円形であるが、北部を搅乱により壊される。断面は箱形である。所属時期は出土遺物より明治時代の所産と考えられる。

#### SK2038出土遺物（第223図）

1は瀬戸・美濃系磁器皿である。2は肥前系磁器瓶である。3・5は備前灯明皿である。6は備前鉢である。4・7は京・信楽系陶器。皿（4），蓋（7）がある。7はSK1017の出土品と接合関係を有する。



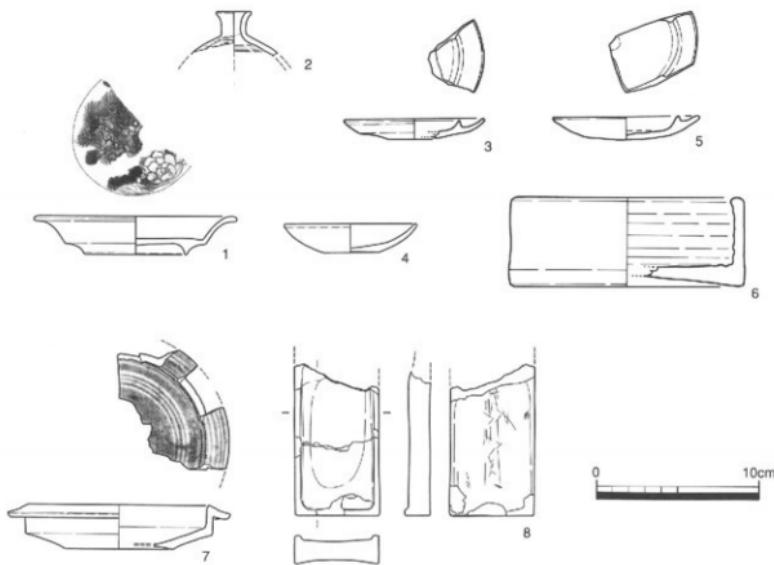
第222図 SK2038・2039・2041・2071遺構平面・土層図

### SK 2039 (第222図)

C区南部、道路整地の上面で確認した遺構である。検出した標高は約1.20m、底面の標高は0.61m前後を測る。検出長は東西方向で約1.1m、南北方向で約0.6mを測る。平面は隅丸方形である。断面は箱形で、中層に瓦が多量に廃棄されていた。所属時期は、出土遺物より19世紀代の所産と考えられる。

### SK 2039出土遺物 (第225図)

7は肥前系磁器碗で、ガラス質の熔着剤による焼継が認められる。8は肥前系磁器瓶である。



遺物名 番号	種類 種別	断面	形状	底面	底面 径(cm)	土色	色調1(粘土)	色調2(粘土、内・外色調)	色調3(表面、上部)	表面	製作年代	備考
SK2038 1 瓶 直	瓶	圓・直	瓶	底:6.15	口:11.85 底:6.15	灰白色	内外:透明地	表面:コバルト	内部:錫子			
SK2038 2 瓶 直	瓶	更直	瓶	底:6.05	口:12.05 底:6.05	灰白色	内外:透明地	表面:青紫色	外部:削面平 内面:削面平	大正時代 Ⅱ~Ⅲ期		
SK2038 3 圓 灯明皿	圓	直・傾	皿	底:1.2	口:8.5 底:1.2	灰白色	2.5V7/2	灰白色2.5V8/2		外面上半:ナデ 外下部:ナズリ		
SK2038 4 圓 直	圓	直	瓶	底:1.2	口:8.5 底:1.2	灰白色	2.5V8/2	内側:2.5V8/3	内面:見込みにビン底2+3	外口縁部に揮付墨		
SK2038 5 圓 灯明皿	圓	直	皿	底:1.4	口:8.5 底:1.4	白10R5/6	白10R5/6	内面:口クロナナ	内面:口クロナナ			
SK2038 6 圓 瓢	圓	直	瓢	底:1.4	口:19.4 底:14.2	透砂灰	透砂灰10P3/3~10 R4/6	透砂灰10P3/3~10 R4/6	内面:ロクロナナ			
SK2038 7 圓 瓢	圓	直	瓢	底:1.4	口:19.4 底:11.00	透砂灰	透砂灰10P3/1 R4/6	透砂灰10P3/1 R4/6	内面:透砂的な網毛目			
SK2038 8 石 瓢	石	直	瓢		底:10.4/2	灰白色	8	上端:白・青 外面:透砂的な網毛目	透砂灰 1244と同一固体			

第223図 SK 2038出土遺物実測図・観察表

#### SK 2041 (第222図)

C区南部、道路整地の上面で確認した遺構である。検出した標高は1.25m前後、底面の標高は1.02m前後を測る。検出長は東西方向で約0.7m、南北方向で約0.5mを測る。平面は楕円形で、断面はU字形である。所属時期は、出土遺物より19世紀代の所産と考えられる。

#### SK 2041出土遺物 (第225図)

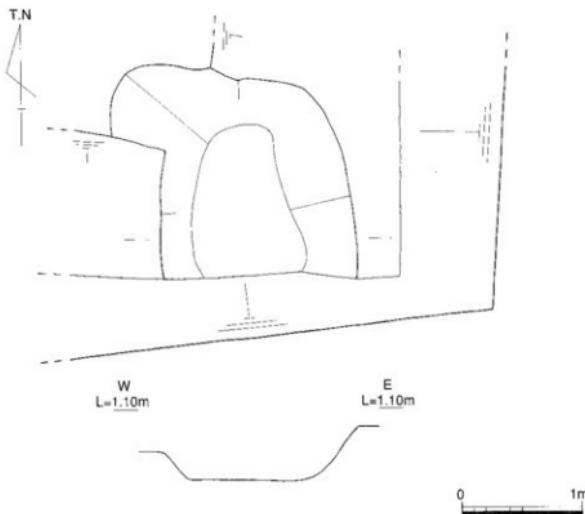
1は関西系磁器碗である。2は陶器鍋である。

#### SK 2071 (第222図)

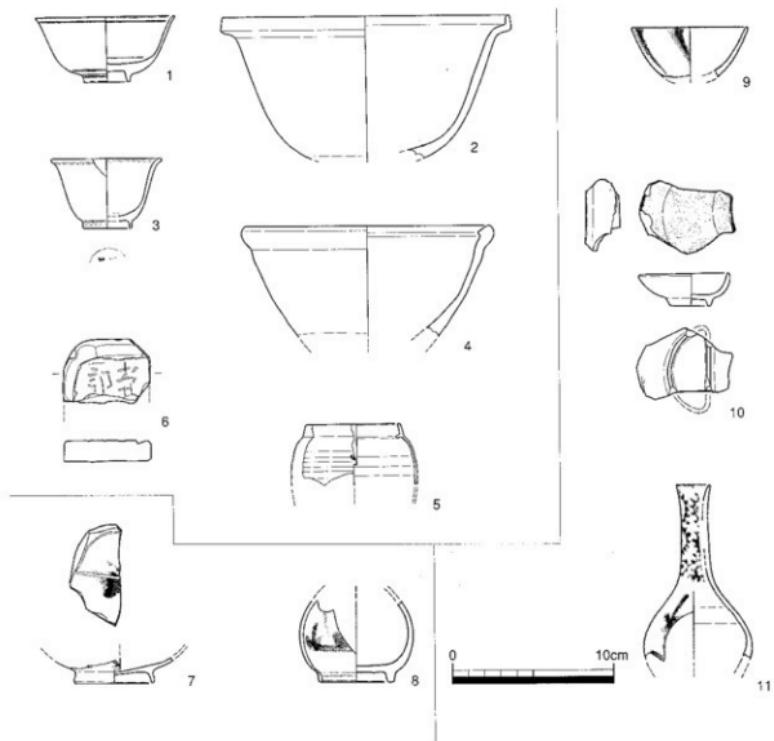
F区南部、道路整地の上面で確認した遺構である。検出した標高は約1.20m、底面の標高は0.88m前後を測る。検出長は東西方向で約1.1m、南北方向で約0.6mを測る。平面は楕円形と推定されるが、東部が調査対象外であるため全容は不明である。断面はU字形である。所属時期は、出土遺物より19世紀代の所産に考えられる。

#### SK 2071出土遺物 (第225図)

3は景德鎮窯系青花小壺である。4は瀬戸・美濃系陶器鉢である。5は京・信楽系陶器の蓋物である。6は土製品で、線刻が認められる。



第224図 SK 2094平面・断面図



番号名 考古 番号	遺物 種別	母機	産地	法量(cm)	鉢土	色調1(粒子)	色調2(粒度・内外色調)	色調3(底面・上部)	底面	製作年代	備考
SK2041 1 瓢 瓢	開底系	□:8.50 蓋:4.00	板	反白色	内:透明無	外:コバルト					
SK2041 2 壺 土壘		□:17.00	板	褐色10R3/4	褐色10R2/4						
SK2071 3 瓢 小舟	中田	□:5.60 蓋:2.60	板	灰白色	内:透明無	外:透明無					董錦様
SK2071 4 瓢 鉢	漏光	□:16.00	板	灰白N7/0	内:透オーラB2.5Y9/1					19世前	
SK2071 5 壺 蓋附	東・復	□:15.25	板	灰白10YR8/2	内:反白7.5Y7/1	内底:緑青色					
SK2071 6 土器質	全長:5.40			にせい7.5YR7/3	□:平1.5	7.5YR7/3					
SK2039 7 瓢 親底部	船形	底:15.00	板	灰白色	内:透明無	底底:淡・緑青色				1770~	小広葉模。ガラスによる施繪模
SK2039 8 瓢 船底部	船形	底:14.50	板	灰白色	内:透明無	底底:淡青色				大徳V期	蓋台内にアルミニナ粉付着
SK2094 9 瓢 瓢		□:7.10	板	灰白色	内:透・緑青色		外底:ねじ花			1770~	小広葉模
SK2094 10 瓢 宝形底	高:12.10	板	反白色	内:透明無	底底:淡黄色 口紅:暗赤褐5YR3/4	内底:堅底凹り				大徳至承	舟切り加工
SK2094 11 瓢 瓢		□:1.80	板	灰白色	内:透明無	底底:淡・緑青色	外底:透青色			大徳V期	

第225図 SK2041・2071・2039・2094出土遺物実測図・観察表

### SK 2094 (第224図)

A区南東隅、道路整地の上面で確認した遺構である。検出した標高は0.74~1.25m、底面の標高は0.57m前後を測る。検出長は東西方向で約1.6m、南北に約1.6mを測る。平面はやや不整形な隅丸方形と推定されるが、南が調査対象外となるため全容は不明である。断面は箱状である。所属時期はSD3011を壊していることから、19世紀前葉以降の所産と考えられる。

### SK 2094出土遺物 (第225図)

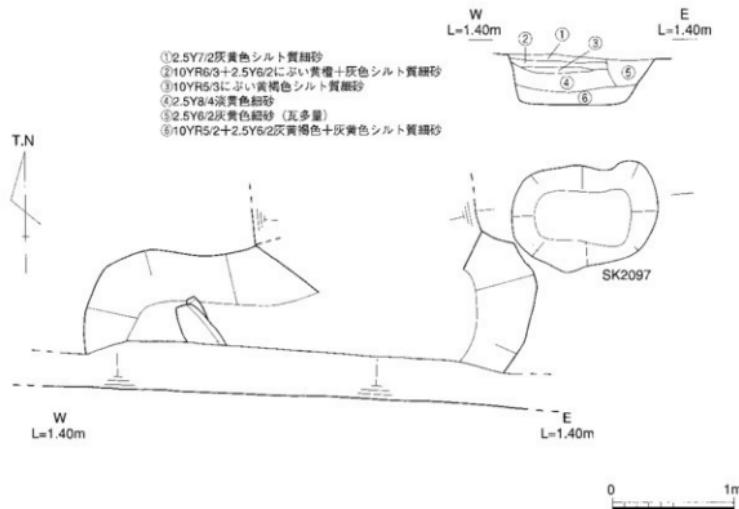
9~11は肥前系磁器。9は広東碗である。10の小皿は、糸切り細工で型紙刷りによる装飾が認められる。11は瓶類である。

### SK 2097 (第226図)

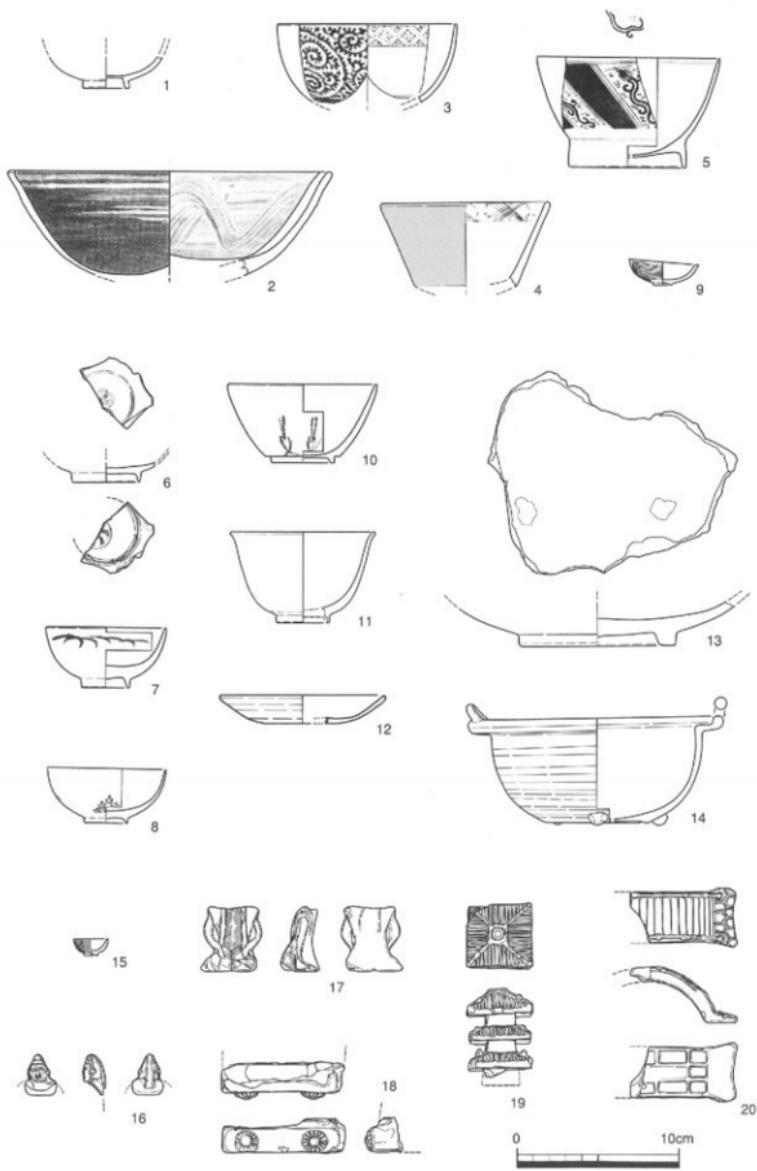
A区、道路整地の上面で確認した遺構である。検出した標高は1.24~1.28m、底面の標高は0.88m前後を測る。検出長は1.2mで、検出幅は0.9m前後を測る。平面はやや不整形な隅丸方形で、断面は箱状である。上位の埋土は道路整地と同様な細い堆積及び瓦を詰めた堆積が認められ、下位では細砂、シルト質土が堆積する。出土遺物より概ね19世紀前葉の埋没時期が考えられる。

### SK 2097出土遺物 (第227図)

1~10・11は、京・信楽系陶器。丸碗(1)、小杉碗(10)、端反碗(11)がある。3~7・9~15は、肥前系磁器。碗(3)、青磁染付(4)、広東碗(5)、小広東碗(6)、小壺(7)、紅皿(9~15)がある。12は備前灯明皿である。13は瀬戸・美濃系陶器鉢底部である。14は施釉陶器把手付鍋である。16~20は、人形及び箱庭セットである



第226図 2097平面・断面・土層図



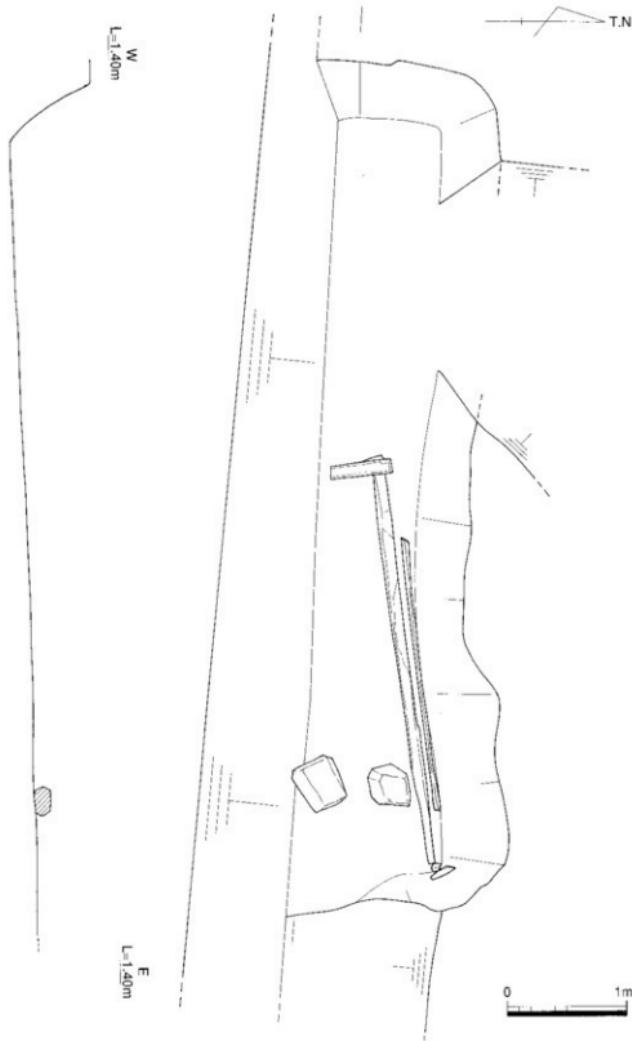
第227図 SK 2097出土遺物実測図

遺構名	推定 番号	遺物 種別	基準 寸法	遺物 法量 (cm)	出土 土	色調1 (出土)	色調2 (検査、内面色調)	色調3 (工具、上塗)	状態	製作年代	備考
SK2097	1	環 礁底部	京・値 底:12.55	地	灰白2.5Y6/2	灰白7.5Y7/1					
SK2097	2	陶 鉢	把柄 口:19.3	地	三褐7.5YR3/2	外面:浅黄2.5Y7/3 内面:にじい黄2.5Y6/4		外面:薄緑の苔色光沢 内面:茶褐色の苔色光沢、 直状新毛目	大根V網 削毛目		
SK2097	3	器 碗	器前 口:16.85	地	灰白色	内面:透明釉	黄10J-2-青色	外面:透明釉 内面:四方彫	大根V網		
SK2097	4	器 碗	器前 口:16.1	地	灰白色	内面:透明釉	黄10J-2-青色	外面:青色 内面:四方彫	大根V網 青面		
SK2097	5	器 瓶	器前 口:11.2 底:16.5 高:7.0	地	灰白色	内面:透明釉	黄10J-2-青色			1700年代 江戸後	
SK2097	6	器 瓶底部	瓶底 底:14.0	地	灰白色	内面:透明釉	黄10J-2-青色			1700年代 江戸後	
SK2097	7	器 瓶	把柄 口:7.25 底:2.8 高:12.55	地	灰白色	内面:透明釉	黄10J-2-青色			大根V網	
SK2097	8	器 瓶	把柄 口:7.25 底:2.8 高:12.55	地	灰白色	内面:透明釉	黄10J-2-青色				
SK2097	9	器 紅皿	器前 口:14.2 底:1.0 高:1.0	地	灰白色	内面:灰白NB1				型押模	
SK2097	10	陶 瓶	京・値 口:19.0 底:4.8 高:3.2	地	灰白2.5Y6/1	内面:灰白SY7/2	象嵌:黑海2.5Y3/2	外面:小紋文(透竹文)		小杉美術	
SK2097	11	陶 瓶	京・値 口:17.2 底:3.2	地	灰白2.5Y6/2	内面:灰白7.5Y7/2				織灰窓	
SK2097	12	陶 灯明座	燈軒 口:10.0 底:1.7 高:4.0	地		内面:赤茶10R5/6 内面:赤茶10R5/4		内面:ロクロナデ 外面:外面下半ケメリ		口縁部内外面に繩付縦、 内面毛	
SK2097	13	陶 器蓋	蓋 底:5.3	地	灰白2.5Y6/2	灰白SY7/2		内面に出土目的2ヶ所			
SK2097	14	陶 土鍋	口:15.1 底:15.5 高:6.55	地	灰オーリエ7.SYR3/2	内面:暗褐色7.SYR3/4				産地不明	
SK2097	15	陶 紅皿	器前 口:12.5 底:1.05 高:0.7	地	灰白色	内面:灰白NB1				型押模	
SK2097	16	土師質 土製人形		中中質	にじい桜7.SYR7/4						
SK2097	17	土師質 土製人形		中中質	にじい桜7.SYR7/4					器表面にトウコ造布、前 後型合わせ	
SK2097	18	土師質 陶的埴輪		中中質	にじい桜7.SYR7/4					器表面にトウコ造布、前 後型合わせ	
SK2097	19	土師質 埴輪セット		中中質	にじい青緑10YR7/3					器表面にトウコの造布 を認める	
SK2097	20	土師質 埴輪セット		中中質	にじい青緑10YR7/3					器表面にトウコの造布 を認める	

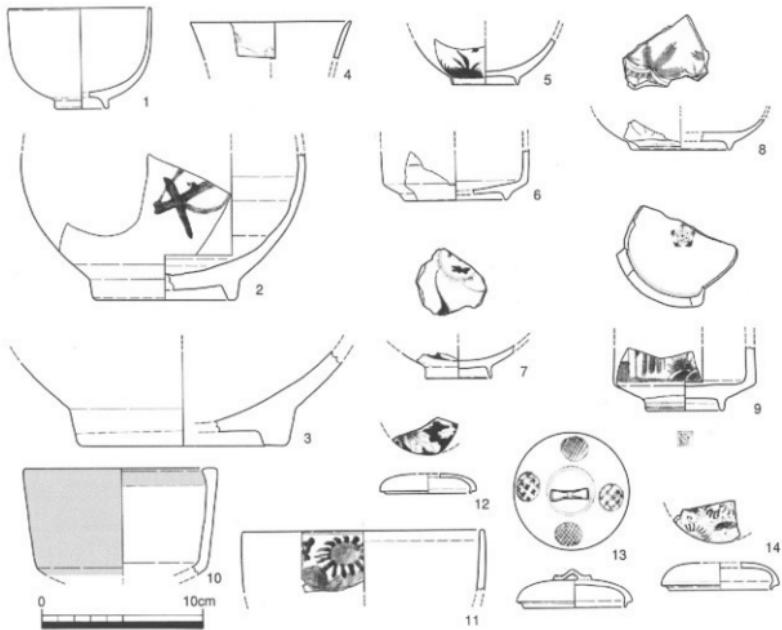
第228図 SK2097出土遺物観察表

### SK2095 (第229図)

A区、道路整地の上面で確認した遺構である。検出した標高は0.75~1.30m前後、底面の標高は0.50~0.58m前後を測る。検出長は約7m、検出幅は1.8m前後を測る。平面は長方形であるが、南側は調査区外で、また近現代の搅乱により遺構の南及び東部の大半は消失している。断面は箱状と推定される。埋土は、瓦等、遺物を多量に包含した砂質土が大半を占めていた。底面に、10cm程の角材をL字ないしコ字に組まれた木材が認められたが、性格については不明である。他の遺構との関連では、第1面で確認された建物（門）の対面となる道路中央部に位置し、東西には同一の規模を有している。また屋敷内へと上水を引き込む箱枠を壊し、開削されていることからも当屋敷の出入口と何らかの関連が推察される。所属時期は、出土遺物から19世紀前葉の埋没時期が考えられる。

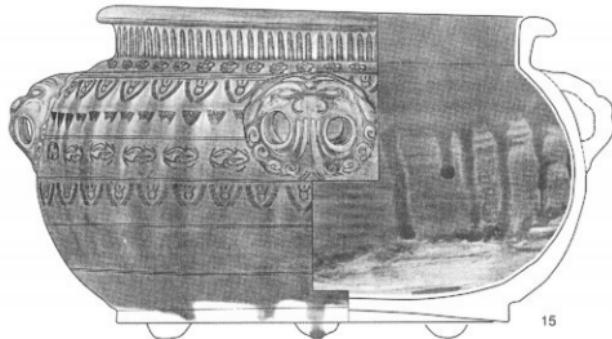


第229図 SK 2095平面・断面図

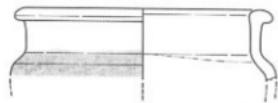


遺物名 通文 番号	遺物 種別	器種	高さ mm	口径 (mm)	底径 (mm)	胎土	色調1 (胎土)	色調2 (内面・外表面)	色調3 (底面・上部)	底盤	製作年代	備考
SK2095 1 瓶 瓶	瓶	直筒	口:8.6 底:8.15 高:13.05	無	無	灰白SY6/1	内外:灰白SY7/1					
SK2095 2 瓶 瓶底部	瓶	直筒	口:8.9	無	無	灰白2.SY7/1	底灰2.SY7/2	灰白:暗青色			2次焼成の痕跡	
SK2095 3 壺 瓶底部	瓶	直筒	底:12.30	無	底:10.8/6	外面:暗青色 上部:褐色SY10R2/2					大抵V期	削毛孔黒漆
SK2095 4 瓶 瓶	瓶	直筒	口:10.00	無	灰白色	内外:透明釉	灰白:淡青白					陶物付
SK2095 5 瓶 瓶底部	瓶	直筒	底:9.95	無	灰白色	内外:透明釉	灰白:暗青色					
SK2095 6 瓶 瓶底部	瓶	直筒	底:16.2	無	灰白色	内外:透明釉	灰白:暗青色 上部:黑褐SYR3/1				大抵V期	黒打底
SK2095 7 瓶 瓶底部	瓶	直筒	底:9.95	無	灰白色	内外:透明釉	灰白:淡青白	外面:ねじ花 内面:ねじ花、墨灰			1770~	小仏葉茎、裏台面に2次 追加の痕跡
SK2095 8 瓶 瓶底部	瓶	直筒	底:9.95	無	灰白色	内外:透明釉	灰白:暗青色				大抵V期	壓打底形
SK2095 9 瓶 瓶	瓶	直筒	底:14.50	無	灰白色	内外:透明釉	灰白:暗青色	内面:五分花			笠台内に結び目 内面:粗熱風	
SK2095 10 瓶 火入	罐	直筒	口:9.00	無	灰白色	内外:透明釉	灰白:淡青白	内外:ねじ花 内面:ねじ花、墨灰				
SK2095 11 瓶 瓶口部	瓶	直筒	口:14.75	無	灰白色	内外:透明釉	灰白:暗青色					
SK2095 12 瓶 瓶	瓶	直筒	最大径:10.0 底:9.50 高:15.00	無	灰白色	内外:透明釉	灰白:暗青色				大抵V期	黒打底
SK2095 13 瓶 瓶	瓶	直筒	最大径:7.2 底:6.25 高:16.3	無	灰白色	内外:透明釉	灰白:暗青色				大抵V期	2次焼成の痕跡
SK2095 14 瓶 亞	瓶	直筒	最大径:7.25 底:6.3	無	灰白色	内外:透明釉	灰白:暗青色				大抵V期	

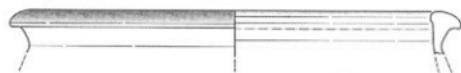
第230図 SK2095出土遺物実測図・観察表（その1）



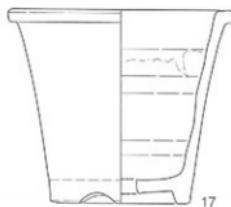
15



16



18



17



19



22



23



21



24

第231図 SK2095出土遺物実測図（その2）

遺物名 番号	種類 形別	基盤	口径	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉面、内外色調)	色調3(底面、上縁)	測定	製作年代	備考
SK2095_15 瓢	瓶	器身	器・突								
SK2095_16 瓢	甕口縁鉢	口:14.5	緑	灰白SY7/1		外面:明治時代1007/1 内面:甕口縁部:灰白SY8/1				実印地・内面に2次焼成の跡跡	
SK2095_17 瓢	植木鉢	陶・素 径:14.6 高:7.9 底:7.8	緑	灰白SY8/2		内面:灰白SY7/1					
SK2095_18 瓢	甕口縁鉢	京・保	口:25.2	緑	灰白SY7/2	口縁上部:昭和初期50年 外縁:白、内面:灰白SY8/2				富田焼	
SK2095_19 軟質粗 陶器	鉢	口:22.85	緑	相田7.5YR6/1		内外:薄赤褐色SYR3/2					
SK2095_20 瓢	灯明皿	器身	口:17.3 底:2.5	緑		外面:透2.5YR6/6 内面:にじみ透2.5YR6/4			内面:ロクロナデ 外縁:凸面下平:ケズリ	口縁部内外面に焼付量	
SK2095_21 瓢	擂鉢	備前	口:25.6 高:7.8 底:13.7	緑		外面:桂赤10R3/6 内面:赤褐10R6/6			内面:ロクロナデ	外縁:指捺	
SK2095_22 瓢	墨入		口:2.5 高:2.5 底:2.6	緑	医白2.5YR8/2	透黄2.5Y7/3				内面に墨付量	
SK2095_23 瓢	ミニニア 瓶		口:5.6 高:2.2 底:1.8	緑	灰白10YR8/2	内面:明黄透2.5Y6/6			外縁:ケズリ 内面:塗目		
SK2095_24 土瓶質 土製品		高:2.25 底:2.75	器・全 器身	相SYR7/6		外面:製作記 内面:押押さえ					

第232図 SK2095出土遺物観察表

### SK2095出土遺物（第230～232図）

瓦、陶器がコンテナに3箱程度出土した。1は京・信楽系陶器丸碗である。2・4は、陶胎染付である。3は肥前系陶器鉢である。5～14は、肥前系磁器。半球碗（5）、筒形碗（6・9）、小広東碗（7）、型打成形の皿（8）、青磁火入（10）、蓋及び蓋物（11～14）がある。15・17は、瀬戸・美濃系陶器。瓶掛（15）、植木鉢（17）がある。18・22は、京・信楽系陶器である。緻密な胎土に白化粧、口縁部は淡緑色を下地とし、透明色の釉を掛けた。富田焼の可能性がある。22は墨入れ。20・21は備前。灯明皿（20）、小形の擂鉢（21）である。23は軟質施釉陶器のミニチュア擂鉢。24はミニチュア釜の土製品である。

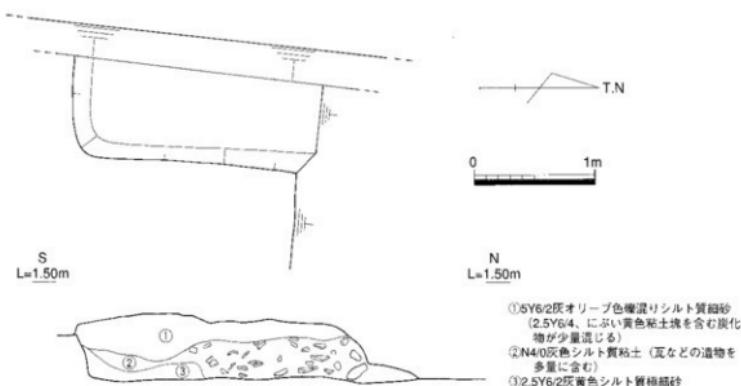
### SK2076（第233図）

F区、道路整地の上面で確認した遺構である。検出した標高は1.06m前後、底面の標高は0.70m前後を測る。検出長は2.1m、検出幅は0.8m前後を測る。平面は長方形と推定されるが、西側が調査区外となり、また北側は現代搅乱により消失している。断面は、ほぼ遺構面より直角に掘られ、底面は水平状にみられる。埋土は3分割され、中層に瓦をはじめ遺物の集中部があり、その上面は埋め戻し土と考えられる。19世紀前葉頃の廃棄土坑と推察されるが、下位からの混入が想定しにくい箇所で検出されたにもかからわず、出土遺物に一部17世紀末～18世紀前葉の所産のものが認められ長い期間存続した可能性もある。

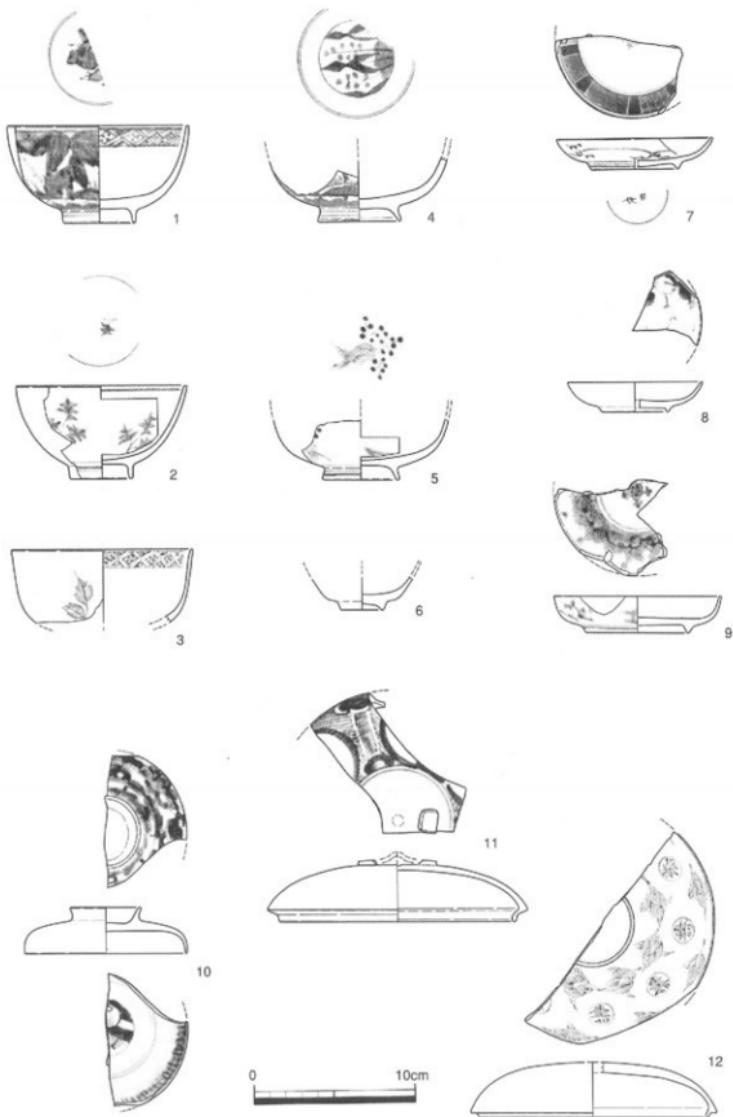
### SK2076出土遺物（第234～237図）

規模に比べ多量の瓦、陶磁器（コンテナ3箱）が出土した。

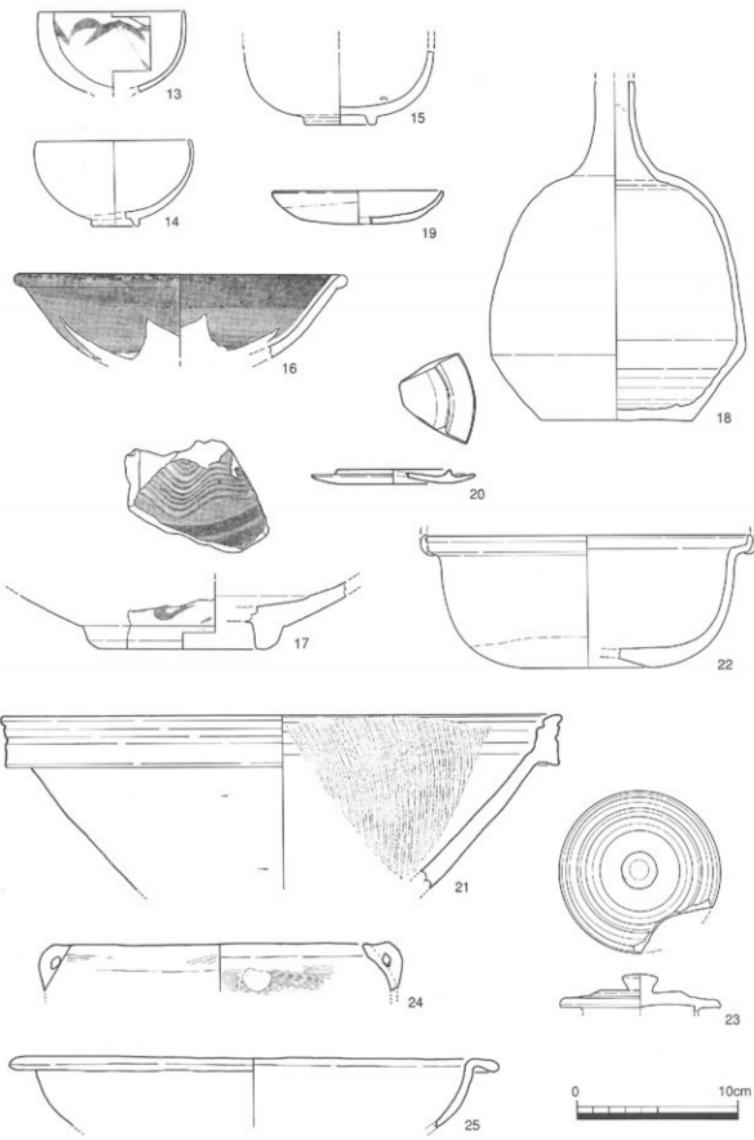
7は肥前系磁器皿である。器高の低いU字高台のもので、見込みには五弁花、内面の文様に墨弾きによる白抜き技法が認められる。（17世紀末～18世紀前葉）。8は、備前献上手德利（17世紀後半～18世紀前葉）。他は肥前系磁器小広東碗（2）、撥高台の碗（4・5）、蓋物（11・12）、京・信楽系陶器丸碗（13・14）等が認められ、SX2008と併行した所産と考えられる。



第233図 SK2076平面・土層図



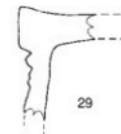
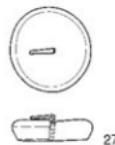
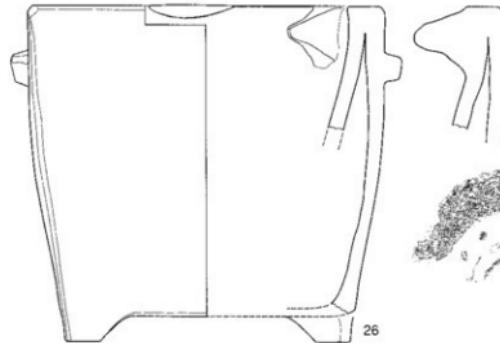
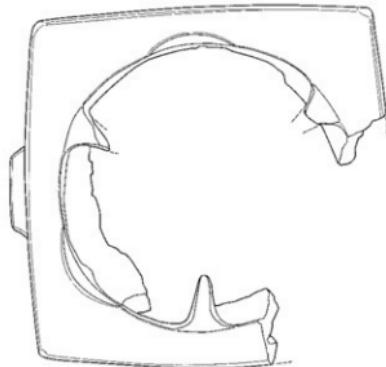
第234図 SK2076出土遺物実測図（その1）



第235図 SK 2076出土遺物実測図（その2）

遺物名	伝文 番号	遺物 種別	基盤	座標	重量(g)	地土	色調1(地土)	色調2(釉質、内面色)	色調3(表面、上縁)	調査	製作年代	備考
SK2076_1	縦	染付瓶	肥前	□:11.0 高:5.95 底:4.25	後	灰白色	内外:透明釉	表面:青青色	四方桙	18c後半		
SK2076_2	縦	染付瓶	肥前	□:10.5 高:5.75 底:3.65	後	灰白色	内外:透明釉	表面:青青色		大横耳附		
SK2076_3	縦	染付瓶	肥前	□:11.1	後	灰白色	内外:透明釉	表面:青青色	内面:草木 内面:四方桙	横桙?	後半	
SK2076_4	縦	染付瓶	肥前	高:5.0	縦	灰白色	内外:透明釉	表面:青青色		直脚&竹 バチ高台		
SK2076_5	縦	染付瓶	肥前	高:4.5	後	灰白色	内外:透明釉	表面:青青色		大横耳附 ハノ字高台 直脚・バチ高台		
SK2076_6	圓	小鉢	肥前	高:2.55	後	灰白色	内外:透明釉			高台内に斜肩付		
SK2076_7	縦	染付小皿	肥前	□:9.5 高:3.0 底:5.3	後	灰白色	内外:透明釉	表面:青青色	外腹:墨葉文 内腹:五瓣花	大横耳附	直脚?	
SK2076_8	縦	染付小皿	肥前	□:8.25 高:1.85 底:4.0	後	灰白色	内外:透明釉	表面:青青色		大横耳附		
SK2076_9	縦	染付小皿	肥前	□:10.2 高:3.2 底:6.25	後	灰白色	内外:透明釉	表面:青青色	外腹:墨葉文 内腹:五瓣花	大横耳附		
SK2076_10	縦	染付瓶	肥前	□:8.45 高:2.65 底:3.95	後	灰白色	内外:透明釉	表面:青青色		大横耳附	直脚・バチ高台	
SK2076_11	縦	染付瓶	肥前	□:10.1 高:3.1 底:14.5	後	灰白色	内外:透明釉	表面:青青色		大横V耳		
SK2076_12	縦	染付瓶	肥前	□:10.2 高:3.2 底:14.5	後	灰白色	内外:透明釉	表面:青青色		大横V耳		
SK2076_13	圓	瓶	安・信	□:10.0	縦	灰白N7.0	内外:淡青SYB3	上縁:緋	外腹:青			
SK2076_14	圓	瓶	安・信	□:9.45 高:2.85 底:3.8	縦	灰白N7.0	内外:淡オーリー2SYB3					
SK2076_15	圓	瓶	高・信	高:4.1	縦	灰白N7.0	内外:深7.5YR3				内腹見込にピン板	
SK2076_16	圓	鉢	肥前	□:20.0	縦	青緑10R6.0	内外:半透明釉2SYB3 内腹下部:1-2mm突起 10YR7/2	内外:直感的な脚毛目	大横耳附	脚毛目		
SK2076_17	圓	鉢	肥前	最大径: 10.5	縦	青緑10R6.0	内底:深赤P942 底:SYR6.1			大横耳附	三足	
SK2076_18	圓	鉢	肥前	高:10.70 底:19.30	縦	灰白N7.0	外腹:青緑赤緑10R2/2					
SK2076_19	縦	灯明皿	肥前	□:10.4 高:3.8	縦		外腹:青・灰・白地2.0YR6/4 内腹:淡青緑2SYR3/3	内外:ロクロナデ 外腹下部・外底:ケズリ				
SK2076_20	縦	灯明皿	信前	□:10.1 高:3.8	縦	明褐色10R3/3	明褐色10R3/3					
SK2076_21	縦	燈鉢	青・ 明石	□:14.0	縦	青緑赤緑10R2/2	青緑赤緑10R2/2		内外:ロクロナデ 外腹:ケズリ			
SK2076_22	圓	鉢		□:20.0 高:7.8	縦	灰白N7.0	内底:青緑赤緑SYR2/4					
SK2076_23	圓	瓶	最大径: 9.8	縦	青緑2SYR6.1	内底:青緑赤緑SYR3/3						
SK2076_24	圓	影手付瓶	□:17.8	縦	青緑10YR3/3	青緑10YR3/3			外腹:ナデ 内腹:青緑3.8・ハケメ			
SK2076_25	正直	粘付		□:30.2	石美・ 長石	にじい焼7.5YR5/4	素N8.0	外腹:ナデ	横桙?			

第236図 SK2076出土遺物観察表



遺物名 番号	組文 種別	器種	場所	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)		色調2(胎裏、内外色調)		色調3(表面、上絵)		調査	製作年代	備考
						大きさ	厚さ	種	保存状	大きさ	厚さ			
SK2076 26	土師質	七輪			粗粒	幅7.5	PR6/6	内外	幅7.5	PR6/6				
SK2076 27	土師質	土師品			粗	高径	SYR8/4							

遺物名 番号	組文 種別	器種	法量(cm)		胎土	色調		調査		備考	
			大きさ	厚さ		種	厚さ	内面	外面		
SK2076 28	軒丸瓦	-	-	-	粗粒	灰N6/0	灰N7/2			良	巴
SK2076 29	軒丸瓦	4.8	1.5	-	粗粒	灰N6/0	灰N6/0			良	巴

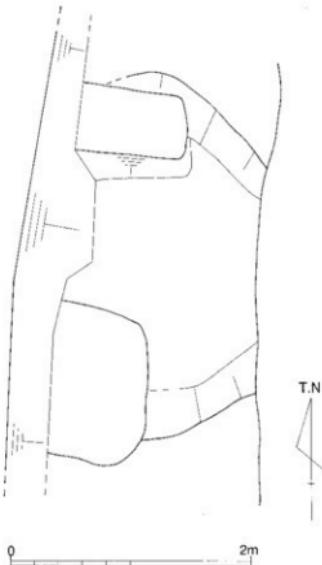
第237図 SK2076出土遺物実測図・観察表（その3）

### SK2074 (第15, 238図)

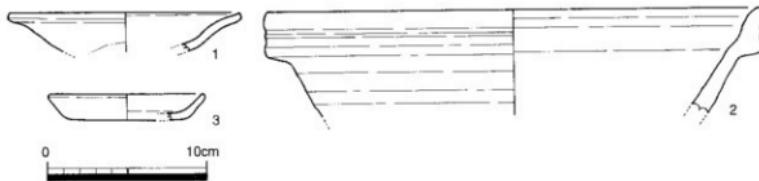
F区の北端部で確認した遺構である。検出した標高は1.02~1.08m前後、底面の標高は0.70m前後を測る。検出長は約3m、検出幅は約1.6mを測る。平面は隅丸方形と推定されるが、東西面が擾乱により壊され明確ではない。断面形状は緩やかな側壁で底面はほぼ平坦面である。上位の埋土は道路の整地と酷似し、下位に黒褐色土、砂礫が認められた。出土遺物に若干の陶磁器のほか、貝殻等の残渣が見られた。

### SK2074出土遺物 (第239図)

1は肥前系陶器皿である。2は備前陶器擂鉢である。3は土師質土器皿。内外面に被熱痕が認められる。



第238図 SK2074平面図



遺構名 番号	本文 書号	遺物 種別	基盤	深度	底面	断面(m)	断土	色調1(断土)	色調2(底面、内面色調)	色調3(外壁、上部)	測量	製作年代	備考
SK2074 1		陶	基盤	底面	口:14.2	壁	Ⅳ-N6/0	Ⅳ-N5/0~白				大柄玉期	
SK2074 2		陶	擂鉢	側面	口:30.3	壁	Ⅳ-YR7/8	壁:YR7/6			内:ロクロナマ	近世中期	
SK2074 3		土師質	器		口:15.5 底:11.6 高:7.5	壁	底:2.5Y7/2	底:2.5Y7/2			内:ロクロナマ 外:赤褐色系		内外に被熱痕

第239図 SK2074出土遺物実測図・観察表

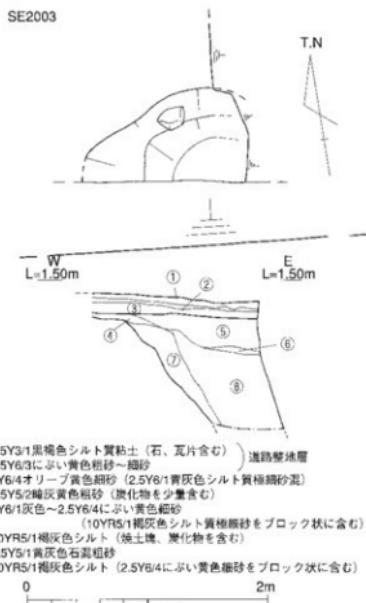
以下、SE 2003～SD 2011はF区南部で検出された遺構である。確認状況及び絵図との対応関係から、SD 2010以南は南北方向の道路に面した屋敷地と推定され、その屋敷内の遺構と考えられる。

### SE 2003（第240図）

F区南端部で検出された井戸戸状の遺構である。検出した標高は1.2m前後である。底面は0.3m付近まで確認しているが、南面が調査範囲外となり底面までは確認できなかった。検出長は東西方向で約1.4m、南北方向で約0.75mを測るが、平面の形状は明確ではない。器壁は直線的に傾斜し、僅かに上端部でテラス状となるのが認められる。埋土は、小石、礫を固めた7層と、その内側は埋め戻し土と考えられる堆積物で充填される。7層の上端部では、人頭大の石材が1箇所のみ認められる。埋土の直上は道路状の整地が認められ、当遺構の直上には一部瓦が敷かれていた。また6層では少量ながら焼土粒が観察できる。

### SE 2003出土遺物（第241図）

出土遺物は、数点のみであった。7は肥前系陶器大皿である。胎土目が認められる。8・9は、備前陶器の頸部及び底部である。



第240図 SE 2003平面・土層図

### SD 2010（第132図）

F区南部で確認した東西方向の溝跡である。

検出距離は短いが護岸状の石列を認められ、溝跡と考えられる。検出長は約1.6m、検出幅は約1.6mを測る。主軸はN-85°-Wを示す。検出した標高は1.15～1.26m、底面の標高は0.94mを測る。断面はU字形である。南壁に沿い人頭大の石材を並べ護岸としている。北壁には礫混じりの土で固め、溝内側の埋土は、上層部に石材や若干の瓦片を含んだ土で充填する。下層部では、シルト質の土が堆積している。

当遺構面ではこの溝を境に北部と南部では整地の状況が明確に異なり、これより北には道路として整地したと考えられる築地状の細い堆積層が水平に認められ、南部ではこの水平状の堆積層が認められない。また、南部においても当遺構面より上位には、築地状の細い堆積層が認められる。以上からは、ある時期まで当溝は屋敷と道路の境界として機能し、廃絶後に南へ伸びる道路に取り込まれたと考えられる。

17世紀中葉頃に描かれたとされる『高松城下図屏風』には、当調査区（F区）に比定される部分は南北方向の道が描かれており、それによれば中堀に面した大きな屋敷に沿い南へ下がると東西方向の道に突当たるが、その南には屋敷があるため西側へ一旦折れて南に抜ける鍵形の道として描かれている。これ以降（享保年間以降）に描かれた絵図は、全て南北方向の直線道路として描かれており現在まで踏襲されていることから、この時期以降に地割が改変されたものと考えられる。

所属時期は、遺物が少量なため明確とはならないが、上述した資料を考慮すると17世紀中葉～18世紀前葉に考えられる。

#### SD2010出土遺物（第241図）

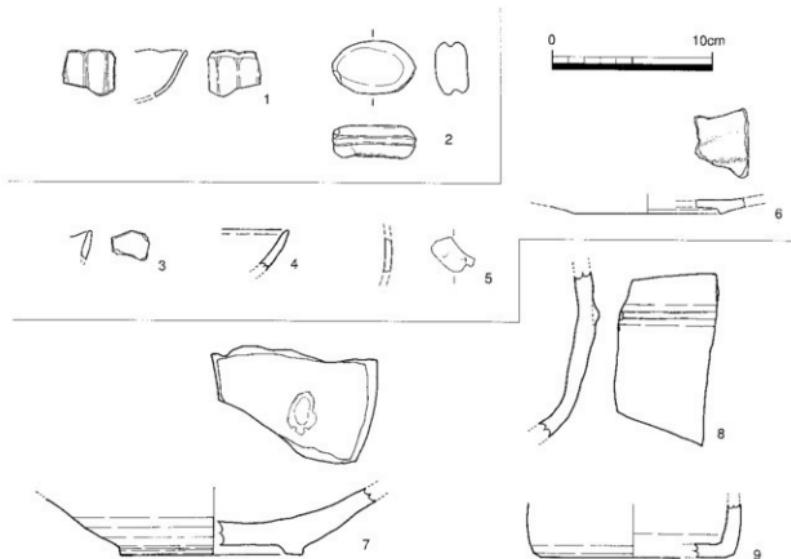
遺物はほぼ皆無であり、数点の小片のみであった。1は肥前系磁器皿の口縁部。薄手のもので、白磁の菊花形皿に考えられる。被熱痕が認められる。2は、有溝の土錐である。

#### SD2011（第132図）

F区南部で確認した東西方向の溝状の遺構である。検出段階でSD2010に平行するため溝と判断したが、検出距離が短く明確ではない。検出長は約1.7m、検出幅は約2.2mを測る。検出標高は1.17m前後、底面の標高は0.71mを測る。断面は船底形である。SE3007が下位に存在する。所属時期は遺物が少量で明確ではないが、SD2010と同様の17世紀中葉～18世紀前葉が考えられる。

#### SD2011出土遺物（第241図）

遺物は少量で、陶磁器小片のみであった。3は漳州窯系白磁の口縁部である。4・5は、肥前系磁器である。5の外面に一重の網目文が認められる。6は志野向付底部。内面に鉄絵が描かれる。



通称名 番号	別文 遺物 種別	器種	产地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上縁)	調整	製作年代	備考
SD2010 1	縦 口縁	瓦片	口前	口:7.50	後	灰白色	内外:灰白N8.0				外側に板熱線
SD2010 2	土師質 土器					直径:13.2 口径:13.2 最大径:13.9	側面 切出端 切出端SYR54	切出端SYR54			

通称名 番号	別文 遺物 種別	器種	产地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上縁)	調整	製作年代	備考
SD2011 3	角 口縁部	中壺			後	灰白2.5YR8/2	内外:灰白2.5YR8/2				漆州窯 白釉
SD2011 4	角 口縁部	口前			後	淡黄褐7.5YR8/5	淡黄褐2.5YR7/6			17世紀	
SD2011 5	縦 底部片	肥前			後	灰白色	内外:透明釉	高須:明青色		1640 ~ 1700年	
SD2011 6	周付底部	渕美	底:19.00	縦	淡黄2.5YR7/3	内外:灰白2.5YR7/1	側面:褐色10YR4/1			大里丸窯	赤野向付

通称名 番号	別文 遺物 種別	器種	产地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上縁)	調整	製作年代	備考
SE2003 7	縦 大皿	居前	武:11.2	縦	淡黄褐7.5YR8/4	△平い縦7.5YR7/3			外側-外沿:ケズリ	大里1-2期	胎土目
SE2003 8	縦 狭尻	居前			側面	外側-長縦曲輪10YR3/3 内側:青白10YR3/6-10YR4/0			内側-ロクナナテ		
SE2003 9	縦 狭尻	居前	底:11.8	側面	赤褐4.4	赤褐10P4/4			内側-ロクナナテ 外側-ナナ		

第241図 SD2010・2011・SE2003出土遺物実測図・観察表

## 第2面A-C区屋敷境遺構（第242・243図）

第2面、屋敷地の南面に相当する地点で確認した遺構群で、東西方向の区画溝（SD1003、2003）及びこれに伴う建物（SA2001）と考えられる屋敷境の施設が中心である。第2面は部分的に観察されたものだが、C区で認められた焼土を前後し区画溝がSD1003からSD2003に改修されることが想定される等、焼土を前後に上層部と下層部に設定される。上層部（第242図）では、区画溝（SD1003、2003）及び屋敷境の建物（SA1001、SA2001）、門に推定される建物（SB1002、SB2001）とも第1面とはほぼ同様の位置に認められ、基本的には第1面へと踏襲される内容となっている。この他、SA2001に面し石列状の遺構（SD2004、2005）及びこれに先行する溝状遺構SD2006があり、SA2001に先行する不定形の落込みSX2002～2004が認められた。道路部分で認められる遺構については、当面より確認面としたため、第1面との判別がより不明瞭だが既述の19世紀代の土坑の他、SD1003に平行するSA2002が検出されている。

下層部（第243図）では、SB2002が焼土以下で認められ、焼土以前の段階となるSD2003に関連した建物と推定される。東部では、第3面で確認された17世紀中葉の整地上でSD2003が開削されており、当期の屋敷境の上限を示すものとなっている。窪地に位置するSB2002を除き、東部での散漫な柱穴等の検出状況から上層部に至る段階での削半を受けたことが想定され、建物、堀等の屋敷境の施設は明確にできない。

区画溝改修の契機となった焼土については、希薄な遺物の出土状況のため直接、時期を推定できない。高松大火（1718年）により当屋敷が被災したことが文献資料からは窺われ、当期に該当する可能性が考えられる。このため上層部は、第1面への両期（SX2008の埋没、上水施設の廃絶）を考慮して18世紀前葉～19世紀前葉の所産と想定する。下層部は、第3面で確認した整地に後出するものとして、17世紀中葉～18世紀前葉の所属が考えられる。

## SA2001、SB2001（第242・244・245図）

A-C区南部、第2面で確認された礎石建物である。検出した標高は、1.15～1.26mを測る。何れも礎石は遺存していないが、柱穴の規模や柱穴内に玉砂利を詰め固めた埋土から、礎石が取り除かれた下部の状況を示す礎石痕として考えられる。SA2001は柱間約1.95mを基本とするが、SB2001の西面となる2間分が1.25mと狭くなっている。SA1001と同様に、南面に対応する礎石痕は明確でなく屋敷境の溝北岸を基礎とした長屋が想定される。検出した礎石痕はSA1001よりも礎石痕の半分程度、南に設置されている。礎石の痕跡は西部では確認されていないが、主軸方位を考慮すれば（SA1001：N-86.5°-W、SA2001：N-84.5°-W），西方でSA1001と重複した位置関係となり検出されなかつた可能性もあり、更に西へ広がることも考えられる。

SB2001はSA2001を兩脇に取り付けた格好となり、礎石の位置や屋敷境に位置することから長屋門と考えられる。門の中心（P-4直下）を通る南北のラインでは、下面で当該期にも使用されたと考えられる上水道が設置されており、出入り口の性格を有している。門の西壁に相当し考えられる礎石痕（P-5、P-9～11）の一間分西側にも、南北方向に同規模の礎石の痕跡（P-6～8）が認められる。所産時期は、上水施設の廃絶（SD3004、3006）等から下限は19世紀前葉と想定される。上限はSB2002との関係より焼土より後出する18世紀前葉以降に想定されるが、主軸がSD2006（17世紀末葉）、SD2003（17世紀中葉～18世紀前葉）に近似し、更に週って存在した可能性も考えられる。

### SB2002（第246図）

C区南西部、第2面下層で確認した礎石建物である。検出した標高は、1.15～1.40mを測り、当地点で確認された焼土層を除去し確認された。梁行は3間（約2.9m）である。桁行について礎石の遺存状況が悪いが、南西隅に遺存するものから5.8mで、6間と推定される。また必ずしも焼土との前後関係が明瞭なものではないが、北西隅及び第2面上層部で認められた礎石及び柱穴を含める（A-A'）と、桁行が更に広がる可能性がある。

礎石上面の高さを見ると、最も遺存状況の良いH-H'のラインで北方向に大きく下って認められ、焼土層（第11図）が北方向に下る状況と一致している。現状で建物が建つと考えられないが、下位には溝（SD3007）、大形廐棄土坑（SX3002）等が重複して存在しており、軟弱な地盤の結果として土地が低下したことも推察される。大きく地盤が低下しているA-A'では、地盤低下により焼土及び礎石が遺存したと考えられる。第2面上層部では、当建物の東側で石材が散乱した状態で確認されてる等、地表面が高かった東側で削平、攪乱を受けた状況が想定される。

当建物の礎石は明確な掘り方を有しないものが多く、後出する礎石の様に地固めを行った様子は認められない。また当地点の周囲では、後世にSX1001、1002等と地固めを行う整地痕にも推定される遺構が確認されている等、上部構造の重量と地盤との関連が窺われる。

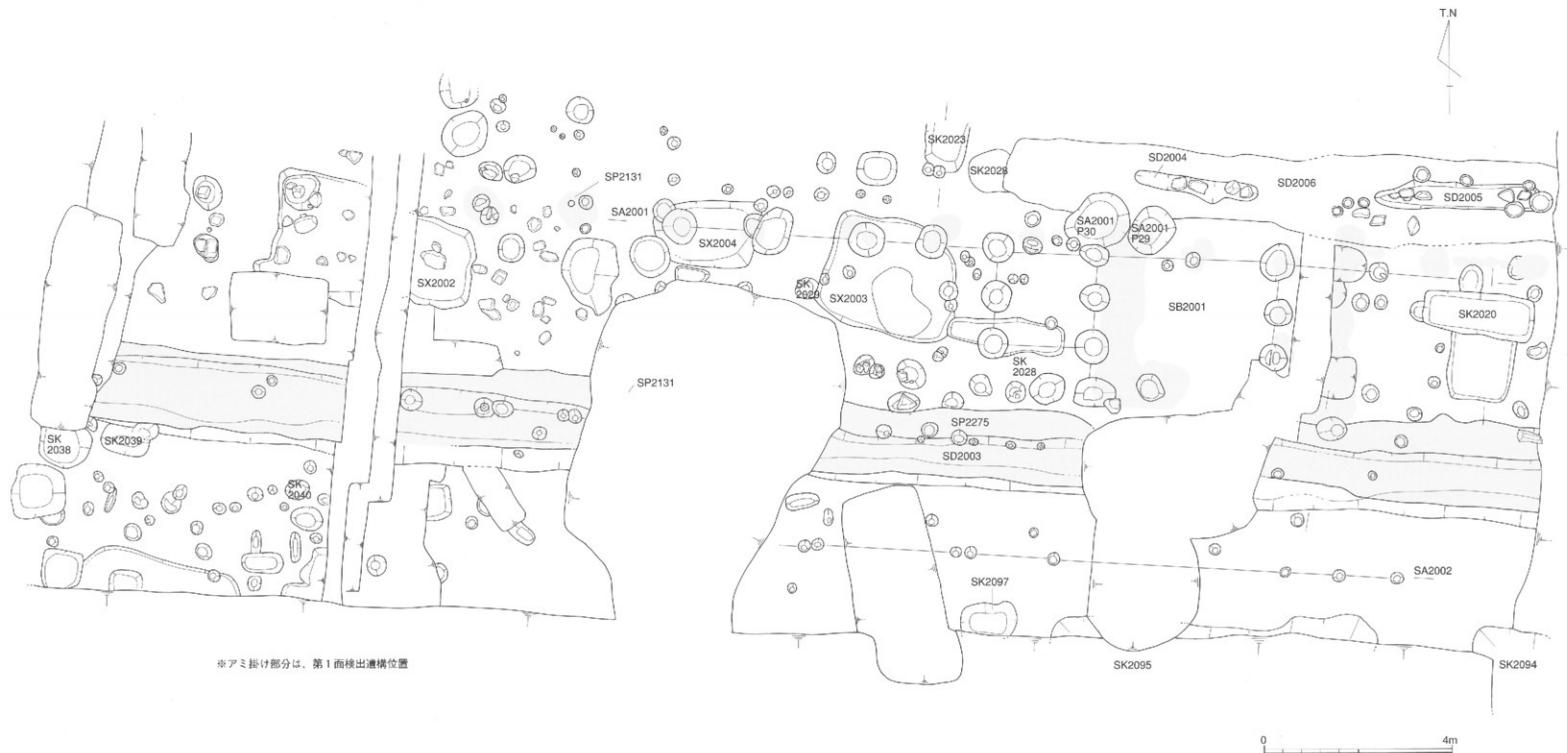
所属時期は、焼土以下となる第2面下層部に相当し、SD2003と同様の17世紀中葉～18世紀前葉の所産と考えられる。

### SA2002（第242・244図）

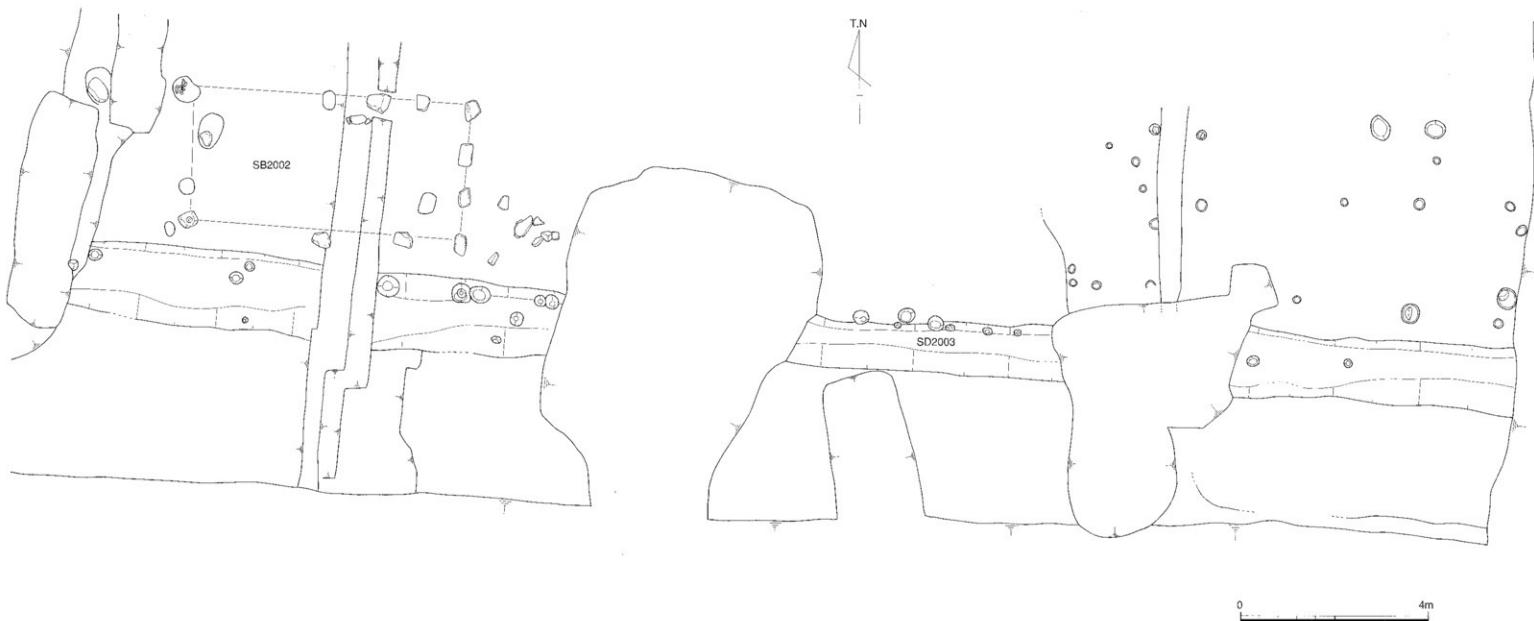
A-C区南部道路上で確認した柵列状の遺構である。検出した標高は、1.25～1.30mを測る。屋敷境の溝より約1.4m南に並び認められる。深度は10cm程度で、柱間距離は一定ではない。更に西に伸びる可能性もあるが、攪乱及び遺構が重複しており明確にならない。SD1003と同方位（N-86°-W）を示し、区画溝と関連した柵列と想定される。所属時期は、出土遺物もなく明確ではないが、主軸が合致するSD1003と同時期の所産と考えられる。

### SD2003（第242・244図）

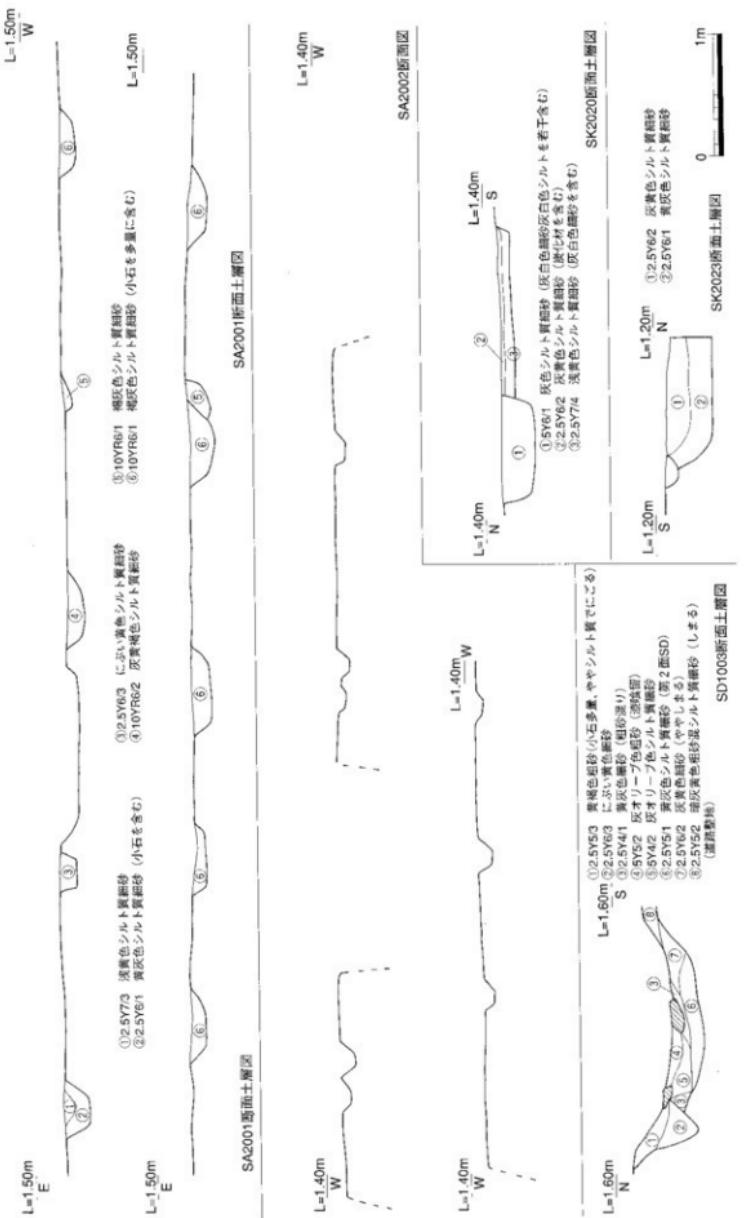
第2面A・C・E区で確認した東西方向の溝跡である。SD1003と重複し、これに先行する屋敷境の区画溝に相当する。北岸はSD1003の北壁において、南岸はSD1003より約0.2m下位となる標高1.15～1.30mの道路整地面で検出した。検出長はSD1003と同距離で、検出幅は遺存の良い箇所で約1.7mを測る。N-84°-Wの主軸を示し、A・C区では南岸がSD1003より僅かに南よりも検出されるが、若干北西部に傾く方位のため、西のE区ではほぼ重なって認められる。断面はU字形で、素掘りの溝として確認された。底面の標高はA区で0.85m前後、C区で0.92m前後、E区で0.97m前後を測り、緩やかに東方向に傾斜することから、排水の方向を示す可能性も考えられる。またC区の西部において、SD1003の北壁面で焼土層が認められ、これに先行することから火災によって廃絶しSD1003に改修された可能性がある。当遺構は、検出面で先行するA区第3面の整地（17世紀中葉に比定）を基盤とし、当期が上限として考えられる。下限は、出土遺物から凡そ18世紀前葉頃と考えられる。



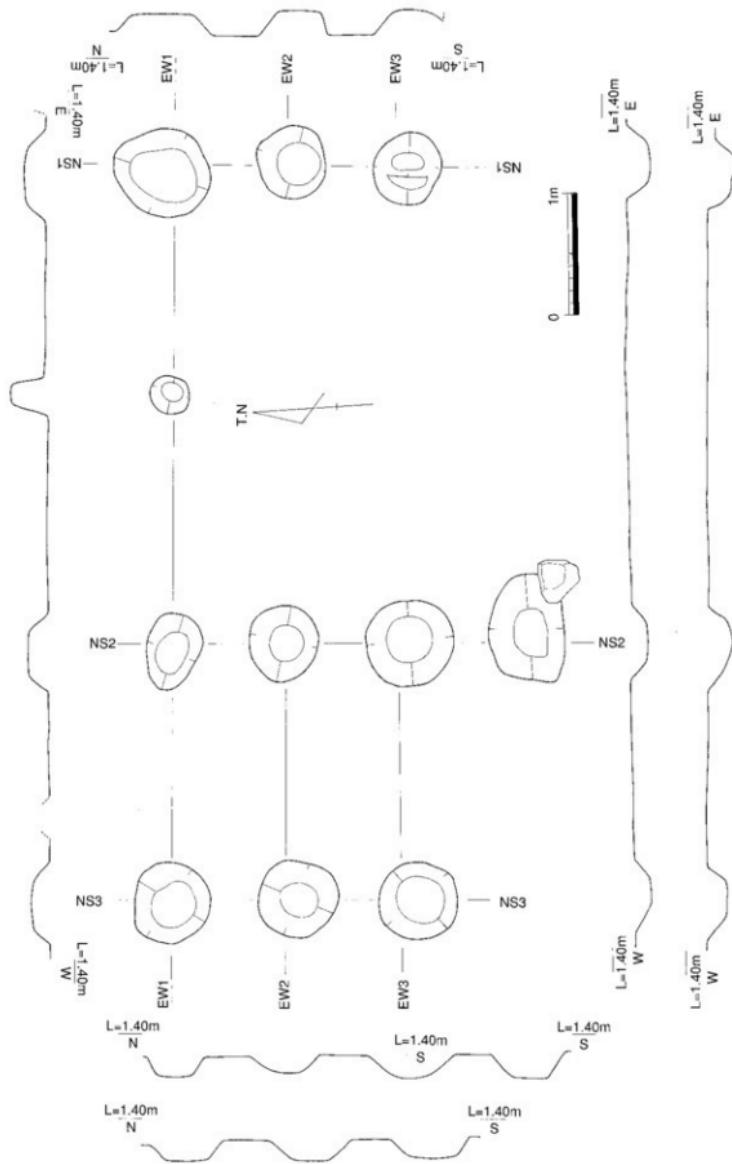
第242図 第2面上層壁際平面図



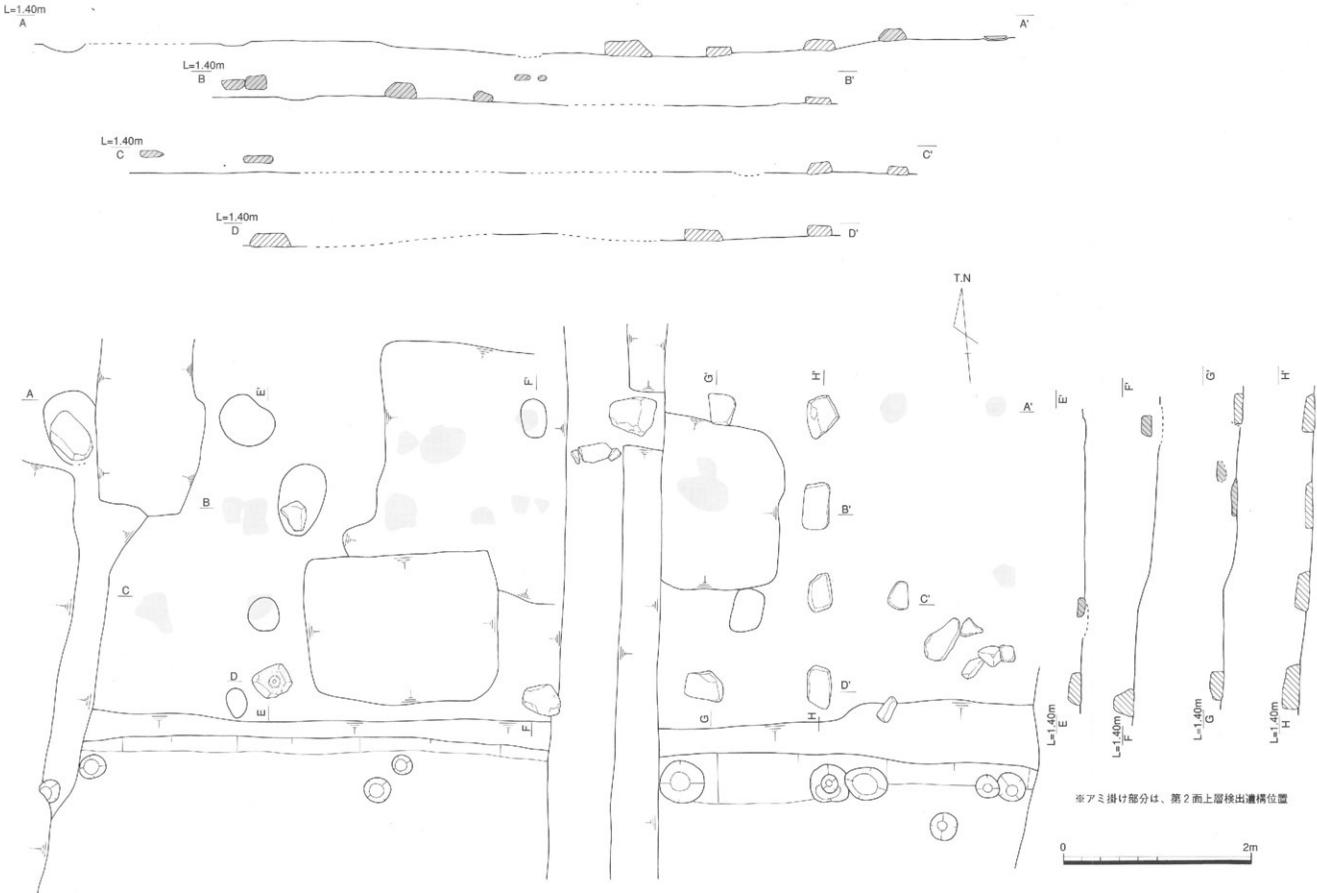
第243図 第2面下層屋敷地平面図



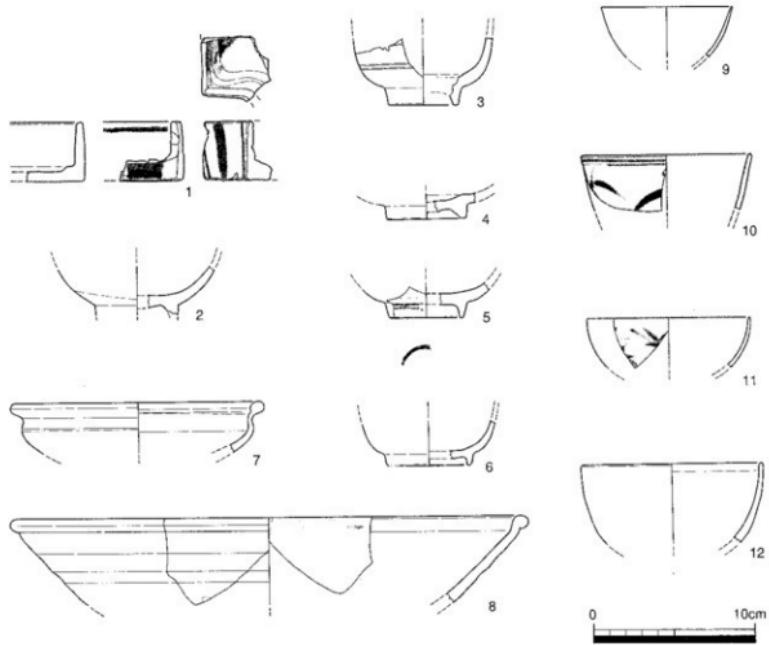
第244図 SA2001・2002・SD1003・SK2023・2020断面・土層図



第245図 SB 2001平面 断面図

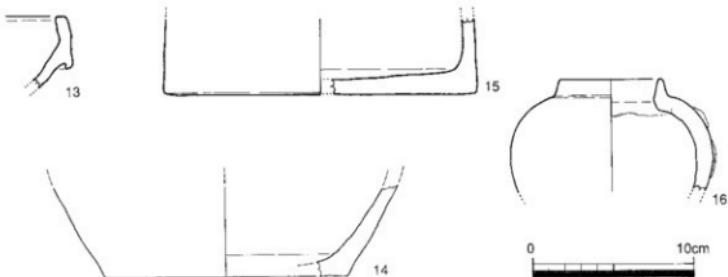


第246図 SB 2002平面図・断面図



遺物名 番号	形 種別	基盤	底地	底量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(胎裏、内外色面)	色調3(内側、上部)	調査	製作年代	備考
SD2003-1	陶 片付	陶	陶	最高:3.00	白	灰青2.5YR3/0	内面:透明釉	胎質:細原赤鉄 2.5YR0/2 上部:緑		1905年代	青磁器 前面に曾熟痕
SD2003-2	陶 片	磁器	磁		白	灰青2.5YR1/1	内面:赤茶16R2/1			1665年代	
SD2003-3	陶 片	磁器	磁	底:4.40	白	灰白色	内面:暗オリーブ8.5YR7/1		外面:浅緑		
SD2003-4	陶 片	磁	磁	底:4.80	中	灰白2.5YR1/1	内面:灰白10Y7/2				
SD2003-5	陶 片	磁器	磁	底:4.40	白	灰白色	内面:透明釉	内面:暗青色			
SD2003-6	陶 片	磁	磁	口:5.00	白	灰白色	内面:灰2.5YR1/1 内面:透明釉			大體計測	
SD2003-7	陶 片付	磁	磁	口:15.00	白	灰N4/1	内面:暗灰青2.5YR3/2				
SD2003-8	陶 皿	肥前	口:32.0	磁	なし	青灰2.5YR7/3	外面:青灰2.5YR5/1 内面:灰白5Y8/2			17c 中葉	青毛目模津 表面に曾熟痕
SD2003-9	陶 片	鍋口縁部	肥前	口:8.00	白	灰白色	内面:反白N8/1				色見?
SD1603-10	陶 片	磁	肥前	口:10.40	白	灰白色	内面:透明釉	内面:暗-青青色			
SD2003-11	陶 片	鍋口縁部	肥前	口:10.00	白	灰白色	内面:透明釉	内面:暗青色			
SD2003-12	陶 片	磁	肥前	口:11.0	白	灰白5Y7/1	内面:緑-外:黄褐5YR2/1 内面:半-灰青2.5YR7/2				

第247図 SD 2003出土遺物実測図・観察表



法標名 番号	器形 種類	口径 底径	高さ (cm)	胎土	色調1 (胎土)	色調2 (釉表、内外色調)	色調3 (底表、上釉)	調整	製作年代	備考
SD2003-13	陶 瀬戸口縁 形	備前		細	輪赤褐10R3/2	地白褐10R3/2		内外:ロクロナデ		
SD2003-14	陶 瓶底部	備前	高:15.0	細	輪赤褐10R3/2	内外:輪褐7.5YR2/2				均子目窯 底部に泥垂釉
SD2003-15	陶 手すり	低め	底:9.3	石英・ 長石	外側:地褐10YR3/4 内側:地青褐10YR6/2			内外:ロクロナデ 外底:凹削あ切れ、保竹面	17世紀	底部と外周底部分に 模付蓋
SD2003-16	土師質 鉢		□:6.1	傷跡有		外側:灰黄2.5Y7/2 内側:灰2.5Y7/1		内・外口縁部:ロクロナデ		

第248図 SD2003出土遺物実測図・観察表

#### SD2003出土遺物（第247・248図）

出土遺物は少量でコンテナ 1/4 程度であった。

1 は瀬戸・美濃系陶器向付（青磁部）である。2 は肥前系附器碗底部。内外鉄釉を施し、高台部は露胎。天目碗であろう。3 は肥前系磁器碗。外面に沈線を巡らし青磁釉を全面に施す。4 は肥前系陶器碗で、灰釉を施す。5 は肥前系磁器碗。U 字高台に二重圈線が認められる。6 は產地不明磁器碗である。7 は肥前系陶器香炉で、鉄釉を施す。8 は肥前系陶器皿。灰釉で、内面には白化粧土による刷毛目装飾が施される。9 は肥前系磁器碗。色絵素地で、外面には僅に赤色が認められる。10 は肥前系磁器碗。やや大振りで口縁部外面に二重圈線が見られる。11 は肥前系磁器碗。器壁の薄い半球形碗に考えられる。12 は肥前系陶器碗で、外面に鉄釉を施す。13・14 は備前で、瀬戸口縁部を堀底部である。15 は信楽鉢底部である。16 は煮形の土師質土器である。

## SD2006（第242・249図）

A区、第2面で確認した溝状の遺構である。石列状遺構（SD2004・2005）の下位で検出した。検出した標高は1.06～1.24mで、底面の標高は0.41～0.67mを測る。検出長は11.7m、検出幅は0.6～0.9mを測る。東西方向の溝状遺構だが、西方向には伸びない。東方向は調査範囲外となり不明だが、底面は僅かに東へ上昇していくのが認められる。遺構の断面はU字形で、下層において遺物が集中して出土した。

屋敷の区画溝SD2003及び、SA2001に平行する方位（N-84° - W前後）を示し、前後関係では当遺構に後出するが、門と考えられるSB2001と西限がほぼ一致して認められ、屋敷境の建物に関連した施設の可能性も考えられる。

所属時期は、出土遺物が17世紀末葉の所産にまとまっており、彦坂織部の家が絶え（1688年）、藩主の家系より分家した頼芳（初代藩主頼重の子）の屋敷となる（1689年）時期を中心に考えられる。また埋土には少量ながら焼土が観察されており、最終埋没が火災（高松大火、1718年）に関連する可能性も考えられる。

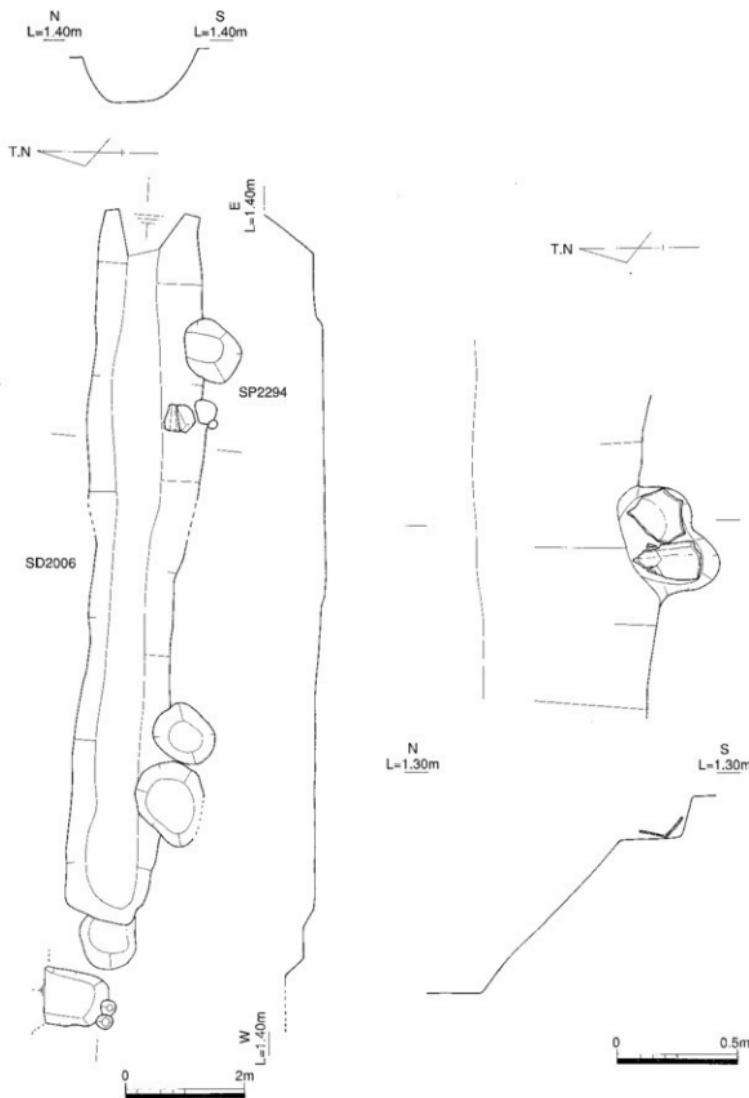
### SD2006出土遺物（第251～262図）

遺物は下肩部よりコンテナ4箱程度出土した。但し、瓦については一部のみ取り上げた。1は陶器碗の口縁部である。黄橙色を呈する胎土に、口縁部より長石軸が厚く掛けられる。唐津と考えられる。2～8は、肥前系陶器碗である。2は器壁が薄く、口縁部へ直線的に開くもので、高い高台を有する。口紅が施される。3は京焼風の器形だが、明赤褐色の釉で高台内にも施釉が認められる。4～6は京焼風陶器碗で、高台内に「清水」の刻印が認められる。8は呉器手碗である。9は鉄釉を施す小杯。10の京焼風陶器碗は、鉄絵により菖蒲を描く。

11～18は肥前系陶器皿である。11～14は見込に蛇ノ目釉剥ぎをしたもので、砂粒の付着が認められる。釉は灰色または緑色を呈する。12には鉄絵が描かれる。17は内面に銅綠釉を施し、見込に蛇ノ目釉剥ぎが施される。18は京焼風の皿である。19は人形品の頭部と考えられる破片で、管耳が付く。外面は柿色の釉、内面は柿色及び銅綠釉を掛け流し、花瓶と考えられる。20は備前瓶（徳利）である。21は肥前系陶器火入。外面上半に鉄釉をし、刷毛目装飾を施す。SD1003との接合資料で、本遺構の埋没と区画溝（改修）との関連が推察される。29は京焼風陶器碗。外面に楼閣山水文が描かれる。

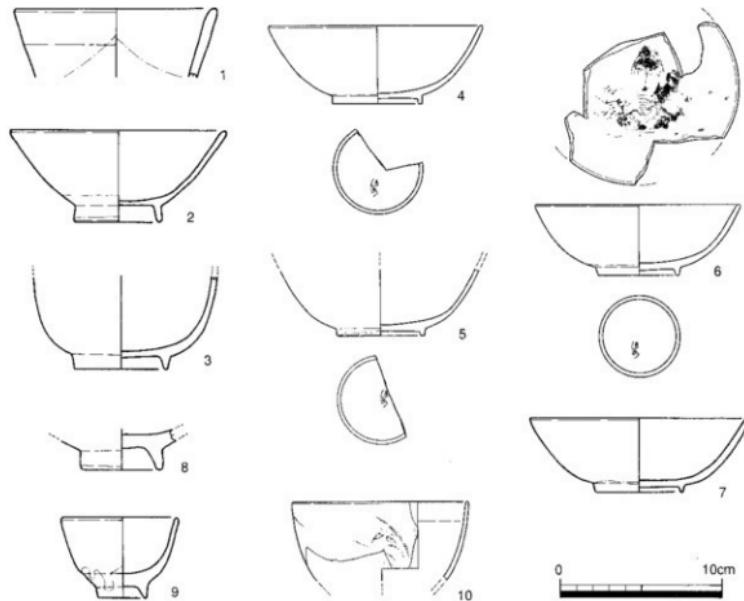
22～29・30・31は肥前系磁器碗である。22・23は断面U字形の高台を有し、口縁部外面及び高台脇に二重圓線が認められる。24の高台は断面U字形で、高台部の幅は狭く低い。27は大振りの碗。高台脇に二重圓線が認められる、高台高は高い。25は白磁碗である。桔梗（？）の陽刻が施される。28も白磁碗である。口紅が施される。30・31は、同一個体の可能性がある色絵の碗。剥落する部分が多いが、赤、黄（金）色に見られる。

32～44は肥前系磁器皿である。32～34は波佐見産青磁皿である。やや粗製で、見込に蛇ノ目釉剥ぎを施す。33・34は釉剥ぎ部分に砂粒が付着し、疊付にも砂粒が付着する。35は白磁だが、絵付けの剥落痕と考えられる箇所がある。薄手で上質のものである。36は折縁の小皿である。38は高台内にハリ支えの痕跡が認められる。内面には鹿と紅葉を描く。37・39は断面U字形の高台で、高台脇に二重圓線が認められる。37の高台内には、ハリ支えの痕跡が認められる。40は団面上で復元した。鍔状に折れ曲がる口縁部で、内面に櫛齒文が認められる。初期伊万里の形態である。41は芙蓉手大皿に考えられる。42は三股窯青磁である。青磁染付で、見込に紅葉を描く。三足と



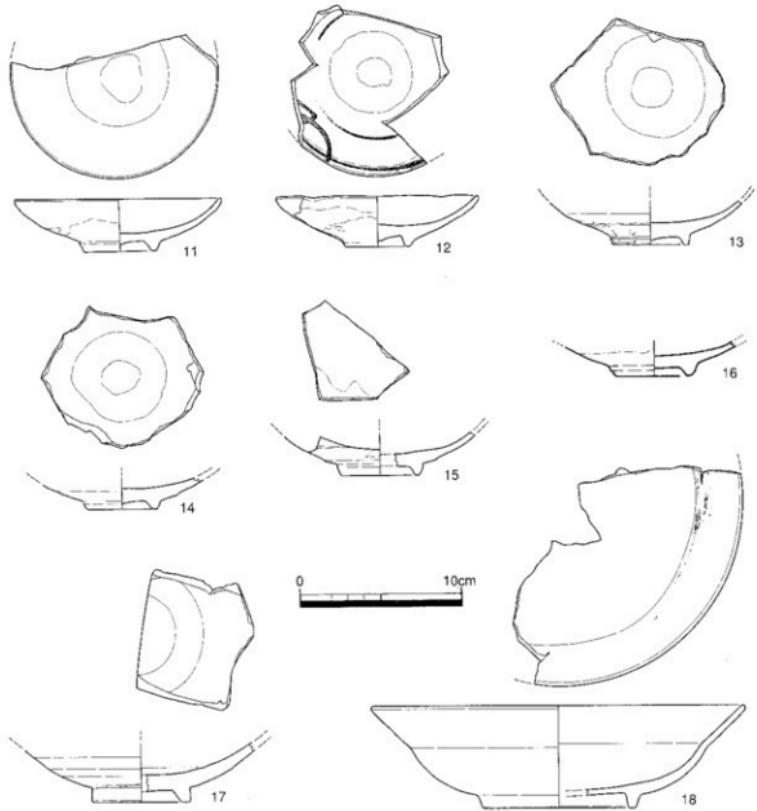
第249図 SD2006平面・断面図

第250図 SP2294平面・断面図



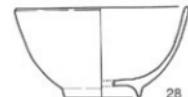
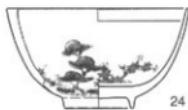
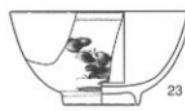
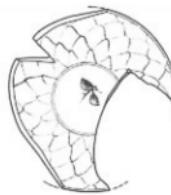
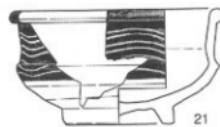
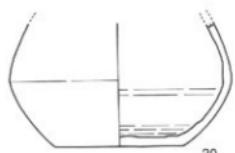
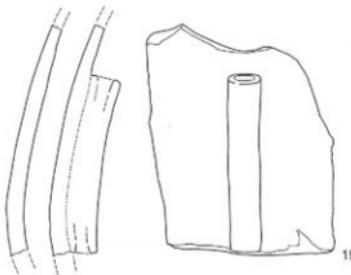
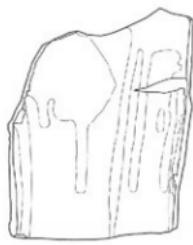
遺物名 番号	類別	器種	度地	底量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉裏、内外色調)	色調3(表面、上絵)	調査	製作年代	備考
SD2006 1	陶	碗	肥前	口:12.2 底:4.8 高:5.2	粘	透青7.5YR8/4	白				
SD2006 2	陶	瓶	肥前	口:13.1 底:4.8 高:5.2	粘	灰白10YR8/2	暗緑7.5YR5/8		高台型:鉢形		
SD2006 3	陶	碗	肥前	底:5.8	粘	透青7.5YR8/4	明赤褐7.5YR5/6		外底:ケズリ		
SD2006 4	陶	瓶	肥前	口:13.05 底:4.8 高:5.45	粘	灰白2.5YB1	内外:透明釉			大徳初期	京焼風
SD2006 5	陶	瓶	肥前	底:5.4	粘	灰白2.5YB1	内外:透明釉			大徳中期	京焼風
SD2006 6	陶	瓶	肥前	口:12.5 底:4.36 高:4.9	粘	灰白N4/0	内外:透明釉	表面:墨絵10YR5/1	内面:墨絵山水	大徳初期	京焼風
SD2006 7	陶	瓶	肥前	口:13.3 底:5.4 高:5.4	粘	透青2.5YB3	に赤い黄緑10YR5/4			大徳中期	
SD2006 8	陶	瓶	肥前	底:4.8	粘	灰白2.5YB2	透青2.5YB4			大徳中期	呂巣子
SD2006 9	陶	小瓶	肥前	口:7.1 底:4.9 高:3.0	粘	灰白N7/0	真N2/0		外底:ケズリ		
SD2006 10	陶	瓶	肥前	口:10.75	粘	灰白5Y7/2	内外:透明釉	铁拉:オリーブ墨SY3/1	外面:あやめ?		直徳風

第251図 SD2006出土遺物実測図・観察表（その1）



遺物名	形文	遺物 番号	断面	底地	径量 (cm)	無土	色調 1 (底土)	色調 2 (裏面、内外色調)	色調 3 (具型、上縁)	調査	製作年代	備考
SD2006 11	盤	皿	泥質	口:19.6 底:13.5 高:14.5	縦	灰H6.0	裏オーリーフ7.5Y5/2			外面:ケズリ 内面:他の目地跡(砂粒付着)	大柄古期	
SD2006 12	陶	皿	閉鎖	口:19.35 底:13.2 高:13.6	縦	灰H6.0	内面:裏オーリーフ7.5Y5/2	底板:砂粒付着	YH13/4	内面:他の目地跡(砂粒付着) 外面:ケズリ	大柄古期	底台内と臺付に砂粒付着
SD2006 13	陶	皿底部	泥質	底:14.4	縦	灰H6.0	裏オーリーフ2.5Y5/6	内面:オーリーフ2.5Y5/1		内面:他の目地跡 外面:ケズリ	大柄古期	
SD2006 14	陶	皿底部	泥質	底:14.25	縦	灰H6.0	裏台S7.5Y8/2			外面:ケズリ 内面:他の目地跡(砂粒付着)	大柄古期	
SD2006 15	陶	皿底部	泥質	底:14.7	縦	灰H6.0	裏台S7.5Y8/1	裏オーリーフ7.5Y4/3		外面:ケズリ		
SD2006 16	陶	皿底部	泥質	底:14.7	縦	灰H6.0	裏2.5Y5/6	裏オーリーフ7.5Y5/3		外底:ケズリ		
SD2006 17	陶	鉢	泥質	底:15.75	縦	灰H6.0	裏台S7.5Y8/2	裏台S7.5Y8/1 内面:裏台S7.5Y8/2(剥離)		内面:他の目地跡	大柄古期	
SD2006 18	陶	鉢	泥質	口:19.25 底:16.3 高:19.9	縦	灰H6.0	裏台S7.5Y8/2	内面:オーリーフ灰H6.0	底板:オーリーフS7.5Y4/3		大柄古期	底面 臺付に砂粒付着

第252図 SD2006出土遺物実測図・観察表（その2）



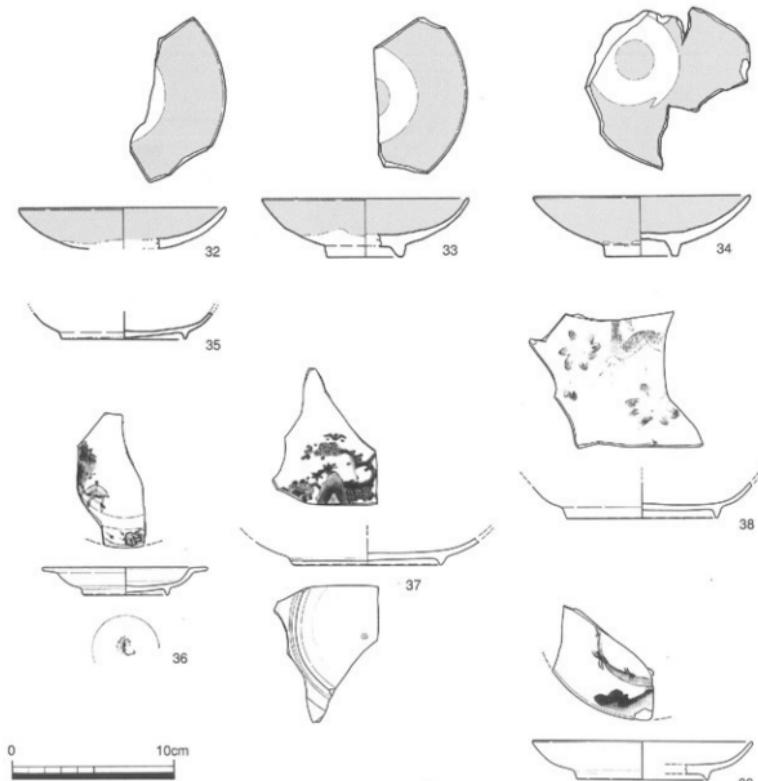
第253図 SD2006出土遺物実測図

考えられる獸面の脚を有し、蛇ノ目凹形高台の釉剥ぎ部に鉄錆を塗布する。43の鉢は、口縁部外面に型成形の痕跡が認められる。上質のもので外面に唐草文、内面に桐が描かれる。

44は型打成形の紅皿である。45~47は小坏である。48・49は瓶類。50は火入である。51・52は青磁花生である。51は耳接着箇所に陽刻が施され、瑠璃色に色付けされる。52は一輪差と考えられる。53は京焼系陶器（理兵衛焼か）香炉蓋である。赤、金の絵付けが施される。

54は信楽鉢である。55~57は備前播鉢である。55・56は小型のもので、体部下半に左方向の削りが認められる。56は暗褐色を呈する。口縁部の頸部の張出しあは弱く、見込の播目は米形に施される。57には片口が認められる。口縁部に黄ゴマ、下端に培養痕が認められる。外面は火襷が顯著で、ナデ仕上げである。

58~75は土師質土器皿である。底面調整が分かるものは、すべて回転糸切りである。胎土が橙色系のものは58・59・62・63・70・73で、以外は灰白色系である。前段階となるSX3004・3005の



第254図 SD2006出土遺物実測図（その4）

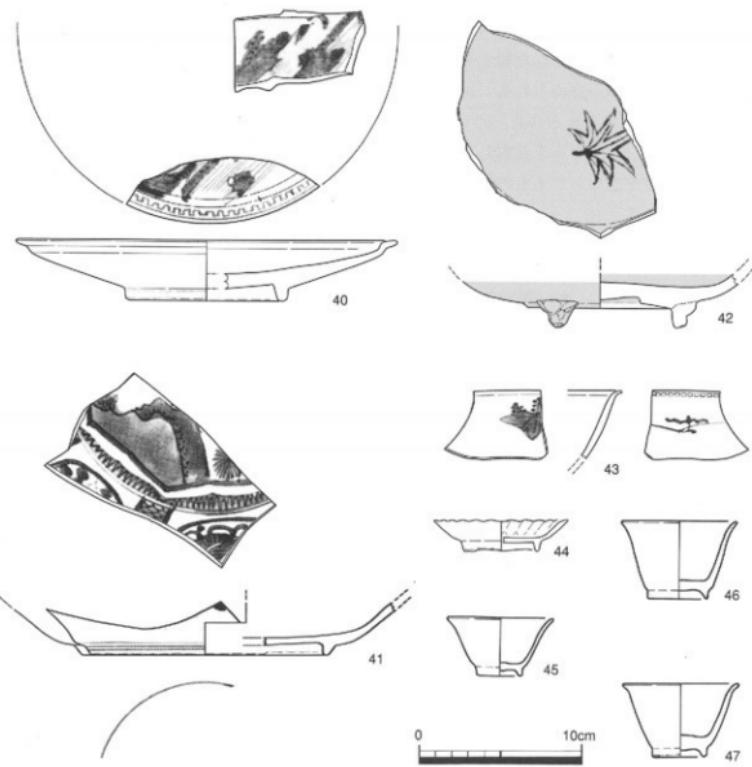
資料に比べ、橙色系の器高が低くなり、灰白色系では口径が一回り小形化している。佐藤編年では様相4~5に該当すると考えられる。

79は、瓦質土器羽釜或いは茶釜の体部である。76~78は焼塙壺蓋である。80~90は焼塙壺である。すべて明るい橙色を呈した胎土を用い、輪積により成形される。80の外面には、「御壺塙師／堺湊伊織」の刻印が認められる（1682年以降で17世紀末葉まで）。同様の形態となる他も、1680~90年頃の所産に考えられる。

瓦については、一部のみを掲載した。91~93は軒丸瓦である。94・95は軒半瓦。96・97は丸瓦。いずれも被熱痕が認められるものが多い。古相のものも含まれ、佐藤編年では様相1~4に該当すると考えられる。

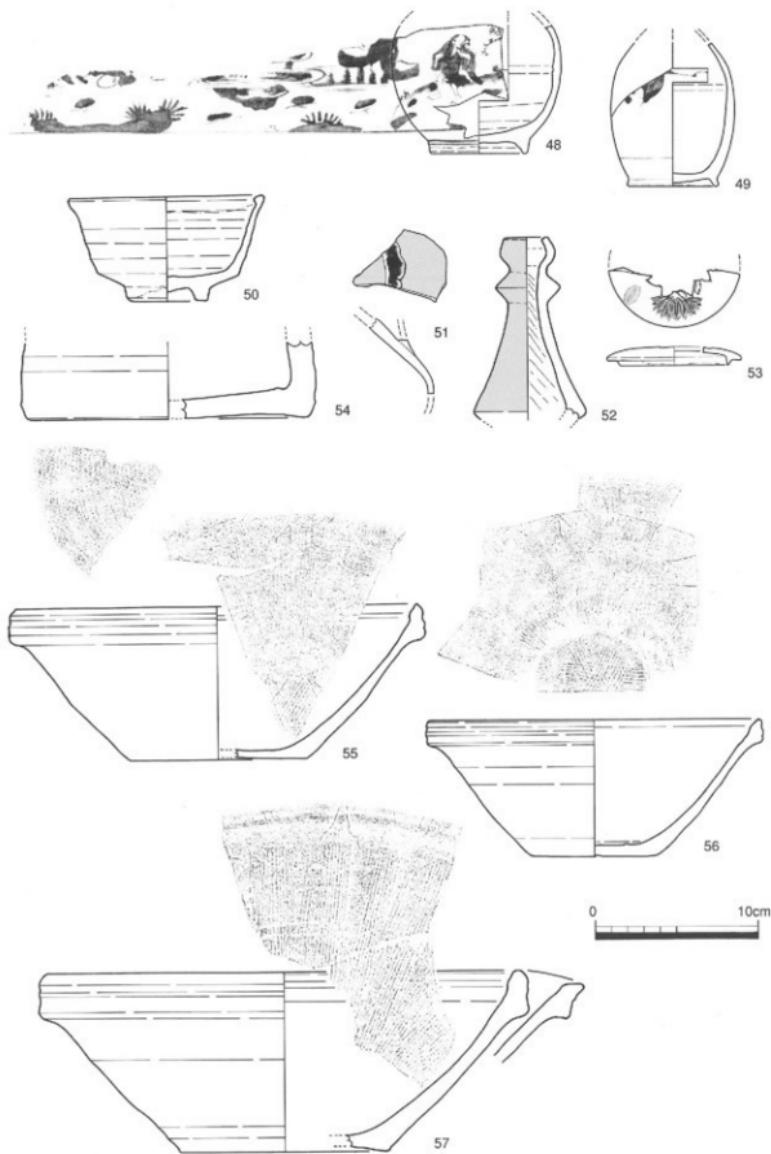
通体名	書文	構物	基盤	底地	法度(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉裏、内外色調)	色調3(内底、上絶)	調整	製作年代	備考	
SD2006 19	陶	壺片				粗	灰白16YR7/1	外底:透明釉2.5YR4/2 内底:透明釉2.5YR4/2 内壁:透明釉2.5YR7/1					
SD2006 20	陶	瓦	板根	底	18.0	粗		外底:焼塙壺蓋2.5YR3/6 内底:赤灰2.5YR4/1	内底:ロクロナデ				
SD2006 21	陶	瓦	板根	口	12.4 高:1.95 底:1.45	粗	赤褐色2.5YR4/6	外底:焼塙壺蓋2.5YR3/2	外底:ケズリ 内底:胡毛	大根直脚 SD1000と接合	胡毛		
SD2006 22	陶	瓦	肥前	口:10.45 底:4.44	粗	灰	灰白色	内外:透明釉	内底:海青色	大根直脚	U字窓台		
SD2006 23	陶	瓦	肥前	口:11.1 底:5.7 高:4.85	粗	灰白色	内外:透明釉	内底:海青色	外底:草木文 内底:一重根目	大根直脚	U字窓台		
SD2006 24	陶	瓦	肥前	口:11.5 底:4.1	粗	灰	灰白色	内外:透明釉	内底:海青色	大根直脚	口縁焼唇に口紅		
SD2006 25	陶	瓦	肥前	口:9.4	粗	灰白色	内外:透明釉				陽刻文有		
SD2006 26	陶	瓦	肥前	口:11.0	粗	灰白色	内外:透明釉	内底:海青色		大根直脚			
SD2006 27	陶	瓦	肥前	底:5.8	粗	灰白色	内外:透明釉	内底:海青色		大根直脚	U字窓台		
SD2006 28	陶	瓦	肥前	口:10.4 底:5.5 高:4.5	粗	反白M6/0	白		口紅	大根直脚	白端味 色絞糸有?		
SD2006 29	陶	瓦	肥前	口:10.0	粗	灰青2.5Y7/2	内外:透明釉	铁鉢:RN4/6		大根直脚	亨源屋 桂園山水		
SD2006 30	陶	瓦	肥前	口:9.9	粗	灰白色	内外:透明釉	色絞:赤			色絞		
SD2006 31	陶	瓦	肥前	口:8.5	粗	灰白色	内外:透明釉	色絞:朱+金+オリーブ灰 5Y3/1	内面:緑	大根直脚	色絞:桂布南門?		
SD2006 32	陶	瓦	肥前	口:12.7	粗	反白M6/0	明緑斑5G7/1			大根直脚	雪綿:絵の目模刻		
SD2006 33	陶	瓦	肥前	口:12.6 底:3.8 高:4.5	粗	反白M6/0	暗緑斑5G7/1		内面:絵の目模刻	大根直脚	絵の目模刻部分と裏面 に移り		
SD2006 34	陶	瓦	肥前	口:13.2 底:3.7 高:4.5	粗	反白M6/0	明緑斑5G7/1			大根直脚	絵の目模刻、高台と袖脚 部分に移り		
SD2006 35	陶	瓦	肥前	底:7.5	粗	反白M6/0	白				白端味		
SD2006 36	陶	瓦	肥前	口:8.95 底:5.15	粗	灰白色	内外:透明釉	内底:海青色		大根直脚			
SD2006 37	陶	瓦	肥前	底:8.05	粗	灰白色	内外:透明釉	内底:海青色		大根直脚	高台内にハリ支え		
SD2006 38	陶	瓦	肥前	底:9.2	粗	灰白色	内外:透明釉	内底:海青色		大根直脚	三角窓台 高台内にハリ支え		
SD2006 39	陶	瓦	肥前	口:13.5 底:2.45 高:8.0	粗	灰白色	内外:透明釉	内底:海青色					

第255図 SD2006出土遺物観察表

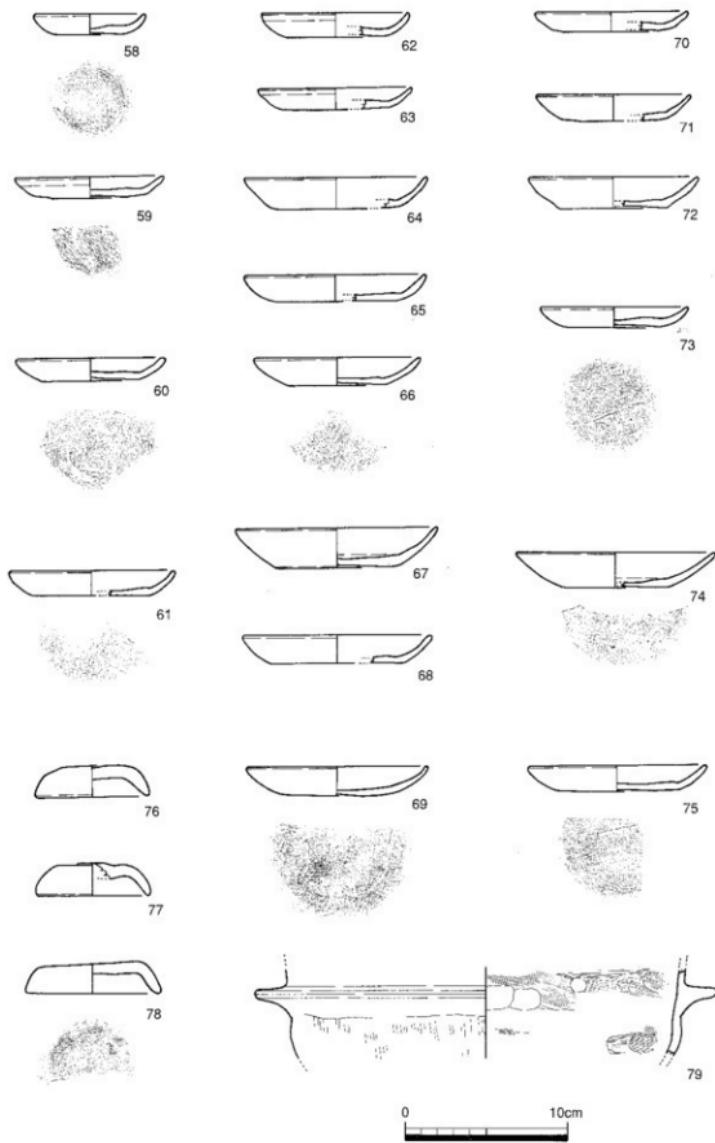


遺物名 番号	器物 種別	部品	座標	測量 (cm)	駁主	色譜 1 (駁主)	色譜 2 (駁主, 内外色譜)	色譜 3 (駁主, 上部)	測量	製作年代	備考
SD2006 40 瓢 大皿				口:23.0 底:17.7 高:8.4	鏡	灰白色	内外:透明釉	表面:繪褐色		大柄中期	
SD2006 41 瓢 大皿				底:14.8	鏡	灰白色	内外:透明釉	表面:繪褐色		大柄中期	U字墨台
SD2006 42 瓢 直鉢形				底:9.8	鏡	灰白色	内外:透明オーリーブ緑SGY71 SGY71	内面:紅葉		大柄中期	青磁, 三苔青磁, 三苔は 斜線, 三足
SD2006 43 瓢 計					鏡	灰白色	内外:透明釉	表面:繪褐色	内面:板	型打製形	
SD2006 44 瓢 盆				口:8.1 底:1.95 高:4.05	鏡	灰白色	内外:透明釉			大柄中期	型打成形, 外面底部に 2 次焼成痕
SD2006 45 瓢 小鉢				口:8.4 底:1.8 高:2.8	鏡	反白NBD	白			大柄中期	白磁, 底部各辺に無施 釉目
SD2006 46 瓢 小鉢				口:7.0 底:4.8 高:3.6	鏡	灰白NBD	白			大柄中期	白磁, 斜形身付に粉付書
SD2006 47 瓢 小鉢				口:7.1 底:3.0 高:3.1	鏡	灰白NBD	白			大柄中期	連環巻竹に跡目 3+序

第256図 SD2006出土遺物実測図・観察表（その5）



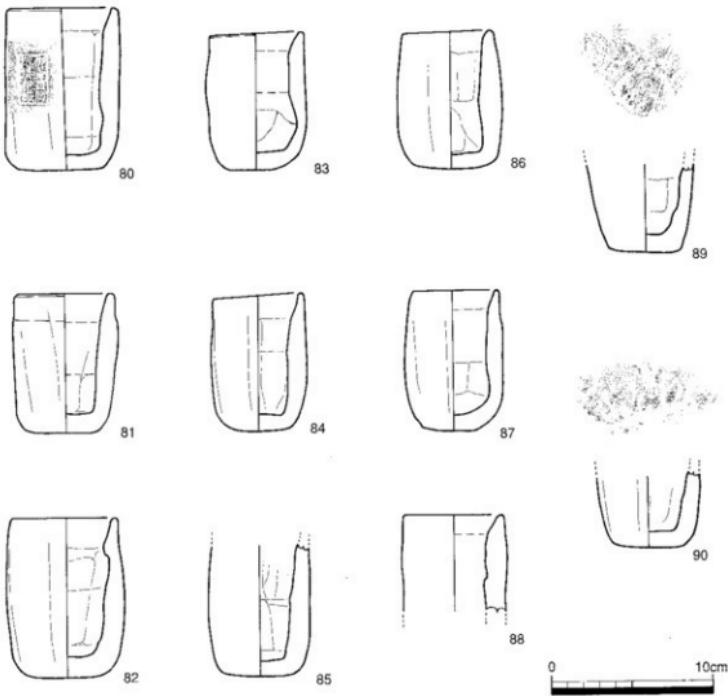
第257図 SD2006出土遺物実測図（その6）



第258図 SD 2006出土遺物実測図（その 7）

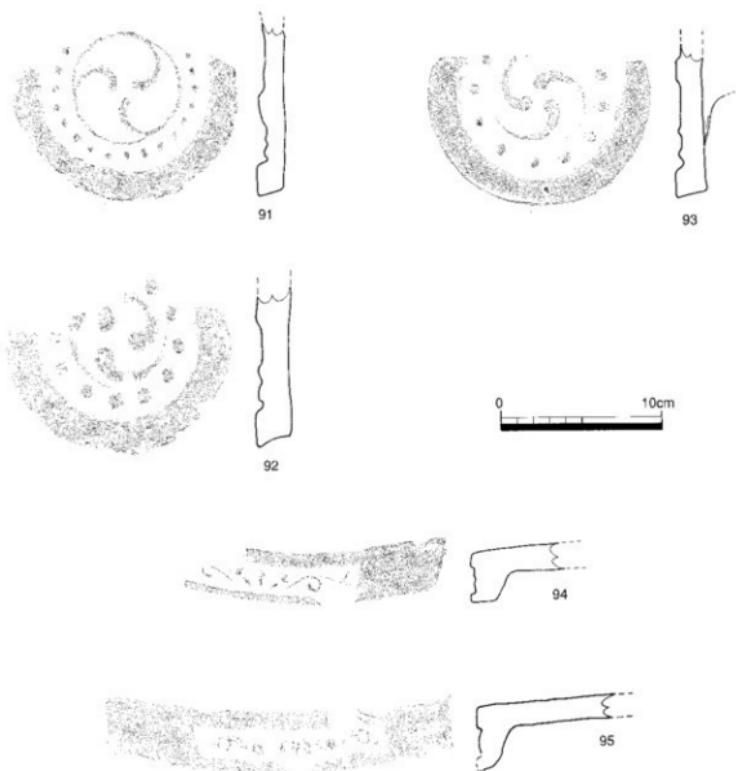
遺物名	種文 番号	種類	度量	測量(m)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色)		色調3(表面、上層)	形態	製作年代	備考
							内:透明釉	外:透明釉				
SD2006 48 磁	瓶	瓶	直前	径:5.7	陶	反白色	内:透明釉	外:透明釉	直口:洁白色			高台内に砂粒付箇
SD2006 49 磁	瓦	肥前	直前	径:5.3	陶	灰白色	内:透明釉	外:透明釉	侈口:洁白色			高台内に砂粒付箇
SD2006 50 磁	火入	直前	口:12.0 高:7.4 底:5.0	粗	反白N8.0		明緑灰S07.1					高台内無施
SD2006 51 磁		瓶		直	陶	灰白色	外:明緑灰7.5GY6/1 底:明緑灰7.5GY6/1					青磁
SD2006 52 磁	花生	直前	口:12.6	粗	底:白8.0		明緑灰7.5GY7/1					青磁
SD2006 53 磁	壺	直・横	口:14.2	粗	底:白SY6/2		内:透明釉	外:洁白色2.5YR5/5 内:反白2.5Y7/1	直口:洁白色-金			
SD2006 54 磁	鉢	直前	径:17.3	石-長 多			外:明緑灰2.5YR5/5 内:反白2.5Y7/1					2次焼成の痕跡
SD2006 55 磁	盆	横鉢	横前	口:24.9 高:3.4 底:10.6	粗	赤褐2.5YR4/6	赤褐2.5YR4/6		内:外口縁部・体部上半:ナデ 下半:ナゲズリ			近世初期
SD2006 56 磁	鉢	横前	口:30.0 高:4.4 底:7.7	粗	オーリップ黒SV3/2	オーリップ黒SV3/2		内:ナゲ 外:ナゲズリ				近世中期
SD2006 57 磁	碗	深鉢	直前	口:26.8 高:11.1 底:12.6	粗	暗赤10R3/5	暗赤10R3/5		内:外:ナゲ			近世中期 口片
SD2006 58 土師質	小皿		口:16.5 高:1.3 底:3.9	粗	赤2.5YR7/6	赤2.5YR7/6		内:外:ロクロナデ 外:底:砂粒あり				
SD2006 59 土師質	皿		口:19.0 高:1.3 底:4.8	赤色褐	赤SYR6/8	赤SYR6/8		内:外:ロクロナデ 外:底:砂粒あり				
SD2006 60 土師質	皿		口:6.9 高:1.1 底:1.9	粗	反白SY6/1	反白SY6/1		内:外:ロクロナデ 外:底:砂粒あり 内:底:上げナデ			口縁部に2次焼成の 痕跡	
SD2006 61 土師質	皿		口:10.0 高:1.5 底:2.1	粗砂粒	反白2.5Y6/1	反白2.5Y6/1		内:外:ナゲ			口縁部に2次焼成の 痕跡	
SD2006 62 土師質	皿		口:8.7 高:1.3 底:6.9	粗砂粒	赤SYR7/6	赤SYR7/6		内:外:ロクロナデ 外:底:砂粒あり				
SD2006 63 土師質	皿		口:9.5 高:1.7 底:6.5	粗	赤SYR7/6	赤SYR7/6		内:外:ロクロナデ 外:底:砂粒あり				
SD2006 64 土師質	皿		口:11.0 高:1.9 底:6.1	粗砂粒	反白2.5Y6/1	反白2.5Y6/1		外:ナゲ 内:外:ロクロナデ			口縁部に2次焼成の 痕跡	
SD2006 65 土師質	皿		口:11.0 高:1.7 底:7.3	粗	反白2.5Y6/1	反白2.5Y6/1		内:外:ロクロナデ 外:底:砂粒あり 内:底:上げナゲ			口縁部に2次焼成の 痕跡	
SD2006 66 土師質	皿		口:10.9 高:1.7 底:6.3	直	深葉緋10YR6/3	深葉緋10YR6/3		外:ロクロナデ 内:底:砂粒あり、板状腹有				
SD2006 67 土師質	皿		口:12.3 高:1.7 底:7.5	粗砂粒	反白2.5Y6/1	反白2.5Y6/1		内:外:ロクロナデ 外:底:ナゲ				
SD2006 68 土師質	皿		口:11.3 高:1.7 底:6.2	粗砂粒	反白10YR6/1	反白10YR6/1		内:外:ロクロナデ 外:底:砂粒あり 内:底:上げナゲ				
SD2006 69 土師質	皿		口:11.0 高:1.9 底:6.4	粗砂粒	反白2.5Y6/1	反白2.5Y6/1		内:外:ロクロナデ 外:底:砂粒あり			口縁部に2次焼成の 痕跡	
SD2006 70 土師質	皿		口:9.2 高:1.6 底:5.6	粗	赤SYR7/6	赤SYR7/6		内:外:ロクロナデ 外:底:砂粒あり				
SD2006 71 土師質	皿		口:9.4 高:1.6 底:6.4	粗	反白10YR6/2	反白10YR6/2		内:外:ロクロナデ 外:底:砂粒あり			内:底に有機物付着	
SD2006 72 土師質	皿		口:10.2 高:1.7 底:6.6	粗	反白2.5Y6/1	反白2.5Y6/1		内:外:ロクロナデ 外:底:砂粒あり			内:底に有機物付着、 2次焼成の痕跡	
SD2006 73 土師質	皿		口:8.8 高:1.2 底:5.6	横切粒	赤SYR7/6	赤SYR7/6		内:外:ロクロナデ 外:底:砂粒あり				
SD2006 74 土師質	皿		口:12.0 高:1.7 底:6.6	粗	反白2.5Y6/1	反白2.5Y6/1		内:外:ロクロナデ 外:底:砂粒あり				
SD2006 75 土師質	皿		口:19.7 高:1.5 底:17.0	粗砂粒	反白2.5Y6/1	反白2.5Y6/1		内:外:ロクロナデ 外:底:砂粒あり			口縁部に2次焼成の 痕跡	
SD2006 76 土師質	焼根茎葉		口:8.7 高:1.1 底:5.6	砂		外:深2.5YR7/8 内:浅2.5YR6/6		内:ナゲ(ナゲ)			漆面	
SD2006 77 土師質	燒根茎葉		口:8.9 高:1.0	粗	赤2.5YR6/9	赤2.5YR6/9		内:赤目、ヨコナデ				
SD2006 78 土師質	焼根茎葉		口:8.9 高:1.0	粗砂粒	赤2.5YR6/6	赤2.5YR6/6		内:外:ロクロナデ 外:底:砂粒			漆面	
SD2006 79 土質	羽皿			粗砂粒		外:深2.5YR6/3 内:浅2.5YR6/0		幹部:ナゲ 内:ナゲ(ナゲメ)・指揮(さき)				

第259図 SD2006出土遺物観察表



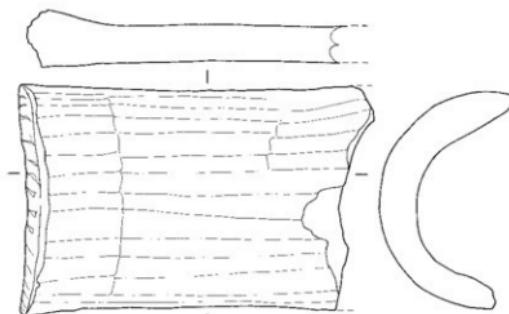
遺物名 (番号)	遺物 種別	基材	形状	法量(cm)	釉土	色調1(釉土)	色調2(釉裏・内面色調)	色調3(外側・上端)	調整	動作年代	備考
SD2006_80 土師質 堆塗器	壺	口:6.2 高:10.0 幅:5.5	滑石粉	他2.SYR6/6	他2.SYR6/6			内外:ナゲ			輪轉成型「堆塗追跡痕跡」 伊弉諾
SD2006_81 土師質 堆塗器	壺	口:5.5 高:9.6 幅:5.7	滑石粉	他2.SYR6/6	他2.SYR6/6			内外:ナゲ			輪轉成型
SD2006_82 土師質 堆塗器	壺	口:6.0 高:9.3 幅:5.8	滑石粉	他2.SYR6/6	他2.SYR6/6			外側:剥離 内面:ナゲ			輪轉成型
SD2006_83 土師質 堆塗器	壺	口:5.6 高:6.4 幅:5.0	滑石粉	他2.SYR7/6	他2.SYR7/6			外側:剥離 内面:ナゲ・暫ナゲ・有目			輪轉成型
SD2006_84 土師質 堆塗器	壺	口:5.1 高:5.8 幅:4.0	滑石粉	他2.SYR7/6	他2.SYR7/6			外側:剥離 内面:ナゲ			輪轉成型
SD2006_85 土師質 堆塗器	壺	底:14.5	滑石粉	他2.SYR6/6	他2.SYR6/6			外側:ナゲ			一部に有目、輪轉成型
SD2006_86 土師質 堆塗器	壺	口:5.3 高:6.8 幅:5.1	砂岩		外側:他2.SYR7/6 内面:他2.SYR6/6			内面:ナゲ			輪轉成型
SD2006_87 土師質 堆塗器	壺	口:5.2 高:6.8 幅:5.2	砂岩		外側:他2.SYR7/6 内面:他2.SYR6/6			外側:剥離 内面:ナゲ			輪轉成型
SD2006_88 土師質 堆塗器	壺	口:6.6	滑石粉	他2.SYR6/6	他2.SYR6/6			内外:ナゲ			輪轉成型
SD2006_89 土師質 堆塗器	壺	底:14.5	砂岩全 石	他2.SYR7/6	他2.SYR7/6			内面:ナゲ・有目底			輪轉底形
SD2006_90 土師質 堆塗器	壺	底:14.2	砂岩		外底:他2.SYR7/6 内底:他2.SYR6/6			内面:有目底			輪轉底形

第260図 SD2006出土遺物実測図・観察表（その8）

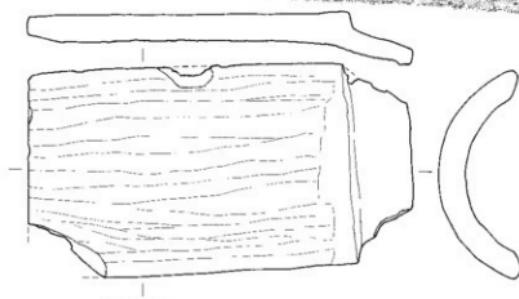
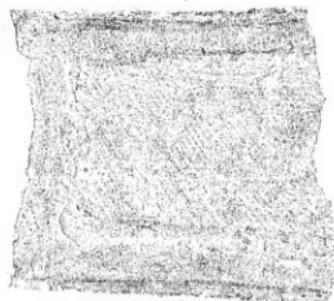


遺物名 番号	商文 種別	法量(m)	地質		色調		風化		後注	備考
			石(保存石)	泥(保存泥)	前面	背面	内面	外面		
SD2006 91 新丸瓦	—	—	—	—	砂礫	灰白2.5Y8/0	暗青灰SPB4/1	—	良	巴 波熱
SD2006 92 新丸瓦	—	2.1	—	—	砂礫	灰白2.5Y7/1	深青灰D8/0	—	良	巴 波熱
SD2006 93 新丸瓦	2.5	—	—	—	砂礫	灰白2.5Y8/0	暗青灰D8/0	—	良	巴
SD2006 94 新平瓦	—	5.3	1.6	16.7	砂礫	灰N6/0	灰M5/0	—	良	—
SD2006 95 新丸瓦	8.6	1.4	21.8	—	砂礫	灰N4/0	灰N4/0	—	良	波熱
SD2006 96 丸瓦	22.0	2.2	14.1	—	砂礫・石	灰白10YR7/1 (6/1)N4/0 (6/1)N5/0	青白 コピキA	—	良	—
SD2006 97 丸瓦	23.6	2.0	12.8	—	砂礫少	灰白5Y7/1	灰N4/0	コピキB ゴザ鉄斑鐵	板ナデ	良 波熱

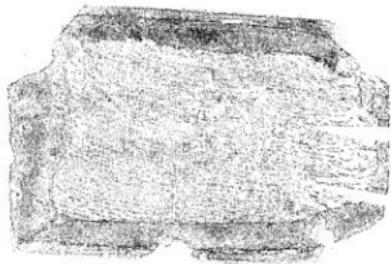
第261図 SD2006出土遺物実測図・観察表（その9）



96



97



第262図 SD2006出土遺物実測図・観察表（その10）

### SD2004・SD2005 (第263図)

A区、第2面で確認した東西方向の溝状の遺構である。検出した標高は共に1.25m前後、底面の標高は共に1.05m前後を測る。検出長はSD2004が約2.7m、SD2005が3.5mで、検出幅は共に1.0m前後を測る。

扁平な石材が一部底面に認められ、周辺にも同規模の石材が散在しており、本來石列状の遺構であったと考えられる。

共にSA2001の東半部北面に位置し、約1.6mの間隔で平行する配置から、SA2001との関連が推察される。直下に、同様の配置でSD2006が存在しこれより後出することから、18世紀代の所産と考えられる。

### SD2004・SD2005出土遺物 (第264図)

遺物の出土量は、コンテナ1/2程であった。

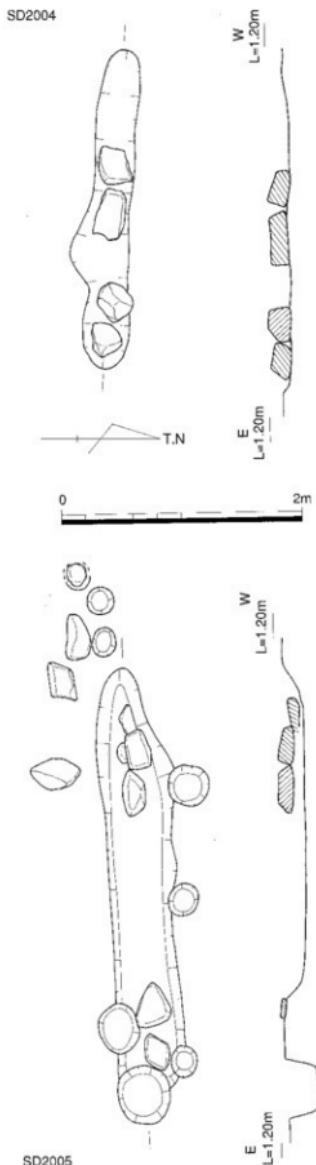
1は肥前系磁器皿である。菊花形の皿で、同形のものがSD2010(第241図1)に認められる。2・3は、備前播鉢である。体部外面に削り調整は認められない。4~6は、土師質土器皿である。7は輪積成形の焼塙壺である。8はミニチュアである。

### SP2294 (第250図)

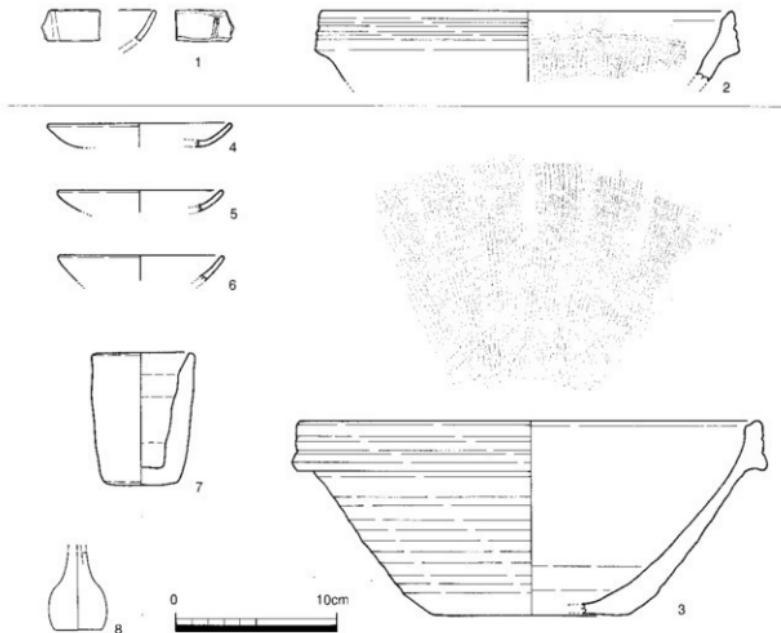
A区中央部、第2面で検出した遺構である。検出した標高は1.27m前後、底面の標高は1.15m前後を測る。径約0.4mの円形と想定されるが、北半をSD2006に壊される。底面からは、埋壺として埋設されていたと考えられる唐津鉢が半蔵された状態で出土している。

### SP2294出土遺物 (第265図)

5は京・信楽系陶器碗である。6は肥前系陶器鉢。二彩手のもので、口縁部頸部に獸面が付けられる。見込には砂目が認められる。



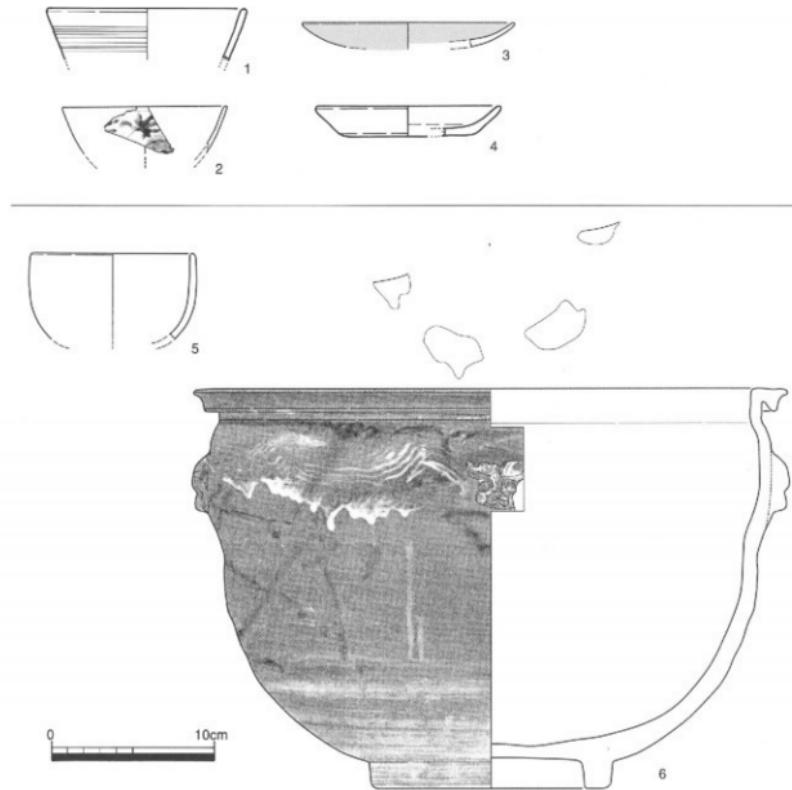
第263図 SD2004・2005平面・断面図



遺物名 番号	器文 種別	遺物 種別	產地	法量(m)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉裏、内外色調)	色調3(表面、上部)	調整	製作年代	備考
SD2004-1	縦	三	肥前		硬	灰白色	内外:透明釉	表面:淡青色			
SD2004-2	周	横耳	肥前	口:25.2	滑動粒		外面:赤7.5R4.6 内面:暗赤褐7.5R3.3		内外:ロクロナデ	近世前期	

遺物名 番号	器文 種別	遺物 種別	產地	法量(m)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉裏、内外色調)	色調3(表面、上部)	調整	製作年代	備考
SD2005-3	縦鉢	縦鉢	肥前	口:26.2 底:11.9 高:12.2	滑動粒	赤10R5.6	赤10R5.6		内外:ロクロナデ	近世前期	
SD2005-4	土師質	皿		口:11.1	中		外面:赤10YR8.0 内面:浅黄褐10YR8.3		内外:ロクロナデ 升進:白粘無印		
SD2005-5	土師質	皿		口:10.1	中	灰白10YR8.1	灰白10YR8.1		内外:ナデ		
SD2005-6	土師質	皿		口:10.1	砂粒少	灰白10YR8.2	灰白10YR8.2		内外:ロクロナデ		
SD2005-7	土師質	焼成窯		口:15.9 底:8.1 高:4.5	滑動粒	橙2.5YR7.8	橙2.5YR7.8				焼成成形
SD2005-8	土師質	さきごと セット		底:1.90	小	灰白10YR8.2	灰白10YR8.2				

第264図 SD2004・2005出土遺物実測図・観察表



遺物名 番号	遺文 種別	基様	性状	底面 (an)	胎土	色調 1 (胎土)	色調 2 (胎内、内外色調)	色調 3 (表面、上絆)	網目	製作年代	参考
SK2028 1	周	鏡		口:12.0	胎	灰白SY7/1	褐10YR4/6				
SK2028 2	盤	鏡面形	透光	口:10.0	胎	灰白色	内外:透明板	黄褐:底・暗褐色			
SK2028 3	瓶	直	透光	口:12.0	胎	灰白色	内外:明褐色SG2/1			大椎晉期	青磁
SK2028 4	土器質	皿		口:11.0 底:8.4	胎真	浅黄褐10YR8/3	浅黄褐10YR8/3		肉桂:二つにアゲ 外縁:斜めスリガリ 内縁:仕上げアゲ		口縁の一辺に斜付蓋
SP2294 5	周	鏡	鏡・伝	口:9.80	胎	透光2.5YB/3	内外:透光2.5YB/3			大椎晉期	
SP2294 6	周	鉢	透光	口:36.5 底:13.5 高:13.9	胎	灰白SY9/3	深褐7.5YR3/2	上部:鏡・灰白10YR8/1 (白色) 黄褐10YR8/6		17c後半	二形

第265図 SK2028・SP2294出土遺物実測図・観察表

### **SK2028（第249図）**

A-C区、第2面で確認した遺構である。検出した標高は1.08m、底面の標高は0.82m前後を測る。検出長は東西方向で約0.8m、南北方向で約0.9mを測る。平面は円形と推定されるが、東部がSD2006に壊されている。所属時期は、SD2006に先行することから17世紀後半を中心に考えられる。

### **SX2028出土遺物（第265図）**

1は肥前系陶器碗である。2・3は肥前系磁器。碗（2）、青磁皿（3）がある。4は土師質土器皿である。

### **SX2002（第11・242図）**

C区、第2面で確認した遺構である。検出した標高は1.05～1.24m、底面の標高は1.04m前後を測る。検出長は約4.2m、検出幅は最大2.5mを測る。平面は、やや不整形な長方形である。断面の形状は、底面がほぼ平坦で、器壁の下半は急傾斜であるが上位では緩やかとなる。C区西部で観察された焼土を切り込んで開削されており、底面には石材が散乱して認められた。所属時期は、焼土に後出することから18世紀前葉以降の所産と推定される。

### **SX2002出土遺物（第267図）**

出土遺物は少量でコンテナ1/4以下である。1は景德鎮窯系青花皿である。高台内にカンナ痕が放射状に認められる。2は漳州窯系青花碗である。3は肥前青磁碗。明緑色の釉調である。4は肥前青磁皿。濃い青緑色の釉で、内面に陰刻文様を施す。5は土師質土器皿である。胎土は灰白色を呈する。6は墓石である。

### **SX2003（第266図）**

C区、第2面で確認した遺構である。検出した標高は1.15～1.24m、底面の標高は1.03～1.12mを測る。検出長は東西方向に約2.7m、南北方向に約2.4mを測る。平面は、やや不整形な方形である。断面の形状は船底形で、底面の中央部がやや窪む。重複関係でSA2001のP-7、P-8に先行する。出土遺物はないが、SA2001との関連及び同様の様相となるSX2004から、17世紀後葉～18世紀前葉に推定される。

### **SX2004（第266図）**

C区、第2面で確認した遺構である。検出した標高は1.13～1.18m、底面の標高は0.90m前後を測る。検出長は約2.1m、検出幅は約1.4mを測る。平面は、やや不整形な方形である。断面の形状は船底形で、埋土は4層に分層され、灰黄色或は褐灰色のシルト質土がほぼ水平状に堆積する。重複関係でSA2001のP-9、P-10に先行する。所属時期は、後出のSA2001との関連及び出土遺物から、17世紀後葉～18世紀前葉を中心とした所産と考えられる。

### **SX2004出土遺物（第267図）**

出土遺物は少量で、土師質土器皿のみ図化できた。7～10は、土師質土器皿である。器形から、佐藤編年の様相3～5の所産と考えられる。

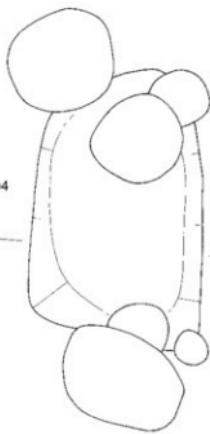
S  
L=1.50m



N  
L=1.50m

- ①2.5Y6/2灰黄色シルト質細砂
- ②10YR5/1褐色シルト質粗細砂
- ③10Y6/2灰黄褐色シルト質細砂
- ④2.5Y5/2暗灰黄色シルト質粗細砂

SX2004



S  
L=1.40m

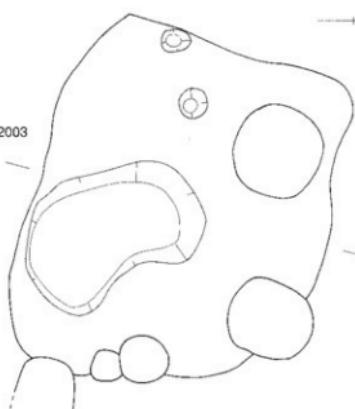


N  
L=1.40m

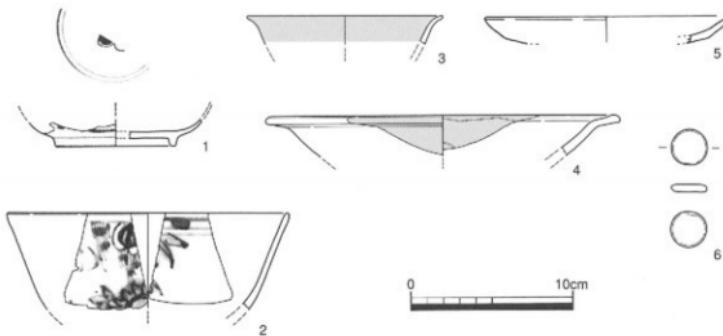
5Y6/1灰色シルト質粗細砂

SX2003

T.N

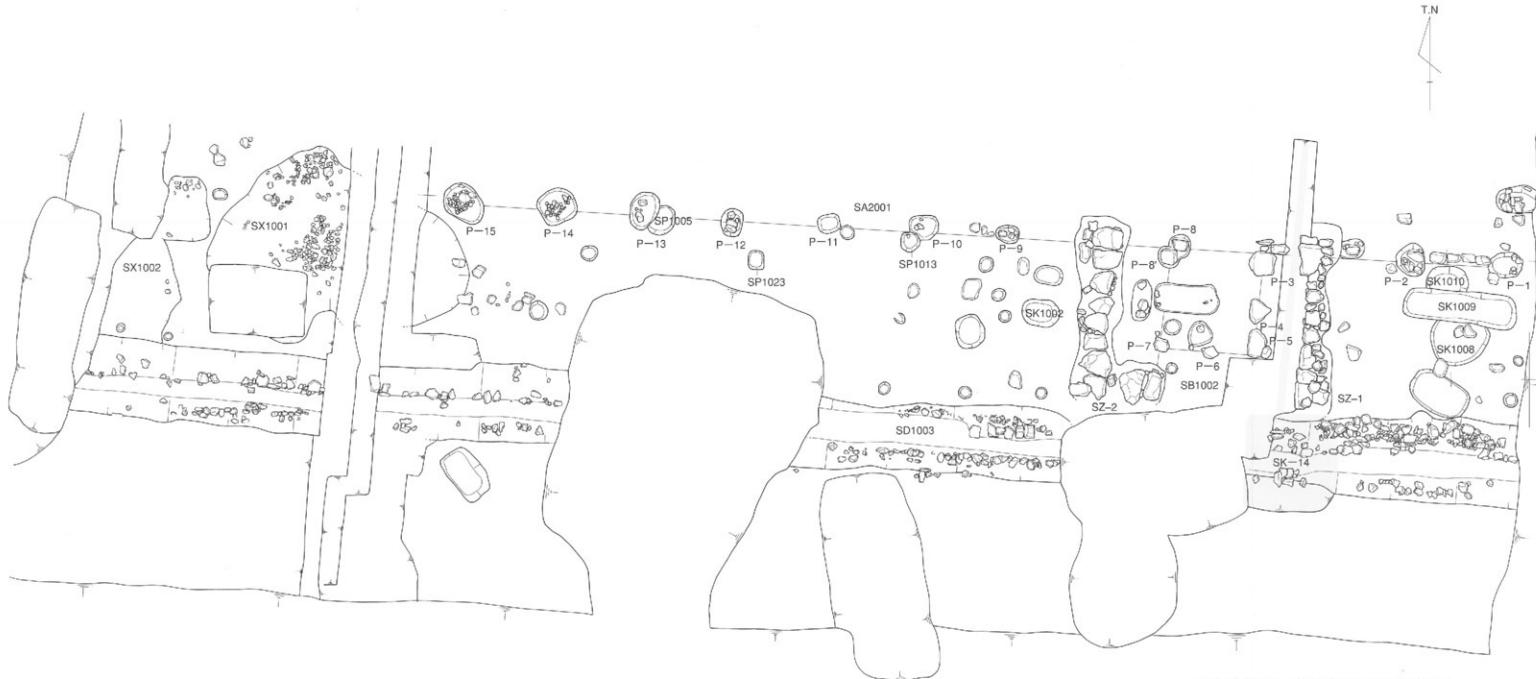


第266図 SX2003・2004平面・土層図



遺物名	形名	遺物 番号	地層	墓地	位置 (m)	出土	色鉛1 (出土)	色鉛2 (地層・内外色調)	色鉛3 (表面・上級)	測量	製作年代	備考
SX2002 1 瓢	瓢	SX2002	基盤部	中塗	底:7.25	傳	灰白色	内外:透明釉	表面:淡青色			高台内にカンナア底 裏方に斜板付
SX2002 2 瓢	瓢	SX2002	縁	中塗	口:17.00	傳	灰白色	内外:透明白	表面:淡青色			津州窯
SX2002 3 瓢	縁	SX2002	縁		口:12.60	傳	灰白色	内外:透明釉7.50Y7/1				青磁縁
SX2002 4 瓢	縁	SX2002	縁	中塗	口:201.70	傳	灰白色	内外オリーブ8.10Y4/2				青縁
SX2002 5 土師質 盆	盆	SX2002	全高:2.0 底:1.45		中	灰白10YR6/2	灰白10YR6/2		内外:ロクロナナ			
SX2002 6 石 基石		SX2002										
SX2004 7 土師質 盆	盆	SX2004	口:13.7 底:12.2 高:3.2		青色釉	浅黄褐7.5YR6/4	浅黄褐7.5YR6/4		内外:ロクロナナ 外底:凹起あり			
SX2004 8 土師質 盆	盆	SX2004	口:19.6 底:1.8 高:6.0		中	口:青い黄褐10YR6/3 底:10YR6/3	口:青い黄褐10YR6/3 底:10YR6/3	口:青い黄褐10YR6/3 底:10YR6/3	内外:ロクロナナ 外底:凹起あり 内底:凸起あり			
SX2004 9 土師質 盆	盆	SX2004	口:17.6 底:1.4 高:4.1		傳	傳	口:青い黄褐10YR7/3 底:10YR7/3	口:青い黄褐10YR7/3 底:10YR7/3	内外:ロクロナナ 外底:凹起あり		口底内折に鉛鉬塗	
SX2004 10 土師質 盆	盆	SX2004	口:16.2		中	傳7.SVH7/6	傳7.SVH7/6		内外:ロクロナナ			

第267図 SX2002・2004出土遺物実測図・観察表



※アミ掛け部分は、試掘時検出SK-14及び土管位置



第268図 第1面屋敷境平面図

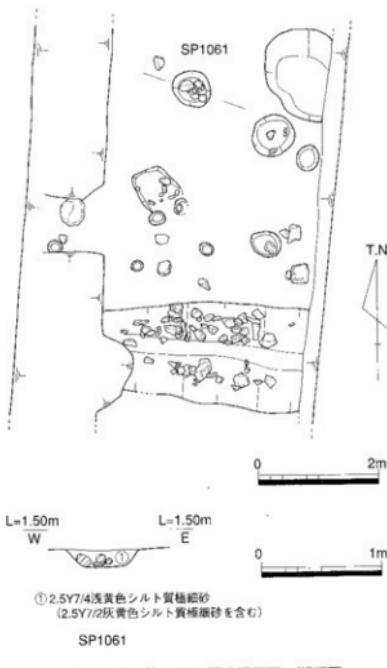
### 第1面A-C区屋敷境遺構（第268図）

試掘調査で確認された礎石（SB1002P-3～5）をはじめ、調査地の南東部に建物の基礎部分（SB1002）を検出した。この建物（SB1002）の北面側の両脇には、礎石痕が東西方向に並び（SA1001）。途中、擾乱及び調査対象地外を挟むが調査地の西部、E区まで認められる（SP1061）。南面では、SA1001に平行する溝（SD1003）が東西方向に検出された。溝（SD1003）の南部は、当面での遺構の確認は行っていないが、周囲に締まる砂及びシルト質土の互層が築地状に認められ、溝（SD1003）以北の整地状況と明瞭に異なって観察された。以上の状況から、東西方向の道路及び区画溝及びそれを南面とした屋敷地が考えられ、絵図に該当する屋敷割りから松平大膳家上屋敷跡地を具体的に想定できることとなった。

### SA1001・SB1002（第268～271図）

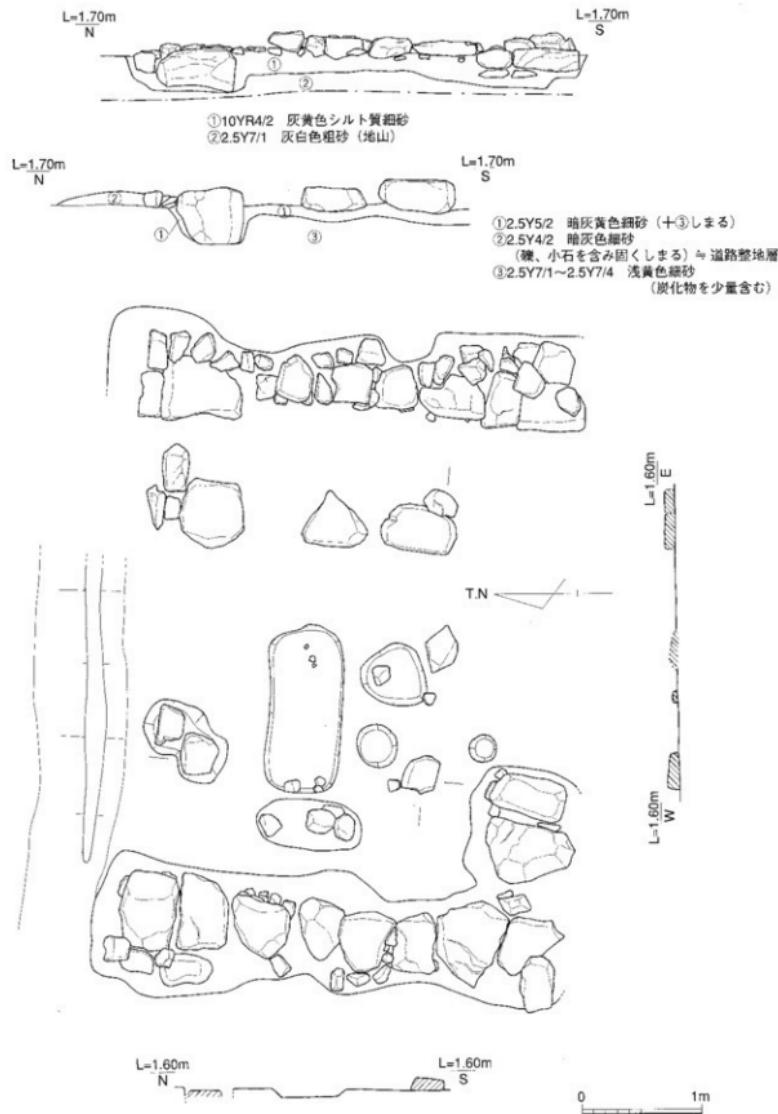
A-C区南部、第1面で確認した礎石建物である。検出した標高は1.44～1.56mを測る。SA1001は何れも礎石は遺存していないが、玉砂利を詰め固めた埋土で、一定の規模を有することから礎石の痕跡として考えられる。C区の西部で礎石列は終わるが、後述するSX1001に壊された状況が観察でき、またE区で屋敷境の溝（SD1003）から同距離に位置するSP1061も同様の礎石痕と考えられ、西方へ伸びる可能性が考えられる。またSA1001と北面あるいは南面で対応する礎石痕は認められないが、SD1003が屋敷境の石組み溝であることを考慮すれば、同溝の北岸を建物の基礎とした可能性が高いと考えられる。

SB1002は、西及び東面側に布掘りをし大振りの石材を並べるもので、重量のある建造物の土台基礎部であることが考えられる。構造や屋敷内での配置関係からは土蔵にも考えられるが、石材は向かい合うように並べられており、また北面及び南面には石列が認められないことから、門と想定される。また両脇に配置されるSA1001の存在から、長屋門であつたものと考えられる。SB1002は、北面に敷居上に土を固めた部分が認められる他、周辺よりやや高い位置に構築されている。西側の石列（SZ-2）がL字となっており、また東側の石列（SZ-1）の内側に礎石（P-3～5）が南北に並ぶもので、これらの内側、2間分が入り口に相当すると考えられる。礎石列（P-3～5）は、第2面の礎石痕と配置が一致するため、既存のものを利用した可



第269図 第1面E区遺構平面・断面図





第271図 SB 1002平面・断面土層図

能性も考えられる。また調査時、礎石列より後出した掘り込みと判断し記録を行っていないが、礎石列（P-3～5）とSZ-1の間に土管（土師質で外面に粗い刷毛調整）が設置されていた。土管は、試掘時に確認された漆喰溜り（SK-14、幕末所産）に接続されており、SD1003内に桥が存在した可能性がある。このことからSZ-1と礎石列（P-3～5）の間は出入り可能な空間であった可能性も考えられ、潜戸が推定される。またSB1002の東面は、SD1003の北岸に基礎部分と考えられる割石が密集し認められ、また北面となるSA1001の下面にも石列が設置されており、SB1002の西面とは異なる構造の建物が推定され、潜戸との関係からは番小屋の存在も考えられる。

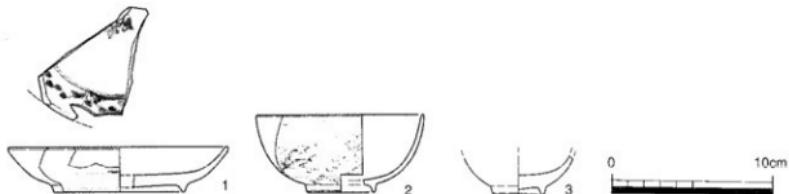
所属時期は、19世紀前葉に屋敷内での画期（SX2008埋没、上水施設SE3003・SD3011の廃絶等）が認められ、当期から屋敷境となるSD1003の廃絶（明治27年）までが想定される。

#### SZ-1・SA1001出土遺物（第272図）

1は肥前系磁器皿である。SZ-1より出土した。2・3は肥前系磁器碗で、SA1001を構成する柱穴より出土した。2の外面には、色絵が認められる。

#### SB1002検出時出土遺物（第273図）

1・2は肥前系陶器。碗（1）、鉢（2）がある。3～7は、肥前系磁器である。碗（3・4）、小壺（5・6）蓋（7）がある。8～10は備前。擂鉢（8・10）、灯明皿（9）。11は産地不明陶器甕。12は軟質施釉陶器。黄釉を施し、珉平焼の可能性が考えられる。

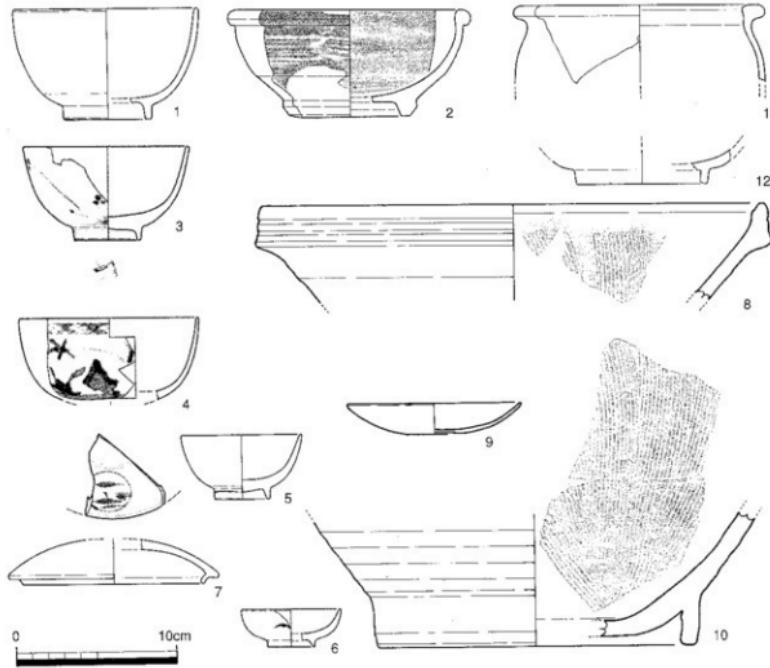


通称名	細文	邊切	基盤	產地	正直（cm）	墳土	色調1（墳土）	色調2（内部、内外色調）	色調3（底面、上底）	調整	製作年代	備考
石列下	1 磁	目	肥前	□:13.60 高:2.75 底:4.00	土	灰白色	内外:透明釉	青緑・深・暗青色	内面:五瓣花	内面:五瓣花	大壺N形	
A1001P	2 磁	輪	肥前	□:10.20 高:4.00	土	灰白色	内外:透明釉	上部:白・黒			18世紀半	竹右衛門
A1001P	3 石	輪底輪	肥前	底:3.00	土	灰白色	内外:透明釉	青緑・暗青色				

第272図 SA1001・SZ-1出土遺物実測図・観察表

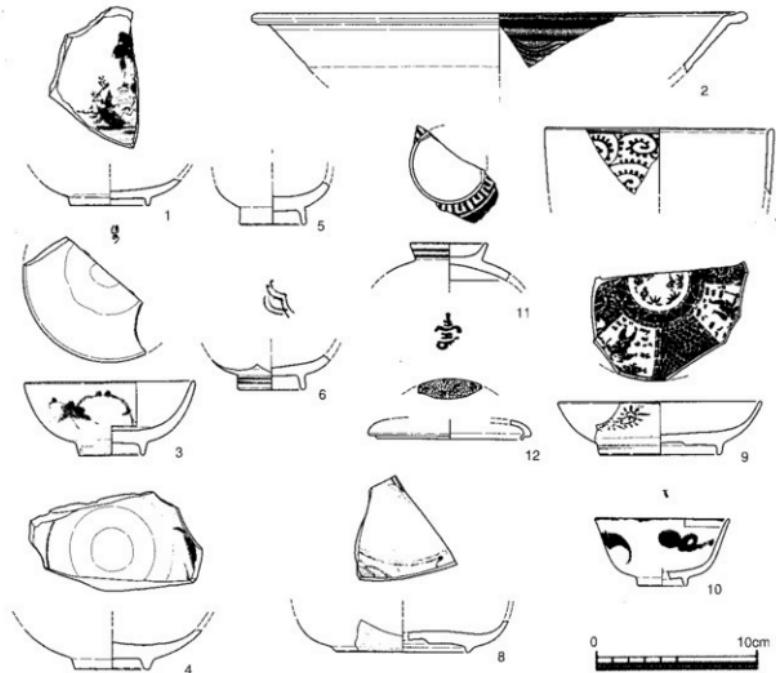
#### SD1003（第268・269図）

第1面A・C・E区で確認した東西方向の溝跡である。屋敷境に相当し、道路の側溝と考えられる。検出長はA-C区間で約31m、E区で約3.5mを割り、調査対象外範囲を含めると総延長で約52mとなる。検出幅は1.2m～1.9mである。主軸はN-86°-Wを示す。検出した標高は1.33～1.56mである。底面の標高はA区で0.96m前後、C区で0.98m前後、E区で1.00m前後を測るが、排水の方向は明確ではない。断面はU字形だが側壁の下端がL形となり、中央部はやや窪む。底面では扁平な石材が両壁に沿って断続的に遺存して認められた。屋敷側の壁面には裏込めに用いたと考えられる割石や礫が一部で観察された。埴土は多量の瓦片及び石材を含み、溝跡はかなり壊され廃絶したと考えられる。瓦片が多く認められていることから、同時に屋敷境の施設も壊したと推定される。この屋敷境は少なくとも明治27年の県庁府舎建設時には失われており、当期が造構廃絶時期の下限となる。



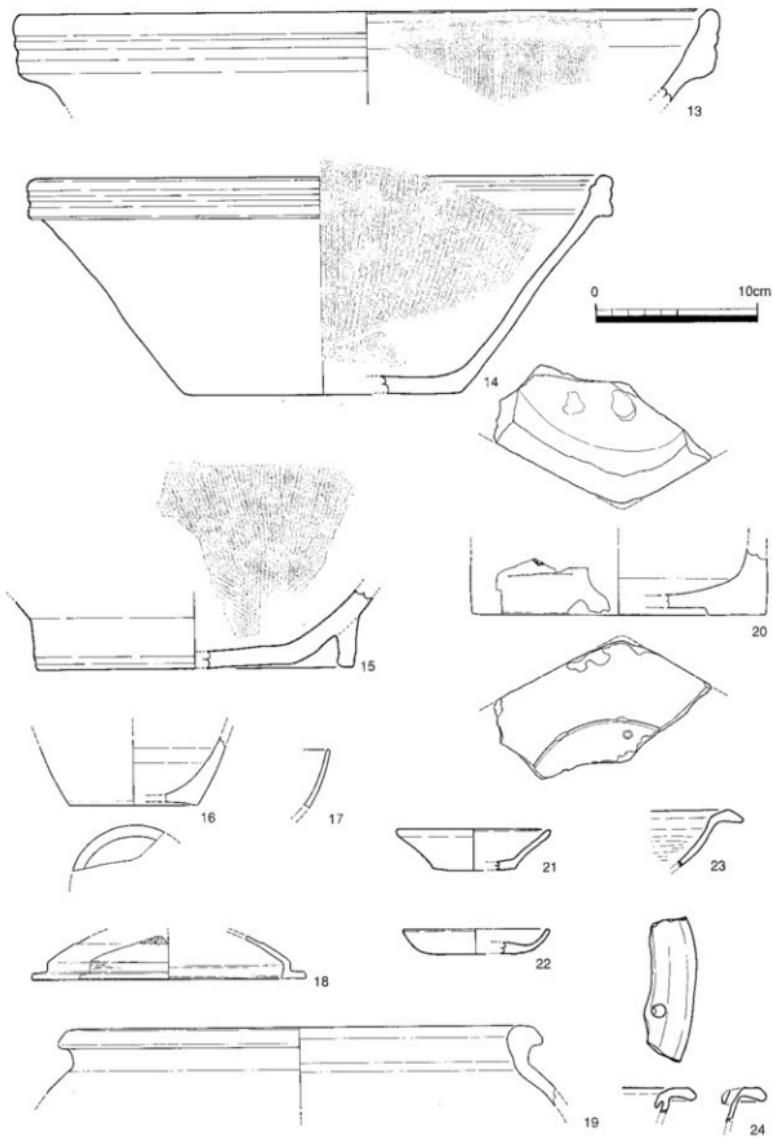
遺物名 番号	概文 様式	遺物 種類	大きさ 法量 (cm)	断土	色調 1 (断土)	色調 2 (釉面・内・外色調)	色調 3 (底面・上部)	調査	製作年代	備考
A区石列 検出中 1	縦 横	碗	直径: 15.40 高さ: 3.50	粘土	灰白2.5YR8/2	内外: 明黄褐色3.5Y7/6 底: 3.5YR8/3				
A区石列 検出中 2	横	縫	直径: 15.00 高さ: 3.50 底: 17.20	粘土	深褐色10R6/9	内外: 明黄褐色3.5Y7/1		内側が暗 人骨が附	新石器時代	割れ目
A区石列 検出中 3	縦	縫	直径: 10.15 高さ: 3.50	粘土	灰白色	内外: 透明な 底: 3.5YR8/1	底面: 淡褐色	外底: 花	大柄が付 底台内に貼紙有	くらわんか 花
A区石列 検出中 4	縦	縫	直径: 11.00	粘土	灰白色	内外: 透明な 底: 3.5YR8/1	底面: 淡褐色	外底: 四方脚	大柄脚付	
A区石列 検出中 5	縦	小杯	直径: 17.40 高さ: 3.50 底: 1.50	粘土	灰白色	内外: 透明な				
A区石列 検出中 6	縦	縫	直径: 16.00 高さ: 3.50 底: 2.20	粘土	灰白色	内外: 透明な 底: 3.5YR8/1	底面: 淡褐色	外底: 番		紅目口
A区石列 検出中 7	縦	縫	直径: 13.00 高さ: 11.00	粘土	灰白色	内外: 透明な 底: 3.5YR8/1	底面: 淡褐色			手形内面にアルミナ移 付有
A区石列 検出中 8	縦	縫	直径: 30.8	粘土	灰白色	直径: 10R4/6		内側: ロココナデ	近世蓄鉢	
A区石列 検出中 9	縦	打眼底	縫	直径: 10.7 高さ: 1.9	粘土	深褐色10R3/6	底: 10R3/6	内側: ロココナデ 外底: ケズリ		口縁内外に保付有
A区石列 検出中 10	縫	縫	直径: 18.1	粘土	灰白色	直径: 10R5/6		外底: ケズリ 内底: ケズリ	近世蓄鉢	
A区石列 検出中 11	縦	縫	直径: 15.50	粘土	灰白色10YR8/3	内底: 黒10YR2/1				黒目口被點装
A区石列 検出中 12	縦	縫	直径: 18.00	粘土	灰白色2.5Y8/1	内底: 浅褐色10YR6/8				

第273図 SB 1002検出中出土遺物実測図・観察表



遺物名	仮文 番号	遺物 種別	基部 底地	法面 (cm)	鉢土	色調1(鉢土)	色調2(縁葉, 内外色調)	色調3(底葉, 上部)	網目	製作方法	備考
SD1003-1	1	碗	皿	底14.80	中	灰白2.SY81	内外:灰白2.SY81	底葉:暗緑灰10G3/1	内面:暗緑山水	大模压型	
SD1003-2	2	盤	鉢口縁器	口20.00	中	灰白10YR5/1	内外:灰白10YR5/2		内面:底葉と縁状の筋毛目	大模が粗	
SD1003-3	3	盤	底	口19.20 底14.50 高さ3.80	中	灰白色	内外:透明釉	底葉:深青色	内面:筋毛目	18e後半 ミナガ付	くらわんか、蓋付にアルミナ付
SD1003-4	4	瓶	皿	底14.45	中	灰白色	内外:透明釉	底葉:暗青色		大模が粗	くらわんか、蓋付にアルミナ付
SD1003-5	5	瓶	瓶底蓋	底14.00	中	灰白色	内外:灰白10Y7/1				
SD1003-6	6	瓶	純底蓋	底14.00	中	灰白色	内外:透明釉	底葉:暗青色			蓋付にアルミナ付付
SD1003-7	7	盤	蓋付縁	口14.00	中	灰白色	内外:透明釉	底葉:暗青色	外側:網目革		
SD1003-8	8	縁	皿	底13.00	中	灰白色	内外:透明釉	底葉:暗青色		大模压型	蓋の目凹形適合
SD1003-9	9	縁	皿	口12.35 底14.45 高さ2.70	中	灰白色	内外:透明釉	底葉:暗青色	内面:圓切松竹彫	大模が粗	蓋底彫り 蓋の目凹型玉合
SD1003-10	10	瓶	底	口8.15 底14.50 高さ2.80	中	灰白色	内外:透明釉	底葉:暗青色	内面:赤褐色 口内:赤褐色		
SD1003-11	11	瓶	蓋	つまみ足 14.80	中	灰白色	内外:透明釉	底葉:暗青色		大模压型	バチ蓋合
SD1003-12	12	瓶	蓋	最大径 -16.10 底19.00	中	灰白色	内外:透明釉	底葉:暗青色		大模が粗	蓋底彫り

第274図 SD1003出土遺物実測図・観察表（その1）



第275図 SD 1003出土遺物実測図（その2）

遺物名	種文	種別	器種	底面	底面(m)	胎土	色調1(胎土)	色調2(底面、内外面)	色調3(内側、上端)	調整	製作年代	備考
SD1003_13	備	磁器	底盤口鉢	肥前	底:42.9	胎		外面:地青釉16F3 内面:にい赤7SR4/4				
SD1003_14	陶	磁器	底盤	底:明石 高:15.2 底:17.3		陶器胎		内面:地2.5YR7/6			19世紀	
SD1003_15	陶	磁器	底盤	底:19.4		陶器胎		外面:地青10R3/6 内面:地10R3/6	外面:ロクロナデ		近世初期	
SD1003_16	陶	磁器	底盤部	底:8.00	中		にい赤7SR4/3	外面:地青2.5YR4/2 内面:にい赤2.5YR4/3				
SD1003_17	陶	皿	瓦平		中	泥青2.5YB3	内面:明黄壁2.5Y5/6					
SD1003_18	陶	鉢		口:17.00	中	黄2.5YB1	外面:青白2.5YR3/3 内面:青白2.5YR3/3 壁:10R3/6	外面:トビカンナ?				
SD1003_19	陶	皿		口:27.0	中	泥青2.5Y7/2	内面:暗青2.5YR3/4					
SD1003_20	陶	香炉底部			中	泥青2.5YB3	外面:灰白2.5YD3 内面:灰白2.5YD3 壁:10R3/6	鉢脚:墨青2.5YR8/1			八角香炉 大谷山の陶石を使った製品?	
SD1003_21	土師質	皿		口:9.4 底:12.5 高:5.2		陶器胎	底2.5YR7/6	底2.5YH7/6		内面:ロクロナデ 外底:四輪車切り		
SD1003_22	土師質	皿		口:16.0 底:13.0 高:5.7		陶器胎	泥青唇7.5YR8/4	泥青唇7.5YR8/4		内面:ロクロナデ 外底:四輪車切り		
SD1003_23	正質	磁器				陶器胎	底NS/0		内・外口縁部:ロクロナデ 外面:地青2.5 内面:ハマメ			
SD1003_24	正質	磁器				陶器胎	底SY2/1	底SY2/1				

第276図 SD1003出土遺物観察表

## SD1003出土遺物（第274～276図）

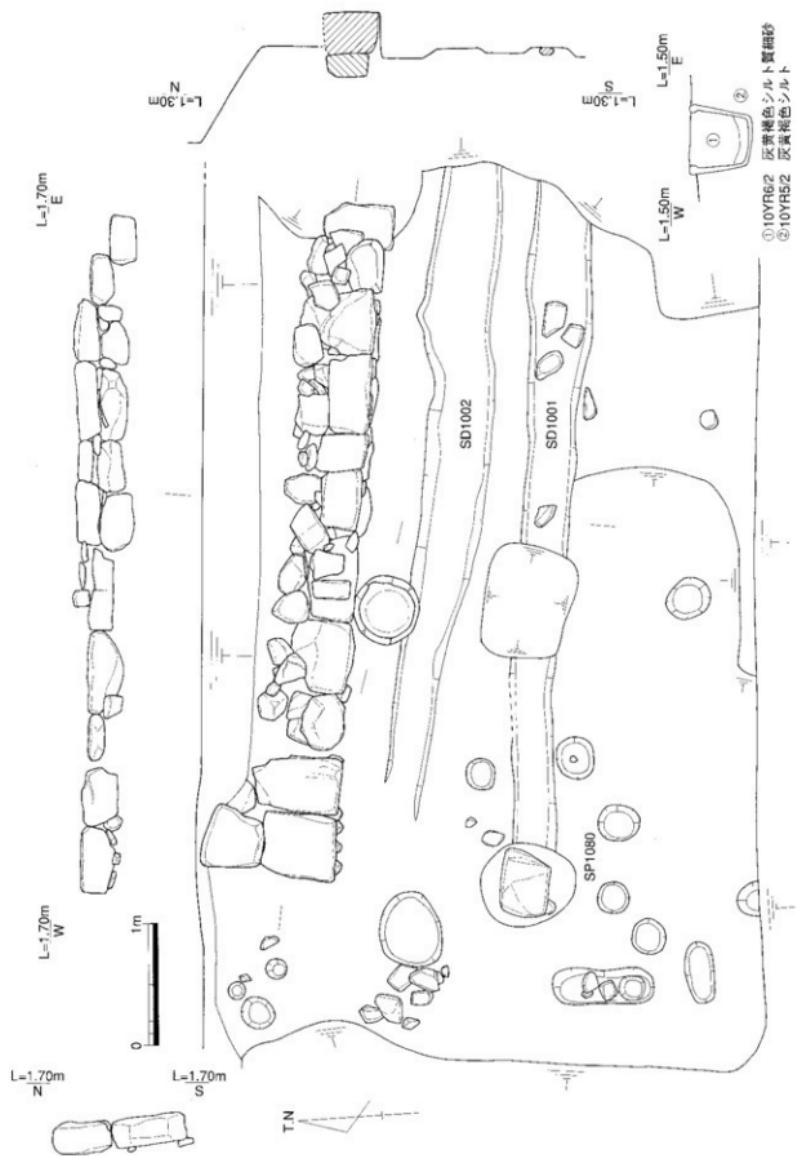
取り上げた瓦については、特徴的なものが認められず、岡化は行わなかった。陶磁器は瓦に比べ少量であったがコンテナで2箱程度出土し、18世紀代～明治期初期までの所産のものが認められる。1・2は肥前系陶器である。3～9は、肥前系磁器。9の皿は、型紙刷りにより絵付けされた製品で、SZ1001の覆土に同形のものが認められる。10は関西系磁器碗である。13・15は、備前系擂鉢。14の擂鉢は、堺・明石産である。16は大谷焼。17は軟質施釉陶器。特徴的な黄色の釉を用いた製品、瓦平焼と考えられる。20は香炉の底部。胎土は、理兵衛焼との関連が指摘される富田丸山の陶土に酷似する。21・22は土師質土器皿である。23・24は、瓦質土器焙烙である。

## SB1001（第277図）

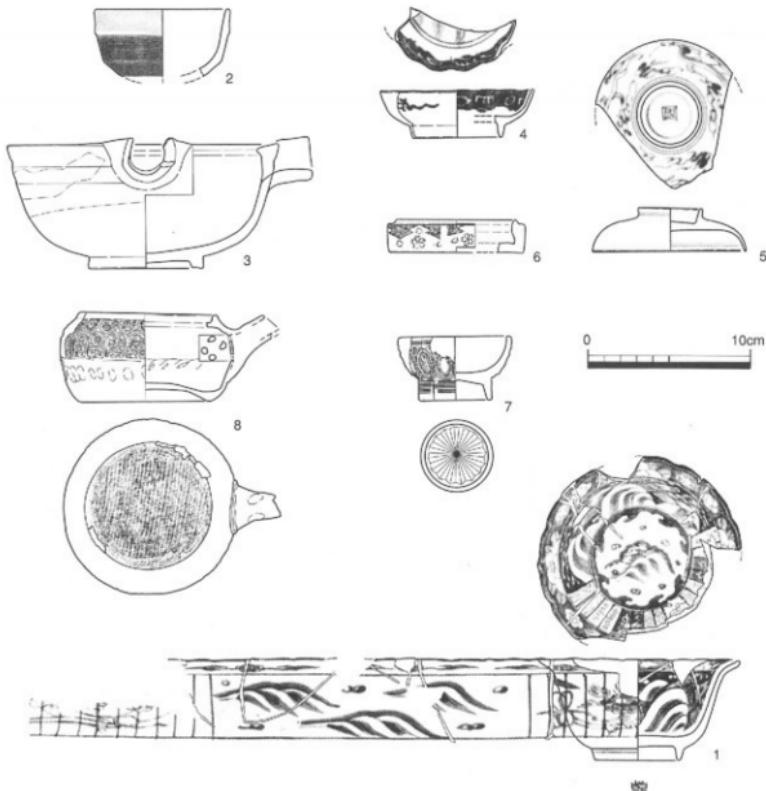
D区北西隅、第1面で確認した建物である。検出した標高は1.45m前後を測り、主軸はN-82°-Wを示す。調査時にはSD1001・1002を南岸とする石組み溝の可能性も考えたが、L字に屈曲する対岸部を欠き、また瓦が多量に散在していたため建物の土台と判断した。北側が調査対象範囲外で、東側が搅乱により壊されているため規模は不明である。40～60cm大の扁平な石材を西面では一段、南面の東部では東に傾斜する地形のためか二段ないし三段に積み、上面を揃えようとしている。内側には割石を詰め留めに用いる。南面に便槽と考えられる土師質の埋甕が設置されている。埋甕の周囲は、SD1002の北壁に沿って瓦が立てられていた。SD1001及び南西角の礎石(SP1080)は、約1.8mの間隔を置き平行し、庇等の関連施設にも考えられる。検出時に出土した遺物より、明治時代の廃絶が考えられる。

## SB1001出土遺物（第278・279図）

1は肥前系磁器鉢。輪花鉢で、内外面に色絵が施される。ガラス質の熔着剤により焼継を行い、接合部に金を塗り隠す。高台内には「上悉」「乃」と読めるものの他、数箇所で文字を記した焼継印が認められる。2・3は瀬戸・美濃系陶器。腰錦碗(2)、片口鉢(3)。4・5は肥前系磁器。皿(4)、蓋(5)。6は磁器の蓋物で、型紙刷りによる装飾。内面には、朱肉とみられる赤色顔料が付着している。7は型合わせによるガラス製品である。8は陶器上瓶。9は備前灯明皿。10は土師質の蓋。11・12は軒丸瓦。13は軒棟瓦である。



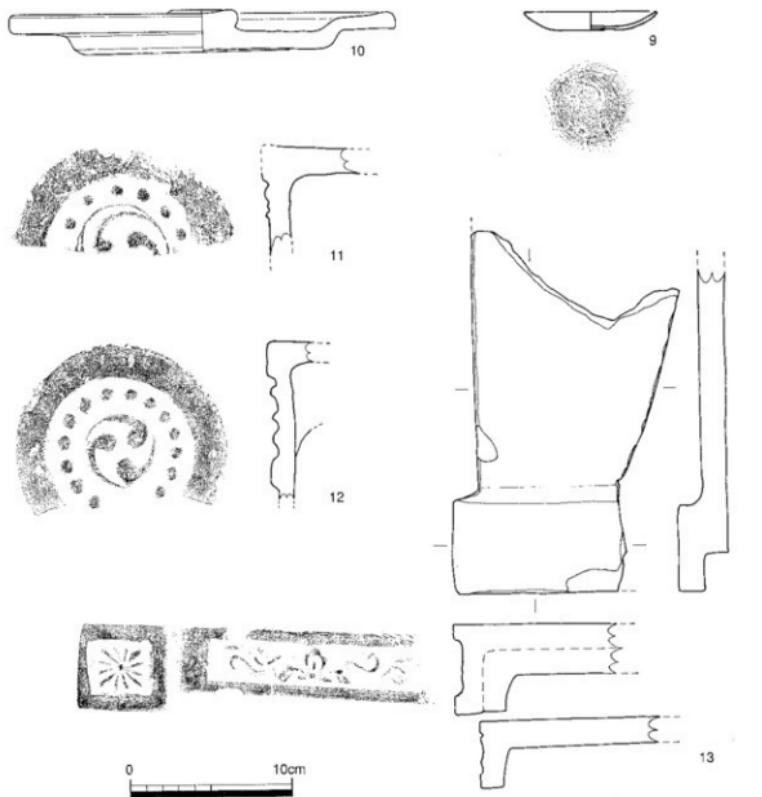
第277図 SB 1001平面・断面図



説

遺物名 番号	形状 種別	基盤	蓋地	直径(cm)	地土	色調1(地土)	各調2(被覆、内外色調)	色調3(底面、上部)	調査	製作年代	備考
SB1001 柱坐牛 1 瓶	瓶	盤底	□:12.2 高:3.15 底:3.2	板	灰青10YB1	内外:透明釉	底面:鈍青色 上部:京一錦-全で模様入り			1790~ 1810年代	「鈍」款記、グラス底盤 上部「京一錦」及び大7の模様印
SB1001 成虎 2 瓶	瓶	盤・蓋	□:8.00	板	灰白2.5YB1	内外上:灰10YV7/2 外下:網目地7.5VR2/3					無記
SB1001 柱坐牛 3 瓶	瓶	片口瓶	素・蓋	□:16.20 高:10.00 底:7.00	板	灰白2.5YB2	内外:オリーブ葉5YB3				煮込みに沿し斜2ヶ所、 内外に抵抗線
SB1001 柱坐牛 4 瓶	瓶	目	盤底	□:9.30 高:2.90 底:3.40	板	灰白色	内外:透明釉	底面:淡・薄青色			壓打成型
SB1001 柱坐牛 5 盆	盆	蓋	盤前	□:16.80 高:3.80 底:3.10	板	灰青色	内外:透明釉	底面:淡・薄青色 口紅:黄褐10YR5/6			統計有
SB1001 柱坐牛 6 瓶	瓶	直地	□:7.00 高:2.00 底:1.00	板	灰白色	内外:透明釉	底面:コバルト	外曲:型模造り			口縁部内方に突付管
SB1001 柱坐牛 7 ガラス 小瓶?					板			前後型合せ			
SB1001 柱坐牛 8 瓶 土瓶	瓶	口:8.00 高:3.25 底:2.25	板	灰灰10YR6/1	にぶい灰褐10YR5/3			内面:ナデ 外側下半:指押丸 外底:青白			

第278図 SB 1001出土遺物実測図・観察表（その1）



遺物名	種類	遺物	品種	属性	測量 (cm)	鉢土	色調1 (鉢土)	色調2 (粗面、内外色調)	色調3 (底面、上縁)	記述	製作年代	備考
SB1001-1	陶	打削面	擦痕	口沿1 底1 高1.1 幅2.9	口径1 底1 高1.1 幅2.9	にかい縁7.5RA4/4	にかい縁7.5RA4/4			内:円錐形(凸)クロナデ 外:縦縫合切欠 外縁:タズリ		口縁内外に擦付型
SB1001-2	土師質	器		8±6.23.85 3±4.84.05 底2.6	8±6.23.85 3±4.84.05 底2.6	にかい縁7.5YR6/4	にかい縁7.5YR6/4					内面に被敷漆
遺物名	種類	遺物	品種	属性	測量 (cm)	鉢土	色調	基面	内面	外縁	地成	備考
SB1001-11	灰瓦	6.0	1.5	-	砂礫少	田MS0	田MS0				良	巴 被敷
SB1001-12	軒瓦	3.0	1.2	-	砂粒	田MS0	底白10YR1				良	巴
SB1001-13	軒瓦	14.3	1.6	22.1	砂礫少	灰白7.5Y7/1	灰SY5/1				良	被敷 キラコ

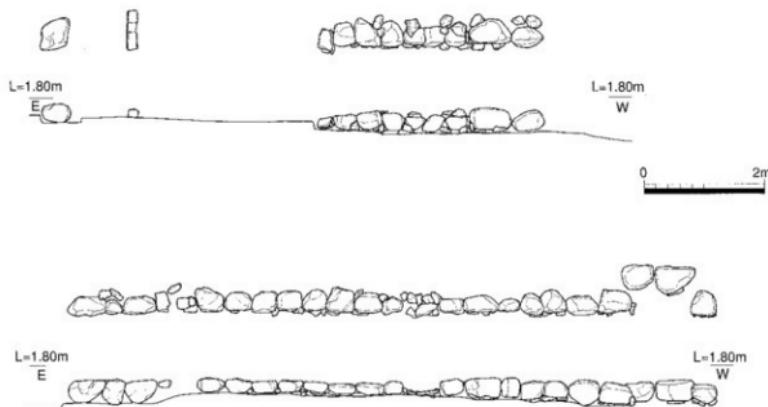
第279図 SB 1001出土遺物実測図・観察表（その2）

### SZ1001 (第280図)

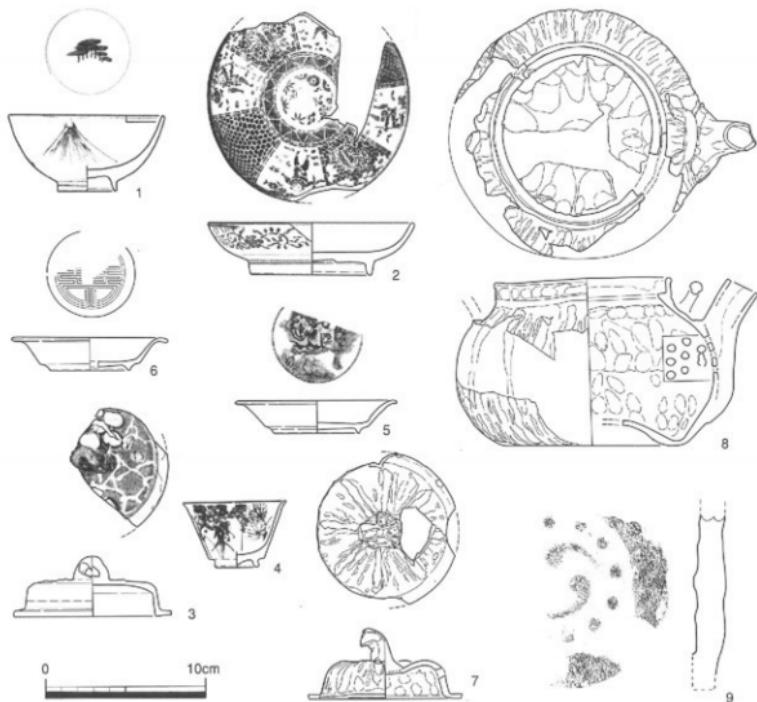
C-D区北端部、第1面で確認した石列状の遺構である。検出した標高は1.55m前後を測り、主軸はN-86°-Wを示す。北面を揃え東西方向に並べられる。南側に対応する石列が認められないことから、調査対象外に対面した石列が想定され、石組み溝である可能性が考えられる。所属時期は検出時の遺物及びSX2010に後出し、また明確ではないが配置関係からはSX2008埋没後の所産と推定され、19世紀前葉～明治時代の所属時期が考えられる。

### SZ1001出土遺物 (第281図)

1は產地不明磁器碗である。2は肥前系磁器皿。型紙刷りによる装飾が認められる。SD1003に同形のものが出土している。3の蓋は、イッチン掛けによる装飾が認められる。4～6は、瀬戸・美濃系磁器である。小壺(4)、皿(5・6)がある。7・8は、產地不明陶器で、南瓜形の土瓶である。9は軒丸瓦片である。



第280図 SZ1001上面・立面図



遺物名 参考 番号	種類	式样	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	色調1 (胎土)	色調2 (胎表・内外色調)	色調3 (底面, 上面)	調整	製作年代	備考
SZ1001-1	盆	浅	口:19.46 底:14.56 高:3.56	深	灰白色	内外:透明	表面:コバルト				
SZ1001-2	瓶	直	口:12.06 底:10.06 高:17.20	細	灰白色	内外:透明	表面:コバルト	丹青:鉛の色斑剥露合		銅鏡塗等	
SZ1001-3	瓶	垂	口:12.29 底:7.80	細	暗褐色	表面:7.5YR7/1	外側:銀	イッチャ剥付:白	外西:梅花		イッチャ剥付
SZ1001-4	瓶	小軒	口:9.30 底:7.80 高:12.66	細	灰白色	内外:透明	表面:コバルト	外側:葉花 内側内:静止ハラケズリ		型押成型	
SZ1001-5	瓶	直	口:19.96 底:12.45 高:14.45	粗	深灰色	内外:透明	表面:コバルト	内面:牽子, 開窓			
SZ1001-6	瓶	直	口:8.80 底:4.85	粗	灰白色	内外:透明				そり目 木型打込	
SZ1001-7	陶	土器の蓋	口:4.50 底:3.60	細	灰褐色	表面:7.5YR5/2			内面:牽押さえ		
SZ1001-8	罐	上直	口:10.6 底:10.3 高:10.3	粗	灰褐色	表面:2.5YR5/1	胎表・内面に深い黒色S9 胎内下部オリーブS9/2				

遺物名 参考 番号	式 様	底径 高さ (cm) 厚さ	高さ (cm) 厚さ (cm)	胎土	色調		調整		性質	備考	
					表面	基面	内面	外面			
SZ1001-9	軽丸瓦	-	-	-	胎土	灰褐色	灰白色	N7/6		良	凸

第281図 SZ1001出土遺物実測図・観察表

### SX1003・1004 (第283・284図)

C区中央部, 第1面で確認した遺構である。検出した標高は, SX1003が1.44~1.50m, SX1004が1.33~1.47mを測る。検出長は, SX1003が東西約2.5m, 南北約0.9m, SX1004が東西約2.7m。南北約0.9mを測る。搅乱により遺存状態は悪いが, 平瓦を立ち並べ, 平面を長方形に囲っている。堆積状況から, まず長方形に土坑を掘り, 外壁に平瓦の凸面を外に向けて縦に並べ, 内側に土を入れ固定させている。両遺構は約4mの間隔を空け, SA1001に平行する主軸方位で約1m北側に設置されている。また第2面の検出遺構であるがSX2008の南端部に位置しており, 配置からこれらの遺構との関連がうかがわれる。明確ではないが, 垣もしくは日隠し等といった屋敷内での小規模な区画施設と推定される。所属時期は, 検出時に出土した遺物より幕末~明治時代の埋没が考えられる。

### SX1003・1004出土遺物 (第285・286図)

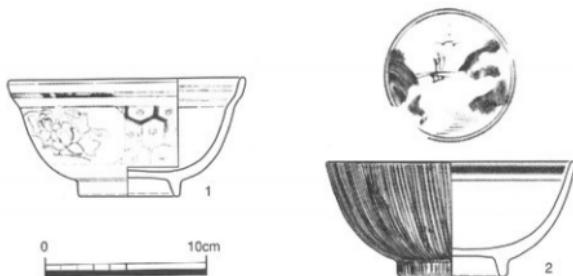
検出時に遺物が一定量認められた。1~3・6は, 肥前系陶器である。砂目の皿(1), 京焼風陶器(2), 刷毛目碗(3), 壺(6)がある。4・5は, 肥前系磁器である。青磁香炉(4), 広東碗(5)がある。7・8は, 濑戸・美濃系陶器である。水壺(7), 植木鉢(8)がある。9・10・13は, 京・信楽系陶器である。11は産地不明陶器蓋である。12は軟質施釉陶器蓋である。14~16は土師質土器。皿(14~15), 壺(17)である。

### SX1005 (第8図)

A-B区, 第1面で確認した集石溝である。検出した標高は, 1.03~1.35m前後を測る。平面でコの字形に検出された。出土遺物より19世紀末以降の所産が考えられ, 県庁庁舎等の基礎と想定される。

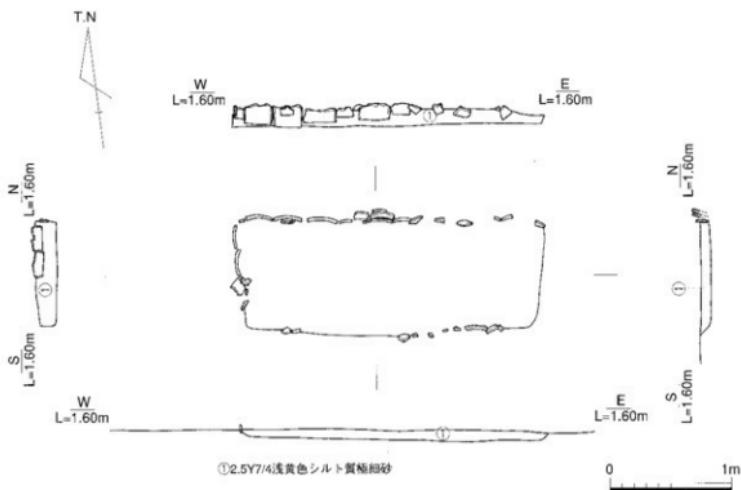
### SX1005出土遺物 (第282図)

1・2は磁器碗である。丼碗の器形で, 明治・大正時代の所産と推定される。

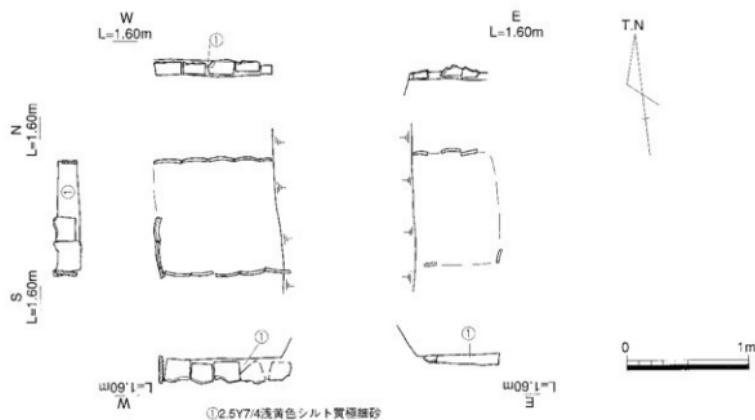


遺物名	部位	遺物 番号	基種	產地	深度(m)	熱土	色別1(熱土)	色別2(織窯, 内外色調)	色別3(緑窯, 上絵)	表面	製作年代	備考
SX1005	1	1	盤	瀬戸・美濃	口:11.30 底:7.30 厚:4.00	瀬戸	板白色	内外:織窯	上絵:金・赤			
SX1005	2	2	碗	瀬戸	口:15.20 底:12.20	瀬戸	板白色	内外:織窯	青釉:明青色, 織窯灰30G 3/1, 口絵:赤絵6YR4/6			

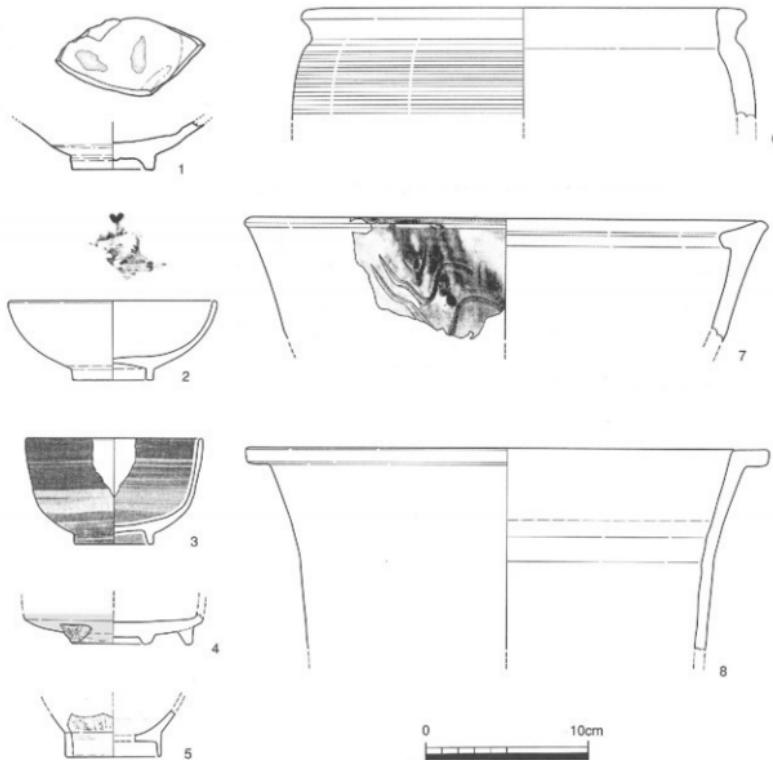
第282図 SX1005出土遺物実測図



第283図 SX1003平面・土層図

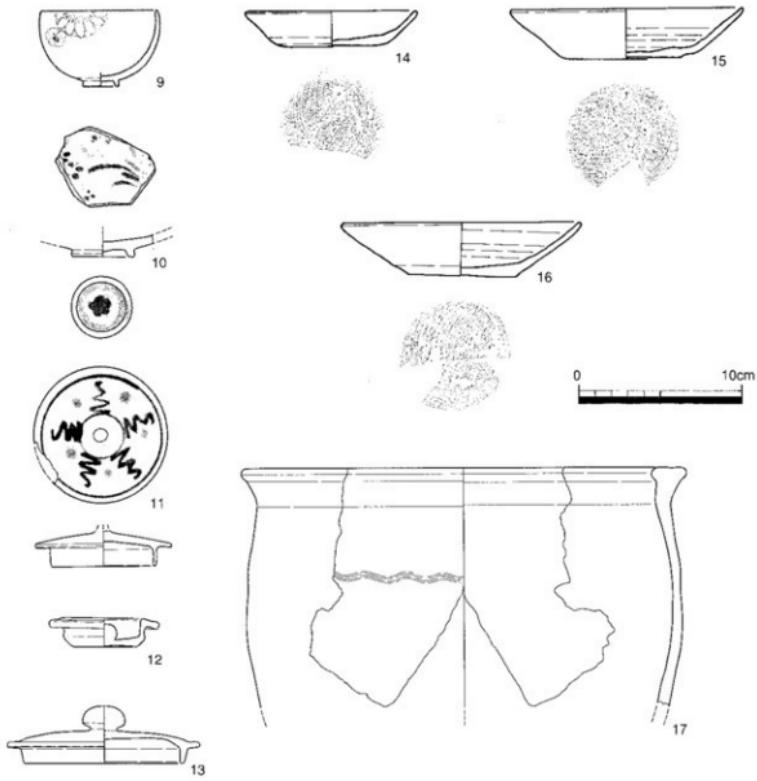


第284図 SX1004平面・土層図



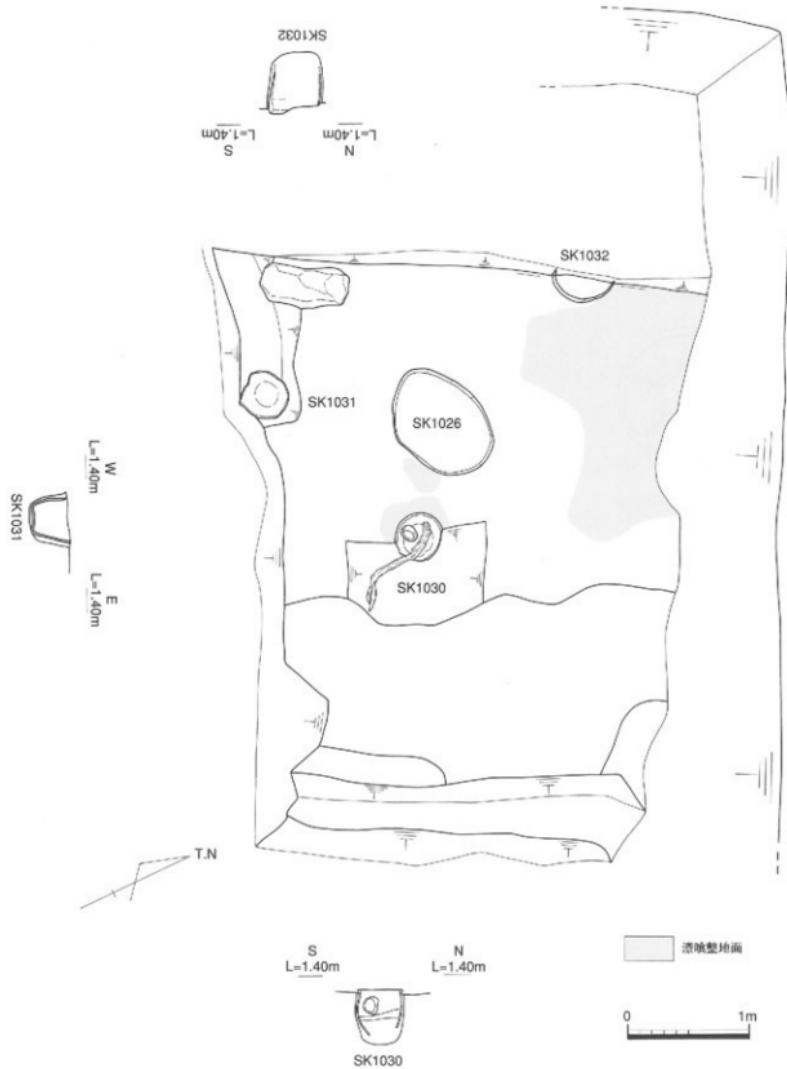
遺物名	本文	遺物 番号	器種	遺傳	基量 (m)	原土	色調 1 (原土)	色調 2 (胎部、内外色調)	色調 3 (表面、上絵)	質地	製作年代	備考
台区西平 面2	1	陶	高足鉢	既削	高:5.0	砂	にぶい黄褐色YH7/2	底自19Y7/1			大晦日	黄込みと高台内側に紺 目2ヶ所
瓦区西斜 面中	2	陶	縁	既削	口:12.50 底:4.60	砂	泥質2.5Y6/5	内外:泥質2.5Y7/3	輪廻:オリーブ地		大晦五絆	泥地風
瓦区西斜 面中	3	陶	縁	既削	口:10.80 底:6.50 壁:4.50	砂	にぶい黄褐色YH6/3	にぶい黄褐色YH6/3		内外:輪廻的な彫毛目	大晦五絆	彫毛目地
瓦区西斜 面中	4	陶	高足鉢	既削	底:4.10	砂	灰白色	削削底10G7/1			界隈	高台内無地
瓦区西斜 面中	5	陶	輪廻部	既削	底:5.60	砂	灰白色	内外:透明白	表面:明黄色		1700~	灰東灰
瓦区西斜 面中	6	陶	高足鉢	既削	口:24.50	砂	明赤褐色2.5YR5/6	外蓋:明赤褐色2.5YR5/6 内蓋:海綿状10G4/1				
瓦区西斜 面中	7	陶	高足鉢	既削	口:32.00	砂	泥質2.5Y6/3	内外:泥質2.5Y7/3	輪廻:オリーブ底SY6/3			
瓦区西斜 面中	8	陶	桶木計	既削	口:31.60	砂	灰白2.5YB2	内外:オリーブ底SY6/3				

第285図 SX1003・1004出土遺物実測図・観察表（その1）



遺物名	形文 番号	遺物 種類	地質	底量 (cm)	胎土	色調1 (胎土)	色調2 (胎面、内・外色)	色調3 (底面、上縁)	調印	製作年代	備考
瓦区画模 出中	9 茶 瓢	器	泥質	口:24.0 底:14.5 高:21.0	粗	灰白SY7/2	内外:灰白SY7/2	底面:淡青色、反オリーブ SY42	外側:青	大抵灰綠	
瓦区画模 出中	10 茶 瓢瓶	器	泥質	底:3.70	細	淡黃2SY6/3	内外:淡黃2SY6/3	上縁:青+金+綠			蓋台内に墨書、色絞
瓦区画模 出中	11 衣 壺	器	粗大粒 底:2.30 高:2.60	粗	反青2SY6/2	外側:灰白SY8/2	上縁:黒2SY2/1、底面				
瓦区画模 出中	12 茶 壺	器	粗大粒 底:1.7 高:4.7 口:3.0	粗	褐SY8/6	外側:明赤褐5YR5/6					
瓦区画模 出中	13 茶 壺	器	粗大粒 底:3.00	粗	灰白2SY8/2	外側:灰白SY7/2					
瓦区画模 出中	14 土師壺 直	器	口:12.4 底:2.2 高:6.8	粘土	朴質-淡紅色1-素燒 2SY7/4内面:深青2SY8/1			内外:ロクロナデ 外側:圓輪み切り 内側:仕上げナデ			口部内外に保付箋
瓦区画模 出中	15 土師壺 斜	器	口:11.9 底:2.1 高:6.7	赤色粘		外側:一層模压7.5YR7/2 内面:深青2SY8/1		内外:ロクロナデ 外側:圓輪み切り			
瓦区画模 出中	16 土師壺 直	器	口:14.4 底:3.8 高:6.7	赤色粘		外側:一層模压7.5YR7/2 内面:深青2SY8/1		内外:ロクロナデ 外側:圓輪み切り			内面に被熱痕、保付箋
瓦区画模 出中	17 土師壺 備	器	口:24.60	粗	に赤い滑性10YR7/0	に赤い滑性10YR7/0					

第286図 SX1003 · 1004出土遺物実測図・観察表 (その2)



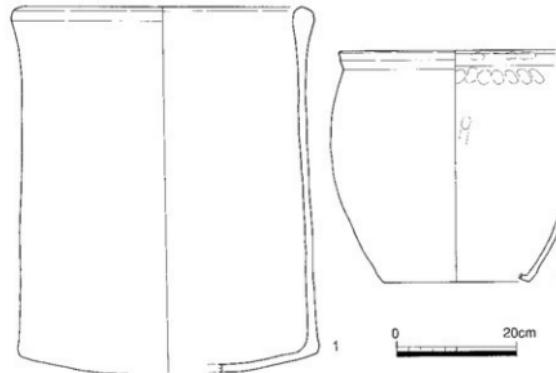
第287図 SK 1030・1031・1032平面・断面図

### SK 1030・1031・1032 (第287図)

B区西半、第1面で確認した埋甕である。SK 1030~1032の3基が確認された。検出した標高は、1.19~1.34m前後を測る。SX1005により壊され、SX2008の埋土と同様の土壁が混じる整地上に埋設されていた。周辺部は検出時に木根や植物根が多く認められた。所属時期は、整地の状況やSX1005に先行することから、19世紀前葉~明治時代の所産と考えられる。

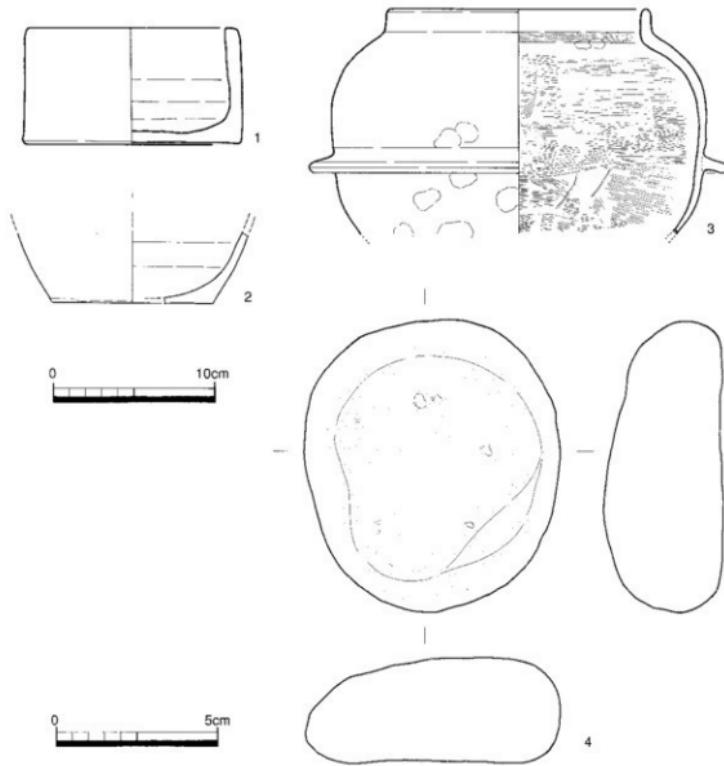
### SK 1030・1031・1032出土遺物 (第288・289図)

1はSK 1032の埋甕で、土師質製である。2はSK 1030の埋甕で、陶質製である。共に底部が欠損した状態で出土した。3・6は、SK 1030甕内から出土した。3は備前鉢である。6は石英質の扁平な石で、側面部に敲打痕が認められる。4・5は、検出時の遺物である。2は大谷焼の底部。3は上師質の釜である。



測定名	本文 (番号)	遺物 種別	基種	備地	法量(cm)	層土	色調1(底土)	色調2(底草、内外面質)	色調3(底草、上縁)	調整	製作年代	備考
SK1032	1	土師質 甕			口:46.0 高:160.0	石器・ 瓦・ 陶器		内井:にごい埋7.5V64		内井:ナゲ 底外縁:ハナメ		
SK1030	2	陶 甕			口:38.4 高:138.0 底:38.0	石英 岩		外井:にごい埋5V764 内井上半:古窯2.0V64 下半:古窯5V965		外井:内井下半:ナゲ 内井上半:指輪注意		

第288図 SK 1030・1032出土遺物実測図・観察表



遺物名 番号	形状 寸法	構造	産地	測定値(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(胎内、内部色調)	色調3(表層、上部)	測定	製作年代	備考
SK1030 1 瓢 鉢	縁有 幅約		C111.1 底:17.3 高:12.3	無	赤7.5R4.6	赤7.5R4.6			内面:コクロナデ		
日次西半 瓦	2 瓢 甕	大甕	底:9.66	無	にせいあ柄2.5YR4.3	外面:梅瓣形2.5YR2.3					
日次西半 瓦	3 土質 瓦	筒瓦	口:15.6	磚直	褐灰10YR5/1	褐灰10YR5/1			内・外・口縁部:コクロナデ 外面:コクロナデ・粗糾き入 内面:ハグメ		復付量
SK1030 4 石 火打石											

第289図 SK 1030・1031・1032出土遺物実測図・観察表

### SK 1009 (第268・270図)

A区東端部、第1面で確認した遺構である。但し、大半を第2面SK2020として掘削し、遺物が取り上げられている。検出した標高は1.40～1.47m前後、底面の標高は1m前後(SK2020)を測る。検出長は東西方向で約2.3m、南北方向で約0.9mを測る。平面は長方形で、断面は船底形である。所属時期は、出土遺物より18世紀後半～19世紀前葉に考えられる。

### SK 1009出土遺物 (第290図)

1は肥前系陶器碗。陶胎染付である。2は肥前系磁器碗である。3は備前灯明皿である。4は陶器茶入で、大谷焼と考えられる。

### SK 1002 (第268図)

A区南部、第1面で確認した遺構である。検出した標高は1.48m前後、底面の標高は1.3m前後を測る。検出長は東西方向で約0.8m、南北方向で約0.56mを測る。平面は隅丸方形である。所属時期は、検出面より19世紀前葉以降と考えられる。

### SK 1002出土遺物 (第290図)

5・6は、土師質土器皿。橙色系の胎上で器高は低い。底部は回転糸切りである。

### SP 1013 (第268図)

A区南部、第1面で確認したピットである。検出した標高は1.43m前後、底面の標高は1.30m前後を測る。SA1001P-10を壊す。径約0.4mの円形として検出した。所属時期は、出土遺物から明治時代と考えられる。

### SP 1013出土遺物 (第290図)

7は京・信楽系陶器碗である。8は、産地不明の磁器碗。銅板転写による装飾が認められる。9は肥前系磁器碗。うがい茶碗である。

### SP 1023 (第268図)

A区南部、第1面で確認したピットである。検出した標高は1.40m前後、底面の標高は1.32m前後を測る。検出長は東西方向で約0.3m、南北方向で約0.4mを測る。平面は隅丸方形である。

### SP 1023出土遺物 (第290図)

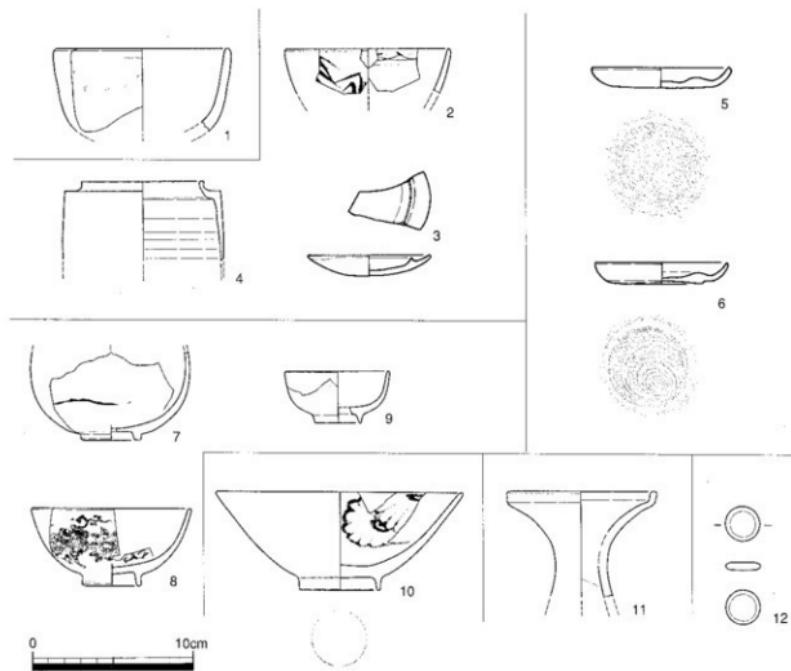
10は肥前系磁器小壺である。

### SX 1001・1002 (第268図)

C区南部、第1面で確認した遺構である。検出した標高は1.31～1.51m、底面の標高は1.40m前後を測る。検出長は、SX1001が東西に約5.5m、南北に約4.1m、SX1002が東西に約1.5m、南北に約4.5mを測る。平面は不整形で、SD1003・SA1001を壊す。両遺構とも瓦片を含み固くしまった埴上で、地固めを行う整地痕の可能性が考えられる。所属時期は、遺構の前後関係により、明治時代以降(県庁建設時)の所産と考えられる。

### SX 1001・1002出土遺物 (第290図)

11は肥前系磁器仏花瓶である。12は基石である。



遺物名	本文 番号	遺物 種類	表面	法寸 (cm)	鉢土 色調	色調2 (鉢土, 内外色調)	色調3 (表面, 上縁)	類型	製作年代	備考
SK1009	1	輪郭墻 片	鉢底	□:10.55	黒 灰白10YR6/1	内外:透明白 表面:暗青オリーブ灰			大都御所	
SK2020	2	周 輪郭墻	鉢底 鉢前	□:18.00	黒 灰白色	内外:透明白	表面:暗青色	外縁:竹條 内縁:波方縁		
SK2020	3	周 打削痕	鉢前	□:7.5 高:1.2	黒	外縁:波紋10R4/4 内縁:複合形2.5VR3/4		内外:竹條 外縁:ケメリ		
SK2020	4	周 切入	大柄	□:7.55	黒 赤褐10R4/3	内外:深褐色SYR2/1				
SK1002	5	土器質 片		□:4.4 厚:1.4	暗真 黒SYR7/6	暗SYR7/6		内外:ロクロナデ 外縁:波輪毛切り	18c後半	
SK1002	6	土器質 片		□:8.1 厚:1.2 高:5.0	赤色 黒SYR7/6	暗SYR7/6		内外:ロクロナデ 外縁:波輪毛切り	内外に有輪脚付負	
SP1013	7	周 縫	身・縫	高:3.55	黒 灰白色	内外:灰オリーブSY5/5	上縁:赤・縫			
SP1013	8	縫 鉢	鉢底 鉢前	□:10.25 高:4.25 厚:1.40	黒 灰白色	内外:透明白	表面:青		網状紋写, 黑色内にアルミナ付着	
SP1023	9	縫 小柄	鉢前	□:3.30 高:2.50 厚:0.70	黒 灰白色	内外:透明白	表面:暗青色			
SP1013	10	縫 鉢	鉢前	□:15.00 高:4.65 厚:1.75	黒 灰白色	内外:透明白	表面:暗青色		内外に被呂面	
SK1001	11	縫 伝花程	鉢前	□:3.20	黒 灰白色	内外:透明白			内縁に被呂波	
SK1002	12	縫 基石		全高:2.26 厚:3.45	黒					

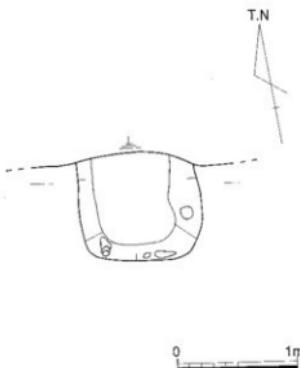
第290図 SK1009・2020・1002・SP1013・1023・SX1001・1002出土遺物実測図・観察表

### SK 1006 (第291図)

A区北部、第1面で確認した遺構である。検出標高は1.43m前後、底面の標高は1.03m前後を測る。検出長は東西方向で約1.0m、南北方向で約0.9mを測る。北部を搅乱により壊される。平面は隅丸方形である。所属時期は、出土遺物より幕末～明治時代と考えられる。

### SK 1006出土遺物 (第295図)

3は陶器鉢である。見込みに砂目が認められる。4は信楽系陶器甕口縁部。5は五徳である。6は土師質土器鉢。7は焼塙壺である。板作りのものである。



### SK 1024 (第8図)

A区北部、第1面で確認した遺構である。検出した標高は1.14～1.28m、底面の標高は1.10m前後を測る。検出長は東西方向で約1.1m、南北方向で約1.7mを測る。北部を搅乱により壊される。平面は梢円形である。所属時期は、出土遺物より幕末～明治時代と考えられる。

### SK 1024出土遺物 (第295図)

1・2は軟質施釉陶器土瓶及び蓋である。赤釉を施すもので、蓋の裏側に「屋島」の刻印が認められ、屋島焼と考えられる。

### SK 1026 (第287図)

B区西部、第1面で確認した遺構である。検出した標高は1.26～1.34m、底面の標高は1.20m前後を測る。検出長は東西方向で約1.0m、南北方向で約0.7mを測る。平面は梢円形である。所属時期は、B区第1面の整地状況から19世紀前葉以降の所産に考えられる。

### SK 1026出土遺物 (第296図)

8は土師質土器甕底部である。

### SP 1041 (第277図)

D区西部、第1面で確認したピットである。検出した標高は1.25m前後、底面の標高は1.05m前後を測る。径約0.3mの円形として検出した。

### SP 1041出土遺物 (第296図)

9は砾石である。

### SD 1002 (第277図)

D区西部、第1面でSB 1001に南面して、確認した溝状の遺構である。検出した標高は1.25～1.34m、底面の標高は1.22m前後を測る。検出長は約5.3m、検出幅は0.3～0.5mを測る。東部は

搅乱により壊される。埋没時期は、SB1001と同様に明治時代と考えられる。

#### SD1002出土遺物（第296図）

10は漳州窯系青花碗である。11は肥前系磁器蓋である。

#### SP1049（第277図）

D区西部、第1面で確認したピットである。検出した標高は1.29m前後、底面の標高は1.18m前後を測る。検出長は東西方向で約0.3m、南北方向で約0.8mを測る。平面は梢円形に検出された。底面に根石が認められる。

#### SP1049出土遺物（第296図）

12は京・信楽系陶器碗である。外面には、大膳家の家紋が藍色で絵付けされる。13は管状の土錘である。

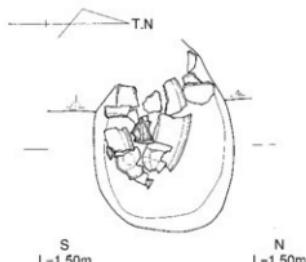
#### SK1017（第292図）

C区中央部、第1面で確認した土坑である。検出した標高は1.37m前後、底面の標高は1.16m前後を測る。検出長は東西方向で約0.5m、南北方向で約0.6mを測るが、東部を搅乱により壊される。平面は円形で、断面は箱形である。所属時期は、出土遺物より明治時代の所産と考えられる。

#### SK1017出土遺物（第297図）

1は肥前系磁器碗である。2は瀬戸・美濃系陶器碗である。3・4は、瀬戸・美濃系磁器碗である。5は京・信楽系陶器蓋で、SK2038の出土品と接合関係を有する。6は軟質施釉陶器で、屋島焼と考えられる。8は土師質の十能である。9・10は、瓦質土器培塿である。

SK1017

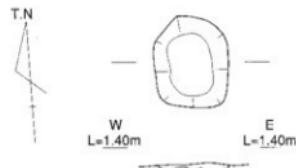


2.5Y5/2暗灰黄色シルト質細砂（炭・貝殻を含む）



第292図 SK1017平面・土層図

SK1018



第293図 SK1018平面・土層図

### SK 1018 (第293図)

D区東端部、第1面で確認した遺構である。検出した標高は1.28m前後、底面の標高は1.07m前後を測る。検出長は東西方向で約0.6m、南北方向で約0.7mを測る。平面は隅丸方形で、断面はU字形である。埋土には瓦片及び貝等の残滓が認められる。所属時期は、出土遺物より幕末～明治時代の所産と考えられる。

### SK 1018出土遺物 (第298図)

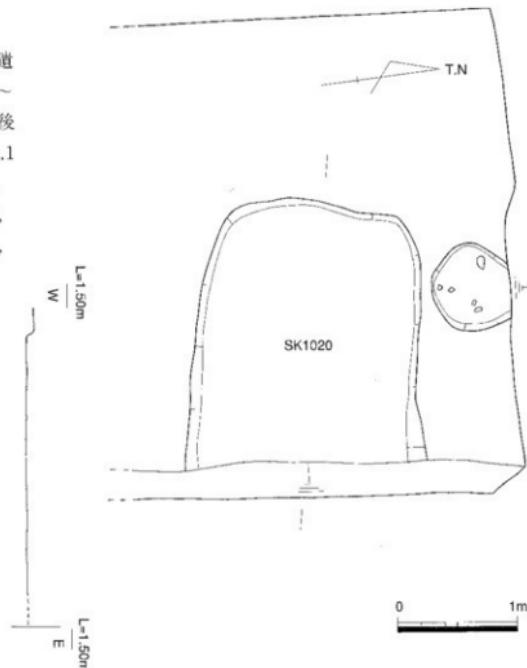
1・2・7は、肥前系磁器である。碗(1)、鉢(2)、瓶(7)がある。3～6は、瀬戸・美濃系磁器である。碗(4)、小壺(5)、皿(6)がある。8は焜炉頬。9は壺形の土師質土器である。

### SK 1020 (第294図)

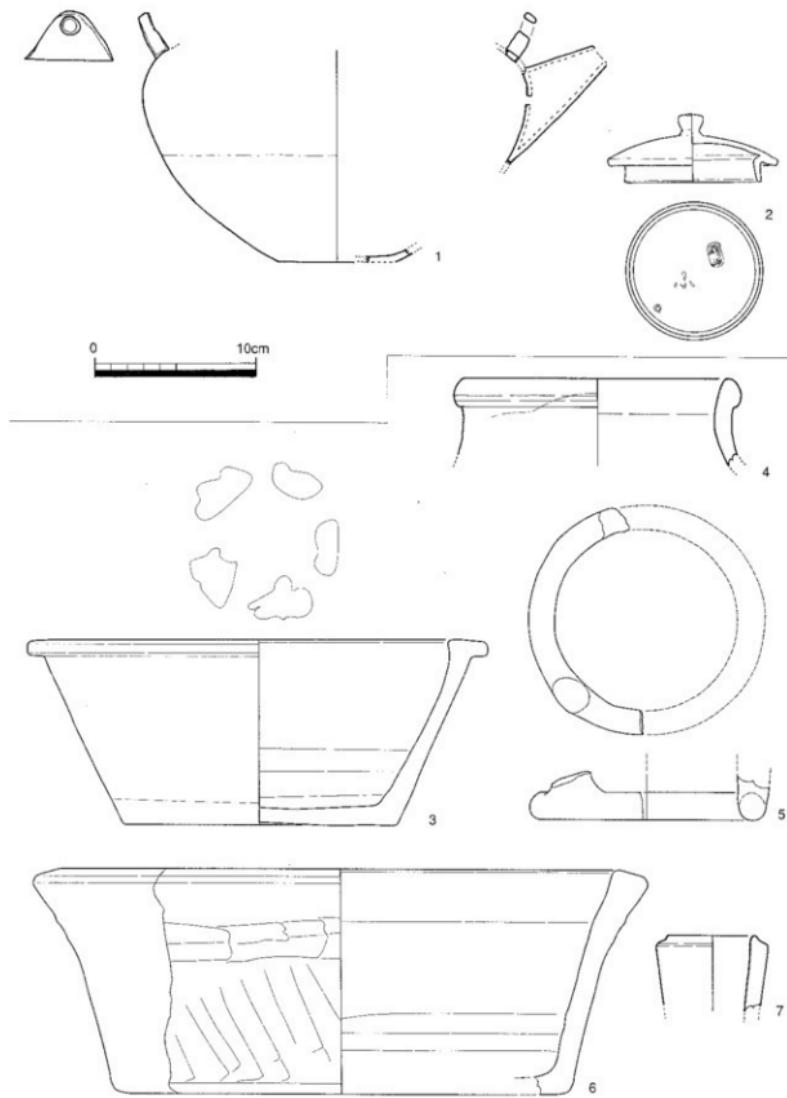
E区北部、第1面で確認した遺構である。検出した標高は1.18～1.28m、底面の標高は1.16m前後を測る。検出長は東西方向で約2.1m、南北方向で約1.8mを測る。平面は長方形として検出したが、東部が調査対象外となっており、全容は不明である。

### SK 1020出土遺物 (第299図)

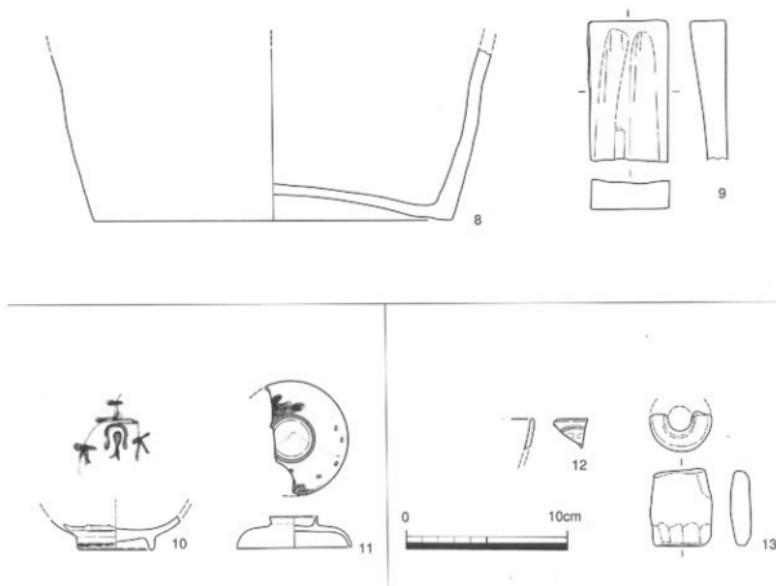
1・2は軒丸瓦である。



第294図 SK 1020平面・断面図

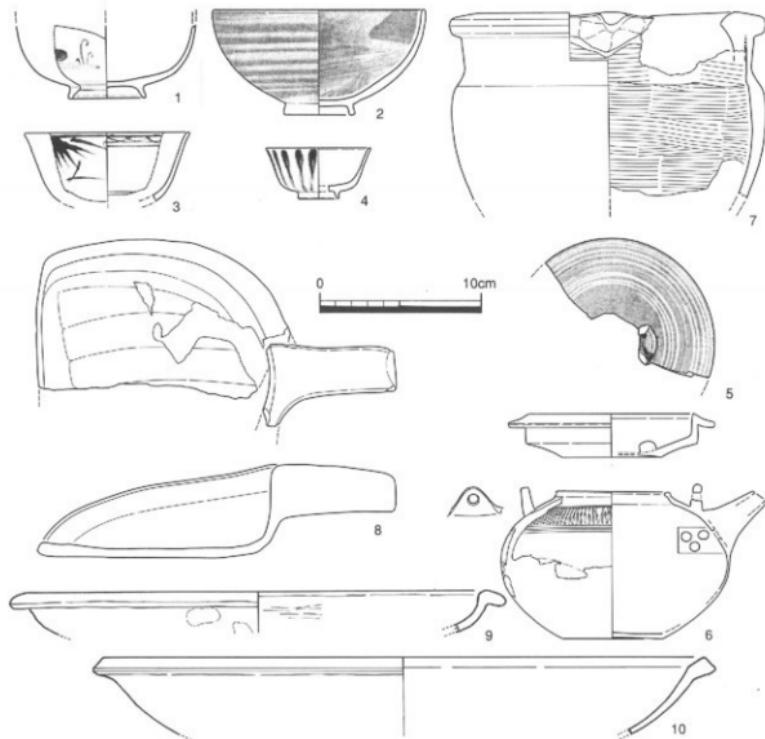


第295図 SK 1024 · 1006出土遺物実測図



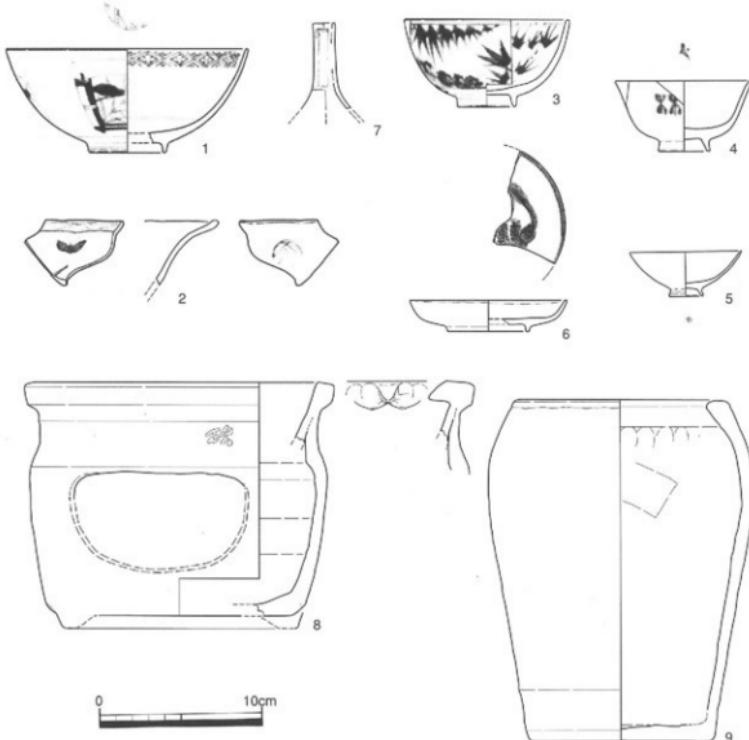
遺物名	器又 番号	測定 標記	縁幅	底地	底径(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(底面、内外色調)	色調3(表面、上粒)	調型	製作年代	備考
SK1024	1	瓶	土厚片	壓扁		板	褐2.5YR6/8	褐赤褐2.5YR6/9		内側:クロナデ		壓扁後 復原後
SK1024	2	瓶	蓋	壓扁	最大径:10.55 高さ:4.28 底径:8.29	板	褐赤褐2.5YR5/6	外面:褐赤褐2.5YR5/8				内窓に「蓋透」の刻印有
SK1006	3	圓	鉢		口:28.0 高さ:11.45 底径:14.8	板	にじい赤褐2.5YR4/5	内外:褐鐵2.5YR5/5				見込みに浮き5ヶ所
SK1006	4	圓	盤口鋸棱	压扁	D:15.8	石板	オリーブ墨Y2/2	褐黃2.5Y6/7				
SK1036	5	土師質	壺			中	にじい墨Y2/4	内外:淡黄2.5Y7/2				
SK1006	6	土師質	鉢		口:134.4 高さ:12.8 底径:26.0	中	褐2.5YR7/8	褐2.5YR7/6	内面:外上部:クロナデ 外下部:指ナデ			
SK1006	7	土師質	燒造口 鋸棱		口:4.8	陶胎	褐2.5YR6/8	褐2.5YR6/8		内面:布目刷	18世紀半	復元
SK1029	8	土師質	燒造口		底:22.03	中	褐2.5YR7/6	褐2.5YR7/6	内面:ナゾ			
SP1041	9	石	砾石									
SD1027	10	圓	復原部		底:4.53	板	灰白色	内外:透切面	底面:泥-褐色			特別調
SD1002	11	瓶	蓋		ワタホキ:3.9 高さ:1.95 底径:7.0	板	灰白色	内外:透明板	底面:切青色			
SP1049	12	瓶	輪形鋸棱	片、芯		板	灰白2.5Y7/1	内外:灰白M8/0	上端:青	外側:小點鋸つ箋		埋入面鏡
SP1049	13	瓶	土師	偏前	全高:4.10	板	灰白2.5YR4/2	灰白2.5YR4/2				

第296図 SK 1024・1006・1026・SP 1041・SD 1002・SP 1049出土遺物実測図・観察表



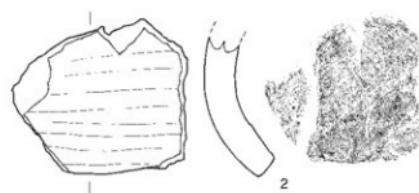
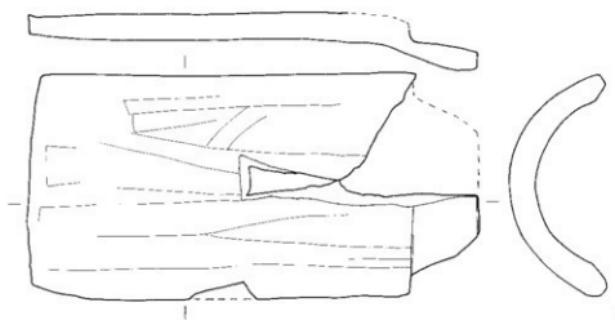
遺物名 番号	形状 寸法	器種	施加	底面(m)	動土	色調1(地土)	色調2(釉面、内面各調)	色調3(底面、上縁)	特徴	製作年代	参考
SK1017 N.9	1 瓢 通	碗	灰被	底:4.65	鐵	灰白色	内外:透明釉	裏面:淡-暗青色			後孫綱
SK1017 N.2	2 壺 瓶	壺・瓶	黑・灰	口:3.30 底:4.65 高:4.03	鐵	深褐色	表面2.SY6.9	底面2.SY7.4			
SK1017 N.9	3 瓢 瓶	瓢・瓶	口:15.05	鐵	灰白色	内外:透明釉	裏面:白-黒	外縁:白-黒	外縁:透明釉		
SK1017 N.4	4 瓢 小杯	碗・小杯	口:2.40 底:1.16 高:2.40	鐵	灰白	内外:透明釉	裏面:淡-暗青色				
SK1017 N.9	5 壺 瓶	壺・瓶	24.8±10.2 25.5±10.8 25.5±12.7	鐵	深褐色	表面2.SY7.1	裏面:オリーブ色SY6.4	上縁:白-青	外縁:透明釉		
SK1017 N.6	6 壺 象頭	壺	口:6.80 底:6.53 高:4.20	鐵	深褐色	表面2.SY7.4	裏面:明褐色SY7.6.6				指印:倒付箋
SK1017 N.6	7 土器質 七輪	口:11.00 底:11.20	中	にかい7.SY9.5	にかい7.SY9.7.2 内面:にかい7.SY9.5.3			内面:ハケヌ	口縁外用内面に温付釉		
SK1017 N.5.9	8 土器質 一輪	壺	高:5.65	中	にかい10.YH6.4	にかい10.YH6.4		内面:ナデ	内面に温付釉		
SK1017 N.6	9 上輪質 楕円	口:28.0	楕円			表面:墨緑7.SY8.3.1 内面:灰褐7.SY7.6.2		内面:ハケヌ	外縁:温付釉 内面:有斑斑状		
SK1017 N.6	10 瓦質 絹織	口:32.4	瓦状			表面:墨緑7.SY8.0					

第297図 SK 1017出土遺物実測図・観察表



遺物名	別文	遺物種別	断面	底形	口径 (cm)	底径 (cm)	土色	表面1 (胎土)	表面2 (胎土、内色)	表面3 (高田、上部)	断面	製作年代	備考
SK1018	1	瓶	瓶	瓶形	□:14.70 臺:6.30 底:4.50	徳 灰白色	内外:透明釉	高底:淡・淡青色				大束灰胎	
SK1018	2	瓶	瓶口端品	瓶形	徳 灰白色	内外:透明釉	高底:淡青色						
SK1018	3	瓶	瓶	瓶形	口:9.90 臺:2.25 底:3.35	徳 灰白色	内外:透明釉	高底:淡青色	内外:墨				
SK1018	4	瓶	瓶	瓶形	口:8.20 臺:4.30 底:3.00	徳 灰白色	内外:透明釉	高底:青色					
SK1018	5	瓶	小瓶	瓶形	口:6.90 臺:2.70 底:2.00	徳 灰白色	内外:透明釉	高底:淡青色					
SK1018	6	瓶	瓶	開口系	口:8.55 臺:1.90 底:4.65	徳 灰白色	内外:透明釉	高底:青、口紅:極濃赤褐色	GYR24				
SK1018	7	瓶	瓶	瓶形	口:3.20	徳 灰白色	内外:透明釉	上部:青					
SK1018	8	土器質	七輪	口:19.0 臺:15.0 底:1.5	徳 灰白色	外壁:泥底Y7.7 内面:に少し焼7.SYR6.4			外蓋:板状ナメ			口部外側・内面に擦付着	
SK1018	9	土器質	火鉢	口:12.0 臺:2.0 底:10.8	徳 灰白色	内面:火口7.SYR6.3 外壁:板状ナメ			内面:板状ナメ、板ナメ				

第298図 SK 1018出土遺物実測図・観察表



0 10cm

遺物名 番号	種別	底面 形状(現存高)	底面 厚さ	側面 現存幅	胎土	色調		調整 内面	外面	施成	備考
						背面	前面				
SX1020 1	丸瓦	27.8	1.6	13.5	砂礫少	灰白N7.0	暗灰N3.0	コリキB コリキE		丸	
SX1020 2	丸瓦	10.6	1.9	9.5	砂礫	灰白2.5Y7.1	灰N4.0	青目	板ナギ	丸	被焼

第299図 SK1020出土遺物実測図・観察表

### C区南西部第3面整地層

C区の南西部、第3面で確認した整地である。検出した標高は約1.00mで、厚さ10cm程の堆積層で遺物を包含する。下位のSE3004・3005・SD3007を被覆し、これらの遺構の上層部と同様の堆积物として認められる。道路状の整地とした水平堆積層の下位に存在し、屋敷内に広がって認められた。前後関係を示す遺構では、上記の遺構より後出し、SK3014、SX3002に先行している。遺物は古相のものも含むが、凡そ16世紀末葉の所産と考えられる。

### C区南西部第3面整地層出土遺物（第300図）

遺物はコンテナに1/4程出土した。中世以来の土師質土器が主体を占める他、備前、瀬戸・美濃系陶器が認められる。1は中国産青磁である。2は瀬戸・美濃系陶器皿である。3は備前窯口縁部である。4～7・9は、土師質土器である。把手付鍋（4）、擂鉢（5）、羽釜（6・7）、鍋脚部（9）がある。8は亀山系瓦質土器鍋である。

### A区第3面整地層

A区、第3面で確認した整地である。当初は、濁らず遺物を包含しないため近世遺構の地山層と考えていた。しかし下位にSX4001、SE3001が認められ、SX3002の一部を被覆する大規模な整地層であることが判明した。確認した標高は約1.00mである。厚さ40cm程で、北に向かい緩やかに流れ込む。おそらく大きく窪むSX4001～SX3002の東部までを、埋め立て造成する目的に用したものと考えられる。当整地層の時期は、SX4001及びSX3004・3005との前後関係により17世紀中葉と考えられる。これらの状況や絵図との関連を考慮すると、松平藩政になって（1642年）、生駒時代の屋敷地が統合される際の所産と推定される。

### A区第3面整地層出土遺物（第301図）

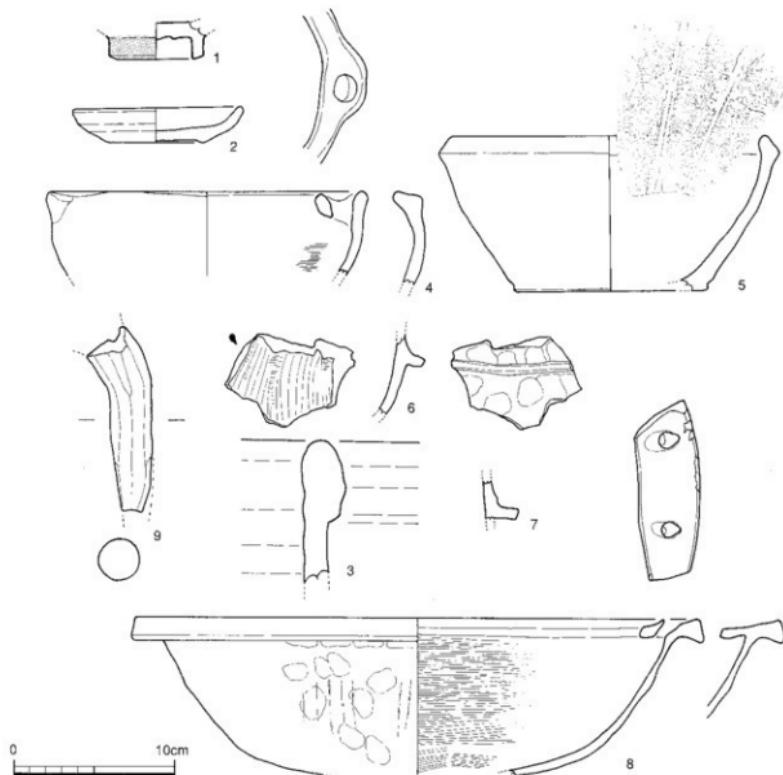
若干量であるが遺物の出土が認められた。1は肥前系陶器碗である。2は肥前系磁器皿。見込に虫（繭？）を描く。3・4は、備前擂鉢である。

### 道路整地

A・C・E・F区で認められた道路と考えられる整地である。上位では細く締まった砂及びシルト質土の互層が築地状にみられ、その下位はやや厚い堆積となるシルト質層が水平に堆積する。下位の堆積については、屋敷内の整地と比べて整った土質の堆積層が水平状に認められるもので、直接、道路と判断できるような特徴的な堆積層ではなく人為的な整地によるものかは明瞭ではない。

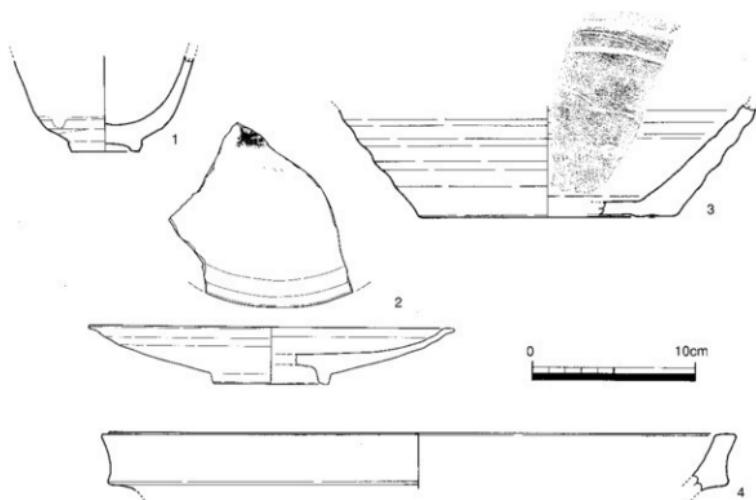
### 道路整地出土遺物（第302・303図）

調査の工程上、大半を機械により掘削したため遺物の取り上げは的確には行っていないが、1～3が第3面までのもので、4～13が、第1面までの機械掘削時の出土遺物である。1は肥前系陶器皿である。2は肥前系陶器火入である。3は肥前系磁器青磁皿である。4～9は肥前系磁器青磁皿である。5は、外間に「□に□小町」と赤色絵されており、紅猪口に考えられる。8は大形の壺である。10は瀬戸・美濃系磁器皿。木型打込みにより成形される。11は京・信楽系陶器端反碗である。12は產地不明陶器蓋。13は焼塙壺蓋である。



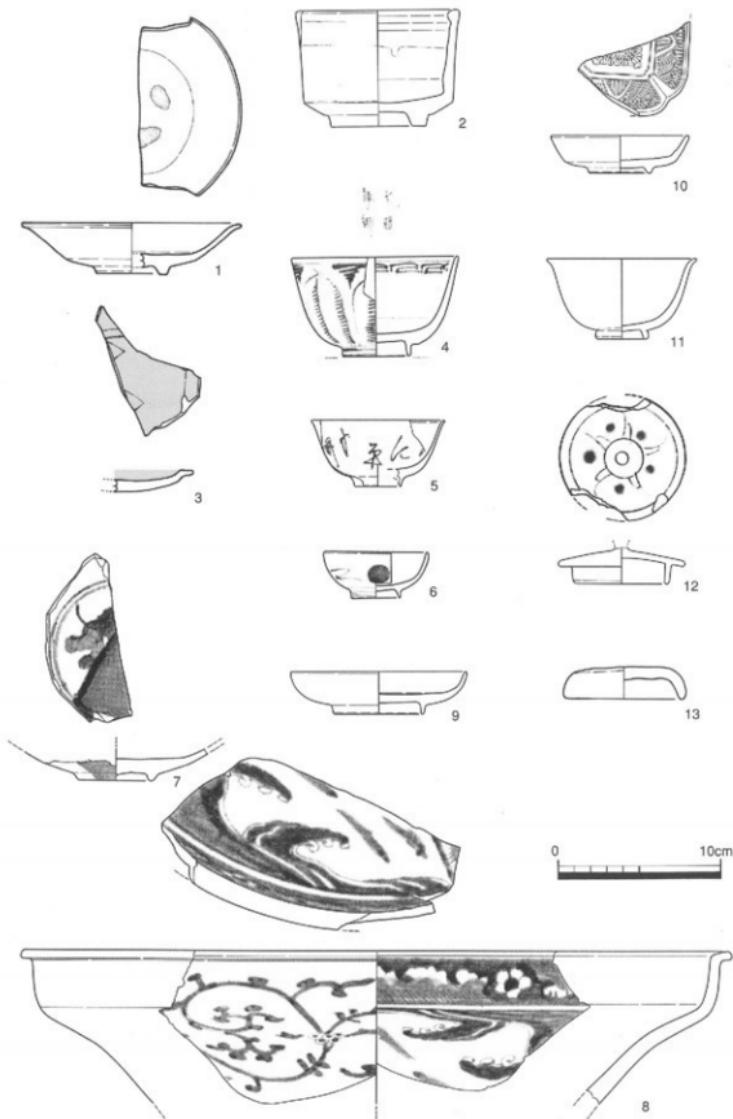
遺物名	形式	性質	器種	層位	法面 (cm)	胎土	色面1 (胎土)	色面2 (胎面、内外色面)	色面3 (内面、上蓋)	特徴	製作年代	備考
南西周灰陶 色シルト 整地	1. 瓢	瓶底部	中國	底:5.8	縦	灰白SYR7/0	オリーブ灰10YR6/2			内面:ケズリ		縫合部?
南西周灰陶 色シルト 整地	2. 瓢	盤	縦・横・直	底:12.1 高:1.8	縦	灰白SYR6/1	淡黄7.5Y7/3				大腹 3枚接	輪削ぎ
南西周灰陶 色シルト 整地	3. 瓢	腹口縁部	縦前		縦		内面:墨褐2.5YR3/1 外面:墨褐2.5YR3/2					
南西周灰陶 色整地	4. 土師質	外耳付罐		口:9.3	軽粘少	暗赤灰2.5YR7/2	暗赤灰2.5YR7/2			外面白縁部:クロナデ 内面:ハケメ、板ナデ		縫合部
南西周灰陶 色シルト 整地	5. 土師質	壺詳		口:19.1 高:19.5 底:12.6	縦	灰白10YR6/2	灰白10YR6/2			外面白縁部:クロナデ 内面:ハケメ		
南西周灰陶 色シルト 整地	6. 土師質	壺面			海砂粘		外面:浅黄褐10YR6/4	外側:浅黄褐10YR6/3		外面:西洋8え 内面:ハケメ		
南西周灰陶 色シルト 整地	7. 土師質	羽池			海砂粘	浅黄褐10YR6/4	浅黄褐10YR6/4			外面白ナデ、ハケメ 内面:ナデ		縫合部
南西周灰陶 色シルト 整地	8. 甕質	一格		口:34.8	海砂粘		内面:墨SY2/1					
南西周灰陶 色整地	9. 土師質	羽池			海砂粘	に少い黄褐10YR6/5	に少い黄褐10YR6/5					

第300図 C区南西部第3面整地層出土遺物実測図・観察表



遺物名 番号	組文 種類	器種	産地	法量(cm)	新土	色調1(新土)	色調2(鉢底、内外色調)	色調3(鉢底、上縁)	調整	製作年代	調査
にかい青 色鉢	1	周	筒	底前: 直:4.1 底:3.0 底:7.00	新	灰N5.0	灰白7.5YR6.9 灰オーラープ7.5Y4.3			大徳2期	
にかい青 色鉢	2	周	直	口:29.40 底:20.00 底:7.00	機	灰白色	内外:透明釉	内面:明青色	内面:昆虫	大徳6-2期	初期伊万里
にかい青 色鉢	3	周	縦鉢	底:15.8	機	偏2YR6.5	偏2YR6.6		外面:ロクロナデ		内外面に被納痕
にかい青 色鉢	4	周	口縦鉢	備前 口:37.5	機		内外:偏暗赤褐2.5YR2.2				

第301図 A区第3面整地層出土遺物実測図・録表



第302図 道路整地出土遺物実測図

遺物名	学文 書番号	遺物 種別	基準	厚さ	法量(m)	胎土	色調1(胎土)	色調2(胎器・内外色調)	色調3(底面,上絵)	調整	製作年代	備考
高台整地	1	陶 盆	鉢形	口:13.2 底:12.7 高:4.3	板	灰白N7/0	オリーブ灰10YR2		高台蓋付・多切り底		大様Ⅱ期	見込みと高台に砂目2 +所
道路整地	2	陶 盆	鉢形	口:9.55 底:7.15 高:3.80	板	青灰2.5YR6/1	内外下:土:桔子紅2.5YR3/3 内:上:土:オリーブ灰 5.5YR5/3				大様Ⅱ期	
道路整地	3	陶 盆	鉢形		板	灰白N7/0	明暦元5G7/1				大様Ⅱ期	青磁 特別
道路整地	4	陶 瓶	瓶形	底:4.60	板	灰白色	内外:透明釉	底:淡・暗青色	内面:「大明年制」			
道路整地	5	陶 瓶	瓶形	底:4.10 高:4.05 底:2.80	板	灰白色	内外:透明釉	上字:地緋7.5YR3/3				
道路整地	6	陶 小杯	鉢形	口:6.30 底:5.95 高:3.00	板	灰白色	内外:透明釉	底:暗青色				
道路整地	7	陶 盆	鉢形	底:4.40	板	灰白N7/0	内外:灰10YR6/1	高台吉兆2.5YH2/4			大様Ⅱ期	
道路整地	8	陶 壺口鉢皿	鉢形	口:43.10	板	灰白色	内外:透明釉	底:淡・暗青色	外底:墨			
道路整地	9	陶 盆	鉢形	口:10.40 底:10.25 高:4.40	板	灰白色	内外:透明釉				大様Ⅱ期	
道路整地	10	陶 盆	鉢形	口:8.55 底:8.30 高:3.70	板	灰白色	内外:透明釉				型押底部	
道路整地	11	陶 小杯	杯・碗	口:5.00 底:4.90 高:1.00	板	灰白2.5Y7/1	内外:灰白2.5Y7/2					
道路整地	12	陶 土瓶底		底:大径:7.75 底:5.60	板	灰青2.5Y7/2	外面:灰白5Y8/1	上絵:絵・オリーブ灰5Y3/2				
道路整地	13	土師質 備前窯		口:7.1 底:2.0	陶器形	模2.5YR6/8	模2.5YR6/8					被撲痕有

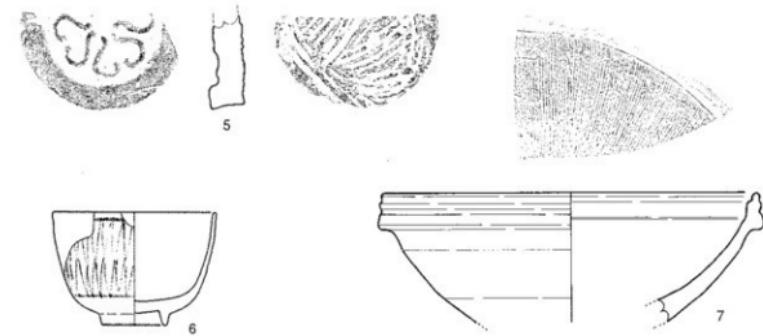
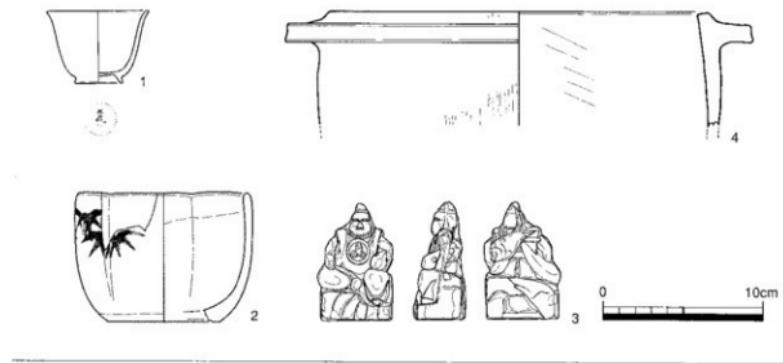
第303図 道路整地出土遺物実測図・観察表

### 機械掘削及び人力掘削中出土遺物（第304～310図）

1は磁器小壺である。高台内に「道八」の銘が認められる。讚窯は藩の御庭焼として、藩主が京焼の名工仁阿弥道八を招き東讃三本松で開窯したと伝えられている。道八焼と呼ばれる讚窯との関連が推察される遺物である。2は京・信楽系陶器火入である。3は恵比寿さん。4は土師器羽釜である。平安時代の所産で、F区より出土している。5は、大膳家の家紋瓦である。A区、第2面で出土した。6は肥前系磁器碗である。7は堺・明石産の擂鉢である。

8～20（18を除く）は、C区第1面から焼土上面までの掘削時の出土遺物である。8～17は、肥前系磁器である。碗（8～12）、小壺（13・14）、皿（15～17）がある。16は、大皿で見込に鹿を描く。高台内には、一重方形枠内に「福」の銘款と4箇所のハリ支えの痕跡が認められる。19は土師質陶器皿である。20は碁石である。18は焼土掘り下げ中に出土した肥前系陶器皿である。口縁部は溝縁で、見込に砂目が認められる。

21～37は、第2面までの掘削中に出土した遺物である。21は、肥前系陶器碗である。22は肥前系陶器火入れである。23は肥前系磁器碗である。内外に瑠璃釉を施す。器面には、上絵の痕跡が残る。24は肥前系磁器碗。青磁で高台内無釉である。25は備前大甕口縁部である。26は產地不明陶器向付である。器面は赤褐色に焼き締まり、外面に陰刻し灰白色の釉を掛ける。口縁端部には刻目を施す。27は肥前系磁器皿である。見込と疊付に砂目が認められる。28は景德鎮窯系青花皿底部である。29は肥前系陶器皿である。銅綠釉を施す。

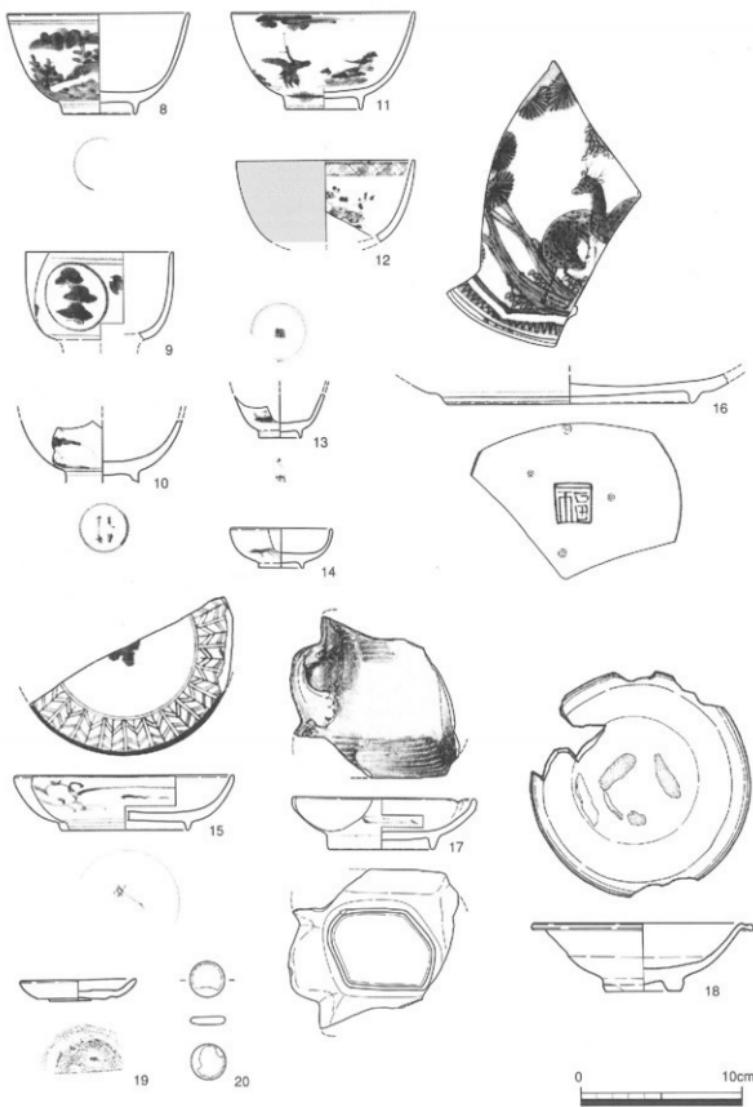


遺物名 番号	種文 種別	品種	産地	底量(cm)	底土	色調1(底土)	色調2(釉裏, 内外色調)	色調3(表面, 上絵)	調整	製作年代	備考
第1回 1 磁 小杯				口:5.80 底:3.45 高:2.85	青	灰白色	内:透明釉	黄褐:淡青色		19世	複葉制品
第1回 2 磁 火入				口:16.20 底:7.85 高:7.00	青	透青2.5Y7/3	内上:オオリーブ黄5Y6/3 内下:オリーブ黄5Y4/2				密作り
第1回 3 土師質 人形				青	にせい模7.5YR7/3	内外:にせい模7.5YR7/3					前後型合わせ キラコ付蓋
F区 第1回 4 土師質 沈面				底:22.4 高:14.45 厚:13.00	赤色粉 多	にせい模10YR7/2 にせい模10YR7/2			外面:ナデ, ハケメ 内面:板ナデ		
第2回 6 磁 瓶	肥前			口:18.00 底:14.90 高:13.00	青	灰白色	内:透明釉	黄褐:地青色		大正廿年	各台内にアルミミナ粉付着
第2回 7 磁 備納	標・ 明石			口:25.0	青		外面:にせい模2.5YR4/4 内面:赤褐10R4/2	内-外口縁部:ロクロナデ 外面:ナデ			

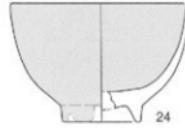
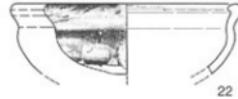
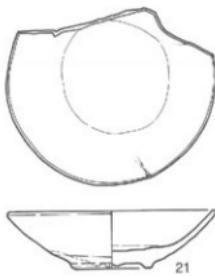
遺物名 番号	種文 種別	底量(cm)	底土	色調	調整	底成	備考
番号	種別	底量(底内径) 底量(底外径) 底量	底土	底面 表面	内面	外周	
第2回 6 密底瓦		10.5 22	—	砂礫 灰60	灰角10Y7/1		良 中盤開つ無

第304図 機械掘削・人力掘削中出土遺物実測図・観察表（その1）



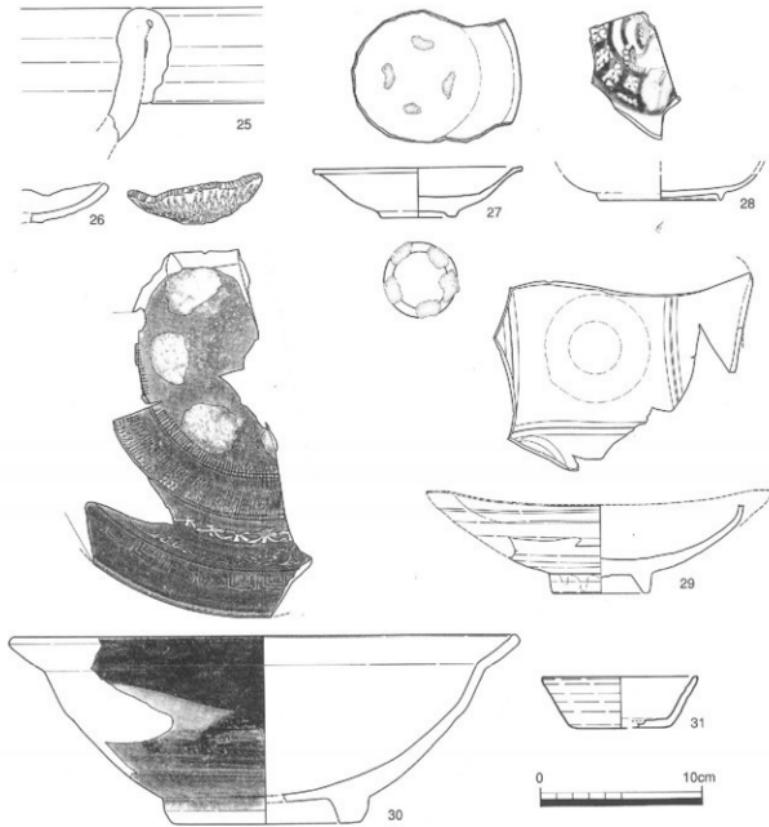
第305図 機械掘削・人力掘削中出土遺物実測図（その2）

遺物名	文政 備考	種類	縫合	深さ	底径 (cm)	地土	色調 1 (地土)	色調 2 (縫合、内外色)	色調 3 (底面、上底)	調整	製作年代	備考
第1回以 下～第2回 縫合	8 磁	瓶	更汎	□:11.00 △:9.15 高:4.40	堆	灰白色	内外:透明釉	表層:青青色		大嘗玉期		
第1回以 下～第3回 縫合	9 磁	瓶	絞口	□:9.00	堆	灰白色	内外:透明釉	表層:青青色	外底:白	大嘗玉期		
第1回以 下～第4回 縫合	10 磁	磁器部	絞口		堆	灰白色	内外:透明釉	表層:青青色			底面に絞沒有	
第1回以 下～第5回 縫合	11 磁	瓶	透前	□:11.10 △:9.50 高:7.50	堆	灰白色		表層:青青色	外底:白			
第1回以 下～第5回 縫合	12 磁	瓶	透前	□:10.80	堆	灰白色	外底:明オーリーブ灰2.GY7 △:11.00 内底:透明釉	表層:青・緑青色 △:11.00 SVB64	内底:透明厚 墨水	大嘗玉期	青磁	
第1回以 下～第5回 縫合	13 磁	小叩着付 瓶	透前	□:12.00	堆	灰白色	内外:透明釉	表層:青青色			底面内に絞缺	
第1回以 下～第5回 縫合	14 磁	小叩	絞口	□:11.10 △:10.50 高:7.50	堆	灰白色	内外:透明釉	表層:青青色	外底:白	大嘗玉期		
第1回以 下～第5回 縫合	15 磁	瓶	透前	□:11.00 △:10.50 高:7.80	堆	灰白色	表層:青・緑青色 △:11.00 SVR71	内底:五分赤		18.0米～ 19.0秒	小伝東洋行	
第1回以 下～第5回 縫合	16 磁	直口瓶	透前	□:15.00	堆	灰白色	内外:透明釉	表層:青青色	内底:青・緑	大嘗玉期	底面に絞有 ハリ丸え	
第1回以 下～第5回 縫合	17 磁	变形皿	更汎	□:11.15 △:12.00 高:8.00	堆	灰白色	内外:透明釉	表層:青・緑青色		大嘗玉期	余切り継工	
C区地土 縫合	18 磁	皿	更汎	□:13.4 △:14.5 高:4.8	堆	透黄緑10YR8/3	△:13.4 △:14.5 高:4.8	△:13.4 △:14.5 高:4.8	外底:ロクロナジ 外底・外腹下部:カズリ	大嘗玉期	見込み移行 3ヶ月と差異 度	
第1回以 下～第5回 縫合	19 土師質 皿	中	△:12.7 △:13 △:13.4 △:13.4	中	△:12.7 △:13 △:13.4 △:13.4	透黄緑10YR7/4	△:12.7 △:13 △:13.4 △:13.4	△:12.7 △:13 △:13.4 △:13.4	△:12.7 △:13 △:13.4 △:13.4	△:12.7 △:13 △:13.4 △:13.4	18.0秒半 ～	
第1回以 下～第5回 縫合	20 石	基石	全:12.20 底:10.5									
第2回	21 磁	皿	透前	□:11.00 △:13.6 高:15.1	堆	透黄緑7.5YR8/6	底:△:7.5YR7/1		外腹下部:ロクロナジ 外底・外腹下部:カズリ	大嘗玉期	見込み-常台に砂利 3ヶ月 待	
第2回	22 磁	鉢口絞付	透前	□:14.20	堆	堆市10YR3/4	外底:△:10YR8/2 内底:透明釉	△:10YR8/2 内底:透明釉			大嘗玉期	2形
第2回	23 磁	碗	透前	□:19.00 △:19.50 高:14.90	堆	灰白色	外底:△:10YR8/2 内底:透明釉	上底:鏡面のみ				
第2回	24 磁	碗	透前	□:11.00 △:11.35 高:14.80	堆	灰白色	内外:明オーリーブ灰2.5 GY7/1			1940～ 50年代	高台内物箱、青磁	



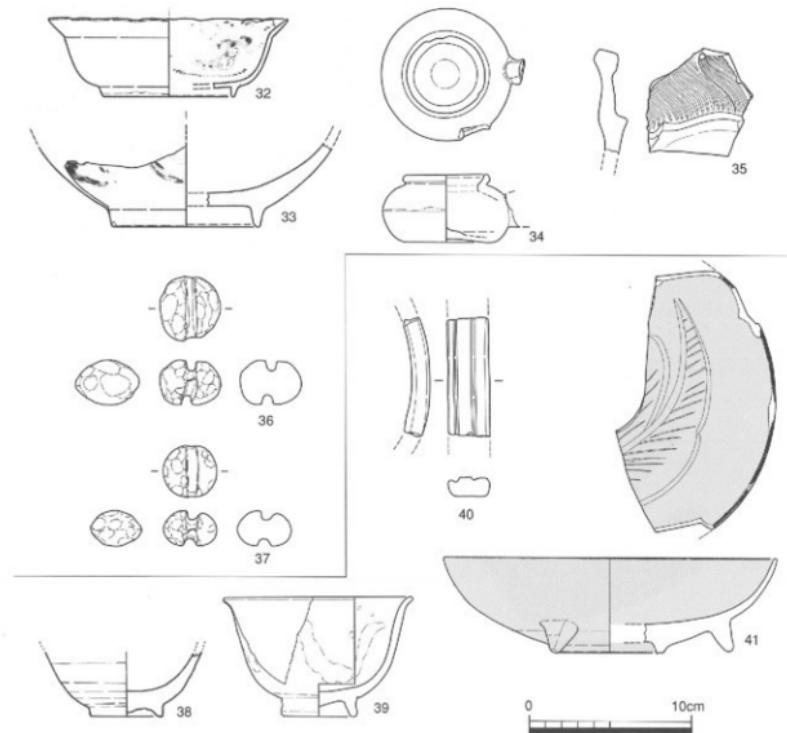
0 10cm

第306図 機械掘削・人力掘削中出土遺物実測図・観察表（その3）



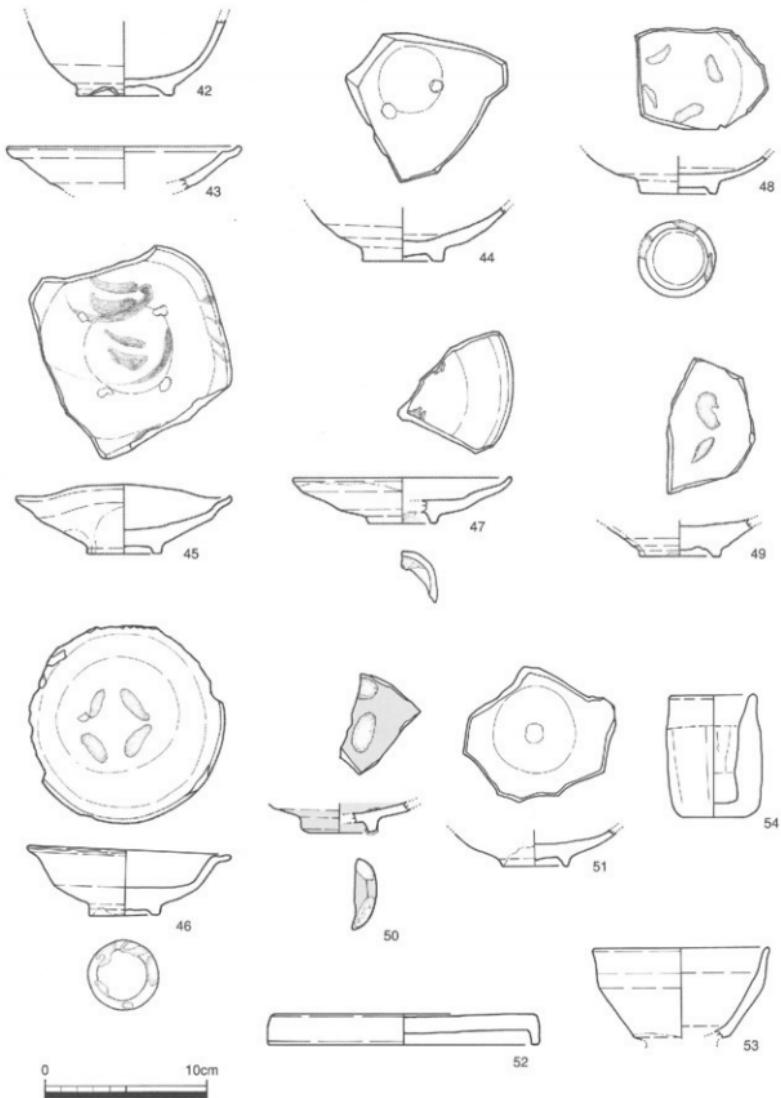
遺構名 参考 番号	形文 参考 番号	遺物 名	形状	高さ(cm)	墻土	色調1(地土)	色調2(鉢底、内外色調)	色調3(内底、上縁)	測量	製作年代	備考
第2回 25	周	楕円形 壺	壺		粘土	赤褐色19R4/4	外壁:朱褐色29YR3/9 内底:杏褐色10R4/4				
第2回 26	周	向付			粘土	灰6/6/1	外側:灰7/7SYR1 内底:浅褐色15H4/4	黄褐色:熟オリーブ灰 2.5GY9/1			
第2回 27	周	壺	壺	口:15.6 底:13.5 高:24.5	粘土	灰6/5Y7/1	黄褐色:5Y7/1			大標Ⅰ期	見込みと高台裏村に特有 な変形器
第2回 28	周	盤	盤	直径:27.40	粘土	灰白色	内底:淡灰褐色	品褐色:暗褐色			青釉器 盤付に點粒付帯
2回6枚 29	周	壺	壺	底:16.75	粘土	灰白10YR8/1	内底:淡褐色 粘灰:10Y5/1		内底:ヘラ巻り 絞の井筒器	大標Ⅱ期	前の貝地器と脚部付帯、 窓台内側用
2回 30	周	壺	壺	口:13.1 底:11.45 高:11.7	粘土	灰褐色10R4/4	内底:灰褐色10YR4/1 粘灰:10Y5/2			大標Ⅲ期	見込みに3ヶ所の砂目
2回 31	土器質 46			L:19.4 W:11.1 H:6.4	赤色粘土	赤い壺7.SYR7/4	赤い壺7.SYR7/4	内底:ロクナテ 外底:四輪弁型		内底に變形器	

第307図 機械掘削・人力掘削中出土遺物実測図・観察表（その4）



遺構名 番号	形式 種別	器種	形体	測量 径直(cm)	底土	色鉛1(壁土)	色鉛2(裏面、外表面)	色鉛3(底面、上底)	調査	製作年代	参考
第2段 32 盆	小鉢			口:14.70 底:14.76 深:6.00	泥	灰白色	内面:乳白色	上底:白			結合面
第2段 33 盆	盛鉢			径:19.00	泥	灰白色	内面:滑沢	色鉛3-1-1			結合内にアルミ土粉付
第2段 34 壺	角壺?			口:15.00 底:14.20 高:6.20	泥	灰白NZ1	内面:結合面10R3/3		底部:四脚あてり		
第2段 35 盆	碟片			泥	灰白SYB1	内面:結合面2SY7/1					
第2段 36 土師質 上縁				全長:3.80	泥	にぶい壺2SYR2/3					
第2段 37 土師質 土縁				全長:3.30	泥	にぶい壺2SYR2/3					
第2段 38 壺 和道器	和道器		壺	直:14.4	泥	赤褐色10R3/6	底白NZ1/0			大焼止用	
第3段 39 壺 瓶	瓶		壺	口:11.30 底:10.95 高:4.30	泥	灰白2.5YR7/2	内面:結合面2SYR2/6	底面:結合2SYR2/1			天目燒
第2段 40 盆 把手			盆	泥	灰SY5/1	内面:10R3/3	口:灰:10R3/5				
80302 41 盆 盆	把手		壺	口:20.0 底:17.6 高:7.6	泥	灰白NB-1	内面:結合面10GY7/1	口:灰:海苔10R3/5	内面:芭蕉文	大焼日用	瓦腹蓋面、三足有 結合内に砂粒付裏

第308図 機械掘削・人力掘削中出土遺物実測図・観察表（その5）



第309図 機械掘削・人力掘削中出土遺物実測図（その6）

通標名	国文 書号	遺物 種別	器種	産地	法華 (cm)	胎土	色絵1 (胎土)	色絵2 (胎土、内外色絵)	色絵3 (表面、上絵)	調査	製作年代	備考
第3回 42	陶	陶器部	肥前	高瀬	底:6.0	繩	灰白10YR8/2	灰白2.5Y8/1				
トレンチ 43	陶	直口縁鉢	田原	口:14.2	繩	にせい:7.5YR7/3	灰白2.5Y7/1		外面下半:ケズリ	大懶1・2期	施熱痕迹	
第3回 44	陶	直底鉢	肥前	底:5.0	繩	灰白2.5Y8/1	灰白SY8/1			大懶1・2期	底込みに胎土2ヶ所	
第3回 45	陶	円付	肥前	口:13.3 底:4.6	繩	地2.5YR6/6	灰白7.5YR5/2	鉄鉢:黒褐SYR3/1		大懶1・2期	底込みに胎土目	
トレンチ 46	陶	盆	肥前	口:12.5 底:4.4 高:4.2	繩	灰白2.5Y8/2	灰白2.5Y7/2			大懶1・2期	肩込みに斜目4ヶ所	
第3回 47	陶	皿	肥前	口:13.2 底:4.0	繩	SOH4/0	灰2.5Y8/1			大懶1・2期	肩込みと臺台内側に斜目	
第3回 48	陶	直底鉢	肥前	底:4.8	繩	灰白10YR8/2	灰青2.5Y8/4		外底:ケズリ	大懶1・2期	肩込み・高台に斜目4ヶ所	
第3回 49	陶	直底鉢	肥前	底:5.0	繩	灰白NT0~にせい:9 7.5YR6/3	明オーリーブ2.5Y7/1		外底:ケズリ 外面下半:ロクロナデ	大懶1・2期	肩込みに斜目2ヶ所と 落差痕	
トレンチ 50	陶	直底鉢	透:4.6	繩	灰白N8/0	明緑灰7.5Y7/1					青緑、黒込み・高台に斜 目2ヶ所	
第3回 51	陶	直底鉢	肥前	底:4.1	繩	にせい:黄緑10YR7/3	オーリーブ7.5Y3/2		外面下半:ロクロナデ 内底:ケズリ 内面:紅の呂粧剥		高台内外に斜目付属	
第3回 52	陶	蓋		口:16.5 底:1.85	繩		天井部:赤7.5P14/6 以外:淡青2.5Y7/4				天井部以外も落差の下に 赤の呂粧跡	
第3回 53	陶	瓶	肥前	口:10.5	繩	透黄青10YR8/4	黒10YR1.7/1				天目鏡	
第3回 54	土師質	灰陶器		口:4.2 底:3.5	砂利	地SYR7/6	地SYR7/6		内・外口縁底:ヨコナデ 外底:板ナゲ		輪積成形のものである。	

第310図 機械掘削・人力掘削中出土遺物観察表

30は肥前系陶器で、三島手のものである。31は土師質土器壺である。32は肥前系磁器鉢である。器壁が薄く、乳白色の器面に赤絵を施す。33は肥前系磁器底部である。外面に色絵が認められる。34は備前水滴である。35は京・信楽系陶器である。器種は不明。36・37の有溝土錐は、同形のものがSK3021に認められる。40は京・信楽系陶器把手部である。

38・39・41~53は、第3面までの掘削中及びトレンチ溝より出土した遺物である。38は肥前系陶器碗である。39は瀬戸・美濃系陶器碗である。41は三股窯青磁である。口鋸で、内面に芭蕉文を施す、三足となる脚が付く。42は肥前系陶器碗である。43~51は肥前系陶器皿である。45は絵唐津向付である。52は軟質施釉陶器蓋。赤褐色の釉が施される。53は唐津天目碗である。54は焼塗壺で、輪積成形のものである。

## 第4章 自然科学的分析

# 高松城跡（松平大膳家上屋敷跡）出土漆器の材質・技法

くらしき作陽大学 北野信彦

## 1.はじめに

本遺跡の発掘調査区は、高松城大手門前といった城郭内でも重要な地点に所在する。当該地点付近は、各種城下絵図を参照すると一貫して上級武家拝領屋敷地跡に比定される区画であり、生駒時代には生駒河内（3160石）、松平時代には、当初は彦坂織部（6000石）、その後は松平大膳の上屋敷跡などに比定されている。発掘調査の結果、江戸時代における上級武家地遺構や遺物が大量に検出され、このなかには江戸時代の比較的古い段階の年代観が与えられる漆器資料も多く含まれていた。今回、高松市教育委員会の御厚意により、これら遺跡内から出土した漆器資料の材質・技法に関する分析調査を行う機会を得た。本報では、その調査結果を報告する。

## 2.出土漆器資料の分析調査

各種出土生活什器の内でも飲食器（椀・蓋・皿類）は、衣・食・住のなかにおいて「食」という我々の日常・非日常の生活の在り方と密接に関わる資料（物質文化財）である。それと即応するためか遺跡から出土する什器類の内、漆器・陶磁器ともに飲食器が占める割合が極めて高い。このような飲食器資料の材質や製作技法と、使用階層や使用状況との関連性が把握されれば、これらが出土した遺構・遺跡の性格、即ちそこで生活していた人々の暮らしづくりの一端がある程度推定されよう。ところが同じ飲食器である陶磁器資料に比較して漆器資料は、木胎・下地・漆塗膜面からなる脆弱な複合遺物であるため、検出・実測調査・保存や保管などの取り扱いに苦慮する場合が多い。加えて陶磁器資料における古窯跡に対応するような生産地遺跡も検出されにくいため、これまで一部の資料の肉眼観察に留まる調査が多かった。しかし、このような取り扱いが厄介と考えられる漆器資料も視点をかえてみてみると、木胎・塗り・加飾などの、材質や製作技法に関する属性が多く、これらの品質は自然科学的手法を用いた調査で、より客観的にとらえ易い。このような漆器資料の生産技術面を調査することは、個々の資料の性格を正確に把握する上で有効な方法であり、これらが出土した遺構・遺跡の性格自体を考える上でも意味があるものと考えている（注1）。

本報では、これらの調査の一環として、漆器資料の形態、漆塗り面の状況を表面観察した後、(1)用材選択、(2)木取り方法、(3)漆膜面の漆塗り構造、(4)色漆や薄絵加飾の使用顔料、などの項目別にわけた文化財科学的な調査を行った。以下、その調査方法と調査結果を記す。

### 2.1 調査方法

#### 2.1.1、用材選択（樹種同定）

樹種の同定作業は、出土木材の細胞組織の特徴を生物顕微鏡で観察し、その結果を新材と比較することでなされる。試料は、カミソリの刃を用いて遺物本体をできるだけ損傷しないように、破切面などオリジナルでない面から木口、柾目、板目の三方向の切片を作成した。切片はキシレン・サフランニンにより脱水および染色して検鏡プレパラートに仕上げた。

#### 2.1.2、木取り方法

挽き物類である漆器の木取り方法の調査は、樹種同定の切片作成時に細胞組織の方向を生物顕微鏡で確認することで、同時に行なった。

### 2.1.3、漆膜面の塗り構造

まず肉眼で漆器資料の塗り表面の状態を観察した後、実体顕微鏡を用いた細部の観察を行なった。次に1mm×3mm程度の漆膜片を漆器資料から採取して合成樹脂（エポキシ系樹脂／アラルダイトGY1251J.P., ハードナーHY837）に包埋した後、断面を研磨し、漆膜の厚さ・塗り重ね構造・顔料粒子の大きさ・下地の状態等について金属顕微鏡による観察を行った。

### 2.1.4、色漆の使用顔料および蒔絵材料の定性分析

色漆に用いられた顔料および蒔絵材料である金属粉の無機物に関する定性分析には、先の漆膜片をカーボン台に取り付け、日立製作所S-415型の走査電子顕微鏡に堀場製作所EMAX-2000エネルギー分散型電子線分析装置（EPMA・電子線マイクロアナライザ）を連動させて用いた。分析設定時間は500秒とした。

### 2.1.5、分析結果の集計方法

個々の漆器資料からもっとも一般的な8つ（Aタイプ）もしくは9つ（Bタイプ）の材質や製作技法上の優劣ランクの項目を抽出し、それぞれの比率を総個体数の中で計算する。この結果をレーダーチャート方式で図化するものである。

#### （Aタイプ集計方法）

レーダー中心軸・上の項目には一括出土漆器資料の加飾率（一括の総個体数の中で漆絵や家紋などの装飾を施した資料が占める割合）を取る。その右側にベンガラ・炭粉下地・ブナ材などのいわゆる廉価で簡素な量産型漆器資料の材質および製作技法上の特徴を取り、それと対応する左側には、朱・サビ下地・ケヤキおよびシオジ材などの優品資料の特徴を示す項目をとる。さらに中心軸・下にランク的にもケヤキおよびシオジ・ブナ材のほぼ中間に位置すると考えられるトチノキ材の占有比率(%)をそれぞれ配置した。

この配置で示されるレーダーチャートは、その重点が右に寄るほどランク的に廉価な資料が多いことを、左に寄るほど優品資料の占める割合が高いことを示す。

#### （Bタイプ集計方法）

レーダー中心軸・上の項目には一括出土漆器資料の加飾率（一括の総個体数の中で漆絵や家紋などの装飾を施した資料が占める割合）を取る。その右側にベンガラ・炭粉下地・スズ（Sn）粉・石黄（As<sub>2</sub>S<sub>3</sub>）粉などのいわゆる廉価で簡素な量産型漆器資料の材質および製作技法上の特徴をとり、それと対応する左側には、朱・サビ下地・金（Au）粉などの優品資料の特徴を示す項目をとる。さらに中心軸・下にはランク的にもほぼ中間に位置すると考えられる銀（Ag）粉の占有比率(%)をそれぞれ配置した。

## 2.2 調査結果

今回調査を行った出土漆器は、椀・蓋型の挽き物類および器物である板物類を中心とした日常生活什器類、合計78点である。これらの帰属年代は、出土状況の層位や共伴国差陶磁器の編年観から、16世紀末～17世紀初頭期の近世初頭期（生駒時代）と17世紀中葉を中心とする江戸時代前期頃（松平時代の彦坂邸跡）の2段階に分類されている。以下、生産技術面からみた出土漆器の項目別に調査結果を述べる（表1）。

### 2.2.1、用材選択

本漆器資料内の挽き物類の用材には、ぶな科ブナ属16点・同コナラ節8点・同クリ1点・にれ科ケヤキ7点・もくせい科シオジ7点・とちのき科トチノキ29点・もくれん科ホオノキ4点・

No.	器型	樹種	木取り 方法	表面塗り技法		塗り構造		使用顔料		備考	遺構番号	
				内	外	内	外	ベンガラ	ベンガラ			
1	碗型片	トチノキ	A	赤	黒	赤	黒	ベンガラ	ベンガラ	引掛け技法	SX3002	
2	碗(小)型	トチノキ	A	赤	黒	黒	赤	ベンガラ	ベンガラ	鶴竹板文様	SX3002	
3	碗型	トチノキ	A	赤	黒	黒	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3002	
4	碗型	トチノキ	A	赤	黒	黒	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3002	
5	碗型	ブナ	A	赤	黒	赤	黒	ベンガラ	ベンガラ		SX3002	
6	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤・黄	赤	ベンガラ	ベンガラ	朱・As+S	SX3002	
7	碗型	コナラ	A	赤	黒	外一絵一赤・黄	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3002	
8	碗型	ブナ	B	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ	ベンガラ	SX3002	
9	碗型	コナラ	B	赤	赤	外一絵一赤	赤	朱	朱	穴開き	SX3004	
10	碗型	トチノキ	A	赤	赤	外一絵一黒	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3002	
11	碗型	ホオノキ	B	赤	黒	外一絵一赤・黄	赤	ベンガラ	ベンガラ	ベンガラ・As+S	SX3002	
12	碗型	ブナ	B	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ	鶴亀文様	SX3002	
13	碗型	古オノキ	B	赤	黒	外一絵一赤・黄	赤	ベンガラ	ベンガラ	ベンガラ・As+S	SX3002	
14	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3002	
15	碗型	シラタマ鶴	B	黒	黒	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3003	
16	碗型	ケヤキ	B	赤	赤	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3003	
17	碗型	ヒノキ	B	赤	黒	外一絵一金	赤	ベンガラ	ベンガラ	ベンガラ+Au	SX3004	
18	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ	草花文様・滑	SX3004	
19	碗型	コナラ	B	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3004	
20	碗型	コナラ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3005	
21.1	機型	コナラ	B	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3005	
21.2	機型	シオジ	C	赤	赤	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3005	
22	碗型	ブナ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3005	
23	碗型	ブナ	A	赤	赤	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3005	
24	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ	花文様	SX3005	
25	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一黒	赤	ベンガラ	ベンガラ	引掛け技法	SX3002	
26	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ	単文様	SX3002	
27	碗型	ホオノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3002	
28	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3002	
29	碗型	コナラ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3004	
30	碗型	トチノキ	B	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3002	
31.1	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3001	
31.2	碗型	トチノキ	A	黒	黒	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3001	
32.1	碗型	カエデ	B	赤	黒	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3002	
32.2	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤・黄	赤	ベンガラ	ベンガラ	朱・As+S	SX3002	
32.3	碗型	ケヤキ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3002	
32.4	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3002	
32.5	碗型	シオジ	B	黒	黒	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3002	
32.6	碗型	コナラ	B	赤	黒	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3002	
32.7	碗型	ホオノキ	B	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3002	
32.8	碗型	シオジ	A	赤	赤	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3002	
32.9	碗型	トチノキ	B	赤	黒	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3002	
33	碗型	ケヤキ	B	黒	黒	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3002	
34.1	碗型	ブナ	B	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3002	
34.2	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3002	
35	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3002	
36	碗型	ブナ	B	黒	黒	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3002	
37.1	碗型	シオジ	B	赤	赤	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3005	
37.2	碗型	トチノキ	A	赤	赤	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3005	
38	碗型	トチノキ	B	赤	赤	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3002	
39	碗型	ケヤキ	B	赤	黒	外一絵一赤	赤	朱	朱		希者せ補強	SX3001
40.1	碗型	シオジ	A	赤	赤	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3002	
40.2	碗型	ブナ	B	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3002	
40.3	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3002	
41	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3008	
42	碗型	ブナ	B	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3002	
43	碗型	トチノキ	B	赤	黒	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3002	
44	碗型	シオジ	B	赤	赤	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3002	
45	碗型	トチノキ	B	赤	赤	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ	引掛け技法	SX3002	
46	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3002	
47	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3001	
48	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤・黄	赤	ベンガラ	ベンガラ	ベンガラ・As+S	SX3002	
49	碗型	コナラ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3006	
50.1	碗型	ブナ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3002	
50.2	板物	スギ	A	赤	赤	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3002	
50.3	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3002	
51.1	碗型	ブナ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3002	
51.2	碗型	ヒノキ	B	赤	黒	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3002	
52	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3004	
53	碗型	ブナ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3002	
54.1	碗型	ブナ	B	赤	黒	外一絵一赤	赤	ベンガラ	ベンガラ		SX3002	
54.2	碗型	ケヤキ	B	赤	黒	外一絵一赤	赤	朱	朱		希者せ補強	SX3002
55	碗型	ケヤキ	B	赤	黒	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3009	
56	碗型	シオジ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3002	
57	碗型	ブナ	A	赤	黒	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3002	
58	碗型	ケヤキ	B	赤	黒	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3002	
59	碗型	クリ	B	赤	黒	外一絵一赤	赤	朱	朱		SX3002	
A	碗型	唐草のみ	赤	赤	外一絵一赤	赤	朱	朱	朱			

表 1

ばら科サクラ亜属1点・かえで科カエデ属1点の広葉樹9種類が、その他器物にはひのき科ヒノキ2点・すぎ科スギ1点の針葉樹3種類、合計12種類が確認された。樹種別に木材的組織・工作の難易・割れ狂い・色光沢・塗りなどを考慮に入れて本漆器資料の使用状況をみてみると、吟味された最優材であるケヤキ・シオジ・ヒノキ材などと、加工や入手の容易さという大量生産の点からみて一般性が高いと考えられる適材であるトチノキ・ブナ・コナラ・スギ材などの2つのグループに分かれた(表2)。これらの占有率を総点数の中でみてみると、前者であるシオジ・ケヤキ・ヒノキ材があわせて20.8%、後者のトチノキ材が37.7%・ブナ材が20.8%・コナラ材が10.4%であり、本資料の場合、基本的には後者の比率が高い。ところが各遺跡別の一括出土漆器の場合、前者が10%前後に留まる例が多く、本資料では比較的前者の占有率も高いため特徴の一つといえよう(写真1)。

さて、筆者によるこれまでの全国の近世出土漆器の用材選択性に関する調査結果では、挽き物である漆器椀・蓋・皿類の樹種には、近世初頭段階の古い時期の資料には樹種の多様性が見られ、江戸時代中期以降にはケヤキ(江戸時代前期段階ではシオジ材が多い)・トチノキ・ブナの3樹種の占有率が高く一般的となる(注2)。この結果を参考にして本漆器資料の用材の使用状況をみると、シオジ・クリ・コナラ節など比較的近世の初期段階に出現がみられる樹種の占有率が高く、本漆器資料の基本的な年代観を考える上で参考となろう。

### 2.2.2. 木取り方法

本資料の内、挽き物類の木取り方法は、横木地と豎木地に大別され、その大半は板目取りもしくは柾目取りの横木地であった。挽き物類である近世出土漆器の木取り方法は、豎木地に比較して横木地を用いる例が大半であり、豎木地の場合も木芯を外した材を利用する例が一般的である(図1)。これは木材の割れ狂い、収縮等を考慮に入れて漆器自体の品質を重視したため、不都合な木取り方法が自然淘汰された結果と考えている。本漆器資料の木取り方法をそれぞれの樹種との関連性でみてみると、トチノキ材は横木地板目取りが優勢であり、ブナ材は横木地板目取り柾目取り両方ともほぼ同じ程度であった。一般にトチノキ材は、芯を中心にして割れ狂いの多い赤味(心材)が広がり、表皮に近い部分にシラタとよばれる白い部分(辺材)がある。シラタは、多く取れても四寸(約12cm)程度しか利用できないので、椀木地ではおのずと椀を伏せたような形で木地を取る板目取りの方法が適している。一方、ブナ材は芯に近いところまで利用が可能なので、木の狂いが少なく木地が多く取れる柾目取り・板目取りどちらでもよいという口承資料がある(注3)。この点からも、本資料の木胎製作の工程が、一貫してそれぞれ材の性質を考慮に入れた可能性が指摘される。

### 2.2.3. 漆塗膜面の塗り構造

漆器表面の漆塗り技法は、大きく分けて無文様で地塗りのみの資料と、家紋等の漆絵文様を地外面に描く資料、さらには蒔絵等きわめて高度な漆工技法をもつ資料に分かれた。これらの漆膜面の塗り構造、特に各漆器の堅牢性を知る目安となる木胎と漆塗り層との間の下地層を定性分析してみると、ピークがほとんど見出だされない資料と、粘土鉱物もしくは珪藻土上の構成要素に近いピークが認められる資料の2種類に分けられた。これらをさらに金属性顕微鏡で観察することで、前者は炭粉を柿渋などに混ぜて用いる炭粉下地、後者は細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地(堅下地もしくは本下地ともいう)であると認識した(注4)。次に、地の漆塗り層は、いずれも簡便な1層塗りから2~3層塗りの多層塗の資料まで見出だされ、基本的に炭粉下地に単層塗の極めて簡素で一般的な日用漆器の塗り構造を持つ資料が中心であるものの、



1 横木地と堅木地の要領  
(横木鉄男「ろくろ ものと人間の文化史31」-1979-より原図引用)

2 近世会津木地削の木取りの方法  
(須藤謙「日本人の生活と文化(木)  
暮らしの中の木器」-1982-より原図引用)

図1 近世以降の漆器（ぬき物類）の木取り方法

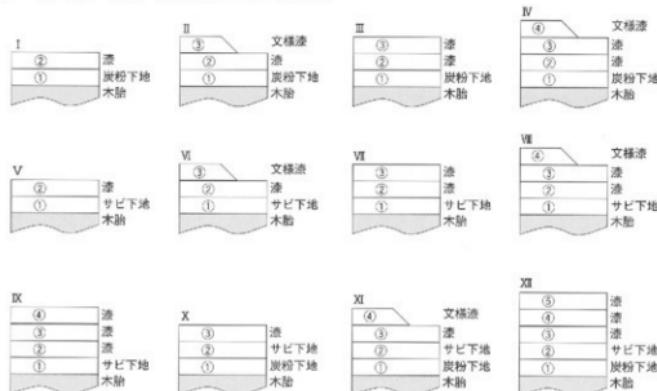


図2 漆塗り構造の分類

A 環孔 材	a. ケヤキ系 ニレ、ケヤキ、シオジ、ハリギリ、クリ、ヤマクワなど	木目が明瞭に表れる。堅硬であるが脆性もあり、木皿など薄手の物に適する。
B 散孔 材	b. サクラ、カエデ系 イタヤカエデその他のカエデ類、ヤマザクラ、ウツミズザクラ、ミズメなど	白木で美しい光沢があり、白木地物にも適している。削れ狂いが少なくて、やや堅さはあるが加工は容易。下地が少量で足りるので、塗り物に最も適する。
C 散孔 材	c. ブナ、トチノキ系 トチノキ、ブナ、ミズキ、カツラ、ホオノキなど	軟らかくて加工は容易であるが、乾燥が難しく狂いも多い。しかし、大量に入手できるので使用量は大である。
D 散孔 材	e. エゴノキ系 エゴノキ、アオハダなど	白い軽軟で加工が容易である。仕上げは見た目によく、彩色もし易いので、玩具、小物等に向いている。とくにエゴノキは大材を得られないが、入手が容易であり、削れにくいので使用に適する。

表2 ろくろぬき物の用材分類一覧表

(横木鉄男「ろくろ ものと人間の文化史31」-1979-などを参考にして作成)

サビ下地に多層塗構造をもつ堅牢性を重視した優品資料も23.5%と比較的高い占有率であり、この点は本漆器資料の特徴の一つといえよう（注5）。なお金泥状や赤色系の色漆による家紋や漆絵の加飾は、いずれも地の上塗り層の上に描かれていた（図2）（写真2）。

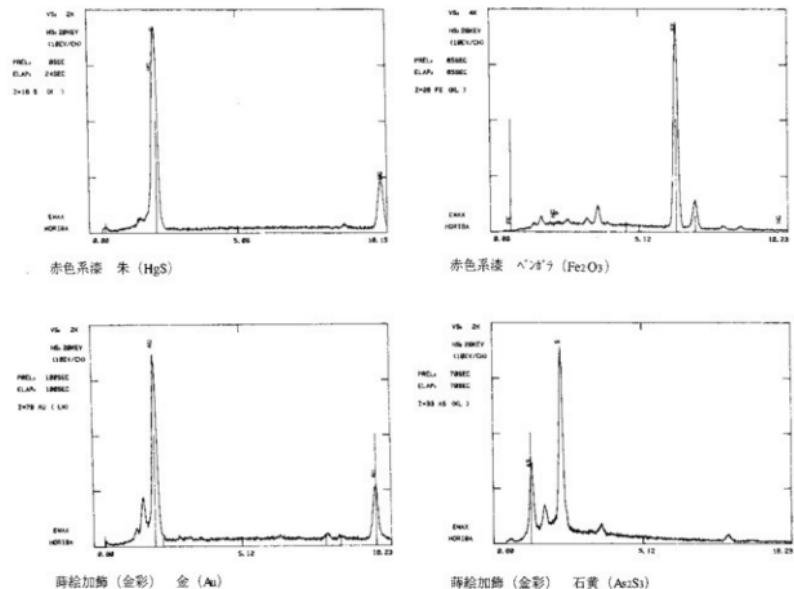
#### 2.2.4、赤色系漆の性質

赤色系漆の使用顔料は、定性分析と顕微鏡観察の結果、それぞれベンガラ（酸化第二鉄 $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ）、朱（水銀朱 $\text{HgS}$ ）、さらには両者を併用して用いる3種類の異なる赤色系漆であると理解した（図3）。ベンガラ・朱とともに赤色系顔料としての歴史は古い。しかし近世漆器の色漆顔料としては、通常近世初頭～江戸時代前期頃の資料では、朱を多用する事例が多いが、その後、江戸時代中期以降には幕府朱座を中心とした統制物資であった朱に比較して、人造ベンガラの工業生産化により量産体制が確立するベンガラの方が廉価で一般的となる（注6）。本漆器資料の場合、簡素で一般的な塗り構造を持つ資料にはベンガラを用いる事例が多いものの、全体的にみると朱の占有率も比較的高かった。この点も本資料の帰属年代を考える上で参考となろう。

#### 2.2.5、蒔絵加飾材料の材質

表面観察において金粉もしくは金泥状による家紋や漆絵等の蒔絵状加飾部分を定性分析した結果、Au（金）が認められる資料とAs+s（ $\text{As}_2\text{S}_3$ ：石黄、三硫化二砒素）が見出だされた（図3）。

筆者のこれまでの出土蒔絵漆器の蒔絵状加飾材料の分析結果では、金（Au）自体を使用する資料は数%程度で少ない。一方、大多数の近世出土漆器では銀・スズ・石黄等の代用金蒔絵材料で



（図3）電子線マイクロアナライザー（EPMA）分析結果

あること。これら金粉以外の蒔絵粉の材質は、石黄→銀→スズへと年代別に使用状況が変化することが判明している。すなわち、金粉以外の蒔絵粉の材質では、帰属年代がやや古い17世紀初・前期～中期頃の資料群では石黄粉が、17世紀後半の特に元禄年間以降の資料群では銀粉の比率が高くなる。そして江戸時代後期～幕末期にはスズ粉蒔絵が多く見出される（注7）。この点を考慮に入れて本資料を見てみると、金自体の使用は認められずいずれも石黄粉が使用されていた。そのため本漆器の材質・技法面からみた本資料の帰属年代は、17世紀中期頃に求められよう。

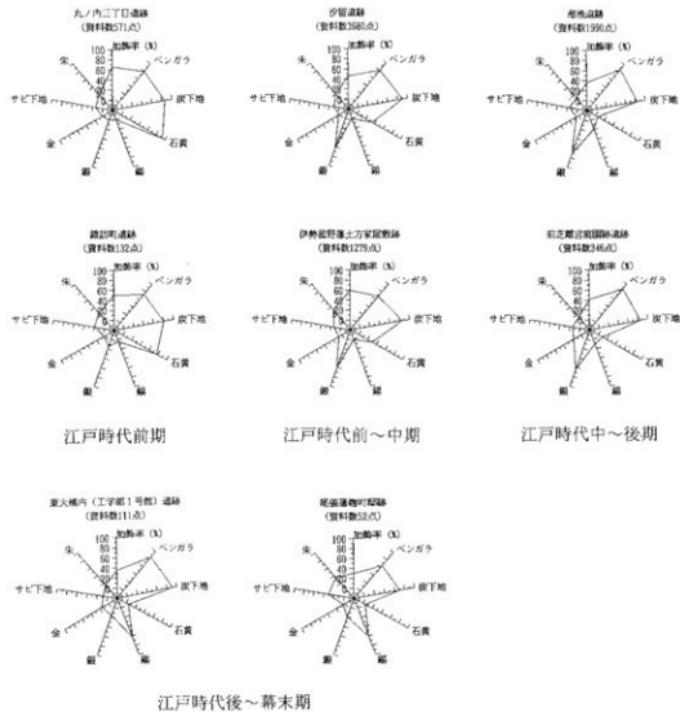
### 3、考察

以上、前章では項目別に各出土漆器資料の材質および製作技法の在り方をみた。その結果、本漆器資料は、木胎・漆塗り技法・使用顔料ともに簡素な素材からなる極めて一般的で廉価な日常什器類から、吟味された素材になる堅牢で複雑な漆工技法を有する優品資料に至るまで、幾つかのランク別のグループに分類された。このような漆器資料のグループ毎の違いは、文化的背景を含むそれぞれの漆器資料の製作年代、これらを使用しさらには投棄した使用階層の社会的・経済的背景（生活様式）、地域性、什器類の使用目的や方法、さらには個々の漆器生産地の技術、などさまざまな条件が反映されたものであろう。とりわけ本漆器資料を構成する材質・技法の傾向は、樹種・赤色系漆や金泥状加飾の使用顔料の構成要素には近世初頭～江戸時代前期頃の比較的初期段階の特徴が多くみられた。この点は、本資料の編年観を考える上で有力な調査結果と言えよう。

次に本報では、生産技術面からみた一括出土漆器資料における組成の傾向を把握するため、本漆器資料および財賀川県埋蔵文化財センター発掘調査のおなじ高松城都内の上級武家屋敷跡出土漆器資料、さらには比較資料として同じ四国の国元城下町における武家地閑連遺跡である新蔵町一丁目遺跡・福島二丁目遺跡・旧動物園跡遺跡（いずれも阿波徳島城下町の武家地閑連遺跡）、高知城下屋敷跡遺跡（土佐高知城下町の武家地閑連遺跡）を一連のレーダーチャート方式による集計作業を行った。

その結果、これらの基本的な材質・製作技法の組成の傾向はいずれも実用に即した生活什器類である飲食器類を中心としていることが理解された（図5）。これは、これら遺跡出土の漆器資料の性格自体が、非日常のハレの食事に供せられるような特別の什器類（伝世品として長期間大切に保管管理される場合が多い）とは異なり、普段の食生活で多用され、かつ割合簡単に廃棄されたであろう日常什器類が中心であることに由来しよう。その一方で本遺跡出土漆器資料をはじめとする国元城下町の武家私邸である武家地閑連遺跡出土漆器資料は、武家江戸参府江戸表の藩邸跡や高知城下屋敷跡遺跡等の公的空間のそれとは異なり、全体的にやや優品の占有率が高い傾向が見出される。この結果は本資料を使用し投棄した家自体の好み傾向や什器調達方法の特徴によるものなのか、単に出土資料の偏在性によるものなのかは、現時点では判明しないが、本漆器資料における一つの傾向と言えよう。

次に、個々の出土漆器資料について若干の検証を加える。(1)炭粉下地を施した上に極めて薄い赤褐色系もしくは黒色系漆や朱漆を一層塗布する資料（資料No. 3, 5, 7, 9, 19, 20, 21.1, 23, 29, 32.5, 32.6, 32.9, 36, 40.2, 43, 46, 49, 50.1, 51.1, 54.1, 58など）、(2)ケヤキ材に布着せ補強し、その上にサビ下地を数回施し、黒一朱の地漆塗りの塗重ねを行うような堅牢性を重視した根来系漆器（資料No. 39, 54.2）、(3)シオジ材に炭粉下地ーサビ（泥系）下地を施し、朱漆を一層塗布するが(2)とおなじ朱漆器でもやや簡便なタイプの資料（資料No. 21.2, 40.1, 44, 57）、(4)加飾部分に引掛け技法を用いた資料（資料No. 1, 10, 25, 45）、(5)鶴亀文様のセ

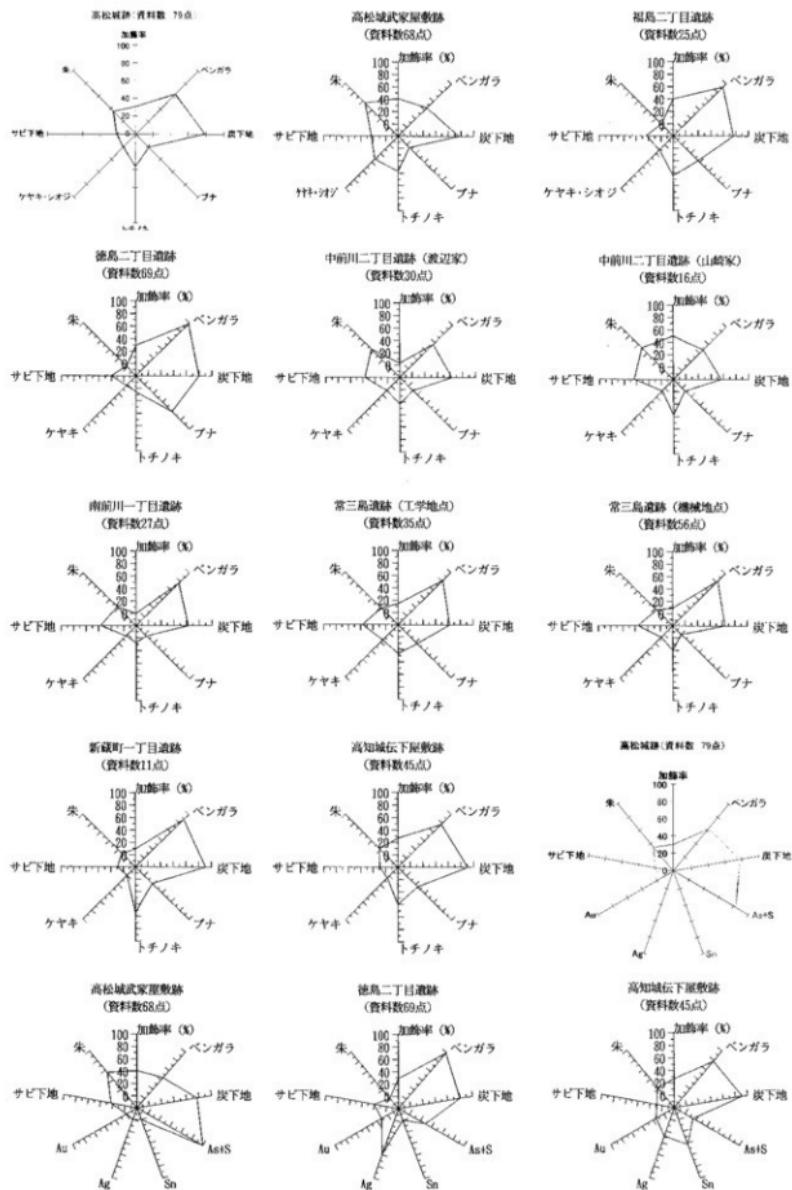


(図4) 各遺跡にみられる年代別蒔絵材料の変遷

ット関係が見出される資料（資料No. 8, 12）などは、いずれも近世初頭期の漆工技法の特徴を有する資料群といえる。一方、(6)加飾の家紋や漆絵に石黄を使用する資料（資料No. 6, 11, 13, 48）、(7)資料No. 18の一点ではあるが、高台底に「露に薄」の草花文様をベンガラ加飾する江戸系の漆器椀類などは、江戸時代前期の17世紀中葉頃の漆工技法の特徴を有している。

今後は、さらに調査事例を充実して高松城下町関連遺跡出土漆器資料の全体的な傾向を把握すること、同時に陶磁器類をはじめとする他の共伴遺物や遺構の性格との相互関連性を総合的に比較・検討していくことが必要である。この一連の検討作業を行うことが、本資料の性格をさらに的確に理解する上で大切なことであろう。

（謝 許）本調査を行なうにあたり、高松市教育委員会文化部文化振興課の小川賢氏をはじめとする各先生方、財香川県埋蔵文化財センター、高知県文化財団埋蔵文化財センター、財徳島県埋蔵文化財センター、徳島市教育委員会、徳島大学埋蔵文化財調査室など、多くの諸機関や方々には資料調査の件で大変お世話になりました。厚く謝意を表します。



(図 5) 各遺跡における一括出土漆器資料の組成（集計例）

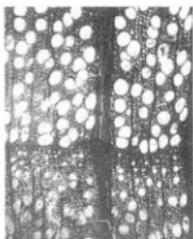
## (注)

- (1) 北野信彦 (1993) 「日常生活什器としての近世漆器椀の生産と消費」『食生活と民只』p.81-101、日本民只学会編 雄山閣出版
- 北野信彦 (2000) 「生産技術面からみた近世出土漆器の生産・流通・消費」『日本考古学 第9号』p.71-96、日本考古学協会、吉川弘文館、等を参照されたい。
- (2) 橋本 (1979) の調査では、近世以降のろくろ挽き物である漆器椀の用材には、早晚材の組織の差が少ない広葉樹の欅孔材もしくは櫛孔材ではあるが韧性がある材を造材であるとしている。
- 橋本鉄男 (1979) 「ろくろ ものと人間の文化史 31」法政大学出版局
- 北野信彦 (2000) 「近世出土漆器椀の用材に関する考察」『考古学と自然科学 第38号』p.47-66 日本文化財科学会
- (3) 須藤 (1982) の調査によると、近世以降の近江系(小椋谷)木地師による挽き物椀の木取り方法の場合、横木板目取りはトチノキ地筋に、同様目取りはブナ地筋に定着し、その細かい技術は、個々の業団に受け継がれてきたとしている。
- 須藤謙 (1982) 「日本人の生活と文化、暮らしの中の木器」日本觀光文化研究所編 ぎょうせい
- (4) なお一部の資料については纏かい粘土や珪藻土をにかわ等に混ぜて用いる泥下地(堅下地・本下地より堅牢性に欠ける)の可能性もある。しかし出土資料のにかわと生漆の明確な科学的識別が技術的に困難な現在、両者をまとめてサビド地とした。
- 北野信彦 (1993) 「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点・I 文献史料からみた畳床型漆に使用する脱脂剤を中心として」『古文化財の科学 第3 8号』p.65-79、古文化財科学研究会
- (5) このような近世漆器の製作技法の在り方を示す民俗事例の1つに、新潟県糸魚川市人所の小林丈助氏による実用に即した近世木地師、漆器椀の製作技法に関する口承資料がある。それによると「上品」布着せ補強(椀の欠け易い縁や糸じりに麻布を巻く)→サビ下地(紙の粉を生漆に混ぜたサビを二回塗布)→下塗り(生漆)→上塗り(牛漆に赤色系顔料もしくは黒色系顔料を混ぜた赤色系漆もしくは黒漆)の工程をふみ、人一代は持つ堅牢なもの。「下品」炭粉下地(柳や松煙を柿渋に混ぜて用いるサビ下地の代用下地)→上塗り(生漆の使用量を節約するために偽漆である不純物を多く混入している粗陋な漆)。「中品」下品とはほぼ同様の工程をふむが上塗りの漆を濃く塗布したりミガキを丁寧にしたりする。下品よりかなり持ちが良いなどとしており、各漆器ランク別の工程をよく示している。文化庁文化財保護部編 (1974) 『木地師の習俗 民俗資料選集2』 国土地理協会
- (6) 江戸時代における朱とベンガラの価格差を検討してみると、江戸時代前期段階には両者海外輸入品が多いためか、相対価格差はほとんど見られない。しかし江戸時代後期頃の段階では、両者に約30倍ほどの相対価格差が見られ、とりわけ朱の高価さと入手困難さが指摘される。
- 北野信彦 (2000) 「朱・ベンガラ 项目」『日本民俗大辞典 (下巻)』福田アジョ署、吉川弘文館
- (7) 寛延四年(1751)の『名古屋諸色直取帳、寛延四年未小買諸色直取帳』には、漆器の体兼技別別の価格が記載されている。この史料では、布着せ褐色塗(上品):常塗(中品):常拭漆塗(下品)の相対価格差は、約51:3.4:1と算定される。また、伊勢志摩郡上方家吉提寺である見性寺の見性寺文書には、伊勢桑名の塗物商ぬし興に提出させた見積書があるが、それによる家紋加飾に使用された金・銀・錫粉薄絵の相対価格比率は、約18:6:1と算定される。いずれの事例からも生産技術面(ここでは材質や製作技法)の違いにより、漆器には明確な価格差が存在したことが理解される。
- 北野信彦、肥冢隆介 (2000) 「近世出土漆器の材質・技法に関する調査」『考古学と自然科学 第38号』p.67-92、日本文化財科学会

## (参考文献)

- (1) 沢口吾一: "日本漆工の研究" (1996)、美術出版社。
- (2) 犀野昭郎: "漆工 (近世編) 日本の美術 8 第231号" (1985)、宝文堂。
- (3) 光芸出版社編: "うるし工芸辞典" (1978)

ぶな科ブナ



木口 (30×)

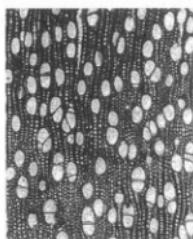


径目 (100×)



板目 (50×)

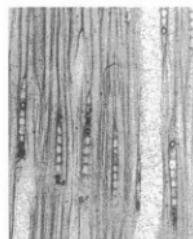
とちのき科トチノキ



木口 (30×)

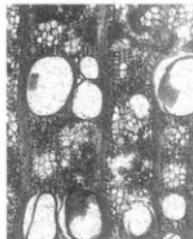


径目 (100×)

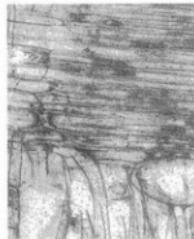


板目 (50×)

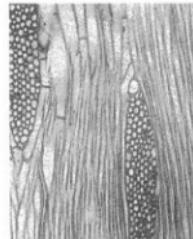
にれ科ケヤキ



木口 (30×)

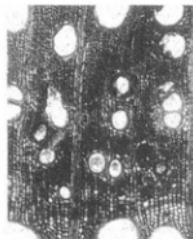


径目 (100×)



板目 (50×)

もくれん科シオジ



木口 (30×)



径目 (100×)



板目 (50×)

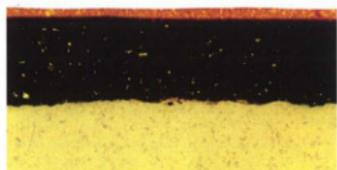
(写真1) 主要用材の顕微鏡写真



黒色系漆（I）（×50）



黒色系漆（I）（×50）



赤色系(朱)漆（I）（×50）



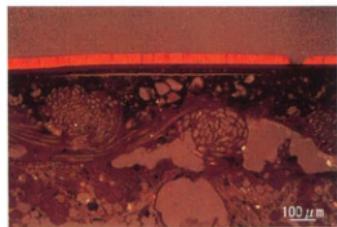
赤色系(ベンガラ)漆（I）（×100）



有加飾漆(ベンガラ漆+黒色系漆)（II）（×100）



有加飾漆(黒色系漆+石黄加飾漆)（II）（×100）



赤色系(朱)漆・布着せ補強（VII）



赤色系(朱)漆・布着せ補強（VII）（×50）

（写真2）塗装膜面の塗り構造の分類



## 第5章 まとめ

## 第1節 遺構の変遷（第311～313図）

以下、調査結果より弥生時代後期及び平安時代のものと、それ以後の主要遺構を5期に分け、当地点での変遷を考察する。

### 弥生時代後期及び平安時代

調査では、弥生時代後期及び平安時代の遺構を若干ではあるが検出した。周辺部に遺構の事例がなく現状では不明な点もあるが、当期の弥生土器は、高松城下の調査で比較的多くの出土例が認められる。後期になり遺跡数が飛躍的に増加する平野部の状況をみれば、当地周辺でもそうした状況下に想定され、今後の調査で集落の所在が判明することが期待される。平安時代の遺構では、既に南接する調査地点（香川県埋蔵文化財調査センター2003『高松城 丸の内地区』）で当該期の遺構基盤層が存在することが指摘され、今回の調査により裏付けられた。確認された溝は条里地割りとは方向が異なり、平野部より条里施工が遅れる可能性がある。野原庄となる以前の段階に想定され、当該期についても海浜部である当地点周辺まで生活域が及ぶことが明確となった。

### I期 築城以前～17世紀初頭

近年、高松城下の調査では中世期の遺跡が随所で確認され、高松城下が中世期の集落（港町）を基盤とした状況が想定されるようになった。南接の調査地点『高松城 丸の内地区』では中世前葉の井戸が2基確認され、今回の調査地点でも中世末葉に廃絶する井戸（SE3004, 3005）及び溝（SD3007）が確認され、また近世の遺構に混入品として散見される中世期の遺物から、当地点周辺でも中世段階の遺跡の存在が想定される。当調査では中世の遺構が南部において末葉期の整地により廃絶したことが確認され、以後との区画がうかがわれる。また西半部では、東西方向の溝状遺構に考えられるSX3007及び南北方向の溝SD3009が検出されている。SX3007については、後出のSX3002の底面で認められる痕跡の方向及び規模からL字形に屈曲していた可能性も考えられる。SD3009との関係は不明な点もあるが、両溝は一定の規模を有しており、区画溝であった可能性が推察される。SX3007の出土遺物は、唐津を含む等上述の中世遺構のものとは様相が異なっており、生駒時代の初段階まで存続していたか、あるいは生駒時代初期の所産と考えられる。中世末葉のSD3007を含め、これらの主軸が条里方向（高松平野では、真北より約8°東へ傾く）にはば合致し、後出の区画及び現状で認められる地割りと異なる。現況の城下地割及び『高松城下図屏風』（図版55）をはじめ松平時代の絵図では曲輪の北面、中堀のラインはほぼ東西に水平であるが、南面となる外堀のラインは、条里地割に合致した傾きをもつ。当地点は後出の遺構及び立地から、やがて曲輪の北面、中堀のラインに規制される状況を読み取ることができるが、生駒時代初期段階では古い地割りを踏襲していた可能性も考えられる。この様な条里地割は、現況でも外堀以南及び曲輪内においても若干認められる。

### II期 17世紀前葉（生駒時代）

大型遺構SX3002, SX4001の存在が際立つ。直接、区画を示すものではないが、遺構南限及び調査地南西隅に位置する井戸（SE3007）から、後出の様な南北及び東西の道路の存在も推定される。この道路については生駒時代末期の『生駒家時代讚岐高松城屋敷割図』（図版53）と松平時代初期の『高松城下図屏風』で変化なく描かれ、現況でその推定に矛盾は生じない。また生駒

時代の絵図では、当調査地点に2或いは3つの区画の存在が比定される。当絵図によれば、西端の屋敷地が張り紙のため不明だが、中央部は空閑地、東に北村興惣右衛門の屋敷が見られる。ゴミ捨場の様相となるSX3002に、土地利用の状況から空閑地の可能性もあるが、区画として明瞭なものではない。その一方、松平時代ではこれら複数の屋敷割りが、広大な屋敷へ統合される状況を文献資料及び調査結果で認められる。さらに東西道路を挟み南北接する調査地点（『松平大膳家中屋敷跡』及び『高松城 丸の内地区』）で、生駒時代～松平時代初期の南北方向の区画溝が確認された結果からは、当該期の屋敷割りが復元できる可能性が指摘される。しかし当地点では南北方向の区画は検出されず、後とする松平時代の屋敷の東限についても調査範囲外に想定される結果となっている。また生駒時代～松平時代の過渡期に推定される『讃岐国高松城図寛永十七年生駒家封地没収大洲藩主加藤泰興当時』の絵図によれば、屋敷割りが細部で変化した可能性も考えられ、現状で当期の詳細な屋敷割りの復元は難しいと言わざるをえない。

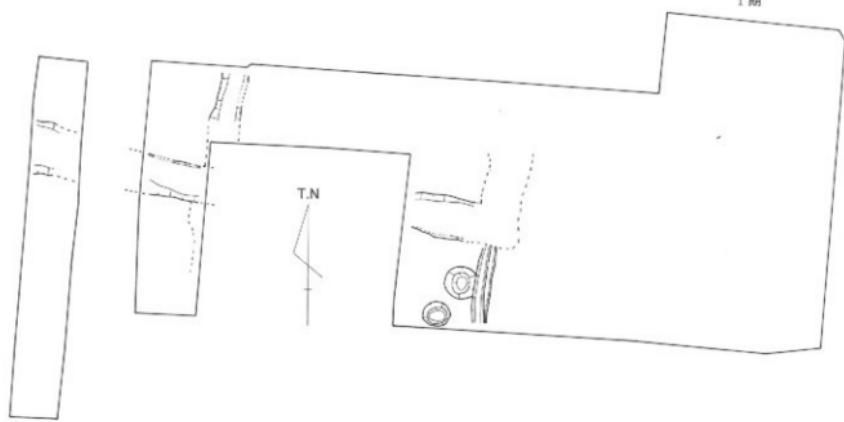
### Ⅲ期 17世紀中葉～18世紀前葉

松平時代に入り、生駒期の複数の屋敷割が1区画の屋敷地に統合される。17世紀中葉、頼重時代の城下を詳細に描いたとされる『高松城下図屏風』がある。当絵図によれば、調査地点は大きな屋敷の裏庭部分に相当し、確認された東西方向の溝（SD2003）及び道路がその南限と考えられる。また調査地西端部で南北方向の道路が南に位置する屋敷に突き当たり、鍵形となる様子が絵図と一致して認められる。屋敷内で確認された遺構については、基本的に次期へと踏襲される内容と考えられる。中央部及び北東部隅で、IV期の終わりに埋没する窪地が存在する。遺構として明瞭な形で検出できなかったが、状況として池状の施設が推定される。北東隅SX3005では木簡資料が出土し、当屋敷が頼重の重臣、彦坂織部邸であることが特定される成果を得た。中央部では、IV期の終わりに廐棄土坑となるSX2008・3001と同一プランとなる杭列が認められ、その底及び西岸部には導水施設に想定されるSE3003-②、SE3003が検出されている。これらの遺構は、区画溝SD2003と同様に屋敷の基本的な施設であるため、松平時代当初より設置された可能性が考えられるが、IV期と重複するため、その詳細な設置時期には検討を要する。とりわけ上水施設については、頼重時代に敷設されたと伝わるが、『高松城下図屏風』で曲輪内に貯水池のような箇所が見られず、また配管に竹樋という後出的な構造が当該期に週りうるのか否かは、今後の調査の進展による。その他屋敷境の施設として、焼土層より下位でSB2002を検出している。単独で建物となるのか後出のような長屋となるかは不明だが、礎石の基盤の状況からはIV期と比べ小規模な上部構造が推定される。東部で検出された溝状の遺構SD2006については、SB2002や後出するSA2001の北面のライン上に開削されており、またSA2001（SB2001）に付随するとみられる石列状の遺構SD2004、2005の下位遺構であることから、当期における屋敷境の建物を暗示するものと考えられる。出土遺物は17世紀末葉頃にまとまり、彦坂織部家が絶え、御連枝大膳家の創始となる頼芳が当屋敷に入る画期に該当している。

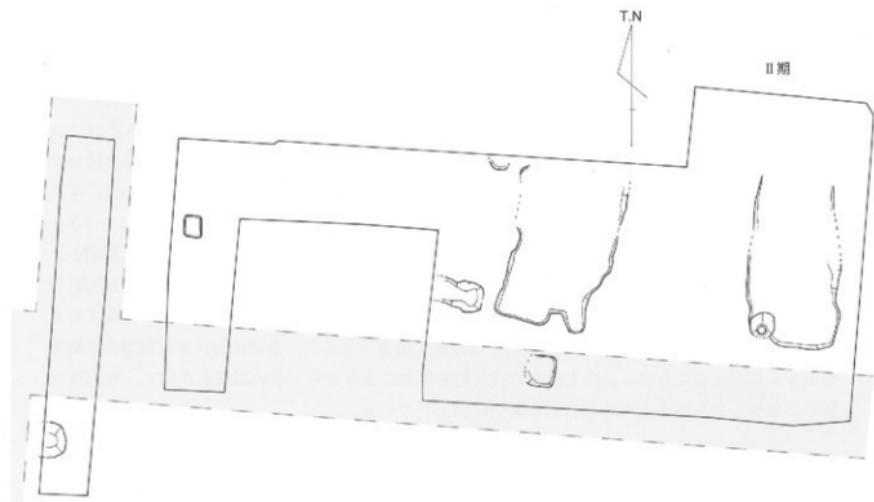
### Ⅳ期 18世紀前葉～19世紀前葉

屋敷境の溝が焼土を前後としSD2003からSD1001に付け替えられた段階を初現と想定される。屋敷内の有様は根本的な変化が見られず、上述したように基本的には前段階を踏襲した状況と考えられる。屋敷地の区画では、調査地の南西端に想定された屋敷が南北方向の道路に吸収され、

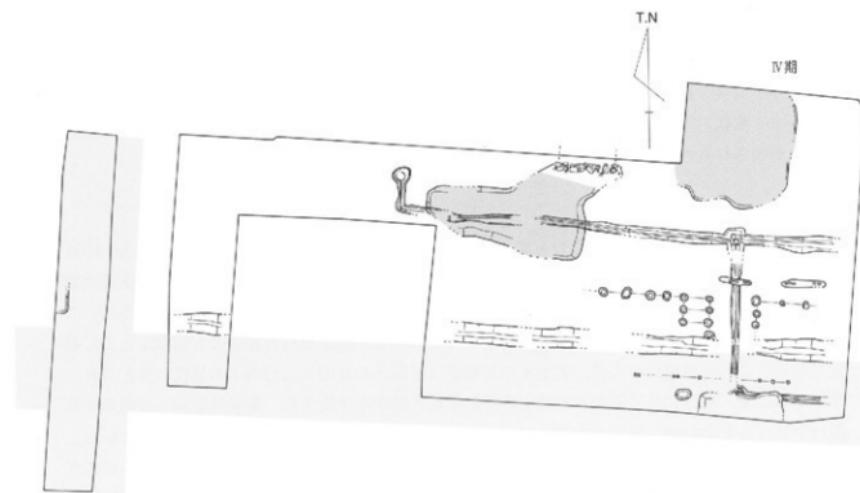
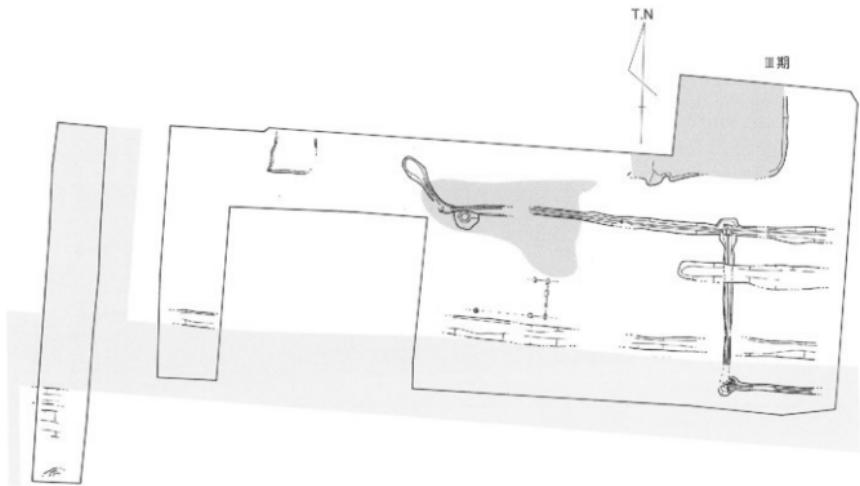
I期



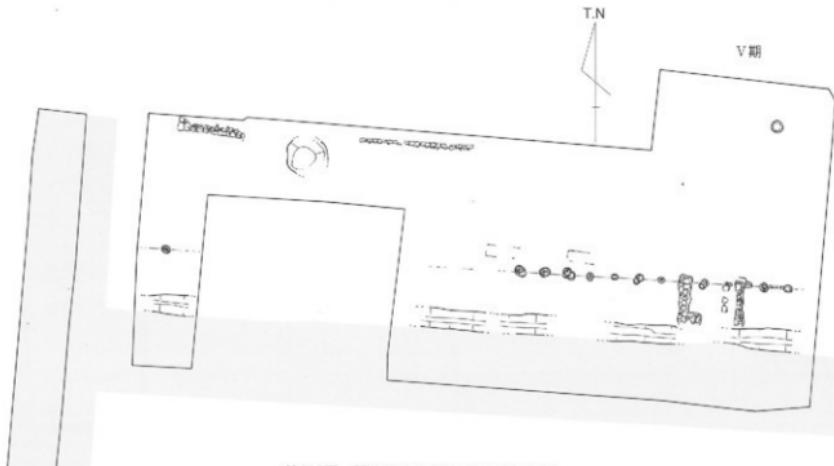
II期



第311図 調査区内遺構変遷図（その1）



第312図 調査区内遺構変遷図（その2）



第313図 調査区内遺構変遷図（その3）

十字の交差点となる大きな変化が認められる。遺物量が少なく調査結果のみで明確な時期比定は難しい。そこで絵図について見ると『高松城下図屏風』から享保年間の『高松城下図』（図版56）まで空白となるが、この間に十字の道路へ変化したと考えられる。現状では、焼土がSD1003への付け替えの契機となること、道路の変更に4つの屋敷地が関与することから、享保3年（1718）の高松大火が画期としては最も可能性が高い。屋敷内では、次期に踏襲されるSA2001、SB2001が屋敷境の施設としてあり、その南面の道路上に小規模な柵が見られる。また池（SX2008）に南面し小規模な建物に想定されるSX2010がある。当期の下限は、SX2008及び調査地北東部に位置する池状の窪みが完全に埋没する時期であり、なおかつ門の南に位置するSK2095に伴い上水枡が壊される等、前段階以来の上水施設が廃絶する19世紀前葉が推定される。

#### V期 19世紀前葉～19世紀末

屋敷割りそのものは前段階と変わらず、屋敷境の施設もほぼ同様に認められる。長屋SA1001は、前段階より西方へ伸びる状況が明瞭となり、門と考えられるSB1002はより重量のある上部構造に耐える土台に付け替えられる。『高松市街古図（文化年間頃高松城下図）』（図版57）では、大蔵家屋敷の南面屋敷境に門らしき建物が描かれ、SB1002或は前段階のSB2001として推定される。この位置関係からは、大蔵家の屋敷がほぼ現状の地割りに相当する規模に推定され、享保年間以来、東西に長く描かれることが多い敷地とはやや矛盾する。調査結果からは敷地の東限は明確にならないが、現状で大蔵家について敷地の増減を示す記録は認められないことから、むしろ現状の地割りとほぼ一致し描かれた『讃岐高松城下絵図（弘化年間）』（図版58）に相当する規模の敷地であった可能性が高い。屋敷内では、北部に建物（SB1001）や石列（SZ1001）、井戸（SE2001, 2002）、屋敷内での小規模な区画（SX1003, 1004）等が認められるが、前段階に池状の窪地は埋められ大半は空閉地状に見られる。

## 第2節 絵図・文献から見た大膳家の歴史と屋敷地の変遷（第314～318図）

第1節「造構の変遷」をもとに、ここでは絵図や文献から大膳家の歴史と屋敷地の変遷について検討したい。なお絵図の時期については、森下友子1996「高松城下の絵図と城下の変遷」「財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要」IVに依拠する。

### I期

この時期は、高松城築城以前にあたるため、絵図は認められない。資料からは、応徳3年（1086）、白河天皇の退位に伴い、野原郷内の勅旨田が立券されて野原庄が成立していることがわかる。この頃と考えられる造構・遺物は今回の調査でも確認できた。近年多く実施された香川県埋蔵文化財調査センターの調査では、高松城東ノ丸地点で15世紀頃と考えられる漁民の墓が確認され、この南に続く香川県歴史博物館建設地点でも同様に漁民の墓が検出されている。高松城西側では、浜ノ町遺跡で14世紀から15世紀前半を中心とする居館跡が確認され、白磁四耳壺埋納造構を検出している。また、西の丸町地区では、12世紀から13世紀前葉と考えられる湊関連施設が検出されている。平成14年度高松市教育委員会によって調査が実施された西の丸地区では、12～16世紀の集落跡を検出した。また、溝から「野原濱村无量壽院」と記された文字瓦が出土しており、この地点が、「野原濱村」であったことや天文年間（1532～1555）にあったとされる無量寺院の存在を裏付けた。今回の調査でも中世と考えられる造構・遺物を確認した。それらはほぼ城下築造直前のものと考えられる。また、14～15世紀と考えられる瓦も出土しており、弥生時代終末・古代・中世と続く集落の存在が想定される。その外、造構は確認されていないものの、弥生土器・須恵器・須恵質土器・土師質土器は、ほとんどの調査地点から出土しており、高松城周辺の中世以前が明らかになりつつある。

### II期

戦国時代の動乱を経て、天正16年（1588）、生駒親正により高松城築城が始まった時から、寛永17年（1640）生駒騒動により生駒氏が出羽国矢島に転封されるまでの間に当る。

絵図には寛永15・16年（1638・1639）に描かれたとされる『生駒家時代譜岐高松城屋敷割図』がある。調査区は御城の南、北に「生駒河内」、南に「北村興惣右衛門」、その西には空閑地、



第314図「生駒家時代譜岐高松城屋敷割図」

さらに西には張り紙が認められる一角である。「生駒河内」は石高3160石を有する生駒氏一族である。母は生駒一正の娘「山里」で、中納言猪熊教利に嫁いで生まれた子であるが、教利早世したため連れ帰り、一正が撫育したものとされる。「北村興惣右衛門」は石高600石を有しており、生駒騒動時は逆意方であったとされる。調査区内では、屋敷地の境を画する溝等は検出されなかつたが、SX4001の西辺が直線状に北に伸びていることから、ここに境が存在したと想定することも可能である。そうすると、平成13年度に当調査地の南側で実施された香川県埋蔵文化財調査センターの調査（丸の内地地区）で検出された「大塚采女」「大塚八右衛門」の屋敷地を画す溝を延伸した位置に屋敷地の境が想定されるわけであるが、そうした場合、絵図では東隣の「前野次太夫」「吉岡太郎兵衛」と境をなす事になり、次時期の遺構・遺物や資料との齟齬が認められる。現状では、絵図『生駒家時代譲岐高松城屋敷割図』は、その屋敷境については、正確性を欠いているものと理解したい。

#### Ⅲ期

松平頼重入府から享保3年（1718）高松大火までをこの時期とする。

生駒騒動の後、大洲城主加藤出羽守、今治城主松平美作守、西條城主一柳丹波守がそれぞれ統治していたが、寛永19年（1642），水戸藩の長子松平頼重が高松12万石藩主として入府した。この時期の絵図として、『高松城下図屏風』がある。

『高松城下図屏風』は1650年代前半に描かれたと考えられているもので、絵図からは生駒時代、生駒河内と南3軒だった屋敷は1軒になっていることが認められる。『生駒家廃乱記』からは、「生駒河内」「北村興惣右衛門」「前野助之丞」の屋敷が、松平家の大老「彦坂織部」の屋敷となつたことが認められる。屋敷数と坪領者に『生駒家時代譲岐高松城屋敷割図』とは齟齬を認めると、『譲岐国高松城図寛永十七年生駒家封地没収大洲藩主加藤泰興当時』の絵図では、北に「生駒河内」南の東側に「北村興惣右衛門」その西側に「前野助之丞」とあり、『生駒家廃乱記』と一致している。

彦坂織部は頼重の常陸下館時代からの家臣で、石高6000石の大老であり、その嫡男織部黒年は頼重の姪を妻に娶っている。

その後、貞享4年（1687）彦坂家は継嗣なく断絶となり、翌年、松平頼重の庶子、松平頼芳が入居する。この後、御連枝として頼芳の孫頼垣は第4代藩主となり、その弟頼央・至央は阿波藩主の養子となっている。

#### Ⅳ期

享保3年（1718）の火事は江戸時代最大の火事と言われ、城下の武家屋敷のほとんどを焼き尽くしたとされる。

『高松城下図』は享保年間（1716～1736）に描かれたもので、『高松城下図屏風』と大きな地割の変更を認める。

屋敷の南を東西に伸びる道は、前時期、西側で鍵型を呈していたものがなくなり、東の南北道路まで3軒であった屋敷は2軒となっている。また、「松平左近殿」屋敷の南西と南、さらに東に用水と思われるものが描かれている。調査結果からも道南側の区画溝（SD2010）が埋められた後、整地され道になったことが確認された。大火以前、屋敷の囲いは掛塀もしくは土塀であったものが、以後、御城火除けのため屋敷の並びを中堀から5間南に寄せ、腰瓦で再建したという。



第315図「讃岐国高松城図 宽永十七年生駒家封地没収大洲藩主加藤泰興当時」

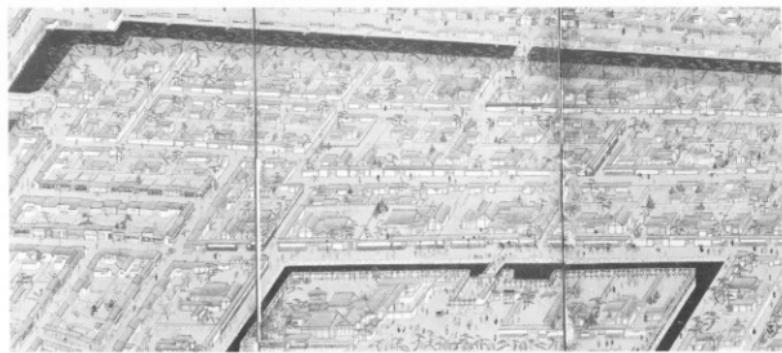
(『小神野夜話』) 大火後、再建された門や堀は柱穴を持ったものになったことが確認された。なお、『高松城下図』にみられる「左近様」は頼芳の嫡男「頼熙」である。また、東西道路を挟んで南に見られる「左近様中屋敷」は、平成13年度に高松市教育委員会によって発掘調査が実施された地点（前述 松平大膳家中屋敷地点）であるが、彦坂家時代、その嫡男のために、松平半右衛門屋敷を召し上げ、屋敷を建てている（『小神野夜話』）が、それが、後に代々松平家の中屋敷になったものと思われる。調査の際、頼昌時代の窓のゴミ穴を検出している。

宝暦9年（1754）、松平家は継嗣なく、第5代藩主頼恭の庶子、頼昌が養子となり家督を継ぐ。頼昌は明和2年（1765）、「大膳」に名前を改め、5000石に加増される。絵図『日本興地南海道郡郷部讃州高松地図』はこの頃のものと考えられる。頼昌にも継嗣がなく、寛政1年（1789）、弟頼裕の長子頼格が養子となり、家督を継ぐ。その後、天保7年（1836）嫡子頼覚が家督を継ぐのをもって、Ⅳ期が終わるものとする。

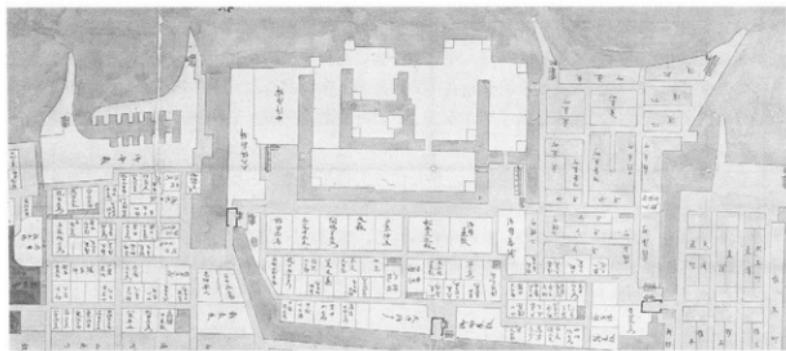
## V期

天保7年（1836）を上限とする。この時期と考えられる絵図に『東讃高松絵図』『天保15年高松之図』『安政4未年高松之図』がある。これらの絵図はいずれも「頼覚」の時期に描かれたもので、地割等に変化はみられない。「頼覚」は後、「大膳」を名乗り、幕末には藩主頼聰にかわり二条城の警衛や禁門の変では日之門外の守衛にあたったり、第1次長州征伐にも出兵した。このような状況の下、元治2年（1865）嫡子頼利が家督2000石を継いでいる。慶応3年（1867）の大政奉還、翌年、明治新政府となるなど激動の後、明治4年（1871）高松藩は高松県となるが、数ヶ月後には丸亀県を合併して香川県となる。しかし明治6年（1873）には名東県（阿波・淡路国）に併合。再び明治8年（1875）には香川県になり、翌年には愛媛県に併合される。そしてようやく明治22年（1888）に至って分県独立を果たし、明治27年（1894）香川県庁が「大膳家」跡に建設される。

明治15年（1882）の『高松市街地図』では、外堀が幅半分程度に埋められた様子が認められ、「大膳家」のあった一区画は「江戸ナガヤ」との記載が認められることから、これ以前に言い伝えどおり四番町のはうへ移転したものと考えられる。



第316図「高松城下図屏風」



第317図「享保年間高松城下図」



第318図「東諸高松絵図」

## 引用文献・主要参考文献

- 飯田町遺跡調査会 1995 「飯田町遺跡」
- 大船和則 2002 「高松城跡（松平人蔵家中屋敷）発掘調査報告書」 高松市教育委員会
- 人橋康二 1994 「古伊万里の文様」 理工学社
- 大阪市文化財協会 1998 「住友銅吹所跡発掘調査報告書」
- 小野正敏 1082 「15, 16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」 『貿易陶磁研究No. 2』 日本貿易陶磁研究会
- 香川県教育委員会 1987 「高松城東の丸跡発掘調査報告書」
- 九州近世陶磁学会 2000 「九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念」
- 北山純一郎 1999 「香川県立博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡」 (財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 財団法人 小谷城郷土館 2000 「シンポジウム 焼塩窯の旅—ものの始まり堺—」
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1984 「国内出土の肥前陶磁」
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1996 「土と炎—九州陶磁の歴史的展開—」
- 佐賀県肥前古陶磁窯跡保存対策連絡会 1999 「肥前古陶磁窯跡 基礎調査・基本方針策定報告書」
- 佐藤 隆 2000 「実年代資料 大坂」 『第12回 関西近世考古学研究会大会 近世の実年代資料』
- 佐藤竜馬 2000 「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4号 空港跡地遺跡IV」
- (財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 佐藤竜馬 2002 「サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4号 高松城跡（西の丸町地区）II」 (財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 鶴柄俊夫・森毅 1999 「豊臣期大阪城跡における三ノ丸築造以前の基準資料」 『大阪市文化財協会研究紀要』 第2号 大阪市文化財協会
- 千代田区飯田町遺跡調査会ほか 2001 「飯田町遺跡」
- 東京大学埋蔵文化財調査室編 1990 「東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3 東京大学木戸構内の世紀医学部付属病院地点」
- 豈田 基 1983 「譜岐のやきもの」「日本やきもの集成10 四国」 平凡社
- 成瀬晃司 2000 「江戸遺跡における実年代資料」 『第12回 関西近世考古学研究会大会 近世の実年代資料』
- 難波洋三 1992 「徳川大坂城期の施設」「難波宮址の研究」 第9
- 桑岡 実 2002 「大坂城三之曲輪跡－表町・丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査－」 岡山市教育委員会
- 藤沢良祐 1993 「瀬戸市史 藤史編」 濱戸市
- 藤好史郎 1996 「高松港頭土地區整理事業平成7年度埋蔵文化財発掘調査概報 高松城跡」 (財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 古野徳久ほか 2000 「平成11年度サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告 高松城跡（西の丸町）・浜の町遺跡」 (財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 堀内秀樹 1997 「東京大学木戸構内の遺跡における年代的考察」 『東京大学校内遺跡調査研究年報 I 1996年度』 東京大学埋蔵文化財調査室
- 松本和彦 2002 「高松城跡出土の京・信楽系陶器と理兵衛焼」 『第4回 国府城下町研究会 四国・淡路の陶磁器II－理兵衛焼と京焼－』
- 松本和彦 2003 「サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5号 高松城跡（西の丸町地区）III」 (財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 松本和彦 2003 「高松家庭裁判所移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（丸の内地区）」 (財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 松本和彦 2002 「四国地方－香川県－」 『第12回九州近世陶磁学会 国内出土の肥前陶磁 西日本の流通を探る』 九州近世陶磁学会
- 森 翠 1992 「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」「難波宮址の研究」 第9 財団法人 大阪史文化財協会
- 森下友子 1996 「高松城下の絵図と城下の変遷」「財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要」 IV (財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 森田克行 1984 「揖津 高槻城」 高槻市教育委員会
- 森村龍一 1995 「福知省 州庶青花・五彩・瑞璫地の編年」 大阪府埋蔵文化財協会





調査区（南西方向から）



調査区近景（南方向から）

図版2



第3面 調査区全景（右が南）



第2面 調査区全景（左が南）

図版4



第1面調査区全景（四電ビルより）



SB 1002 完掘状況（上が南）



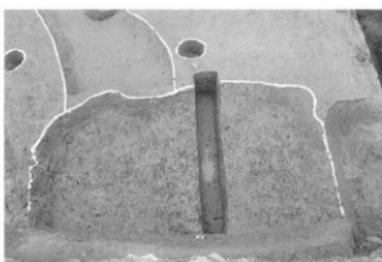
第5面A-C区柱穴群（南方向から）



弥生柱穴群 断面



SK4001 断面



SK4001（南方向から）



SD4001 断面



SD4001（南方向から）



SX4001 断面



SX4001（東方向から）

図版6



F区 第3面完掘（南方向から）



E区 第3面完掘（南方向から）



SX3002（北方向から）



SX4001（東方向から）



SX3002 断面



SX3002 断面



SX3002 遺物出土状況



SX3002 遺物出土状況